

秋田県文化財調査報告書第213集

大砂川地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書II

—— 上熊ノ沢遺跡 ——

1991・3

秋田県教育委員会

秋田県埋蔵文化財センター

大砂川地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書II

—— 上熊ノ沢遺跡 ——

1991・3

秋田県教育委員会

## 序

秋田県には、数多くの埋蔵文化財が残されています。この貴重な文化財の保護施策を、県民生活を豊かにする開発と調和をもって構じて行くことは、私達現代に生きる者の負うべき課題と考えます。

このたび、象潟町大砂川地区農免農道整備事業の路線が、上熊ノ沢遺跡の一部を通過することになり、工事に先立って失われる部分について発掘調査を実施いたしました。

調査の結果、縄文時代早期から弥生時代におよぶ各時期の土器・石器が多数出土し、縄文時代中期後半の複式炉が設けられた竪穴住居跡などの遺構を検出いたしました。

本報告書はこれらの成果をまとめたものであり、埋蔵文化財の保護に広く活用されるとともに、郷土の歴史や文化を研究する資料として、多くの方々にご利用いただければ幸いに存じます。

最後に、本調査の実施及び本報告書を刊行するにあたり、御援助、御協力を賜りました秋田県農政部、秋田県由利農林事務所土地改良課、象潟町役場農林水産課、象潟町教育委員会、象潟町郷土資料館をはじめ、関係各位に対し厚く御礼申し上げます。

平成3年3月15日

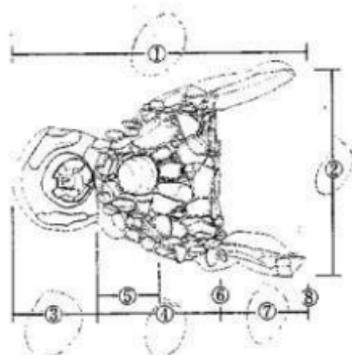
秋田県教育委員会

教育長 橋本 顕信

## 例 言

- 1 本書は、大砂川地区農免農道整備事業に係る上熊ノ沢遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査の内容については、すでにその一部が調査略報等によって公表されているが、本報告書の内容がそれらに優先する。
- 3 本書の第1～3章、第4章第2節、第6章2は武藤祐浩、第4章第1節、第6章1は和泉昭一が執筆した。
- 4 第5章自然科学的分析の内、熱残留磁気測定は秋田大学鉱山学部助教授、西谷忠師先生に執筆をお願いした。また蛍光X線分析は岩手県立博物館佐々木巧氏にお願いし、ご助言を得た。このほか放射性炭素年代測定は学習院大学年代測定室に、鉱物分析及び樹種同定はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した報告書である。
- 5 本書に使用した地図は、国土地理院発行の1/50,000「象潟」「吹浦」、秋田県由利農林事務所土地改良課提供の1/500及び1/1,000地形図である。
- 6 遺構土層図中の土色の表記は、農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』によった。
- 7 挿図中の遺物番号は、遺構内外の出土を問わず、土器・石器ごとに通し番号を付してあり、その番号は、図版中の遺物番号と対応している。その際、土製品は土器に、アスファルト塊・古銭は石器に含めた。また挿図中の土器には、出土地点と分類を明記した。
- 8 遺構番号は、その種類ごとに略号を付し、検出順に通し番号を付したが、後に検討の結果、遺構ではないと判断したものは欠番とした。また遺構・遺物には下記の略記号を使用した。  
SI 竪穴住居跡 SKI 竪穴状遺構 SN 炉跡 SK 土坑 SR 土器埋設遺構 SQ 集石
- 9 挿図に使用したスクリーン・トン・シボルマークは以下の通りである。また複式炉細部の名称を下図により記述した。

	地 山		アスファルト	① 全 長 m
	焼 土		腐 部	② 幅(最大) m
	焼土塊		凹 部	③ 土器埋設部
	炭化物		土器割れ口	④ 石 組 部
	炭化材		土器・土製品	⑤ 奥 壁
			石材・石製品	⑥ 石組部末端
				⑦ 前 庭 部
				⑧ 前庭部末端



# 目 次

## 序 例言 目次

第1章 はじめに……………	1	第1節 検出遺構と出土遺物……………	13
第1節 調査に至るまで……………	1	第2節 遺構外出土遺物……………	92
第2節 調査の組織と構成……………	1	第5章 自然科学的分析……………	134
第2章 遺跡の立地と環境……………	3	第1節 放射性炭素年代測定……………	134
第1節 立地と環境……………	3	第2節 残留磁気測定……………	134
第2節 歴史的環境……………	4	第3節 鉱物分析及び屈折率測定……………	138
第3章 発掘調査の概要……………	7	第4節 樹種同定……………	141
第1節 遺跡の概観……………	7	第5節 蛍光X線分析……………	142
第2節 調査の方法……………	9	第6章 まとめ……………	143
第3節 調査経過……………	10	写真図版	
第4章 調査の記録……………	13		

## 挿図目次

第1図 調査区及び周辺地形図……………	2	第20図 S I 02・19出土遺物(6) ……	33
第2図 上熊ノ沢遺跡と周辺遺跡地図……………	5	第21図 S I 03竪穴住居跡・炉跡……………	36
第3図 基本土層模式図……………	8	第22図 S I 03出土遺物……………	37
第4図 遺構配置図……………	11・12	第23図 S I 04・22・24・25竪穴住居跡・ 遺物出土状況……………	38
第5図 S I 01竪穴住居跡……………	14	第24図 S I 04炉跡・出土遺物(1) ……	39
第6図 S I 01遺物出土状況……………	15	第25図 S I 04出土遺物(2)……………	40
第7図 S I 01出土遺物(1)……………	16	第26図 S I 04・22・24・25出土遺物(3) ……	41
第8図 S I 01出土遺物(2)……………	17	第27図 S I 09・17竪穴住居跡……………	44
第9図 S I 01出土遺物(3)……………	18	第28図 S I 09・17炉跡……………	45
第10図 S I 01出土遺物(4)……………	19	第29図 S I 09・17出土遺物……………	46
第11図 S I 02・19竪穴住居跡……………	22	第30図 S I 12竪穴住居跡・炉跡……………	48
第12図 S I 02・19遺物出土状況……………	23	第31図 S I 12出土遺物……………	50
第13図 S I 02炉跡……………	24	第32図 S I 14竪穴住居跡・遺物出土状況 ……………	52
第14図 S I 02炉埋設土器……………	25	第33図 S I 14炉跡……………	53
第15図 S I 02・19出土遺物(1)……………	26	第34図 S I 14出土遺物(1)……………	54
第16図 S I 02出土遺物(2)……………	27	第35図 S I 14出土遺物(2)……………	55
第17図 S I 02出土遺物(3)……………	28	第36図 S I 14出土遺物(3)……………	56
第18図 S I 02出土遺物(4)……………	29		
第19図 S I 19出土遺物(5)……………	32		

第37図	S I 14出土遺物 (4) ……………	57	第70図	遺構外出土土器 (12) ……………	106
第38図	S I 14出土遺物 (5) ……………	58	第71図	遺構外出土土器 (13) ……………	107
第39図	S I 15竪穴住居跡・炉跡 ……………	60	第72図	遺構外出土土器 (14) ……………	108
第40図	S I 18竪穴住居跡 ……………	64	第73図	遺構外出土土器 (15) ……………	111
第41図	S I 18遺物出土状況・焼土及び 炭化材検出状況 ……………	65	第74図	遺構外出土土器 (16) ……………	112
第42図	S I 18炉跡 ……………	66	第75図	遺構外出土土器 (17) ……………	113
第43図	S I 18出土遺物 (1) ……………	67	第76図	遺構外出土土器 (18) ……………	114
第44図	S I 18出土遺物 (2) ……………	68	第77図	遺構外出土土器 (19) ……………	115
第45図	S I 18出土遺物 (3) ……………	69	第78図	遺構外出土土器 (20) ……………	116
第46図	S I 21竪穴住居跡・炉跡 ……………	70	第79図	遺構外出土土器 (21) ……………	117
第47図	S I 21出土遺物 ……………	71	第80図	遺構外出土土器 (22) ……………	118
第48図	S I 37竪穴住居跡・炉跡 出土遺物 ……………	72	第81図	遺構外出土土器 (23) ……………	119
第49図	S K I 07竪穴状遺構・遺物出土 状況・出土遺物 (1) ……………	76	第82図	遺構外出土土器 (24) ……………	120
第50図	S K I 07出土遺物 (2) ……………	77	第83図	遺構外出土土器 (25) ……………	121
第51図	S N 05・20・40炉跡出土遺物 …	78	第84図	遺構外出土土器 (26) ……………	122
第52図	S K 08・13・23・26~30土坑 …	83	第85図	遺構外出土石器 (1) ……………	124
第53図	S K 31・33~36・38・39・ 41・42・44土坑 ……………	84	第86図	遺構外出土石器 (2) ……………	125
第54図	S K 45~49・52~55土坑 ……………	85	第87図	遺構外出土石器 (3) ……………	126
第55図	S K 出土遺物 (1) ……………	86	第88図	遺構外出土石器 (4) ……………	127
第56図	S K 出土遺物 (2) ……………	87	第89図	遺構外出土石器 (5) ……………	128
第57図	S K 出土遺物 (3) ……………	88	第90図	遺構外出土石器 (6) ……………	129
第58図	S R 10土器埋設遺構・ S Q 16集石 ……………	92	第91図	遺構外出土石器 (7) ……………	130
第59図	遺構外出土土器 (1) ……………	94	第92図	遺構外出土石器 (8) ……………	131
第60図	遺構外出土土器 (2) ……………	95	第93図	遺構外出土土製品・石製品・ 須恵器・古銭 ……………	133
第61図	遺構外出土土器 (3) ……………	96	第94図	上熊ノ沢遺跡住居跡配 置略図 ……………	135
第62図	遺構外出土土器 (4) ……………	97	第95図	各炉跡の測定結果と平均偏 角・伏角 ……………	135
第63図	遺構外出土土器 (5) ……………	98	第96図	上熊ノ沢遺跡測定結果 ……………	135
第64図	遺構外出土土器 (6) ……………	99	第97図	上熊ノ沢遺跡 鉦物分析試 料の層位 ……………	139
第65図	遺構外出土土器 (7) ……………	101	第98図	上熊ノ沢遺跡 鉦物組成 ダイヤグラム ……………	140
第66図	遺構外出土土器 (8) ……………	102	第99図	蛍光X線分析装置による 安定チャート ……………	142
第67図	遺構外出土土器 (9) ……………	103	第100図	複式炉を有する竪穴住居跡 変遷図 ……………	144
第68図	遺構外出土土器 (10) ……………	104			
第69図	遺構外出土土器 (11) ……………	105			

## 表目次

第1表	遺跡一覽表	6	第3表	上熊ノ沢遺跡 鉦物組成	140
第2表	上熊ノ沢遺跡炉跡残留磁気調査	137			

## 図版目次

図版1	1	調査前近景	147	図版15	遺構内出土土器(1)	161
	2	航空写真	147	図版16	遺構内出土土器(2)	162
図版2	1	S I 01 竪穴住居跡完 掘状況	148	図版17	遺構内出土土器(3)	163
	2	S I 02・19 竪穴住居跡 遺物出土状況	148	図版18	遺構内出土土器(4)	164
図版3		S I 02 竪穴住居跡	149	図版19	遺構外出土土器(1)	165
図版4		S I 03 竪穴住居跡	150	図版20	遺構外出土土器(2)	166
図版5		S I 04・22・24・25 竪穴住居跡	151	図版21	遺構外出土土器(3)	167
図版6		S I 09・17 竪穴住居跡	152	図版22	遺構外出土土器(4)	168
図版7		S I 12 竪穴住居跡	153	図版23	遺構外出土土器(5)	169
図版8		S I 14 竪穴住居跡	154	図版24	遺構外出土土器(6)	170
図版9	1	S I 15 竪穴住居跡	155	図版25	遺構外出土土器(7)	171
	2	S I 18 竪穴住居跡 精査状況	155	図版26	遺構外出土土器(8)	172
図版10		S I 18 竪穴住居跡	156	図版27	遺構外出土土器(9)	173
図版11		S I 21 竪穴住居跡	157	図版28	遺構外出土石器(1)	174
図版12		S I 37 竪穴住居跡	158	図版29	遺構外出土石器(2)	175
図版13		S K I 07 竪穴状遺構 S N 05・20・40 炉跡	159	図版30	遺構外出土石器(3)	176
図版14		S K 08・13・49・52~54 土坑 S R 10 土器埋設遺構	160	図版31	土器展開写真(1)	177
				図版32	土器展開写真(2)	178
				図版33	1 重鉦物・軽鉦物偏光 顕微鏡写真	179
					2 炭化材電子顕微鏡写真	179

## 第1章 はじめに

### 第1節 調査に至るまで

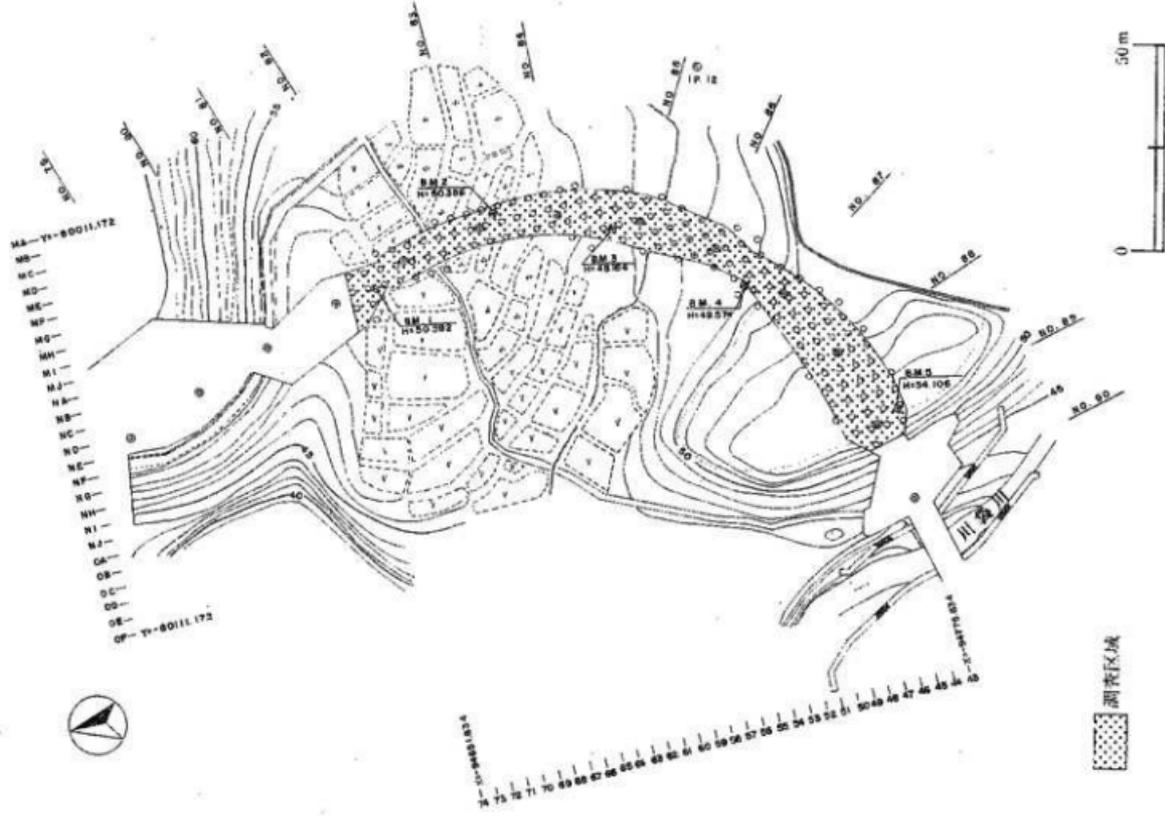
このたび象潟町大砂川地区に計画された農免農道は、大須郷を起点とし大砂川に至る総延長2,184m、幅6mの道路である。昭和62年度には大須郷から川袋までのⅠ期工事が着工し、翌昭和63年度には川袋から大砂川に至るⅡ期工事計画が立案、施行されることになった。これに伴って秋田県教育委員会では、昭和63年度に計画路線内の分布調査及び遺跡範囲確認調査を実施し、Ⅰ期工事路線内に上熊ノ沢遺跡・Ⅱ期工事路線内にヲフキ遺跡の2遺跡があることを報告した。この結果を受けて、秋田県教育委員会と事業主体である秋田県農政部の間で、遺跡保存について協議したが、路線変更が不可能な事から、記録保存の措置をとることで合意し、平成元年5月8日～6月30日にヲフキ遺跡、同年7月3日～10月3日に上熊ノ沢遺跡の発掘調査を実施した。

註

- 1 秋田県教育委員会「遺跡詳細分布調査報告書」秋田県文化財調査報告書第179集 1989（平成元年）
- 2 秋田県教育委員会「大砂川地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書」秋田県文化財調査報告書第199集 1990（平成2年）

### 第2節 調査の組織と構成

遺跡所在地	由利郡象潟町大須郷字上熊沢3番地他
調査期間	平成元年7月3日～10月3日
調査面積	1,800㎡
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	武藤祐浩 秋田県埋蔵文化財センター学芸主事 和泉昭一 秋田県埋蔵文化財センター非常勤職員 鎌田 茂 秋田県埋蔵文化財センター非常勤職員 吉田 真 秋田県埋蔵文化財センター非常勤職員
総務担当者	佐田 茂 秋田県埋蔵文化財センター主査 高橋忠太郎秋田県埋蔵文化財センター主事
調査協力期間	秋田県農政部由利農林事務所土地改良課 象潟町役場農林水産課 象潟町教育委員会 象潟町郷土資料館



第1図 調査区及び周辺地形図

## 第2章 遺跡の立地と環境

## 第1節 立地と環境

象潟町は秋田県の南西端にあって、由利地方の中でも気候温暖な地域として知られている。東は仁賀保町、北は金浦町、南は山形県遊佐町に接し、西は日本海に面している。また、町の南東部には出羽富士と呼ばれる鳥海山（標高2,237m）がそびえている。

上熊ノ沢遺跡は、鳥海山の西麓、標高54mの台地上に存在し、日本海の汀線より直線距離にして1.5km東にあり、東経139° 53' 11"、北緯39° 07' 10" に位置する。また、JR上浜駅の南西、小砂川駅からは北東方向で共に約2.0kmであり、山形県境までも約4km、車で5分ほどの所である。

日本海の海岸線に沿って走る国道7号線を、象潟町の中心部から南下するとJR上浜駅を過ぎた辺りで右前方に日本海が広がる。夏の日本海は真っ青で爽快である。またこの付近から小砂川にかけては火山性の岩石海岸が形成されており、国道7号線にあっては希に見る景勝地となっている。道路左手は大砂川地区であり、ヲフキ遺跡付近をよくめて段々に水田が作られている。道路右側の上浜小学校を過ぎると、道路は比高差20mほどの台地上にのぼる。この坂を上り、大須郷の看板を左折すると集落が見えてくる。道は集落の公民館に突き当たり、二股に別れるが、その左側を進み集落を抜けると、前方の山裾まで水田が続く。道なりに進み、小砂川バイパスに続く道との交差点を左折すると間もなく、大須郷集落ののる台地の北端にいたり、農道建設の現場につく。遺跡はここから川袋川を挟んだ対岸である。

鳥海山の西側に源を欲する川袋川は西北西に小さく蛇行しながら流れ、川袋集落を経て日本海に注ぐ全長7km程の短く小さな川である。遺跡はこの川袋川の右岸台地上に立地している。この台地は川袋川の右岸に沿って舌状に西北西に延びるもので、高い平坦な所でその広さは長さ70m（南北）、幅25m（東西）ある。台地の川袋川側（西）は急な崖で、東側はゆるい斜面をなす。台地の北東側の緩斜面を下りきった所に小さな沢が川袋川と平行に流れている。したがってこの舌状台地は川袋川と小さな沢に挟まれた状態である。遺跡は沢のさらに北側にも延びている。北側に、再び緩やかな斜面を上ると南北40m、東西50mほどの平場がある。こちらの台地も、南西方向は緩く、北側はきつい斜面となっており、台地全体としては西側に張り出す舌状を呈している。遺跡全体はこれら二つの舌状台地を含んでいる。

遺跡の周辺は、鳥海山の西側、観音森の山裾にあたる。杉林がおおいが部分的に竹林もある。こうした林の地面には、鳥海山の噴火による径2mにも及ぶ岩石が露頭するところも見られた。

また、今回の調査区の東側には、大須郷周辺の台地に開かれた水田に引く水道が設けられている。これは烏海山の山肌を流れ落ちる水が、山麓に自生しているブナの原生林によって中和され、清水として湧きでたものを利用したものである。真夏に冷たいこの水は、私達の発掘調査作業時にも、一服の涼をあたえてくれた。

## 第2節 歴史的環境

上熊ノ沢遺跡が所在する象潟町には、原始・古代・中世などの遺跡が分布している。これらの遺跡は、日本海に注ぐ川登川、白雪川、奈曾川などや、その支流の諸河川によって形成された河岸段丘上と烏海山西麓の台地上に立地している。特に大砂川地区周辺は早くから土器、石器、土偶などの出土が報じられており、埋蔵文化財包蔵地として全国的にも知られている場所である。また、1915（大正5）年には東京帝国大学人類学教室の大野雲外教授が資料収集のため来町している。

象潟町では、旧石器時代の遺跡は確認されていなかったが、近年大須郷地区からナイフ形石器が採集されたという。残念ながら出土地点が明確ではないが、この時代の遺跡が確認される日も近いものと思われる。縄文時代の遺跡は、数が少ないものの前期から晩期まで各期を通じて発見されている。これらの遺跡から出土した土器には、青森県を中心に東北部に分布する円筒土器様式土器、宮城県を中心として東南部に分布する大木土器様式土器があり、縄文人の広範囲に亘る地域交流をうかがうことができる。また、山形県庄内地方の隣接地であり、前期終末から中期初頭にかけての時期や、晩期終末から弥生時代前期にかけては共通する特徴も多い。

県内でも調査例の少ない弥生時代の遺跡としては、象潟町では九十九島遺跡 [14 第2図中の番号 以下同じ] 1箇所であったが、上熊ノ沢遺跡 [1] でも弥生時代の土器などが発見され、この時代の遺跡が1つ追加された。

古代の遺跡としては、奈良・平安期にわたる製塩遺跡であるカウヤ遺跡 [15]、平成元年度調査されたヲフキ遺跡 [2] の2遺跡がある。また、奈良時代（733年）に造営された秋田市高清水にある秋田城への道筋にあり、これに関係する遺跡などがまだ多く埋蔵されているものと思われる。なお、大砂川地区は、金環等が出土した管ヶ崎（くだがさき）古墳の所在地とされている。中世の遺跡では、この地を支配した小笠原氏、仁賀保氏、十二頭などの居城の跡である、汐（塩）越城 [16]、関新館 [17]、国見館 [18] などの城館がある。

近世に至っては、江戸期の俳人松尾芭蕉が訪れた虹満寺や、その末寺光岸寺がある。



第2図 上熊ノ沢遺跡と周辺遺跡位置図

## 註

- 1 庄内昭夫氏のご教示による。
- 2 秋田県『秋田県史』考古編 1977 (昭和52年)
- 3 853年(仁寿3)年、天台宗の慈覚大師円仁の開創と伝えられている。

## 参考文献

- 1 奈良修介・豊島 昂 『秋田県の考古学』 郷土考古学叢書 1967 (昭和42年)
- 2 象潟町教育委員会 『象潟町史』 1968 (昭和43年)
- 3 秋田県教育委員会 『秋田県遺跡地図』 1976 (昭和51年)
- 4 秋田県 『秋田県史』 考古編 1977 (昭和52年)
- 5 秋田県教育委員会 『秋田県の中世城館』 秋田県文化財調査報告書第86集 1981 (昭和56年)
- 6 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県埋蔵文化財調査報告書第103集 1983 (昭和58年)
- 7 秋田県教育委員会 『カウヤ遺跡発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第123集 1985 (昭和60年)
- 8 秋田県教育委員会 『カウヤ遺跡第2次発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第135集 1986 (昭和61年)
- 9 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第179集 1989 (平成元年)
- 10 秋田県教育委員会 『大砂川遺跡農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 - ヲフキ遺跡 -』 秋田県文化財調査報告書第199集 1990 (平成元年)

第1表 遺跡一覧表 遺跡番号は、第2図に対応。文献番号は参考文献の番号に対応。

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	文献番号
1	上 熊ノ沢	象潟町大須郷字上熊ノ沢3	縄文・弥生	9
2	ヲフキ	象潟町大砂川字ヲフキ27	縄文・平安	3・7・8・9・10
3	菅 先	象潟町大砂川字菅先	縄文(中・後期)	3・7・8・9
4	川 崎	象潟町川袋字川崎42・44	縄文(中・晩期)	7・8
5	滝ノ下	象潟町川袋字滝ノ下42・44	縄文(中・晩期)	7・8
6	萩 坂	象潟町本郷字上の平(萩坂)	縄文(後期)	3
6	ヨシハ沢	象潟町関字ヨシハ沢	縄文(晩期)	3・7・8
8	栗 山 池	象潟町本郷字栗山池	縄文(晩期)	3・7・8
9	下居権現森	象潟町関字下居権現森	縄文	3・7・8
10	小砂川下向坂	象潟町小砂川字下向坂	縄文	3・7・8
11	小砂川水上	象潟町小砂川字中磯	縄文	3・7・8
12	小砂川三崎	象潟町小砂川字水上	縄文	3・7・8
13	小砂川三崎	象潟町小砂川字三崎	縄文	3・7・8
14	九十九島	象潟町九十九島の内の一つ	弥生	3・7・8
15	カウヤ	象潟町小砂川字カウヤ	縄文・奈良・平安・近世	6・7・8
16	汐(塩)越城	象潟町塩越字二の丸	中世	2・5・8
17	関新館	象潟町関字赤坂	中世	5・8
18	園見館	象潟町横園字園見館	中世	5・8

### 第3章 発掘調査の概要

#### 第1節 遺跡の概観

上熊ノ沢遺跡は川袋川の右岸台地上に立地している。遺跡は二つの舌状台地とその間の斜面からなっている。その標高は南側の台地上で54.1m、北側の台地上で50.5m、また二つの台地間の斜面下方では48.0mである。遺跡の東側は観音森の山裾にあたり、斜面上方との傾斜はややきつい。遺跡の北側には、西方向からの沢が入り込む。また南西部では急な崖をなし比高差14mをもち、西側では緩やかな斜面が続いた後に、川袋川に面している。

車による遺跡への進入路は、大須郷側からしかない。川袋川左岸から遺跡付近を臨むと、遺跡南側の台地が、建設途中の橋脚の向こうに崖面を露呈しており、路線幅だけは杉が伐採されている。台地上は平坦に見えるが台地の奥行きは感じられない。眼下の川袋川は雨天の翌日には水量を増し、勢い良く流れている。この川の下流ではサケの稚魚を養殖しているという。橋脚の下に仮設された土橋をわたると、遺跡南側台地の南西裾に作業道がある。ここは杉林の中で、夏でも涼しい。この道を50m程進むと、急に目の前が開け、遺跡北側の緩やかな斜面が続いている。調査前の現況は遺跡南側が杉林、遺跡北側の一部が畑地であったというが、調査開始時点では、後者は既に腰の辺りまでの雑草が繁る荒地地となっていた。また、調査区内は、段々畑状の地形を止め、径1mにも達する岩を組んだ畦畔が残っており、以前に水田として開墾された土地であったことが、容易に看取された。

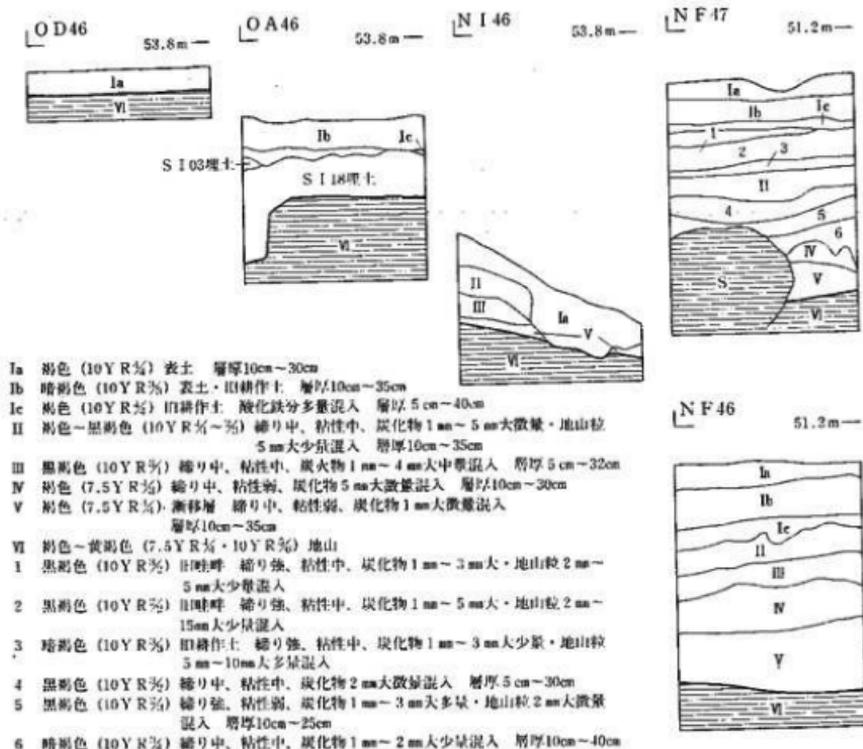
今回発掘調査の原因となった農免農道は、全長2,184m、幅6mである(第2図)。大砂川を起点とし、川袋までは水田地帯をとおり、川袋からは山裾の山林をきって進み、遺跡付近で大きくカーブを描いて川袋川を越え、大須郷にいたる。このため調査区の全体は、北西に中心を持つ弧状になっている。遺跡内では、北側の台地のへりを通り、南側の台地のほぼ中央を、通り抜けて行く。

調査では、南側の台地上に縄文時代中期後葉の複式炉を伴う竪穴住居跡群と同中期末葉から後期初頭にかけての竪穴住居跡1軒、また同晩期最終末から弥生時代前期にかけての竪穴住居跡1軒を検出した。また、中央の小さな沢に向かう斜面からは、縄文時代中期後葉、同晩期最終末から弥生時代にかけての土器が多量に出土している。なお、この斜面には、ほぼ南北方向に沢が埋没しており、その沢底は岩石海岸に見られるような岩場となっていた(第4図)。

調査区北側では縄文時代中期後半の土坑を検出したものの、遺構は少なかった。台地の南側及び北側の斜面からは縄文時代後期前葉の土器と同晩期終末から弥生時代にかけての土器がま

とまって出土しており、南側とは若干様相を違えている。尚、調査区北端の斜面下方には遺物包含層が続いているが、その部分は盛土となるため調査区から除外されている。

遺跡の基本層位は、調査区南側の46ラインの土層をもとにした(第3図)。調査区南西側の台地上では開田時の削平が著しくI層だけである。また調査区中央の小さな沢の南側では、2m程の標高差があるもののNF47グリッドの堆積層に類似する。調査区北半においては、IV・V層の層厚が5cm前後づつになるものの、基本的にI～V層に分けられる。全体に下位の層は地山の土に類似し、調査では地山面の特定及び遺構の検出に苦勞した。尚、NF47グリッド付近掘り下げ中に、縄文時代晩期最終末から弥生時代前期の土器片がまとめて出土したところがある。本報告書では遺構として扱っていないが、その部分の土層も合わせて示した。第3図中の4層に晩期最終末から弥生時代前期の土器がまとめており、5・6層からは縄文時代前期前葉・同中期後葉の土器が出土している。



第3図 基本土層模式図

## 第2節 調査の方法

調査の方法はグリッド法を採用した。遺跡全体に方眼をかけることを想定し、調査区南東に打設された工事的杭IP12を原点とし、国家座標第X系の座標にに合わせて一辺4mのグリッドを設定した。また、座標軸の南北方向に2桁の算用数字(49・50・51…)、東西方向にアルファベット2文字の組み合わせ(MA…MJ・NA…NJ・OA…OF)を付し、この組み合わせを各グリッド杭の名称とした(例 NA50)。各グリッドの呼称は、グリッドの南東隅の杭の名称を用いている。

掘り下げは表土から人力で行った。遺構外出土遺物の取り上げは出土グリッド・出土層位・出土年月日を記入したラベルとともに取り上げた。遺構内出土遺物については1点ごとに番号を付して取り上げるようにしたが、覆土一括としたものもある。これら遺物の出土状況は必要に応じて適宜図面作製や写真撮影を行った。遺構の確認は掘り込み面で行うように努めたが、大半は地山面で検出した。

遺構の精査は、対象となる遺構によって2分法・4分法を用いた。記録は主に図面と写真によった。図面は断面図と平面図を作成したが、遺構によってはエレベーション図を作成したものもある。平面図はグリッド杭を利用した遺り方測量で作図した。各国の縮尺は基本的に1/20で作図したが、場合によっては1/10で行ったものもある。遺構図面は、遺物出土状況・重複関係などから数回にわたる図面作製を行っている。また、SI02・19付近の1/20平面図の作成はリフティング・ケーブル・カメラシステムにより、また調査区全体地形把握のための1/200遺構配置図の作成は、空中写真測量による図化を委託した。

写真は、基本的には35mm、必要に応じて6×4.5cmのモノクロとリバーサルフィルムを使用した。

この他、遺跡の年代把握などのために、試料のサンプリングを行い、分析を委託した。

室内における整理は、遺構については実測図より第2原図を作成し、これをトレースしている。また遺物については、洗浄・注記の後に復元し、実測図・拓影図の作成、写真撮影を行っている。

## 第3節 調査の経過

発掘調査は平成元年7月3日から10月3日までの間に、延べ90日を費やして行われた。調査期間前半は晴天が続いたが厳しい暑さのみまわれ、後半は連日の雨にさいなまれた。また、調査期間全般を通し作業員が不足し、作業自体はアルバイト生の労力に支えられた部分もあった。

以下に日誌から抜粋して調査経過を略述する。

- 7月3日 機材搬入。作業員に対し、作業の説明を行い、調査を開始する。全体の土層把握のために、調査区内に6本のトレンチを設定し掘り下げる。
- 5日 由利農林事務所土地改良課の山中氏来跡し、現況視察。この後、山中氏は調査期間中度々来跡された。
- 10日 トレンチ調査を終了し、南側の台地上の表土除去開始。
- 19日 遺構確認精査開始。地山面の乾きが早く、遺構が確認し辛いが部分的に暗褐色土の落ち込みを検出している。
- 21日 粗掘を中断し、N Iラインまでの遺構確認を進めている。本日までの作業員は10～14名であり人手不足が深刻である。
- 24日 S I 01・02の遺構精査を開始する。また本日よりアルバイトが入り、調査区北側に向けての粗掘再開。
- 31日 本日までに竪穴住居跡6軒を含む11基の遺構を検出した。また調査区中央部に向かう斜面には、岩が多くでてきている。
- 8月10日 町役場産業課職員5名来跡し、遺跡を見学していく。
- 23日 調査工程の見直しを行い、調査期間9月22日まで延長となる。本日までに検出した遺構は22基である。
- 29日 秋田大学の西谷先生が来跡され、熱残留磁気測定の実験試料をサンプリングして行かれる。
- 30日 町郷土資料館職員4名来跡し、遺跡を見学する。また本日より調査区北半の粗掘開始。
- 9月5日 調査員2名増員なる。本日まで調査区南半で検出した遺構は39基に上り、竪穴住居跡の精査が遅れている。
- 13日 調査区北半での遺構確認精査を開始。
- 16日 航空写真測量のための写真撮影が行われる。
- 20日 S I 02・19付近の精査を終了し、調査区南側の調査を終了。
- 22日 北側台地周辺の土坑・ピット群の精査を終了し、現場作業を終了する。
- 10月3日 機材撤収および協力期間に挨拶し、発掘調査を終了する。



第4図 遺構配置図

## 第4章 調査の記録

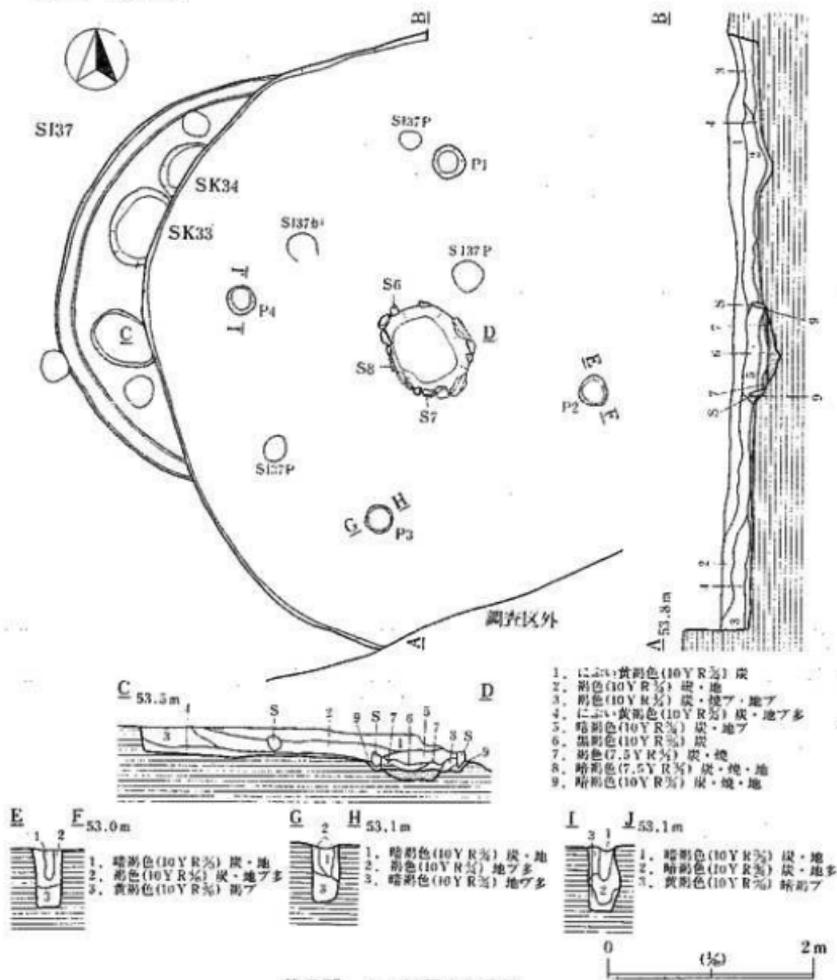
調査によって検出した遺構は、竪穴住居跡を中心に総数49遺構である。また出土した遺物は縄文土器及び石器など整理用コンテナで110箱である。

なお、遺構内外から出土した土器については以下のとおり分類して記述した。

I群 早期中葉(貝殻文)	II群 早期後葉(条痕文)	III群 前期初頭
IV群 前期末葉~中期初頭	V群 中期前葉	VI群 中期後葉
VII群 中期末葉~後期初頭	VIII群 後期前葉	IX群 後期中葉
X群 後期後葉~晩期初頭	XI群 晩期末葉~弥生時代	

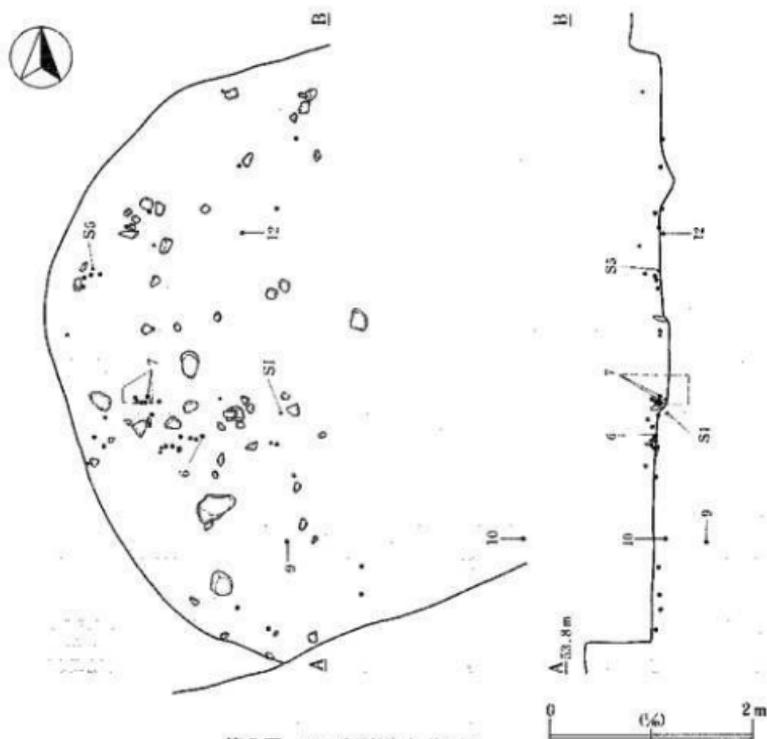
## 第1節 検出遺構と出土遺物

調査の結果、遺構としては竪穴住居跡1軒、竪穴状遺構1基、炉跡3基、土坑27基、土器埋設遺構1基、集石1基が検出された。その分布状況は第4図に示したとおりであるが、ある程度まとまりを見出すことができる。全体的には調査区西端の南北に伸びる台地上とその東側斜面に約8割の遺構が分布し、他はその台地の東側に南西から北東へ伸びる埋没谷の東側縁辺部に竪穴住居跡1軒(SI15)、土坑3基(SK38・45・46)、集石1基(SQ16)、調査区東端の台地西側緩斜面に土坑5基(SK48・49・52~54)が分布している。竪穴住居跡16軒中、複式炉をもつ住居跡は11軒、地床炉をもつものが1軒(SI19)で縄文時代中期後葉から後期初頭の時期に比定される。残り4軒は、SI101が縄文時代晩期末葉から弥生時代初頭の時期に比定され、他はSI104と重複する住居跡である(SI22・24・25)。開田による破壊が著しいため検出面が床面であったり、柱穴配置から形態・規模を推定したものが大部分である。炉跡として扱った3基は炉の形態や住居跡と同様の分布状況を示すことから、本来は住居の炉であった可能性が強い。しかし、柱穴等を検出できなかったため炉跡として一括している。特に離れた位置にあるSI15を除けば、台地上の縁辺部及び東側斜面に集中し、台地上の中央部は空白に近くなっている。また、住居跡の重複が顕著である点は、その位置に構築しなければならなかった集落構成上の規範や、狭少(東西幅)な地形での有効利用、自然的環境上の営利性という要因が考えられる。それは台地上の南側(46ライン以南)では、地山下の礫層が一部上面に露呈しているにもかかわらず、住居・炉等を構築していることが一つの証左となろう。その意味ではSI15も例外ではない。台地の西端は川袋川の崖線で、調査時でも崩落が進行していたが、当時の地形を想定すれば幾分台地が広がっていたことが窺える。集落の領域は、さらに調査区



第5図 S101 壁穴住居跡

外の北側台地にも広がると考えられる。土坑・土器埋設遺構・集石の分布状況を見ると、調査区西端の台地に集中するものの、全体的には散在している。土坑については①西側台地の44~46ライン内で東西に帯状に分布する群、②S I 15南西側に分布する群、③調査区東端の台地西側緩斜面に分布する群がある。そのうち③では礫を配置する土坑 (SK 49・52・54) が検出されているため、他の土坑とは性格が異なるものと考えられる。調査区東端の台地で住居跡を検出していないことと③の土坑の性格から、上熊ノ沢遺跡内における遺構群の在り方の一端が窺える。



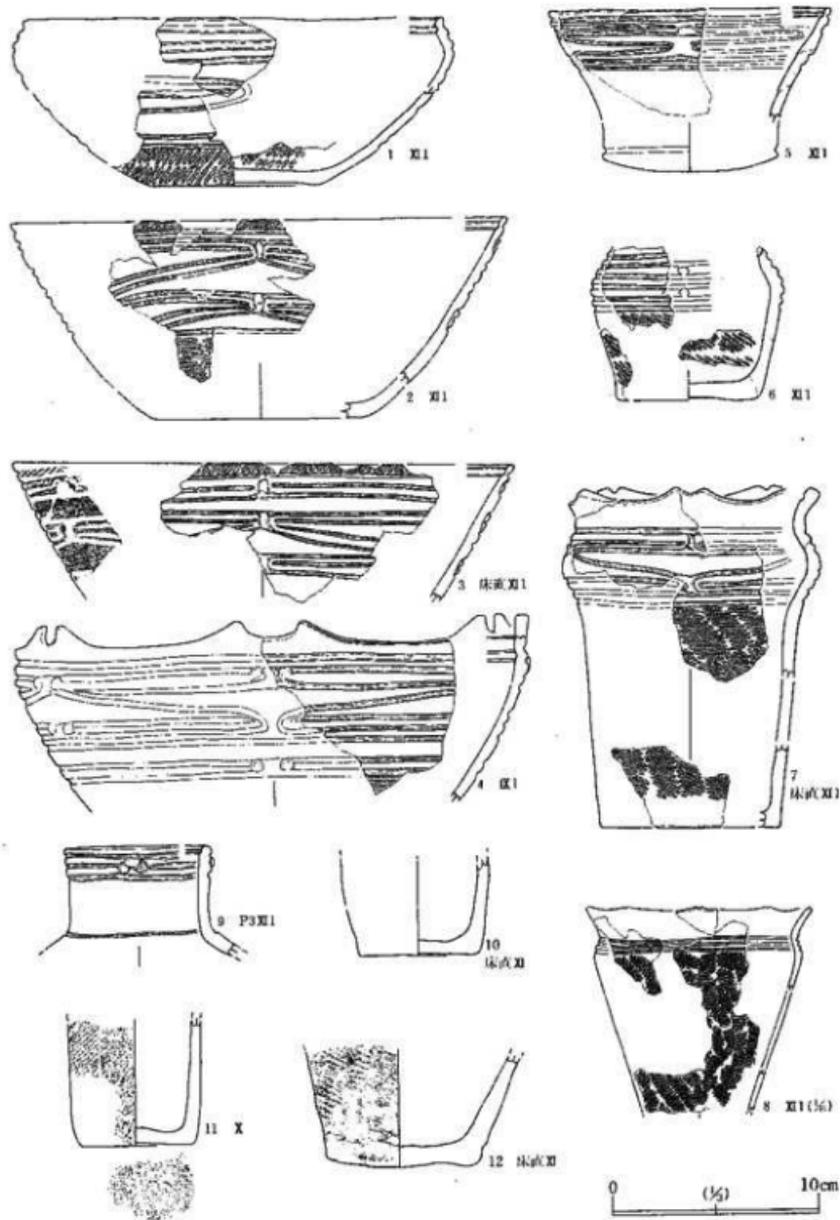
第6図 S101遺物出土状況

以下、各々の遺構について種別・番号順に記述するが、重複する遺構については順不同・一括して記述するものがある。

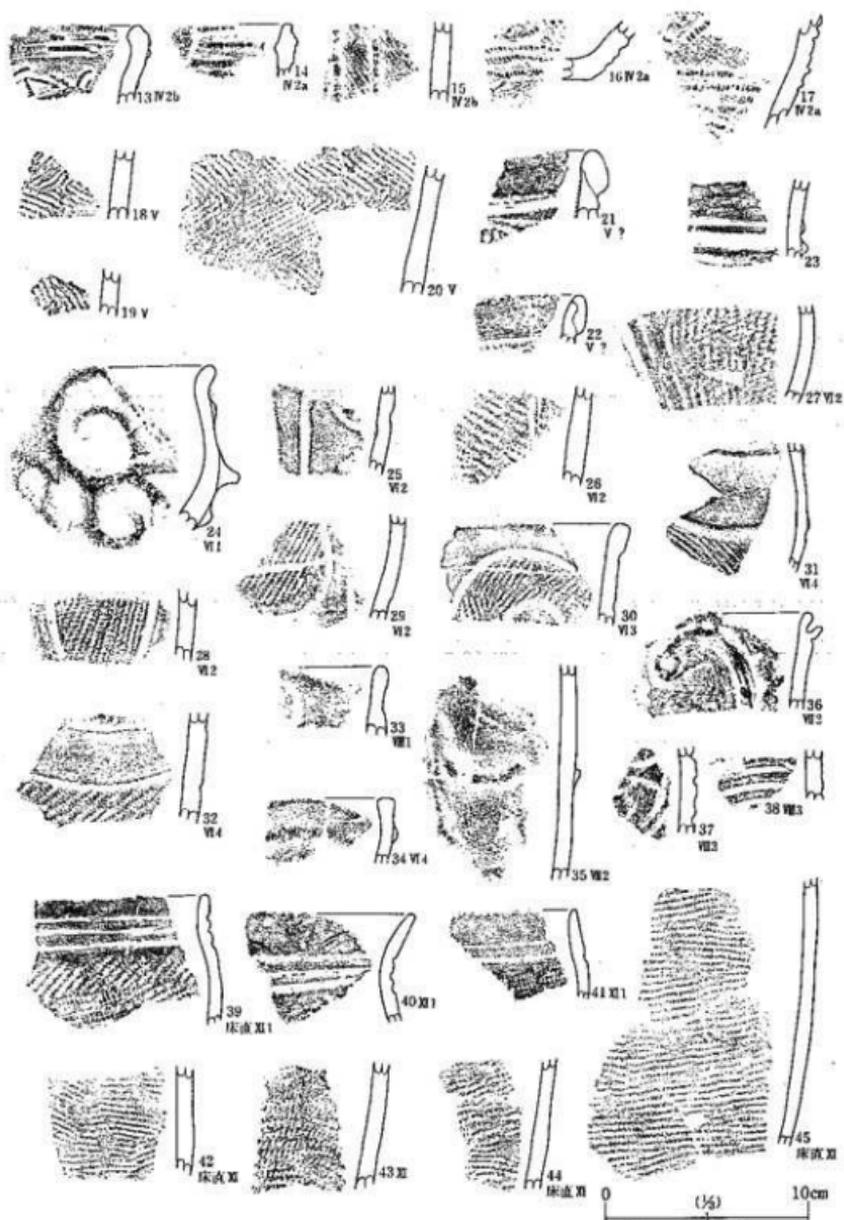
### 1 竪穴住居跡

#### S101 (第6～10図、図版2・15)

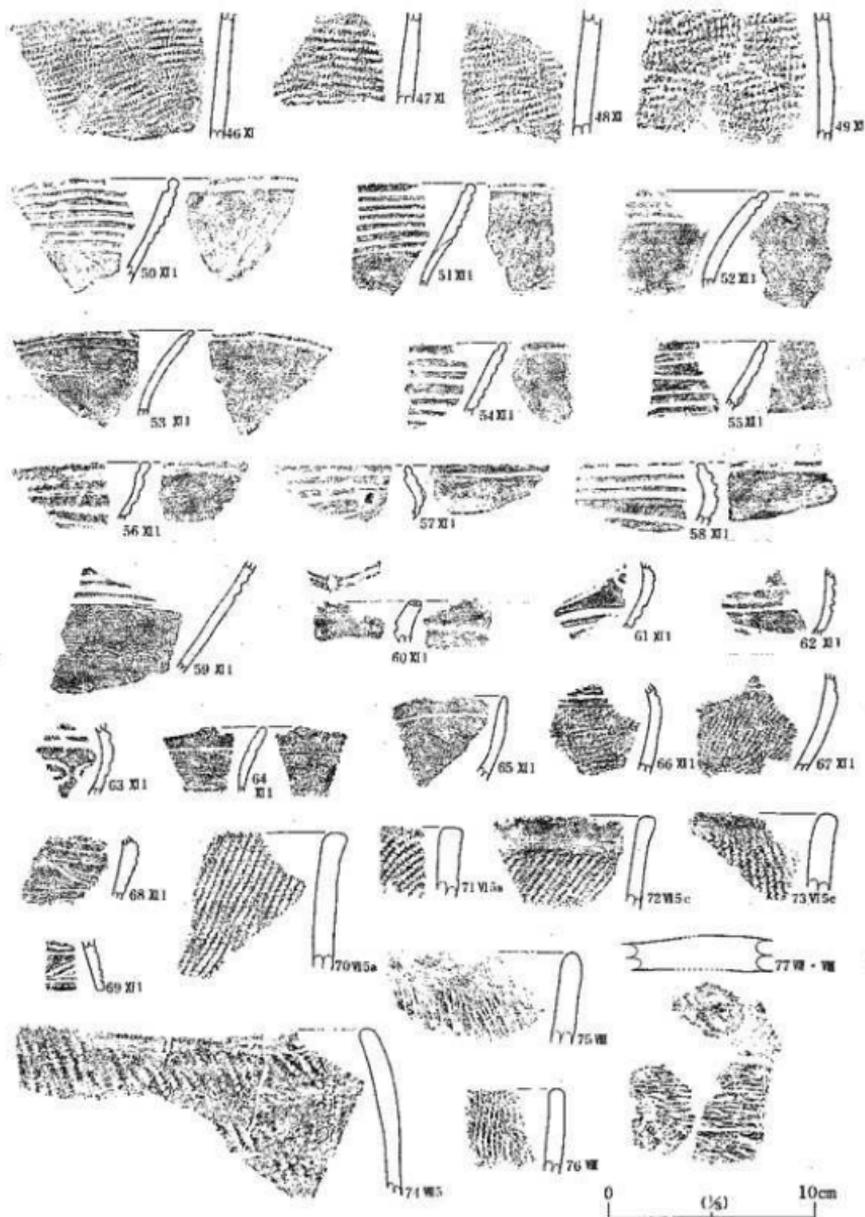
台地の南東側縁辺部にあたるNJ・OA43・44グリッドに位置し、漸移層上面で検出した。東側は開田による擾乱を受け、南側は調査区外にかかっているため全容は不明である。平面形は推定径6mの円形を呈すると考えられ、現存する壁高は28cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面は平坦で堅緻である。埋土は後述する炉の埋土(6～9層)も含めて9層に細別できる。2～4層に多量の遺物が含まれ、2・3層にはIV～VII群、4層にはXI群に比定される遺物が主体を占める。本遺構は縄文時代中期後葉から後期初頭の時期と考えられるS137, SK33・34を切って構築されているため、2・3層の遺物はこれらの遺構に関わるものを多く含ん



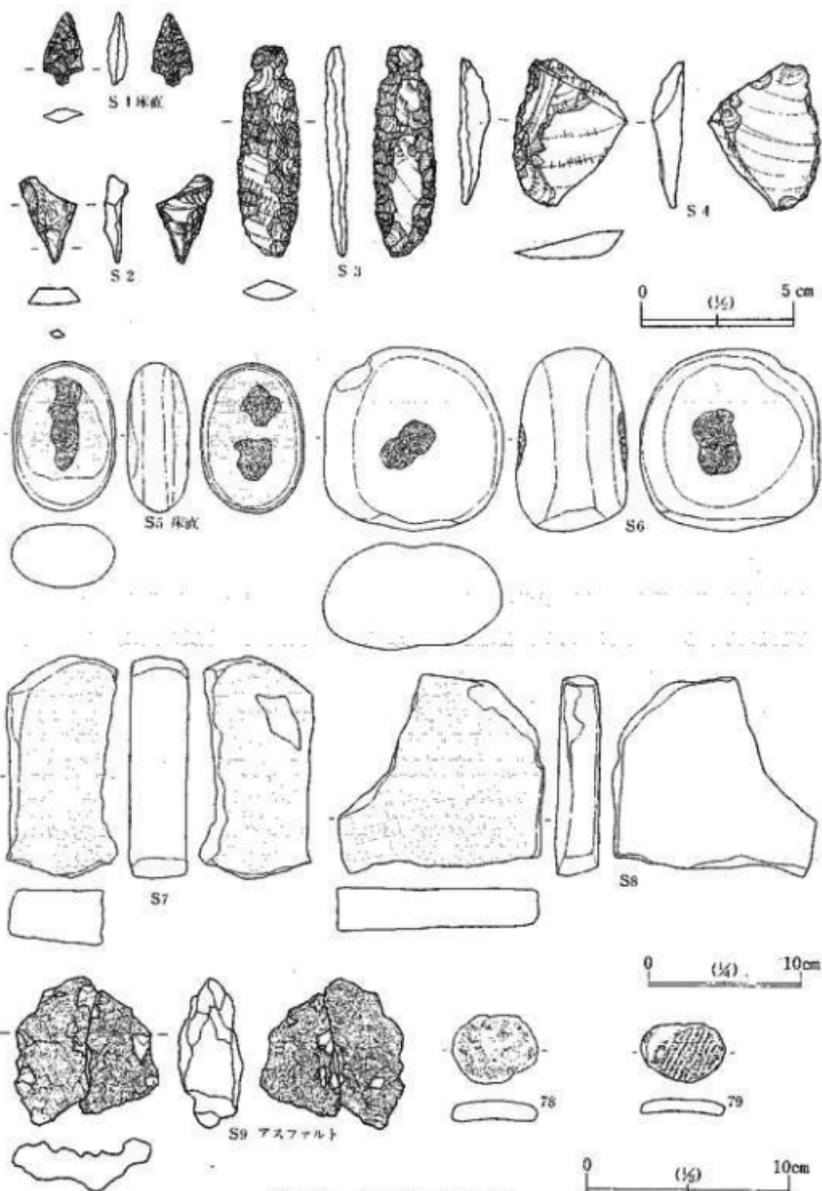
第7図 S 101出土遺物(1)



第8圖 S101出土遺物(2)



第9図 S 101出土遺物(3)



第10圖 S101出土遺物(4)

でいると推定できる。この視点から2・3層は二次的な流れ込みと解される。4層は層厚が薄く、床面直上に普遍的に覆っているため貼床と看取できるが、層の上面は安定性を欠いているため貼床ではないと考える。本遺構に伴う遺物を多く含むもの的人為的堆積の可能性が高い。また、遺物をほとんど含まない1層も4層と同様の堆積と考えられる。

柱穴はP1～4の4本を検出した。ほぼ正方形に配置され、P3・4を結んだ軸線方向はN-32°-Wで、炉の長軸方向にほぼ一致する。床面からの深さはP1～4の順に70cm、58cm、60cm、64cmを測る。埋土の観察から柱痕が認められ、4本とも約30cmの深さである。

炉は掘り込みをもつ石囲炉で、柱穴に囲まれたほぼ中央部に設けられている。平面形は長軸95cm、短軸80cmの楕円形で、深さ5cm～10cmを測る。底面は加熱による赤変・硬化が著しく、赤変は底面下10cmまで達している。壁はやや外傾し、壁に取り付く形で7cm～23cm大の円礫・亜角礫が配されている。北面で礫のない部分があるが、調査時では緩い窪みを検出しているため、抜き取られたものと判断できる。また、礫には凹石・石皿(第10図S6～9)が転用されている。埋土は5層に細別でき、自然的堆積であるが、9層は炉構築時に礫を固定させた充填土である。

遺物は埋土2～4層中及び床面から多量の縄文土器片・石器が出土した(第7～10図I1～79、S1～9)。IV～VII群・X群・XI群に比定される土器と石鏃・石錐・石匙・磨石・凹石・石皿等の石器、アスファルト塊である。ここでは床面から多く出土しているXI群土器について述べていく。第7図の復元実測図と第8・9図39～69がXI群土器に相当する。器種では鉢類が最も多く、壺・深鉢(瓊)類は非常に少ない。沈線描画後、調整を施す工字文・変形工字文が体部上半に3単位配置され、体部下半にはLR縄文を施すものが多い。沈線はやや太く、断面形が「U」状を呈する。工字文の結束部に粘土粒を貼付するものは比較的少ない。1・57・58・61～63は口縁部が内傾する深鉢形土器で、57は結束部に2個一対の粘土粒が貼付されている。2・3・54・55・59は体部から口縁部にかけて直線的に開く鉢形土器である。2・3は口縁部に縄文帯をもつ特徴があり、3は床面出土であるが、口縁部の縄文帯と体部上半の変形工字文間に平行沈線による工字文を配置したものと思われる。5・50～53は口縁部がやや外反する鉢形土器で、出土している鉢類のなかでは小形のものである。底部は丸底か平底を呈すると思われ、体部上半には変形工字文や数条の平行沈線文が施される。5は「π」字状の挾入部が作出されている。7は床面出土で、体部上半に影らみをもち、口縁部が外反する深鉢形(雙)土器である。3単位の波状口縁で波頂部は二対1単位の山形状を呈する。波底部も緩い波状を呈するため全体的には6単位の波状を構成している。影らみ部には3単位の変形工字文が施され、結束部の位置は口縁の波頂部に一致する。9は柱穴P3の3層中から出土した壺形土器の口頸部で、2条の平行沈線間に粘土粒を貼付することにより工字文を作出している。68は篋状工具による粗雑な

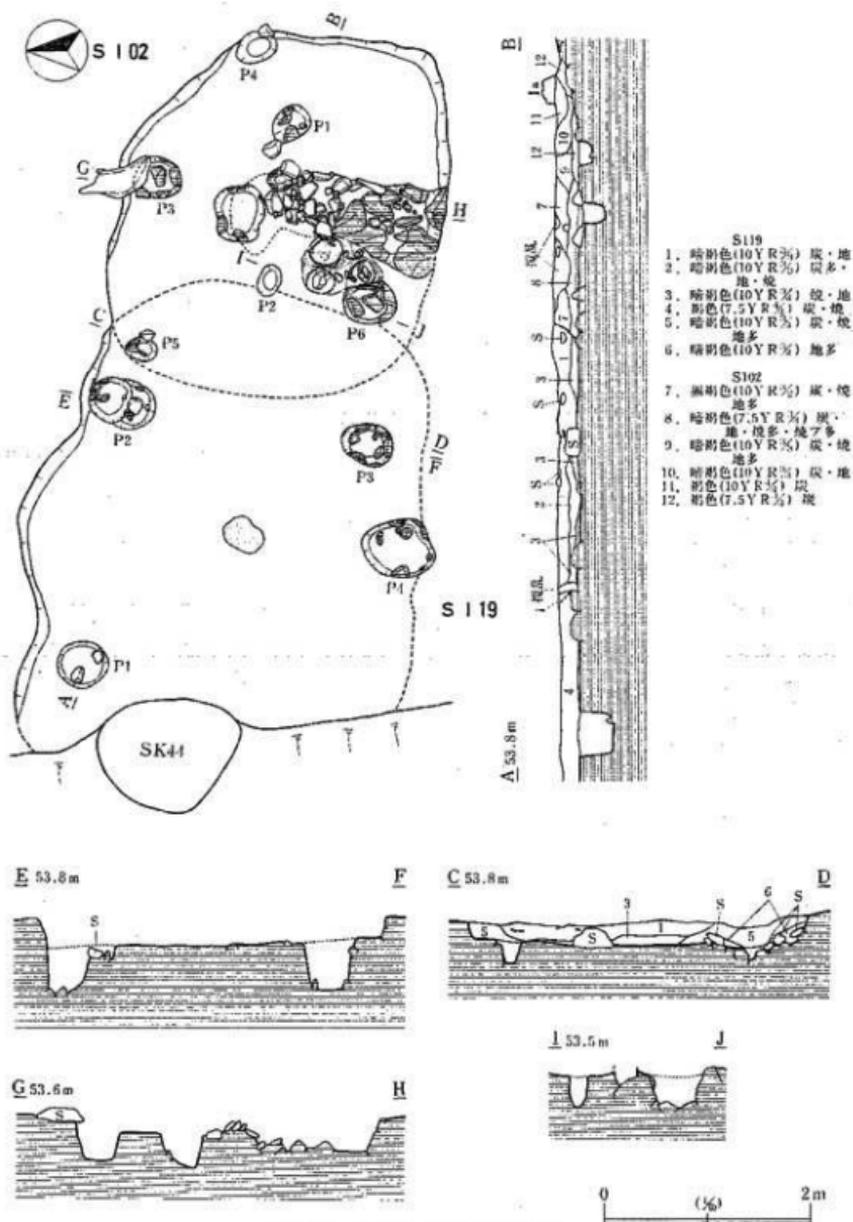
変形工字文が施文されたミニチュア土器の体部破片と思われる。69は台付鉢の台部破片で2条1単位の平行沈線による山形文が施されるとと思われる。10は床面出土の無文土器で、円筒状を呈する小形の底部破片である。出土時には中に砂鉄塊が充填されていた。

#### S I 02 (第11図～18・20図、図版2・3・15)

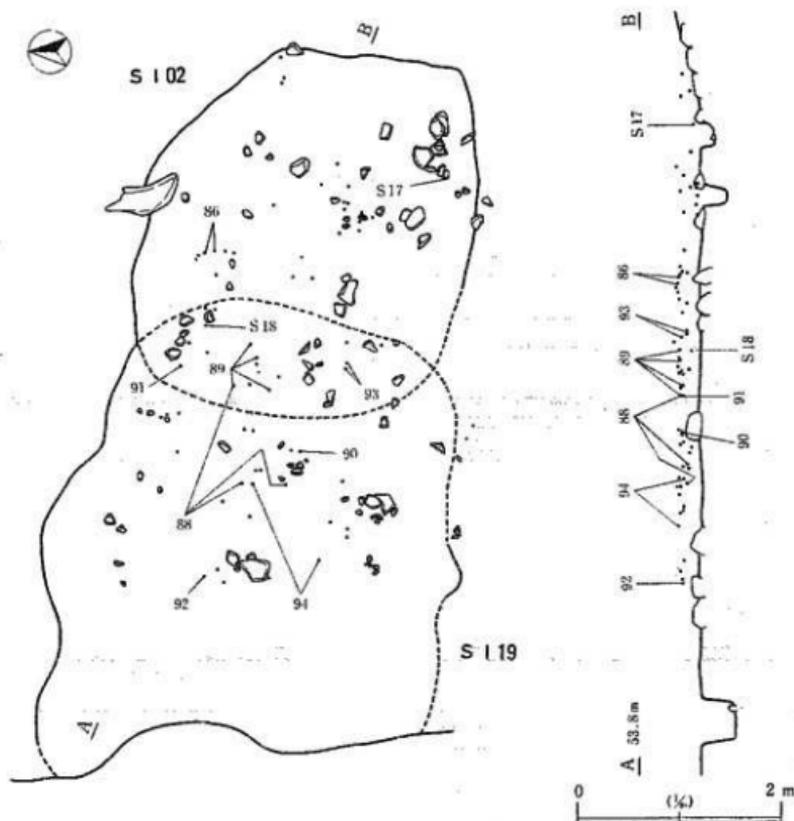
台地の西端にあたるOC・OD44・45グリッドに位置する。西側では後述するS I 19と重複するが、埋土の堆積から本遺構が古いと判断した。検出面は地山上面である。S I 19に切られているため全容は不明であるが、平面形は径3.2mの隅丸方形を呈し、北東隅部で直線的に内側へいくこむ歪な形になっている。現存する壁高は10cm～15cmを測り、壁際から床面中央部へは緩傾斜する。これは本遺構が地山下の礫層を一部掘り込んで構築しているため、礫の密度が高い部分では、礫が露出した時点で掘り込みを止めたことに起因する。南東から南西部分の壁際で特に顕著である。壁は緩く外傾し、南壁では礫が露呈している。床面は北側がほぼ平坦で、南側の大部分は礫面になっている。埋土はS I 19を含めて12層に細別でき、7～12層が本遺構の埋土に相当する。壁際に12層が自然堆積した後、VI群土器を多く含む11層が流入し、さらに、VI・VII群土器を主に含む7～10層がその上面に埋め戻された状況を呈している。

柱穴は6本検出した。P 1～3が主柱穴で、P 4・5は壁際に取り付くものと考えられる。P 6は後述する炉に切られているため、本遺構より古い可能性がある。床面からの深さは順に16cm、30cm、10cm、22cm、34cmを測り、P 4以外は礫層を掘り込んでいる。P 1・2間の中点とP 3を結ぶ線が本遺構の中軸線と考えられ、N-13°-Eを向く。

炉は南半部の中央やや西寄りで検出した。精査の結果、複数の土器を埋設した部分が二箇所あることが認められ、一方は掘り方の痕跡のみ留めていることから、新旧二時期の炉があると判断した。以下、新旧に別けて記述する。旧炉は前庭部末端が南壁に接する複式炉で、全長1.75m、幅0.87mを測り、長軸方向は住居の中軸線にはほぼ一致する。土器埋設部は掘り方と考えられる二箇所を検出した。(1)はP 1・2を結ぶ線上ややP 1寄りに設けられ、炉の長軸線からは東に振れている。平面形は径25cmの円形で深さ28cmを測る。(2)は(1)の北西側に位置し、平面形は径50cmの円形で深さ34cmを測る。埋土は(1)(2)とも炭化物、焼土ブロックを多量に混入する暗褐色土で、よく締まっている。周辺は燃焼による赤変・硬化が著しく、プラン上面にも及んでいることから(1)(2)の機能が終了後にも、この部分で火を焚いていた可能性がある。埋設されていた土器の出土はなかった。石組部は径50cmの方形状を呈し、深さ15cm～20cmを測る。礫層を掘り込んで構築しているため、奥壁・側壁・底面は露呈した礫面をそのまま利用している。5cm～20cm大の亜角礫を組んだ部分は、奥壁上部と前庭部側末端部に見られる。前者は亜角礫を斜めに立て付け、後者は直線上に積み上げている。全体的に燃焼の痕跡は認められず、僅かに奥壁上部で看取できる。前庭部は若干末広がりに開き、末端は南壁に接



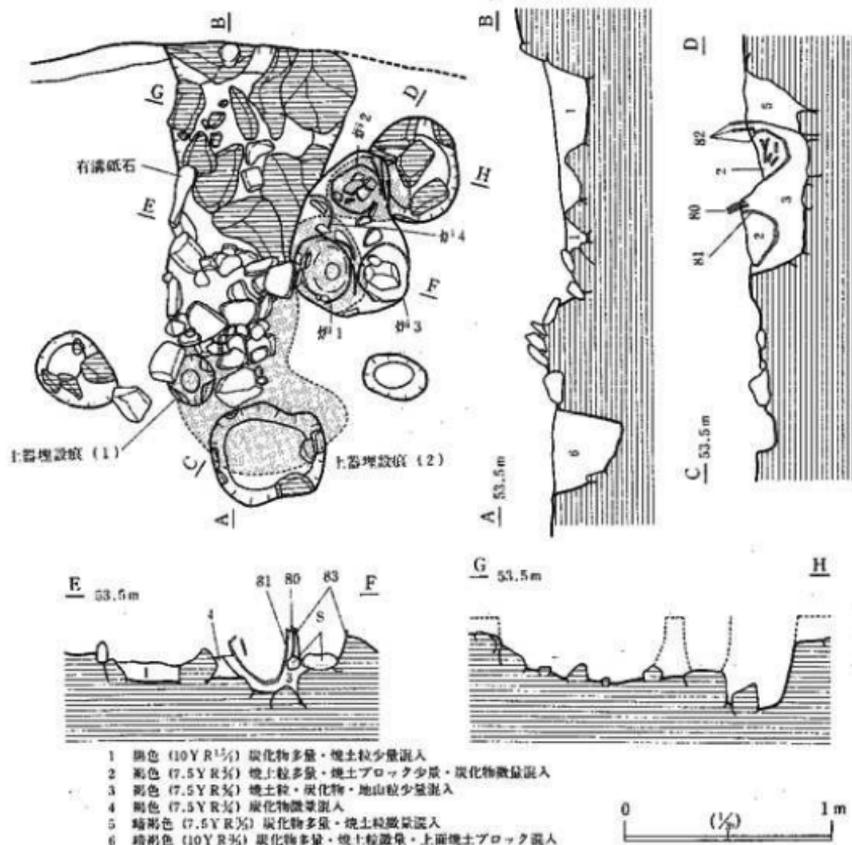
第11図 S102・19竪穴住居跡



第12図 S102・19遺物出土状況

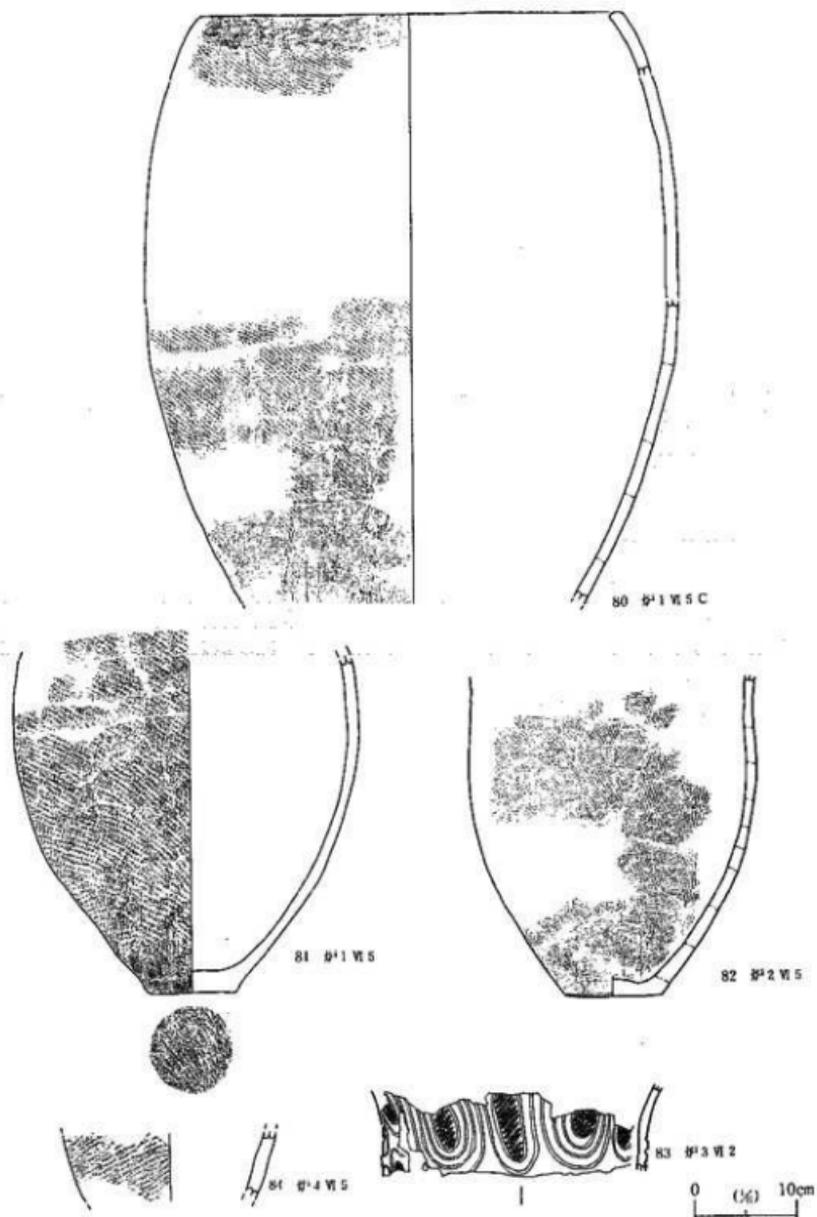
している。石組部と同様に礫面が露呈しているため起伏が著しい。床面からの深さは20cmを測り、石組部との比高差はほとんどない。東側壁には長辺30cm大の礫1点を立て付けているが、これは、砂岩質の有溝礫石を転用したものである。長側辺部に幅1cmを測る3条の溝を有し、加熱による赤変が認められる。

新炉は土器埋設部だけが前庭部北西側に隣接して設けられ、石組部・前庭部はそのまま遺存していたと考えられる。土器埋設部は炉1～4の4基の埋設土器からなっている。掘り方平面形は長軸81cm、短軸59cmの不整楕円形を呈し、深さ25cm～30cmを測る。礫層を掘り込んでいるため南東壁・底面は礫面である。炉1・2を結ぶ線が中軸線と考えられ、N-26°-Eを向く。これは住居の中軸線及び旧炉の長軸方向より東へ二倍振れている。炉3・4は中軸線の両側に設けられるが、これらを結ぶ線は中軸線に直交しない。炉1・2は口縁部を欠く深鉢形土器が



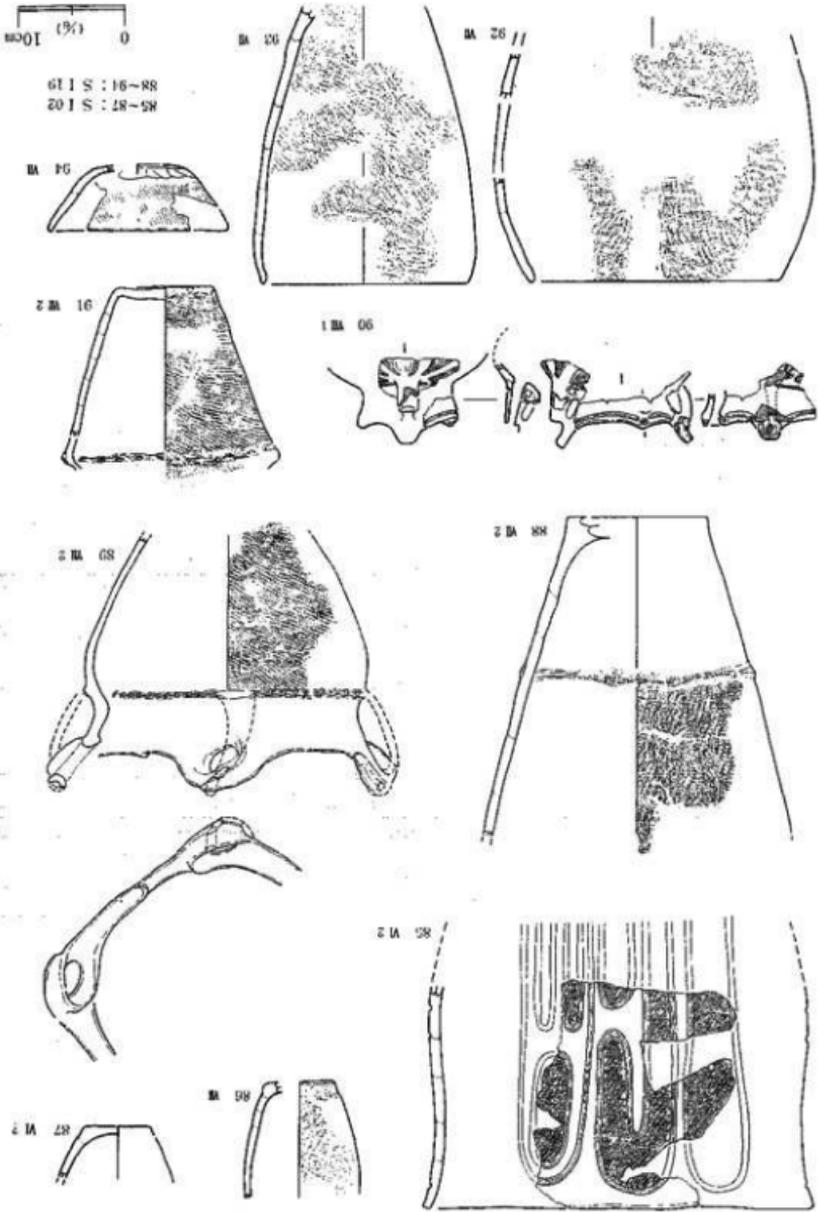
第13図 S102炉跡

埋設されている。炉1は中軸線に直交する南東方向から斜めに据えられ、傾斜角は12°を測る。炉2は中軸線上の北東方向から斜めに据えられ、傾斜角は15°を測る。各々、同一個体・別個体の胴部破片を外周縁辺部に二重から四重に立て据えている。精査の結果、各5個体の土器が使用されていた。炉3・4は深鉢形土器の胴部が垂直に埋設されている。炉3は環状を呈するが、炉4は1/2周で、各1個体の土器である。炉4の埋設土器は炉1の外周に立て据えられた1個体と同一である。炉の断ち割りからP6を切って構築していることが認められ、埋設土器の底面は掘り方底面から3cm~7cm程上位にあることが窺える。また、炉3の底面には17cm大の亜角礫1個が水平に置かれているが、炉4の底面には礫がなく、掘り方埋土の褐色土である。炉1・2の周辺は黒焼の痕跡が著しいもの、炉3・4では顕著に認められないことから、炉1・2が主燃焼部と考えられる。また、焼土化の範囲は掘り方埋土下位、すなわち埋設土器の

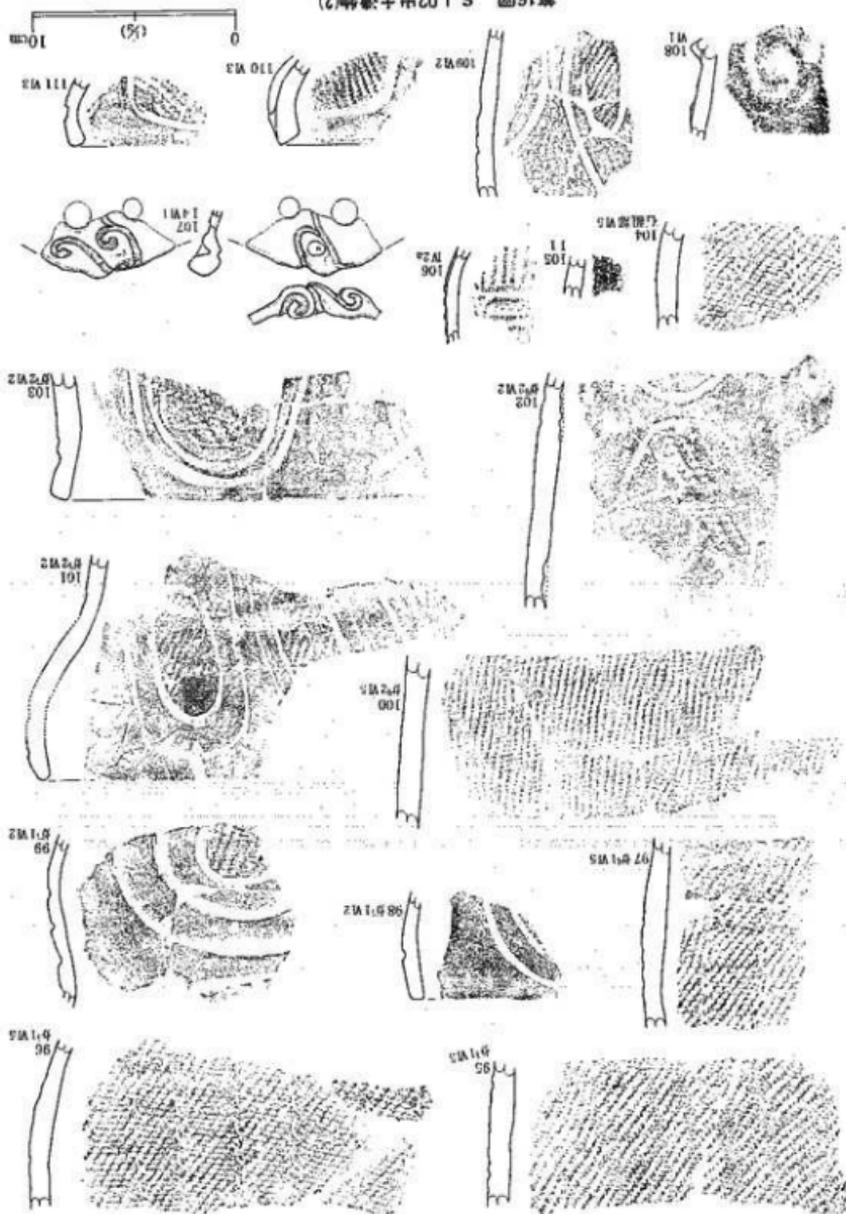


第14図 S102炉埋設土器

第15図 S 102・19出土遺物(1)



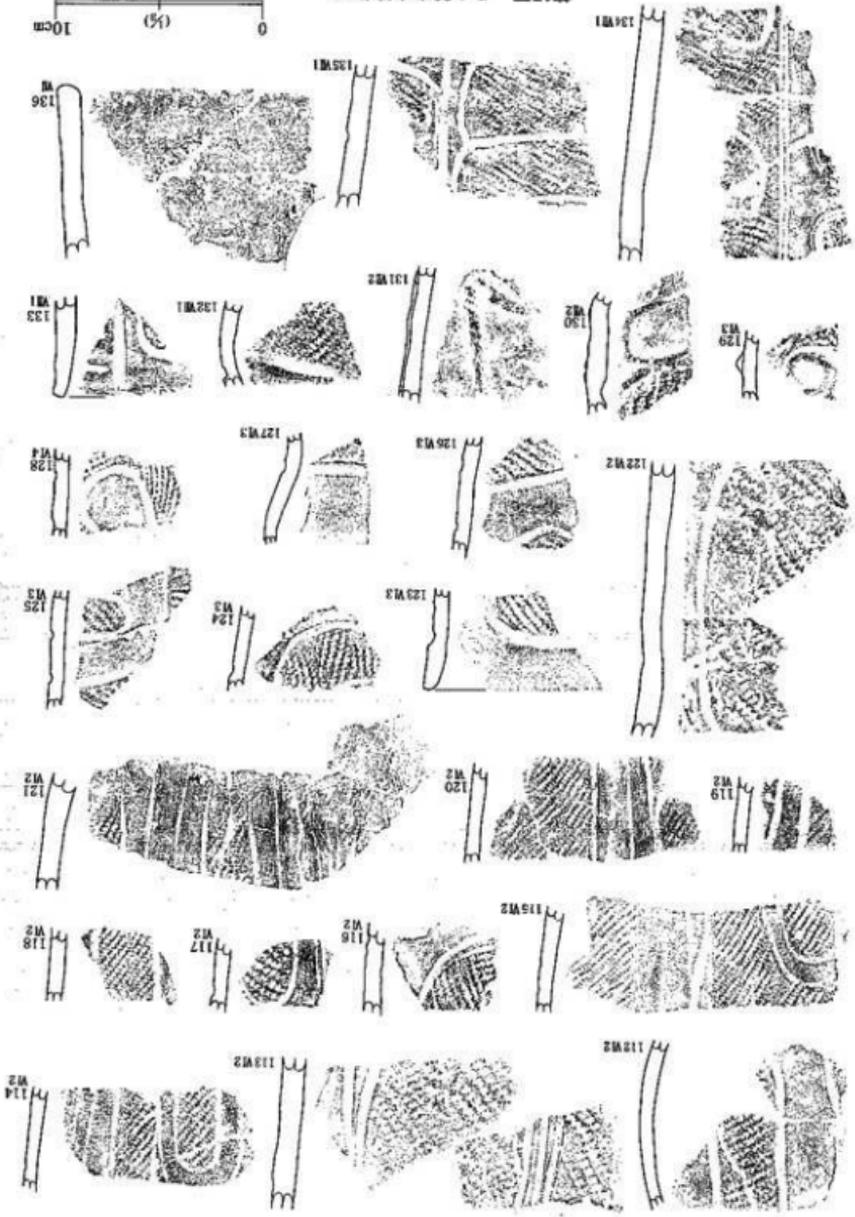
第16圖 S102出土遺物(2)

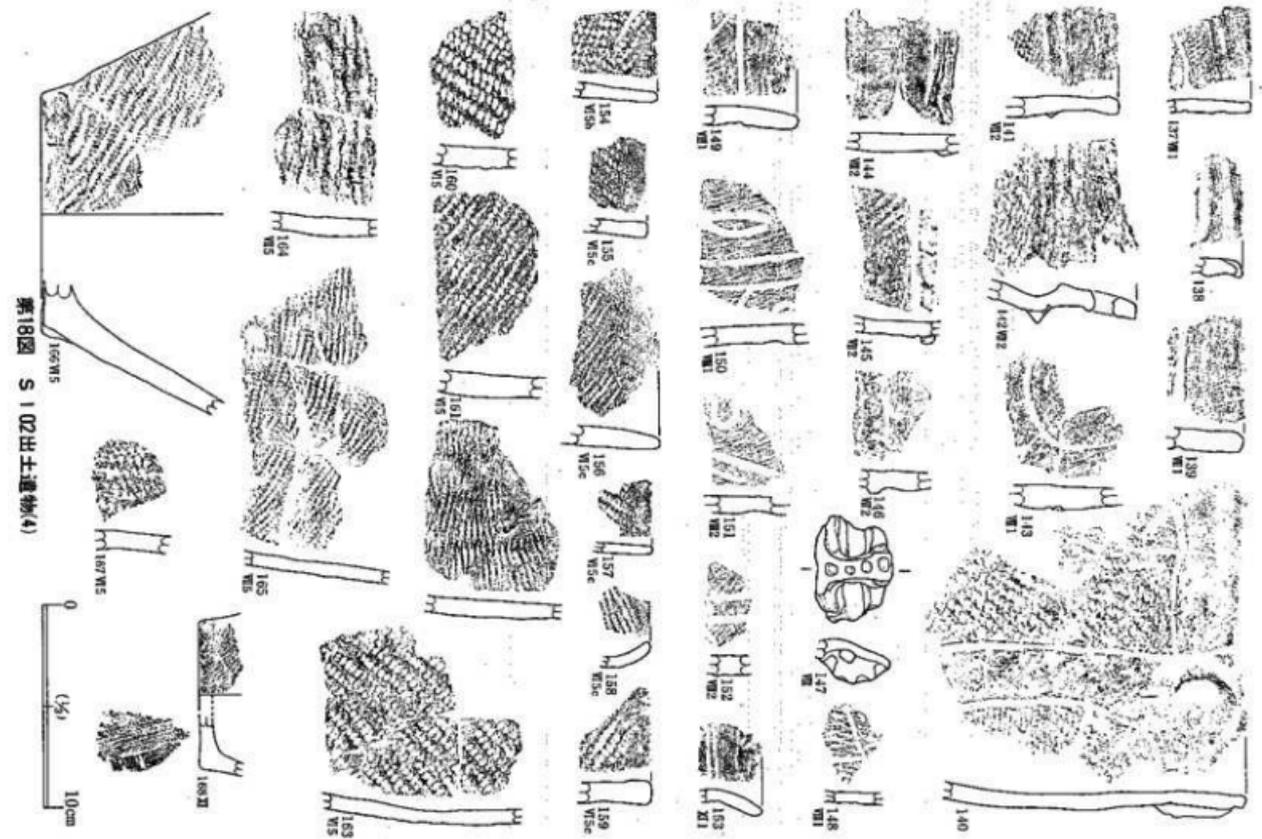


第1圖 柿川遺跡之出土遺物

第17図 S10出土遺物(3)

0 10cm (5)





第18図 S102出土遺物(4)

底面周辺に達していない。これは、燃焼時間の総時間数・掘り方埋土の質性に関わるものと思われる。

遺物は多量の縄文土器片と石器・土製品が出土した。大部分は埋土7～11層中から出土し、本遺構に直接関わるものは認められない。土器はⅠ・Ⅳ～Ⅷ・Ⅸ群に比定され、主体となるものはⅥ・Ⅶ群土器である。第14・16図80・84・95～103は炉1～4に埋設された土器である。81は炉1の埋設土器で底径8.8cm、現存器高32.6cmを測る。地文はR L R複節縄文が縦位回転に施文されている。81の外周に立て据えられた土器が80・95・98で、80・95は地文にそれぞれL R・R L単節縄文が縦位回転に施文されている。96・97は同一個体で地文はR L結節縄文を用いて縦位回転に施文している。98・99は同一個体でやや太めの沈線により楕円状区画文が施され、R L単節縄文を充填している。82は炉2の埋設土器で底径9.8cm、現存器高31.6cmを測る。地文はL R単節縄文が縦位回転に施文されている。101～103は逆「U」字状垂懸文・楕円文・二重楕円文が施文され、単位文内に充填されている縄文は順にR L・L R・L R L原体を用いている。83は炉3の埋設土器で楕円文・渦状文をモチーフとする単位区画文が配置されている。単位文内にはR L単節縄文が縦位回転に充填されている。84は炉4に半周ほど埋設されていた土器で95と同一個体である。104は96・97と同一個体で旧炉石組部の底面から出土した。129～147はⅦ群土器に比定される。132～135・137～140・143は沈線区画による文様が施され、129～131・141・142・144～146は隆線区画による文様が施されている。区画文間の切り合うもの(130・131・135・140)や隆線の上に刺突が施されるもの(145・146)がある。136は台付鉢の台部破片と考えられる。地文は無文で横位のナデ調整が施されている。拓影図左上部には円形の透かしを作出したと思われる痕跡がある。石器は埋土中から12点出土し、石匙・不定形石器・磨製石斧・磨石等がある(第20図S10～17)。土製品は第20図200の円盤状土製品1点のみが出土した。

#### S119 (第11・12・15・19・20図、図版2・15・16)

台地の西端にあたるOD・OE44グリッドに位置し、地山上面で検出した。東側でS102と重複するが、埋土の堆積から本遺構が新しいと判断した。西側は川袋川の崖線にかかり、既に崩壊しているため全容は不明である。また、崖線上で検出したSK44は本遺構に伴わない古い土坑である。現存する平面形は長軸(東西)4.6m、短軸(南北)4.0mの隅丸長方形を呈すると考えられる。壁高は16cm～28cmを測り、緩く外傾する。床面はほぼ平坦で堅緻であるが、南半部は地山下の礫層が露呈している。これは礫層を掘り込んで構築しているのではなく、礫が露呈した時点で掘り込みを止めたもので、現存する壁面には礫が認められない。埋土は6層に細別でき、自然的堆積を呈する。壁際に5・6層が堆積した後、Ⅲ～Ⅶ群土器を含む2～4層が床面に厚く堆積している。2～4層堆積後の東側の窪みにはⅦ群を主体とする土器が投棄さ

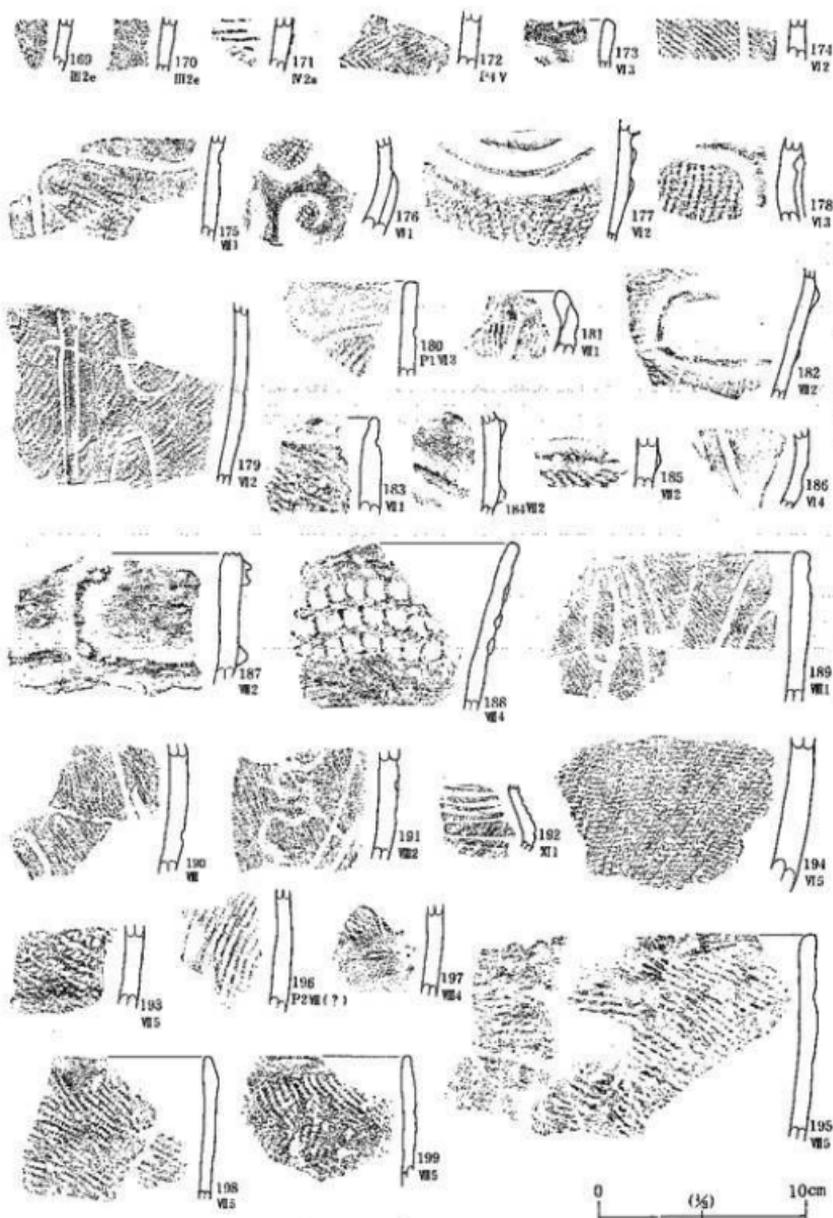
れていた。該群に比定される5個体の土器が認められている。

柱穴はP1~4の4本を検出した。主柱穴はP1~3と考えられ、配列は方形を呈すると思われるが、床面南西部分に想定される残り1本は検出されなかった。径45cm~50cmの円形で、床面からの深さは順に38cm、40cm、46cm、24cmを測る。底面はP1が礫層の露出面、P2が礫層下約5cm、P3・4が礫層下約25cmに位置する。よって、地山下の礫層は南東から北西方向へ傾斜していることが窺える。長軸方向に並ぶP1・2を結ぶ線が本遺構の中軸線と考えられ、N-85°-Wを向く。

炉は床面ほぼ中央部に設けられた地床炉である。平面形は径35cm~40cmの不整形を呈し、焼土の厚さは3cm~5cmを測る。下部に掘り込みは伴わない。

遺物は比較的多くの縄文土器片と石器・土製品・石製品が出土した。埋土1~4層中から出土したため本遺構に直接関わる遺物は認められない。土器はⅢ~Ⅷ群・Ⅺ群に比定され、なかでも、Ⅵ~Ⅷ群土器を主体としている(第15図88~94・第19図169~199)。Ⅲ~Ⅴ・Ⅺ群に比定される土器は少なく、169~172・192の5点である。169・170は網目状燃糸文、172は結束第1種羽状縄文が施されている。171は押し引きを施した数条の細い粘土紐が貼付され、192は変形工字文が施文されている。第15図に図示した88~94は1層から出土した土器で、90がⅧ群、その他はⅦ群に比定される。94は口径17.2cm、底径8.8cm、器高3.2cmを測る浅鉢形土器で、地文にはLR単節縄文が横位回転に施文され、底部上端にはケズリ状の調整が施されている。90は注口土器で、口縁は緩い波状を呈し、2単位の突起が配置されている。突起には橋状把手が貼付され、1つには注口部が取り付けられている。胴部には曲線的な沈線文が施され、部分的にR燃糸文が充塞されている。88・89・91~93は胎土・焼成が類似する土器である。88は深鉢形土器で胴部下半に横位に巡る粘土紐を貼付している。上方にはRL単節縄文が縦位回転に施文されているが、下方は無文で、粗いケズリ状の調整が施されている。底径13.6cm、現存器高31.0cmを測る。89は4単位の橋状把手が取り付けると考えられる深鉢形土器である。頸部は緩い屈曲をもち、稜状を呈する。屈曲部には縦位の刺突が施され、胴部にはLR単節縄文が縦位回転に施文されている。91は頸部に強い屈曲をもつ鉢形土器である。屈曲部には粘土紐を貼付し、左から右への方向で刺突を施している。胴部にはLR単節縄文が縦位回転に施文されている。底径9.6cm、現存器高18cmを測る。92・93は地文縄文の深鉢形土器である。92は口縁部が内傾し、胴部上半が膨らむ器形でRL単節縄文が縦位回転に施文されている。93は底部から胴部にかけて直線的に開き、口縁部がやや内傾する器形でLR単節縄文が縦位回転に施文されている。口径は92が24.8cm、93が20cmを測る。

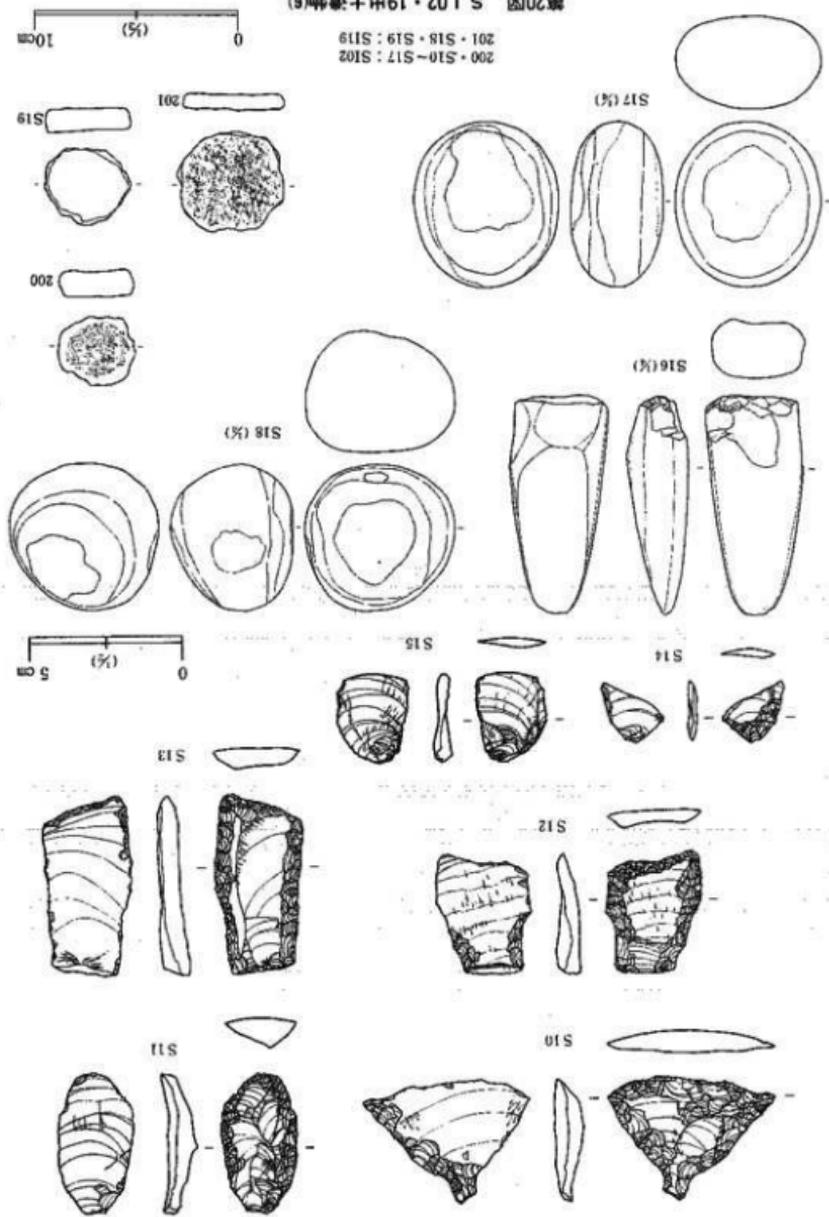
石器は埋土1層から磨石1点(第20図S18)のみ出土し、その他には上製・石製円盤が各1点ずつ出土している(第20図201・S19)。



第19図 S I 19出土遺物(5)

第20圖 S102・19出土遺物(6)

200・S10-S17: S102  
201・S18・S19: S119



第1圖 神出遺物之出土遺物

## S103 (第21・22図、図版4・16)

台地の東側緩斜面上端にあたるNJ46・OA45・46グリッドに位置する。検出面は地山上面で、既に床面に達している。本遺構は4遺構と重複するため、先に新旧関係について述べておく。炉が付設されている東側でS118と重複するが、S118の検出面が本遺構の床面に相当し、本遺構の炉も遺存していることからS118が古いと判断した。北西側でS112と重複するが、開田により攪乱されているため新旧は不明である。出土遺物の比較では本遺構が新しいと考えられる。柱穴P1の上面で検出したSK31は新しい土坑で、また、床面南部で検出したSN40は遺存状況から本遺構より古い炉跡と判断した。調査の初期の段階で、46ラインに設定した土層観察用ベルトにより本遺構の存在は予想されていたが、開田による攪乱が床面までおよび、床面直上を覆う層厚の薄い埋土が部分的に看取できる状態であった。よって、壁は認められず、全容は不明であるが、柱穴配列からプランを推定した。平面形は約4mの略円形を呈すると考えられる。床面はほぼ平坦であるが、南西側から中央へ緩く傾斜している。

柱穴は11本検出した。床面からの深さは順に59cm、53cm、36cm、13cm、16cm、12cm、7cm、12cm、16cm、11cm、21cmを測る。主柱穴はP1～5と考えられる。P1・2間の中点とP4を結ぶ線が中軸線と考えられ、N-78°-Eを向き、炉の長軸方向より7°東に振れている。中軸線はP3・5間の中点を通過し、P1・2間の中点は炉の埋設土器上にある。P6～10は壁際に取り付くものと考えられるが、南西側に位置するP9・10は主柱穴のP3・4と台形状の配列をなす。P9・10間距離は60cmを測り、床面が緩く傾斜していることを考慮すれば、この部分に出入口を想定できる。また、P10から胴部上半を欠く深鉢形土器が正位に出土したことから、埋甕の可能性も考えられる。

炉は南東半部中央やや南東寄り検出した。長軸方向はN-71°-Eを向き、全長1.81m、幅0.9mを測る。石組部南東部分が攪乱により壊されている他、前庭部末端は北東壁に接していたと考えられる。土器埋設部は中央に口縁を欠く深鉢形土器が長軸線上の北東方向から斜めに埋設されている。傾斜角は6°を測り、石組部側の外周には同一個体の胴部破片を二重に立て据えている。埋設土器の外周には末広りの「U」字形に8cm×22cm大の直角礫がやや粗雑に敷かれている。石組部は径50cmの方形状を呈し、深さ20cm×22cmを測る。奥壁には35cm×45cm大の板状礫1枚が急傾斜で据え付けられている。礫の背面は埋設土器の上面に接し、さらに、8cmの比高差をもって埋設土器側にオーバーハングしている。側壁は北西側が現存しているが、20cm×30cm大の板状礫2枚を立て付け、急斜面で立ち上がる。底面は20cm大の板状礫3枚が敷かれ、その隙間に4cm×12cm大の直角礫・円礫が詰められている。末端には10cm大の直角礫を立て据え、磨石・石棒が転用されている。前庭部は若干末広りに開いて、南東壁に接していたと考えられる。床面からの深さは20cm×22cmを測り、石組部底面との比高差はほとんどない

ものである。炉の断ち割りから燃焼による痕跡は土器埋設部が顕著で、掘り方底面まで達している。石組部の奥壁上端は燃焼の痕跡を認められるが、側壁及び底面にはない。また、底面下の焼土は、焼失家屋であるS I 18の床面に接するため、その帰属は判断できないものであった。

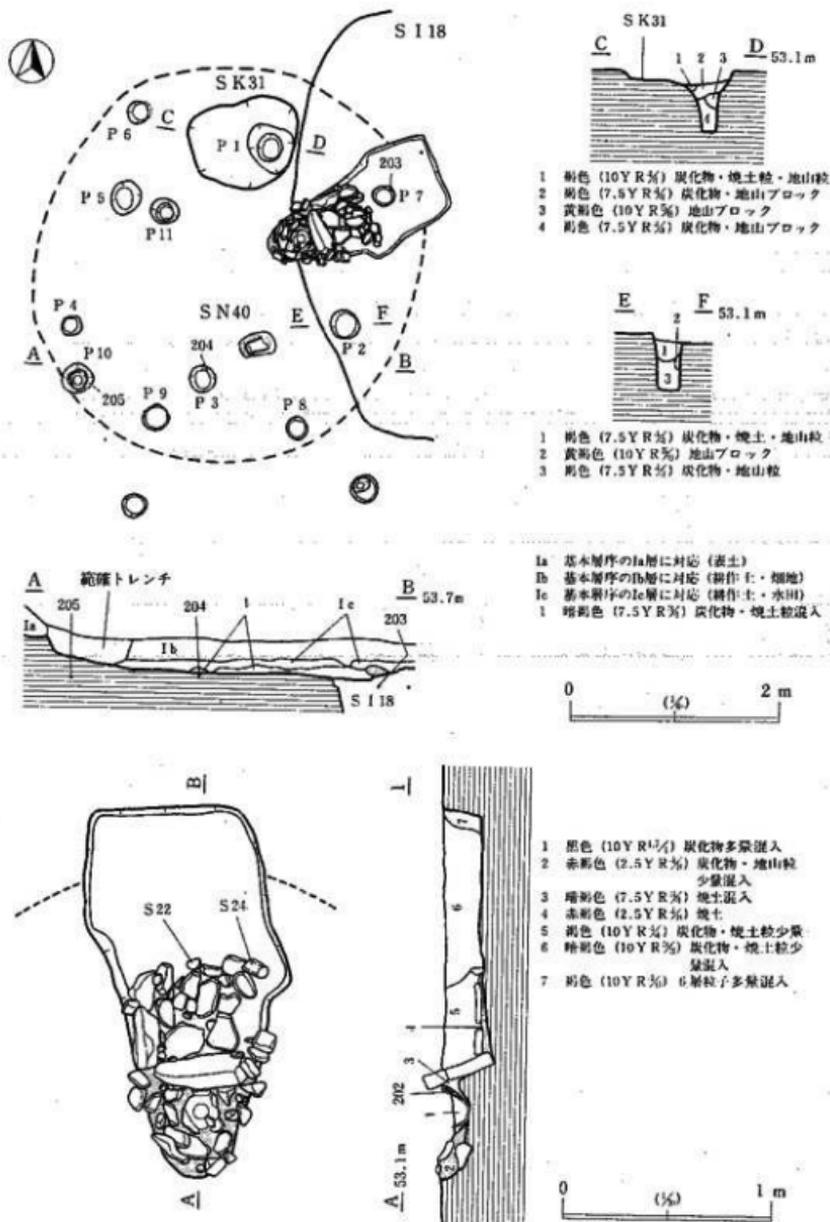
遺物は埋設土器(第22図202)以外にⅢ・Ⅳ・Ⅵ～Ⅷ群に比定される土器と石錐・磨石・石棒等の石器が出土した(同図203～229、S 20～24)。大部分は攪乱層(I a・c)から出土し、203～205・209・S 23・24が柱穴や炉前庭部の埋土中出土及び石組部に転用された石器である。202は埋設土器で、口縁部が内弯する深鉢形土器である。地文にはL R単節縄文が施文されるが、全体的に粗雑である。203は炉の前庭部埋土中から出土した深鉢形土器で、底部から口縁部にかけて直線的に開く器形を呈する。地文にはL R単節縄文が縦位回転に施文される。口径16.8cm、底径3.6cm、器高16cmを測り、胴部下半は摩滅が著しい。204は柱穴P 3埋土上位から出土した小形の鉢形土器で、波状口縁を呈すると考えられる。隆線による波頭状区画文が横位に巡ることにより文様帯が二分割される。上半は無文で横位のナテ整形が施され、下半はL R単節縄文が部分的に充填される。205は柱穴P 10から出土した深鉢形土器の胴部下半で、R L R複節縄文が縦位回転に施文される。底径は8.8cmを測り、摩滅が著しい。

#### S I 04・22・24・25 (第23～26図、図版5・16・31)

台地の東側緩斜面にあたるN I・N J 47・48グリッドに位置し、4軒の竪穴住居が重複するものである。北西側が調査区外にかかり、南東側が開田による攪乱を受けているため全容は不明である。調査区外との境界で観察した埋土の堆積状況からS I 22→24→25→04の順に新しくなると判断した。各住居の床面は段差があり、その比高差は新旧の順に5cm、5cm、7cmを測り、古い住居ほど高いレベルにある。これは本住居群が斜面に構築され、斜面上端から下端へ移行したことに起因する。本住居群が3回の建て替えなのか、4軒の切り合いなのかは判断できなかった。以下、新旧の順に記述する。

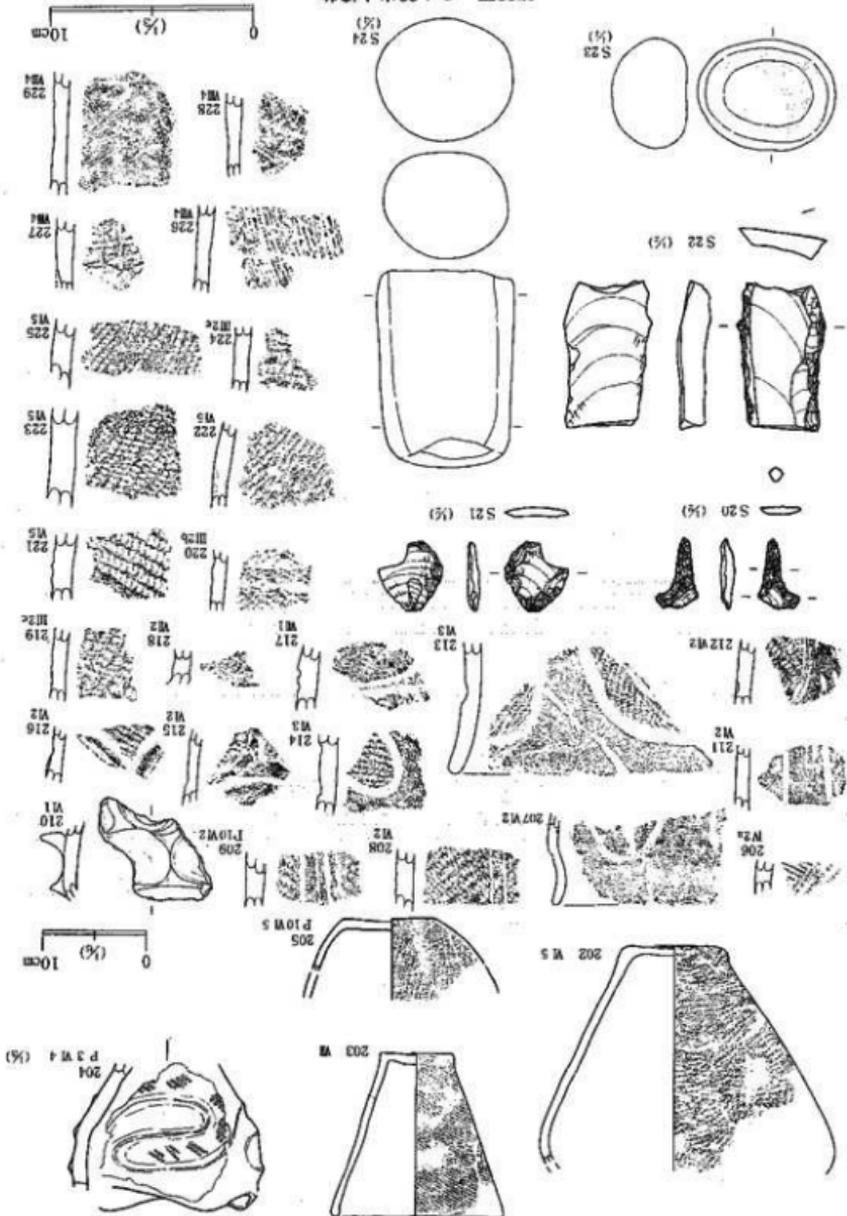
S I 04は斜面の下端に位置し、プランの南東半部を検出した。検出面は地山上面である。平面形は推定径3.4mの略円形を呈すると考えられる。現存する壁高は5cmを測り、緩く外傾するが、埋土の観察から南西壁部は少なくとも60cmあったことが窺える。床面はほぼ平坦で堅緻であるが、壁際から中央部に向かって緩傾斜している。埋土は炉・柱穴P 1を含めて9層に細別でき、自然的堆積を呈する。遺物を少量含む4・5・7～9層が壁際から床面中央部にかけて堆積した後、Ⅵ群土器を多く含む3・6層が流れ込み、その上面にⅦ群土器を多く含む1・2層が堆積した状況を呈する。

柱穴はP 1・2・7・8の4本を検出した。床面からの深さは順に45cm、47cm、45cm、20cmを測り、主柱穴はP 1・2と考えられる。P 1・2間の中点に直交する線を中軸線と考えるとN - 28° - Wを向き、炉の長軸方向に一致する。また、P 1・2を結ぶ線は炉の石組部末端を通

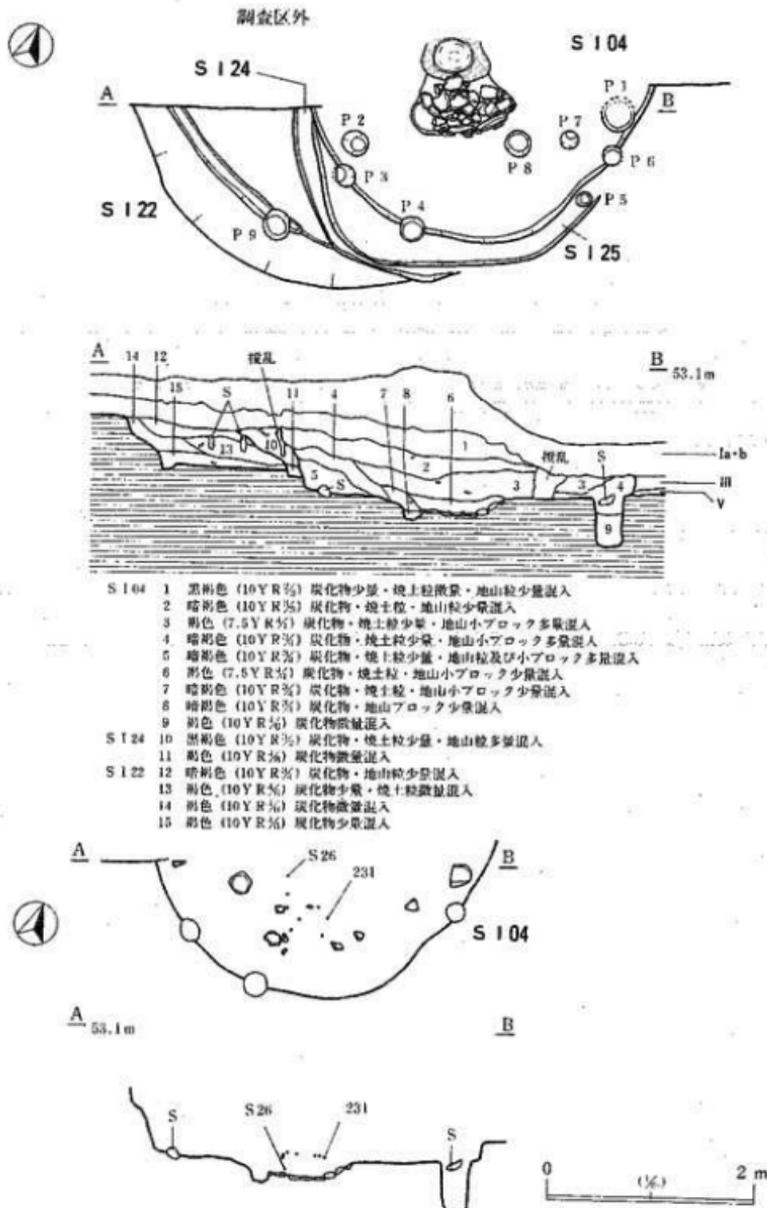


第21図 S103竪穴住居跡・炉跡

第22圖 S103出土遺物

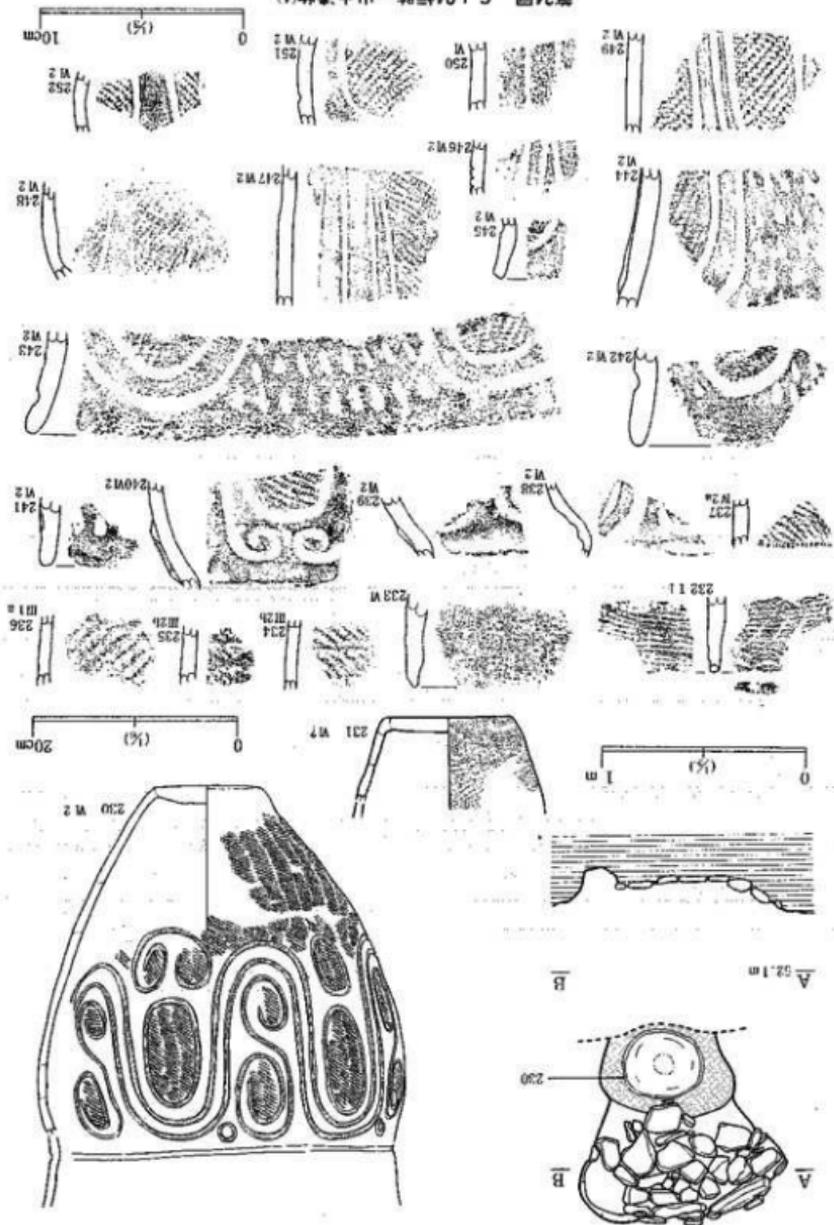


第1部 出土遺物と出土遺物



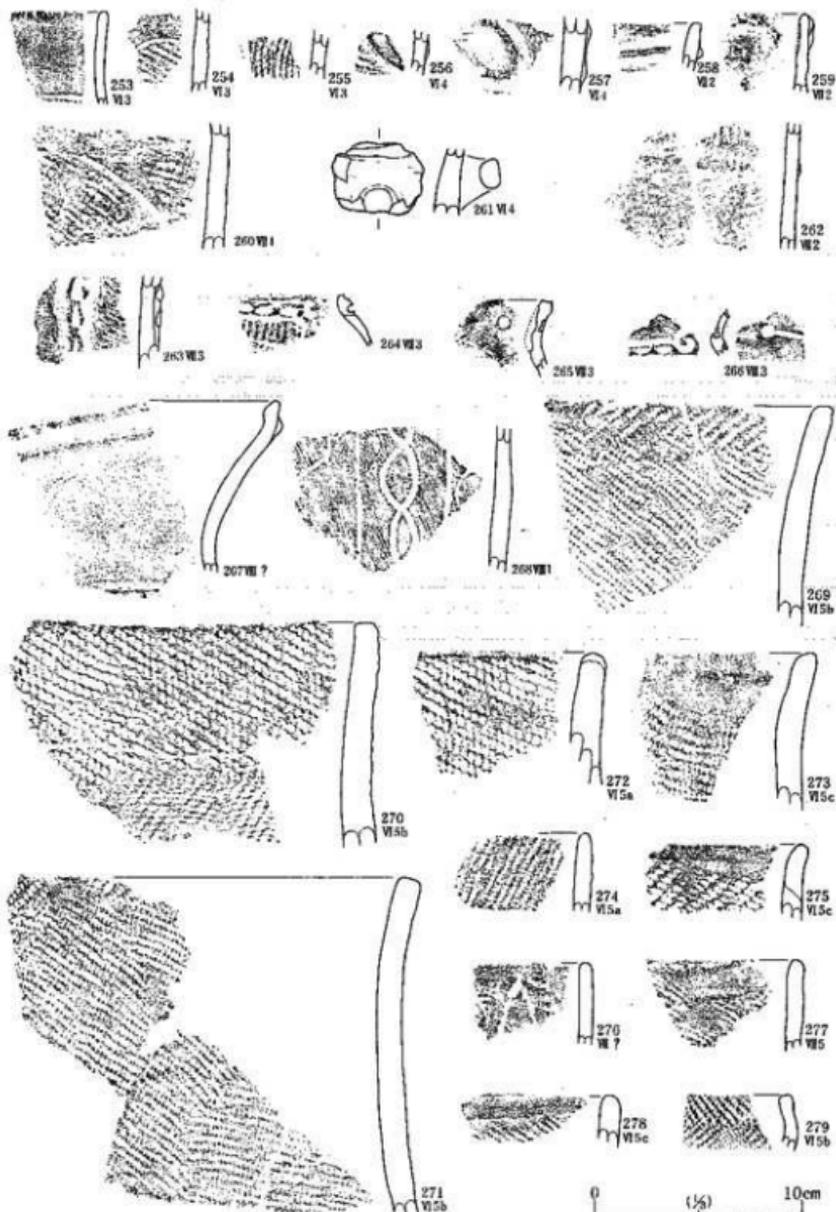
第23図 S I 04・22・24・25 竪穴住居跡・遺物出土状況

第24圖 S104片跡・出土遺物(1)

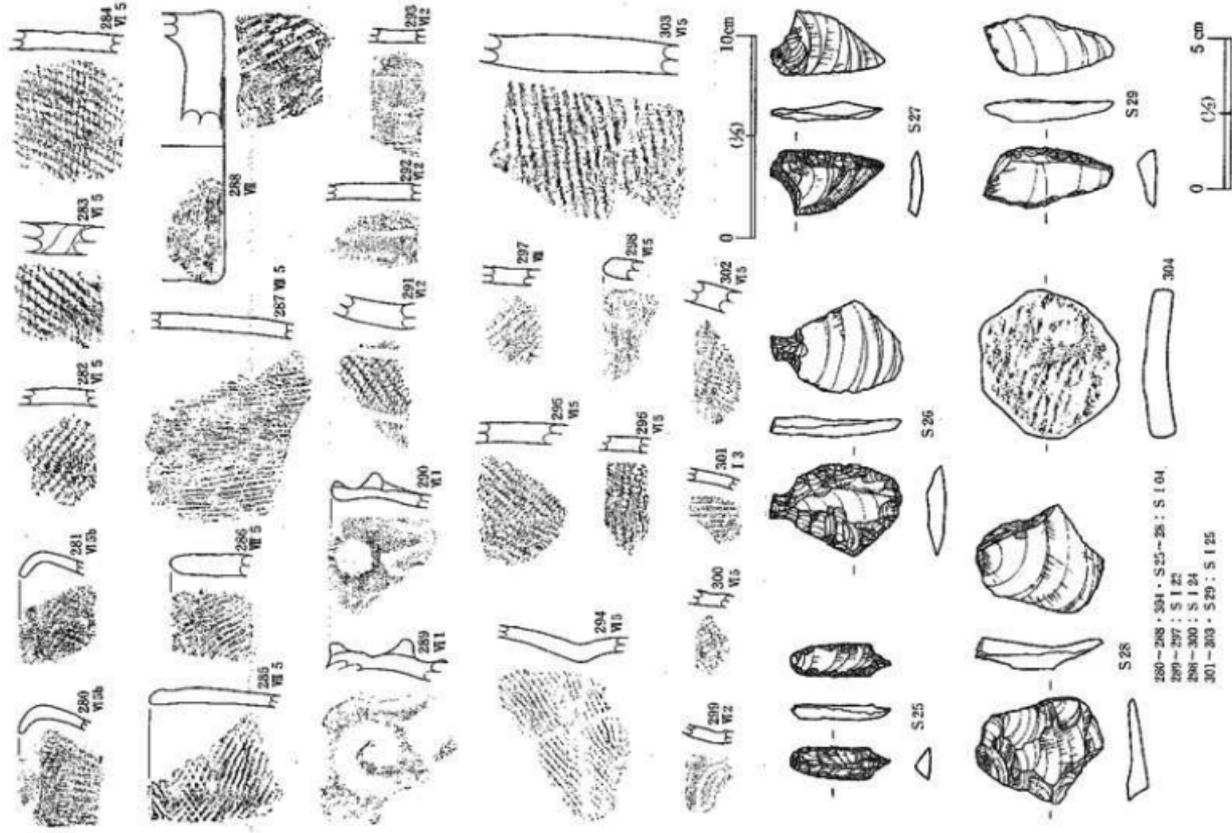


第1節 出土遺物之片跡

第4章 調査の記録



第25図 S104出土遺物(2)



第26図 S 104・22・24・25出土遺物(3)

過する。

炉は中央部やや南西寄りで見出した。前庭部をもたない複式炉で、長軸方向は北西から南東を向き、全長1m、幅1mを測る。土器埋設部は中央に口縁部を欠く深鉢形土器を埋設している。周辺は焼灼の痕跡が著しく、径60cmの略円形状に赤変・硬化している。石組部は末広がり大きく開き、末端は緩い弧状を呈する。南西隅部は攪乱を受けたため礫は残存せず、ピット状の窪みになっている。奥壁は18cm大の板状礫4枚がかなり緩い傾斜で据えられ、隙間を10cm大の亜角礫で詰めている。奥壁の上端は土器埋設部の上面より3cmの比高差をもって突出している。側壁は奥壁と同様な造りを呈し、底面は5cm～15cm大の板状礫・亜角礫が敷き詰められ、長軸50cm、短軸20cmの長方形を呈する。末端には長辺30cm大の板状礫2枚を垂直に立て付け、隙間を10cm大の板状礫で詰めている。奥壁上端は焼灼の痕跡が認められるが、他の部分ではほとんど看取できない。

S I 25はS I 04の南側に位置するが、南東壁から南西壁の一部と壁際の床面が現存する他は、S I 04に破壊されている。検出面は地山上面である。南東壁・南西壁がやや直線状を呈するため、平面形は一辺3m前後の隅丸方形と考えられる。現存する壁高は5cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は平坦で堅緻である。埋土はII・IV群土器を少量含む褐色土で、人為的堆積と考えられる。

柱穴はP 3～6の4本を見出したが、P 5を除く3本はS I 04の壁面に位置する。床面からの深さは順に40cm、34cm、23cm、50cmを測る。柱穴の埋土は褐色土の単一層で、床面を覆っていた堆積土と同様、埋め戻されたものと考えられる。炉は見出していない。

S I 24はS I 25の南西側に位置し、南西壁と床面が僅かに認められるが、そのほとんどはS I 04・25によって壊されている。検出面は地山上面である。平面形は径2.6m前後の略円形を呈すると考えられる。現存する壁高は南西壁南寄り23cmを測るが、調査区外との境界で観察した埋土から少なくとも48cmあったことが窺える。壁はなかり外傾するが、大部分は崩落したものと考えられる。床面はほぼ平坦で堅緻である。埋土は2層に細別でき、VI群土器を少量含む自然的堆積と考えられる。柱穴・炉は見出していない。

S I 22は斜面の上端、S I 24の南西側に位置し、地山上面で見出した。北東側は上述の3軒により破壊されているものの、南西半部は残存していると考えられる。壁溝をもつ竪穴住居で、平面形は径4m前後の略円形を呈すると考えられる。現存する壁高は45cmを測り、緩い立ち上がりを呈する。S I 24と同様、壁は崩落したものと考えられる。壁面直下には溝が付設され、上面幅10cm～17cm、底面幅5cm～8cm、深さ5cm～7cmを測る。壁は緩く外傾し、底面は比較的平坦である。南側で途切れる部分が認められるため、全周するものではないことが窺える。床面はほぼ平坦であるが、南西から北東へやや傾斜している。埋土は4層に細別でき、VI群土

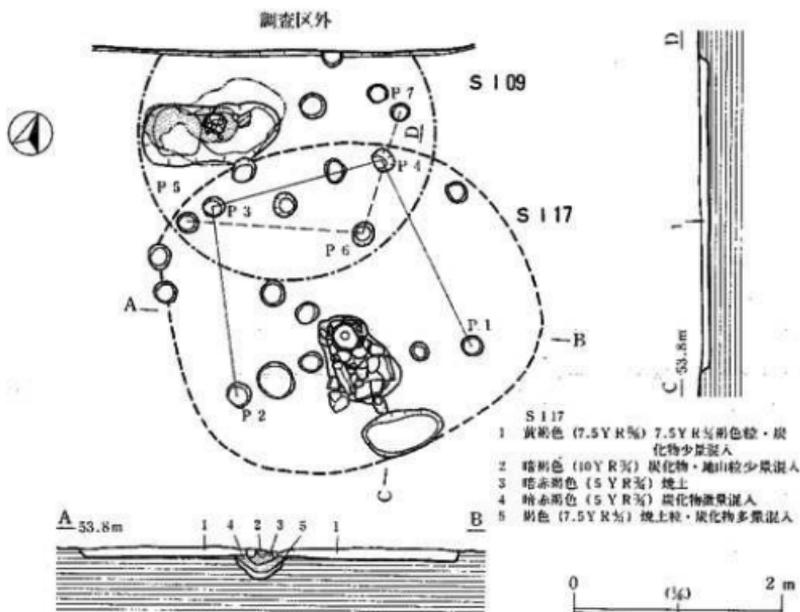
器を少量含む褐色土の自然的堆積と考えられる。柱穴・炉は検出していない。なお、P6は埋土上面で検出したピットで、本遺構より新しいものである。

遺物は4軒を合わせて多量の縄文土器が出土した。第24～26図230～288、S25～28はS I 04出土遺物で、230を除いて埋土2・3・6層から出土した。I・III・IV・VI～VIII群土器に比定されるが、主体はVI・VII群土器である。第26図289～297がS I 22、同図298～300がS I 24、同図301～303、S29がS I 25出土遺物で、297・301を除いてVI群土器に比定されるものである。301は貝殻条痕文が施され、I群に比定される。230はS I 04の埋設土器で口縁部を欠くものの、最大幅が胴部上半にあり、口縁部が緩く外傾する深鉢形土器である。横走する一条の沈線により口縁部・胴部文様帯が区画され、口縁部は無文で横位のナデ調整が施される。胴部文様は上半に描かれ、下半は縄文が施される。横位に巡る二条の波状沈線文により14単位に分割され、3種類の単位区画文の組み合わせが配置される。上方には縦列渦状区画文が、下方には縦列楕円文、楕円文+双頭渦状区画文が施文される。縄文はLR単節縄文が胴部下半の他に、単位区画文に充塞され、部分的に磨り消されている。また、小円形文は二箇所に配置されている。

#### S I 09 (第27～29図、図版6)

台地の北西部にあたるOD46・47グリッドに位置し、地山上面で検出した。北西側が調査区外になっているため全容は不明である。大部分開田による攪乱が地山面まで及んでいたため、検出面が床面に相当し、プランは柱穴配列から推定した。また、南東側でS I 17と重複するが、精査の結果、本遺構が古いと判断した。平面形は径3.0m前後の略円形を呈すると考えられる。壁は現存していない。床面はほぼ平坦で堅緻である。柱穴はP5～P7と考えられ、全体的には五角形の配列を成すものと思われる。床面からの深さは順に16cm、24cm、11cmを測り、埋土には焼土粒・炭化物を多く混入している。

炉は南西部西寄りで検出した。掘り方平面形は長軸1.35m、短軸0.6mの楕円形を呈し、深さ7cm～20cmを測る。ほぼ中央部に深鉢形土器の胴部下半を西南西方向から斜めに据えた土器埋設炉で、傾斜角は12°を測る。埋設土器の外周は加熱による変色・硬化が著しく、径35cmの円形状に広がっている。さらに、その外側は焼土と褐色土がシモフリ状に混在している。東北東側で加熱の痕跡が若干窺える6cm～16cm大の垂角礫2点を検出した。炉の断ち割りから、埋土は6層に細別できる。1層が土器埋設部の焼土化で土器底面下4cmまで達している。他は焼土・褐色土が、攪乱状の堆積を呈する掘り方埋土である。掘り方の形態・埋土から新旧2時期の炉が想定される。新炉は前述の土器埋設炉で、旧炉は複式炉と思われる。旧炉は土器埋設部と石組部から構成され、土器埋設部は新炉の位置にほぼ一致する。それは2層埋土の底面が緩く窪むことから想定される。また石組部は4～6層埋土の部分にあたり、掘り込みをもつ方形状に組まれる。3層埋土の部分は10cm程一段高くなっているが、土器埋設部の先端側に配され



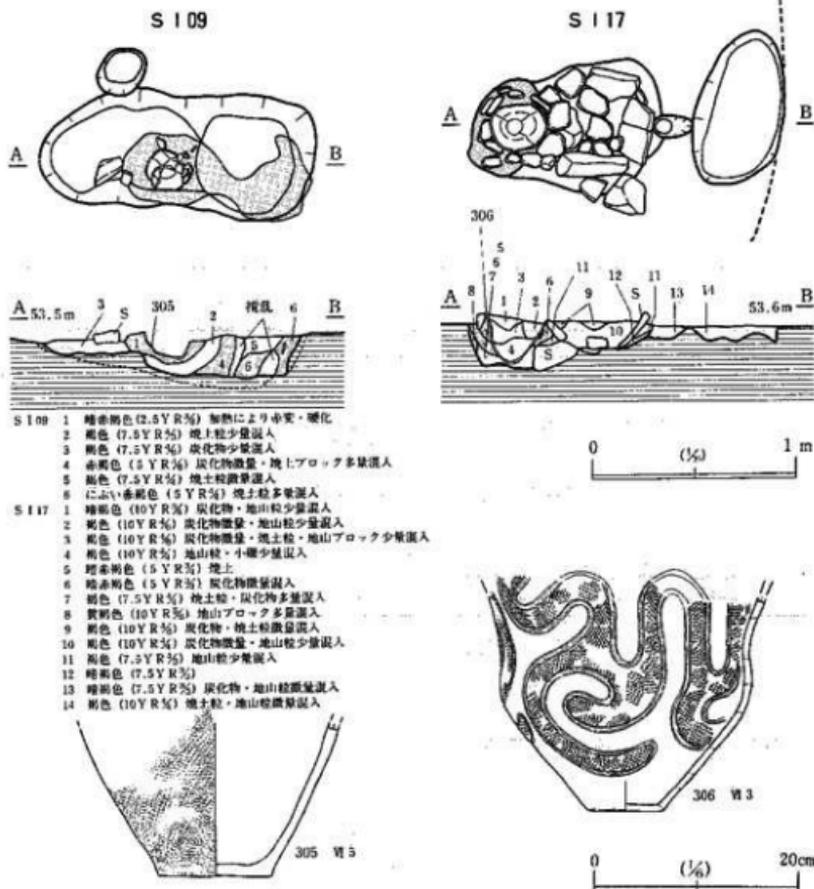
第27図 S 109・17竪穴住居跡

た敷石の掘り方と思われる。長軸方向は掘り方長軸と一致すると考えられ、N-73°-Eを向く。これは新炉の土器の埋設方向とも一致している。

遺物は埋設土器（第28図305）の他に、埋土6層から4点（第29図309-312）、埋設土器の北東側、検出面で2点（第29図307・308）の縄文土器片が出土した。305はRLR複節縄文、312はRL単節縄文が縦位回転施文されている。307・308は同一個体で太めの沈線区画によるアルファベット状文が施されると考えられる。309-311は渦文・楕円文・二重楕円文が配置され、310・311は同一個体である。307-311のうち309がLR単節縄文、他はRLR複節縄文が充填される。

S 107（第27-29図、図版6・31）

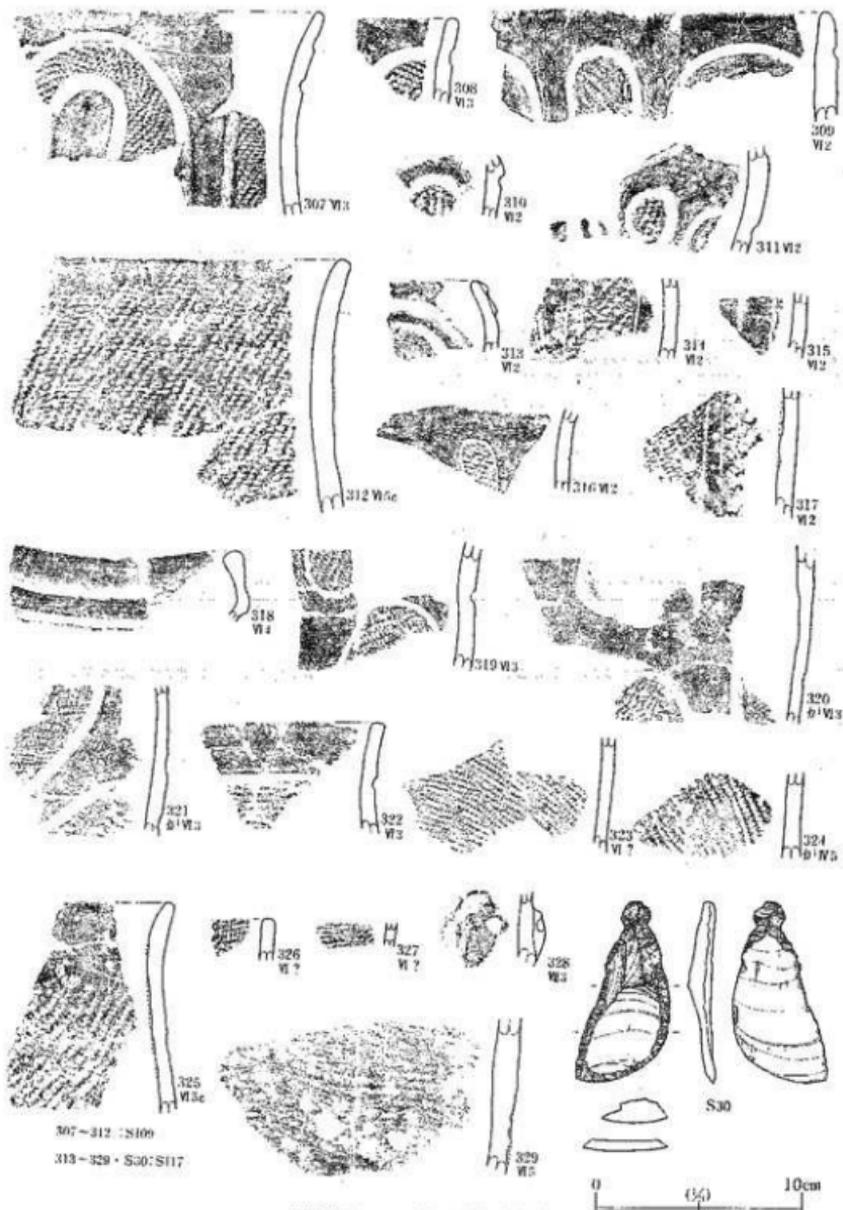
OC・OD46グリッドに位置し、S 109の南東側で重複する本遺構が新しいと判断した。開田による耕作土を除去したところ、OD46グリッド南東側で炉の石組部と思われる礫上端部を検出した。ほぼ南北、東西方向に直交する2本の土層観察用ベルトを設置し、精査を行ったが明確なプランを把握することができず、床面に相当する面まで全域を掘り下げた。結果的には、土層の観察から本遺構の壁と認められる立ち上がりを把握し、検出面が漸移層、床面が地山上面に相当すると判断した。南北ベルトの北側はS 109の東側に一部かかっているが、S 1



第28図 S 109・17炉跡

09の壁は認められなかった。その結果、開田による擾乱はS 109側では地山面まで、S 117側では漸移層の上位まで及んでいたことが確認された。S 117のプランは2本のベルトと柱穴配列から推定した。

平面形は径3.2m～3.4mの略円形を呈し、現存する壁高は7cm～10cmを測る。壁は緩く外傾し、床面はほぼ平坦である。埋土は黄褐色土の単一層で、炭化物を少量混入する。柱穴配列はP 1～4と考えられ、方形状を呈する。床面からの深さは順に11cm、14cm、15cm、12cmを測る。P 1・2間の中点とP 3・4間の中点を結ぶ線が、中軸線と考えられ、N-31°-Wを向き、炉の長軸方向より10°北へ振れる。また、P 1・2を結ぶ線は炉の石組部中央を通過する。



第29図 S109・17出土遺物

炉は南東半部中央で検出した。長軸方向はN-41°-Wを向き、全長92cm、幅66cmを測る。前庭部をもたない複式炉で土器埋設部と石組部から構成される。土器埋設部は中央に口縁部を欠く深鉢形土器を正位に据えている。石組部の外周縁辺部にはさらに3個体の縄文土器片を立て据え二重に巡る形になっている。埋設土器の周りには「U」字状に縁石が配され、12cm~22cm大の直角礫を立て据えている。土器埋設部は縁石・土器ともに焼痕の痕跡が著しい。石組部は方形を呈し、深さ13cmを測る。奥壁は13cm大の板状礫2枚を緩い傾斜に据え付け、対向する末端隅には30cm大の板状礫1枚を緩い傾斜に据え付けている。南側壁には板状礫・直角礫をほぼ垂直に立て据えている。底面は地山下の礫層上面に達し、礫の露呈した部分をそのまま使用している。石組部では焼痕の痕跡を看取できなかった。石組部と南東壁間で、長径17cmと78cmを測る楕円形の落ち込みを2基検出したが、積極的に前庭部とは判断できなかった。炉の断ち割りから埋土は14層に細別でき、加熱による焼土化は掘り方底面直上の7層までは達していないことが窺える。

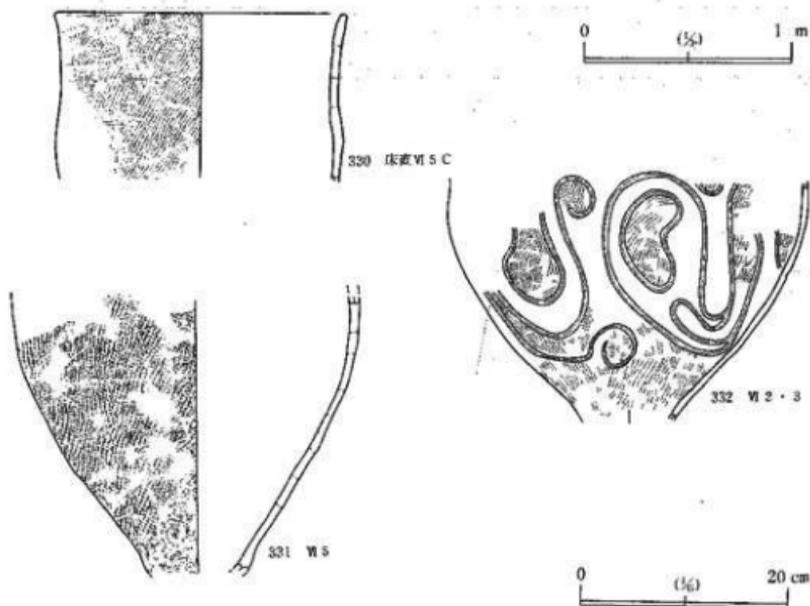
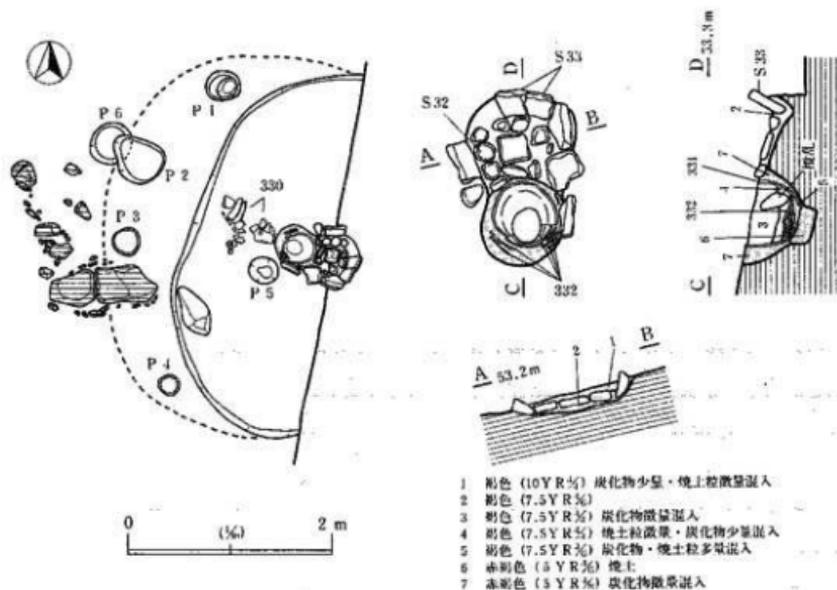
遺物は埋設土器（第28図306、第29図320・321・324）以外に、埋土中から縄文土器片（第29図313~319、322・323、325~329）少量と、石匙1点（第29図S30）が出土した。306は胴部下半に緩い括れをもつ深鉢形土器で、「J」字状をモチーフとする文様が配置され、縄文はLRL複節縄文が充填される。320・321・324は埋設土器の外側に立て据えられた縄文土器片で、320・321は沈線区画内にLRL単節・LRL複節縄文が充填され、324はLRL単節縄文が施されている。3点とも加熱による器面の剝離痕が著しい。埋土中から出土した土器はVI群に比定されるものがほとんどで328がVII群に比定される。328は口縁部に取り付く橋状把手の下端で、円形の刺突文が施されている。

#### S I 12（第30・31図、図版7・16）

台地の東側縁辺部にあたるOA・OB46・47グリッドに位置する。開田による攪乱が地山上面まで及んでいたため検出面が床面に相当し、東半部は地山下まで深く削平されていたため内容は不明である。また、削平を受けている南東側では前述したS I 03とプラン上重複するが、新旧は不明である。出土遺物からの検討では本遺構が古い様相を呈している。本遺構のプランは柱穴配列から推定した。

平面形は径3.7m前後の略円形を呈すると考えられる。壁は現存せず、床面はほぼ平坦であるが、南東側へ緩く傾斜している。また、南東半部の炉の周辺は一段低くなり、比高差3cm~5cmを測る。特にこの部分の床面は堅緻である。

柱穴は6本検出した。主柱穴はP1・4と考えられ、他は不明である。P6はP2より新しく、埋土中から縄文土器片1点（第31図336）が出土している。床面からの深さは順に36cm、26cm、25cm、12cm、21cm、19cmを測る。P1・4間の中点に直交する線を本遺構の中軸線と考えると



第30図 S12壁穴住居跡・炉跡

N-78-Wになる。これは炉の長軸方向にほぼ一致する。また、P3・5を結ぶ線はP1・4のそれに直交する。

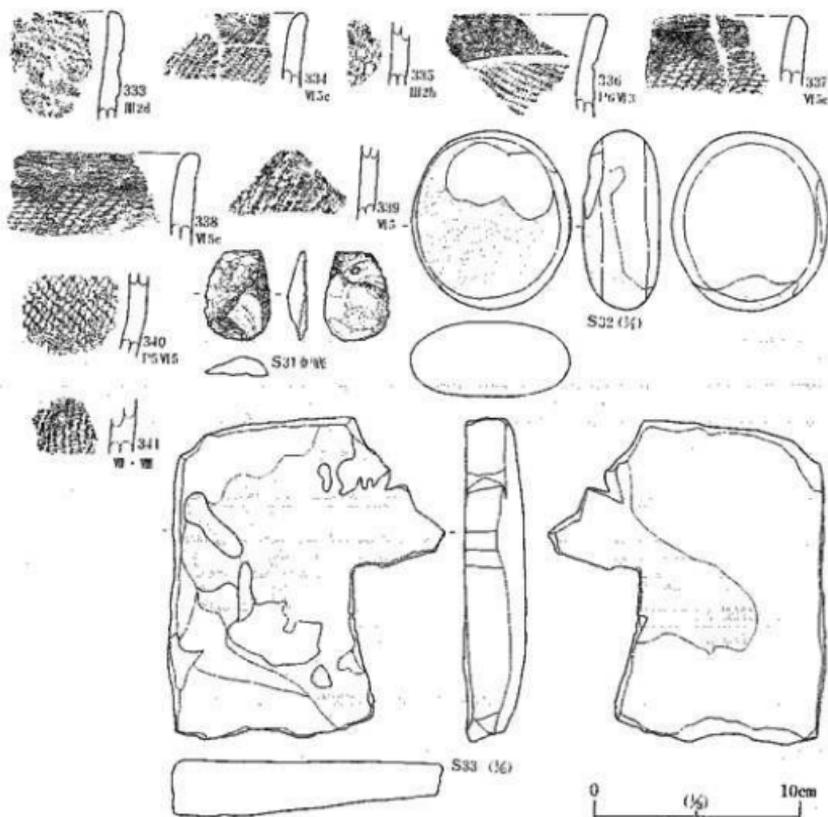
炉は南東側半部中央で検出した。前庭部は攪乱により不明であるが、土器埋設部と石組部は遺存していた。長軸方向はN-77-Wを向き、全長86cm、幅63cmを測る。土器埋設部は中央に口縁部と底部を欠く深鉢形土器を長軸線上の石組部側から斜めに据えている。傾斜角は12°を測る。外周縁辺部には部分的に、別個体の同一破片を1~4重に立て据え、また、埋設土器内底面にも4重に積み重ねている。埋設土器の南西側には20cm大の亜角礫1点を立て据えている。石組部は深さ5cm~13cmを測る。緩い末広がりに組まれ、末端は弧状を呈する。北東側で一部攪乱を受けているが、側壁及び末端側には11cm~28cm大の板状礫・亜角礫・石皿を緩い傾斜に据え付けている。底面は中央部に15cm大の板状礫1枚を敷き、その外周には5cm~10cm大の亜角礫・磨石を敷き詰めている。床面は土器埋設部側から末端にかけて緩く傾斜し、埋設土器の上端とは若干比高差はあるものの、ほぼ水平を呈している。この傾斜角が78°を測ることから、埋設土器の傾斜角とは直交することになる。土器埋設部及び石組部の先端側は焼灼の痕跡が著しく、埋設土器や底面に敷かれた土器片は特に顕著である。炉の断ち割りから埋土は7層に細別でき、加熱による焼土化は土器埋設部掘り方全体に達していることが窺える。

遺物は埋設土器の2個体(第30図331・332)の他にP5・6の埋土中、炉の北西側床面及びその上面から縄文土器片が少量出土した(第30図330、第31図333~341)。石器は土器埋設部掘り方4層から不定形石器1点、石組部に転用された磨石・石皿が出土した(第31図S31~33)。330は床面から押し潰された状況で出土した深鉢形土器で胴部下半を欠いている。胴部上半に緩い膨らみをもち口縁部がわずかに外反する器形を呈し、RL単節縄文が縦位回転施文されている。331は埋設土器の外周及び底面に据えられていた深鉢形土器で、胴部の張りに比べて底部径がかなり小さくなると考えられる。RL単節縄文が縦位回転施文されている。332は埋設土器で、底部は331に通ずるものがある。口縁部は不明であるが、胴部上半がかなり膨らむ器形と考えられる。描線端部が連結する部分と渦文状に開く部分により、曲線の文様が区画され、区画内には楕円状の文様が配置されている。RL単節縄文を部分的に充填し、一部磨り消しを施している。333~335はⅢ群、336~340はⅥ群、341はⅦ群かⅧ群土器に比定され、336がP6、340がP5の埋土中から出土している。

#### S I 14 (第32~38図、図版8・17)

台地の東側斜面にあたるNG・NH48・49グリッドに位置し、南西側のS I 04に近接している。検出面は地山上面であるが、北西側は調査区外にかかっているため全容は不明である。西壁際でSK30と重複しているが、埋土の堆積状況からSK30が新しい土坑であると判断した。

平面形は径4.8cmの略円形を呈すると考えられる。現存する壁高は19cm~51cmを測り、斜面



第31図 S112出土遺物

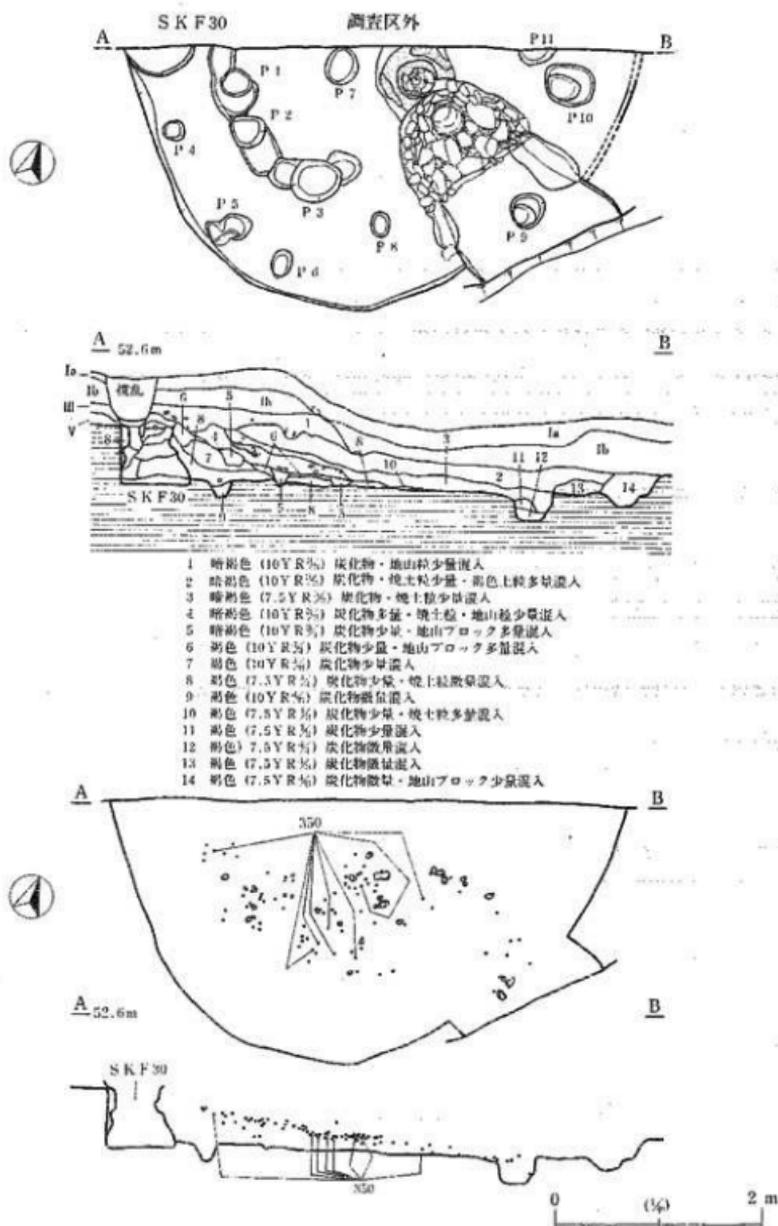
に構築しているため南西壁側が高くなっている。壁は南西側ではほぼ垂直に立ち上がり、北東側では緩く外傾している。床面はほぼ平坦で堅緻であるが、南西側から北東側へ緩く傾斜している。南西壁際から70cm程内側の床面上で壁溝と考えられる褐色土の落ち込みを検出した。炉の石組部南西側45cm程で一旦途切れるが、調査区外境界の土層堆積では北東壁直下にも落ち込みを看取できることから、調査区外の北西側に続くものと考えられる。上面幅26cm～32cm、底面幅18cm～28cm、深さ9cm～20cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は起伏が著しい。埋土の状況から人為的に埋め戻された可能性が強く、また、検出された位置が本遺構の北東側に片寄ることから、古い段階の壁溝と判断した。このことから本遺構は一回の建て替えが行われ、南側から西側へ拡張された住居と考えられる。拡張後の住居には壁溝は付設されていない。

柱穴はP1～11の11本検出した。拡張前に伴うと認められる柱穴はP1で、壁溝底面で検出

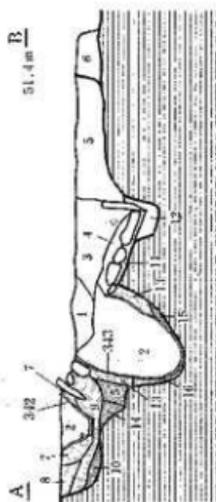
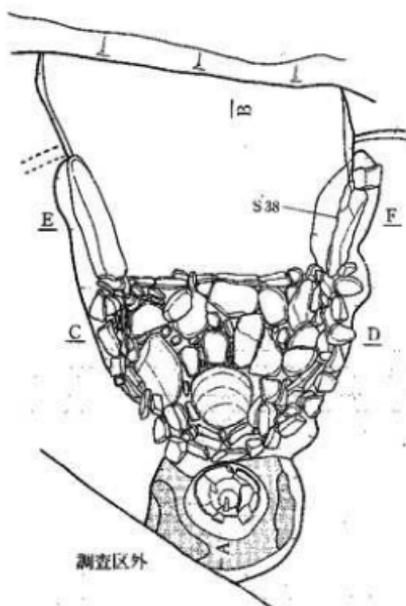
し、深さ39cmを測る。P2-11は拡張後の柱穴と考えられ、底面からの深さは順に35cm、48cm、19cm、29cm、28cm、14cm、34cm、35cm、19cmを測る。主柱穴はP8-10で、P4-6は壁際に取り付くものと考えられる。P8・10間の中点とP9を結ぶ線が中軸線と考えられ、N-55°-Wを向く。これは炉の長軸方向と一致し、また、P8・10を結ぶ線は石組部の前庭部寄りを通過する。本遺構の埋土は壁溝・柱穴P11を含めて14層に細別でき、自然的堆積を呈する。壁際及び柱穴に遺物をほとんど含まない6-14層の褐色土が自然堆積した後、VI・VII群土器を主体的に含む2-5層時褐色土が流入している。4層からはVII群に比定される8個体の土器が含まれていたことから、投棄されたものと考えられる。

炉は南東半部中央で検出した拡張後の複式炉である。拡張前の炉は検出されなかった。長軸方向はN-55°-Wを向き、全長2.07m、幅1.53mを測る。土器埋設部は長軸線上石組部寄りに口縁部から胴部上半を欠く深鉢形土器を据えている。周辺は燃焼による焼土化が著しく、径60cm-75cmの円形内で赤変・硬化している。石組部の平面形は前庭部側に大きく開く「U」字状を呈し、断面形は連台形状を呈する。床面からの最大深部は35cmを測り、前庭部側末端にある。したがって底面は土器埋設部側から直線的に傾斜している。壁面には5cm-30cm大の板状礫・亜角礫を積み上げ、壁面上端は床面から3cm程突出している。底面は15cm-30cm大の板状礫を8枚敷き、隙間には3cm-10cm大の亜角礫を詰めている。末端には28cm-35cm大の板状礫2枚をほぼ垂直に立て付け、隙間を10cm大の板状礫で詰めている。上端と底面との比高差は15cmを測り、前庭部底面から3cm程突出している。底面の土器埋設部寄りには深鉢形土器が据えられていた。長軸線上の前庭部側から斜めに据えられ、傾斜角26°を測る。土器の上端は底面に一致する。前庭部は末広がりに開き、末端は南東壁に接している。床面からの深さは23cmを測り、底面は平坦であるが、末端側から石組部側へ緩く傾斜している。側壁には60cm大の板状礫を立て付けているが、やや内傾し南西側壁には石皿を転用している。炉の断面割りから埋土は16層に細別でき、11・12層を除く7-16層は燃焼による焼土化の範囲である。2個の埋設土器とその間の石組部は燃焼による痕跡が著しいものの、石組部末端側では顕著に認められない。

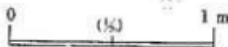
遺物は多量の縄文土器片と石器・石製品が出土した。埋土2-5層中から出土したものが大部分で、本遺構に直接関わるものは認められない。土器はIII・IV・VI-VIII・X・XI群に比定され、なかでもVI・VII群土器を主体としている(第34-38図344-460)。第33図342・343は炉の埋設土器である。342は底径9.2cm、現存器高15cmを測る深鉢形土器でR L単節縄文が縦位回転に施文されている。343は石組部に埋設された深鉢形土器で、口縁部が内湾する器形である。口径30.8cm、底径10.4cm、器高50.4cmを測り、R L単節縄文が縦位回転に施文されているが、口縁部の大部分はやや斜方向からの回転施文である。第34図344-351は埋土4層中から出土したVII群に比定される土器である。344・347は口縁部が内傾し、胴部から底部にかけて直線的に移行



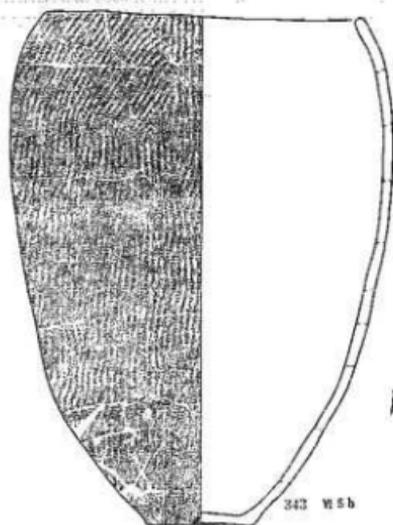
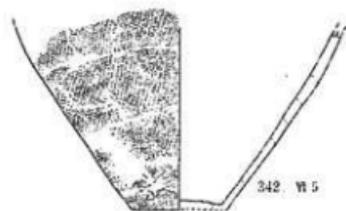
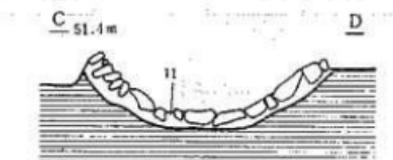
第32図 S114罅穴住居跡・遺物出土状況



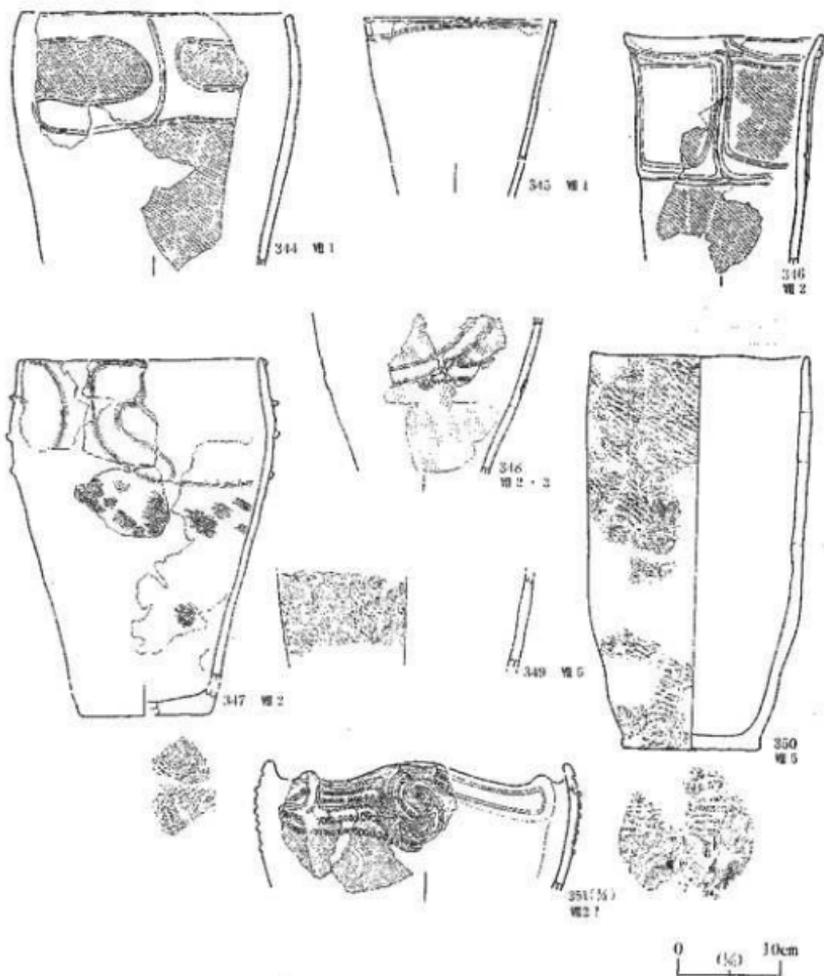
- 1 濃い黄褐色 (10Y R%) 炭化物少量混入
- 2 濃い黄褐色 (10Y R%) 炭化物少量混入
- 3 褐色 (10Y R%) 炭化物・焼土粒少量混入
- 4 褐色 (10Y R%) 炭化物少量
- 5 褐色 (10Y R%) 炭化物少量・地山粒多量混入
- 6 褐色 (10Y R%) 本付跡跡壁
- 7 濃い赤褐色 (5Y R%) 褐色土粒多量混入
- 8 濃い赤褐色 (5Y R%) 褐色土粒少量混入
- 9 赤褐色 (5Y R%) 褐色土粒中量混入
- 10 赤褐色 (5Y R%) 加熱による赤変・硬化
- 11 褐色 (7.5Y R%) 焼土粒・地山粒少量混入
- 12 褐色 (7.5Y R%) 地山プロック多量混入
- 13 赤褐色 (5Y R%) 地山粒微量
- 14 赤褐色 (5Y R%) 加熱による赤変・硬化
- 15 赤褐色 (5Y R%) 褐色土粒微量混入
- 16 暗赤褐色 (5Y R%) 加熱による赤変・硬化



調査区外

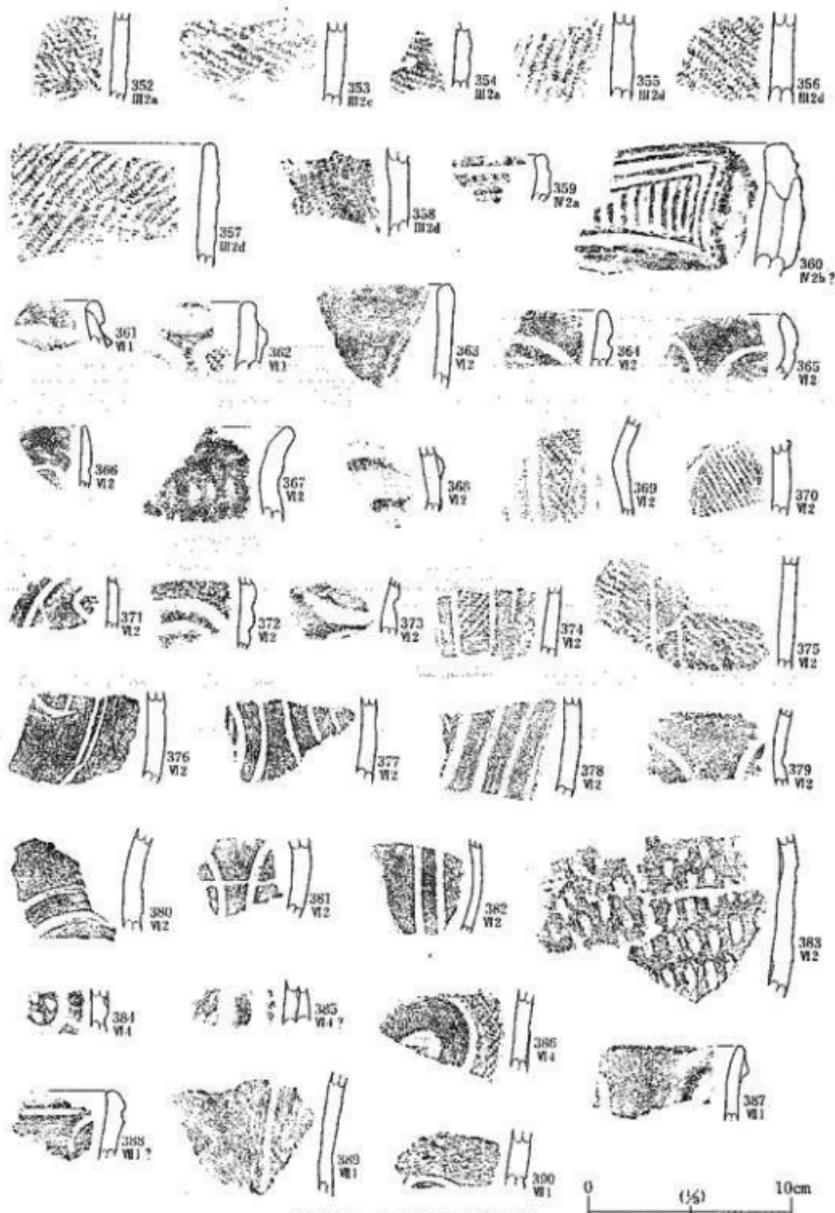


第33図 S I 14炉跡

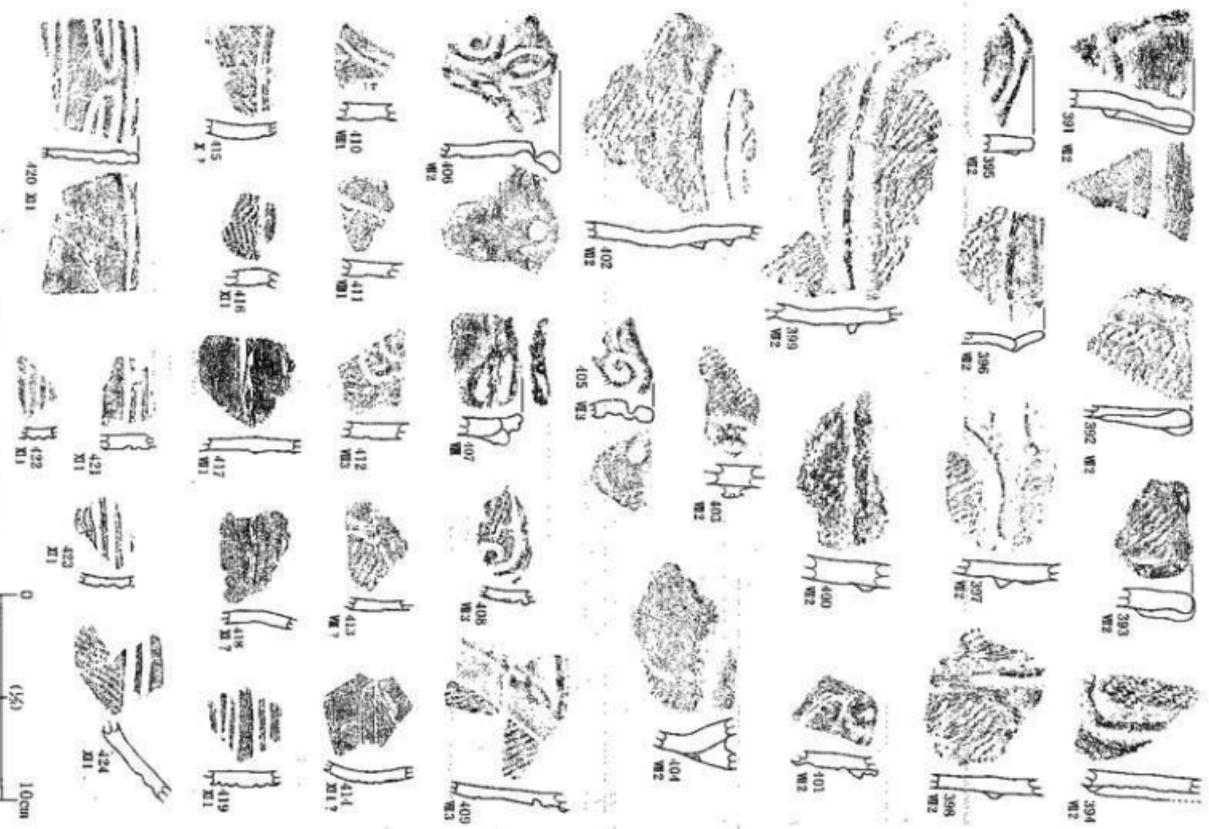


第34図 S114出土遺物(1)

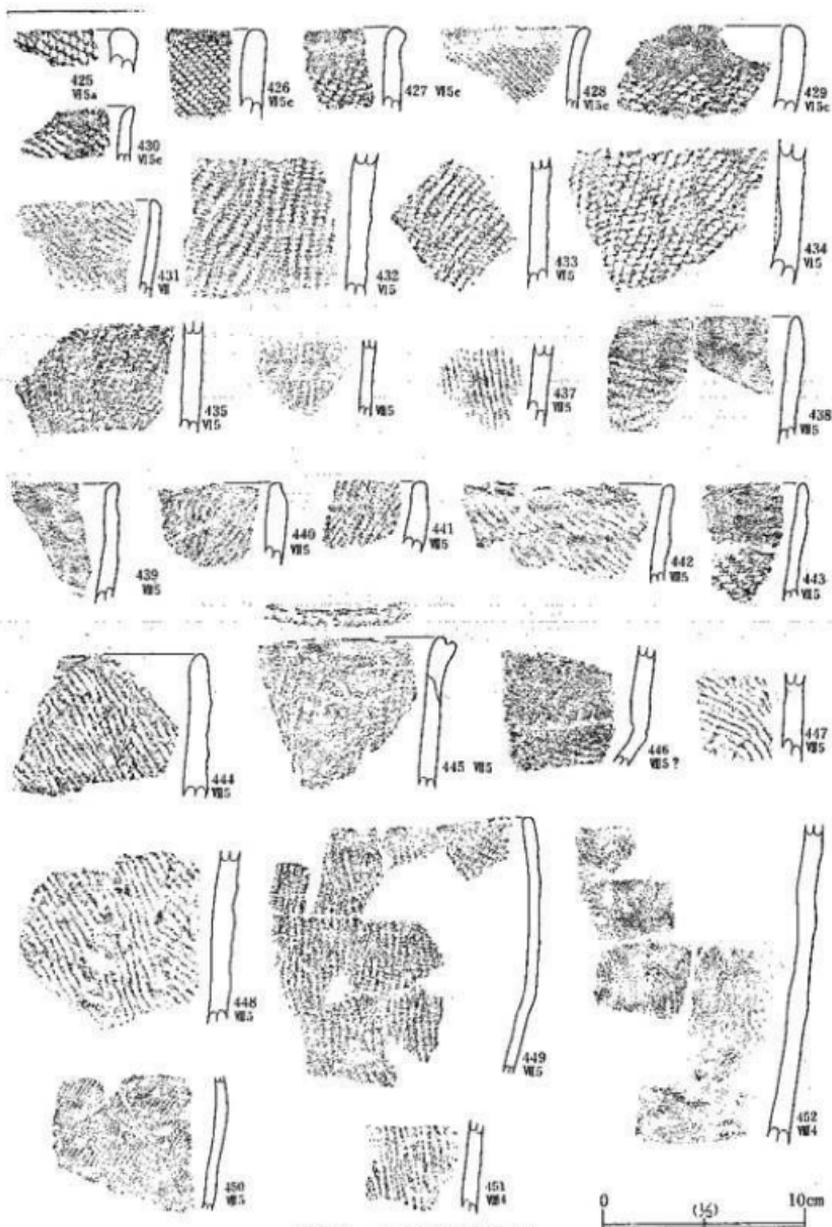
する深鉢形土器である。344は沈線、347は隆線による区画文が施され、各帯線は文様帯の区画線と切り合っている。344の区画文内にはR R反拗の縄文が横位回転に充塞され、口径26.4cmを測る。347の区画文内は無文で、胴部にはL R単筋縄文が縦位回転に施文されている。口径23.8cm、底径12.6cm、器高35.2cmを測る。346は口縁部が鋭く外傾する深鉢形土器である。口縁は極めて緩い4単位の波状を呈し、波頂部から胴部上半にかけてクランク状の粘土紐を貼付し、4単位の枠状区画を構成している。各区画内には沈線による方形区画文が配置され、その一端は波頂



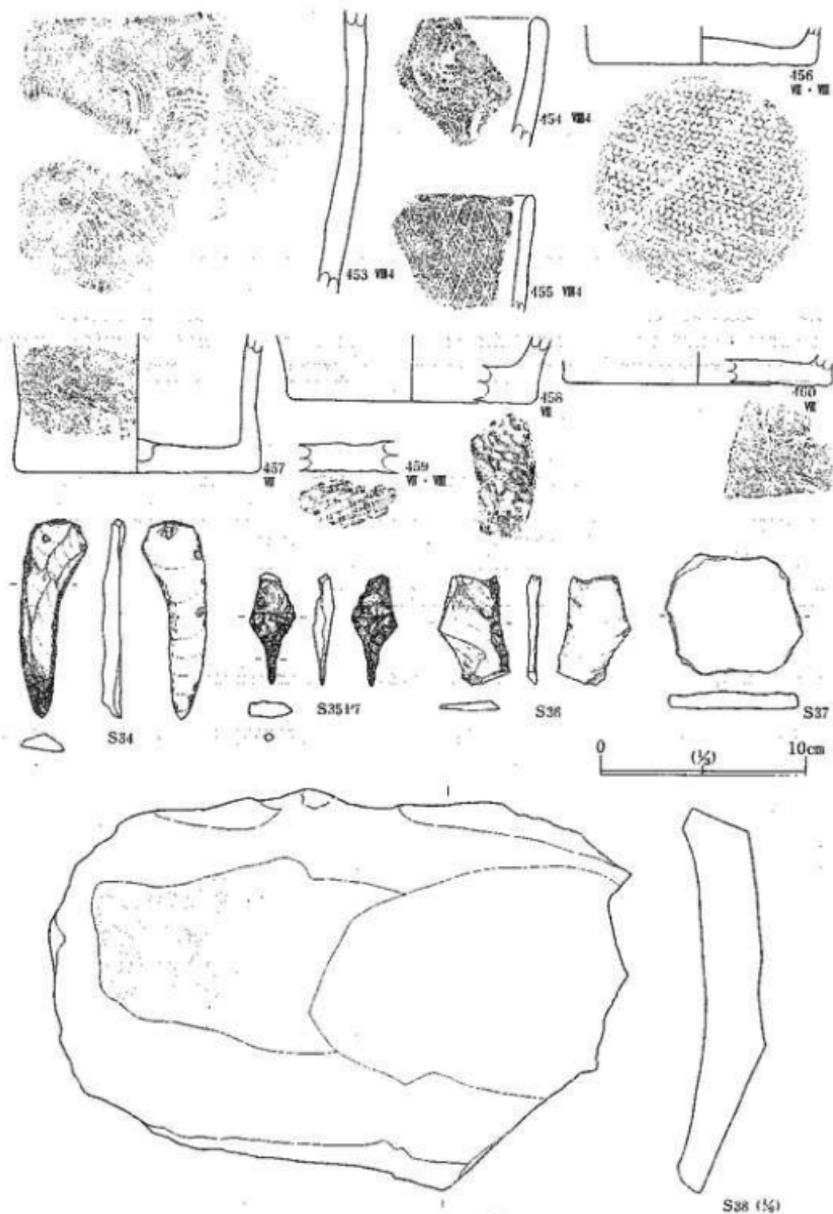
第35図 S I 14出土遺物(2)



第36図 S 114出土建物3



第37図 S I 14出土遺物(4)



第38圖 S I 14出土遺物(5)

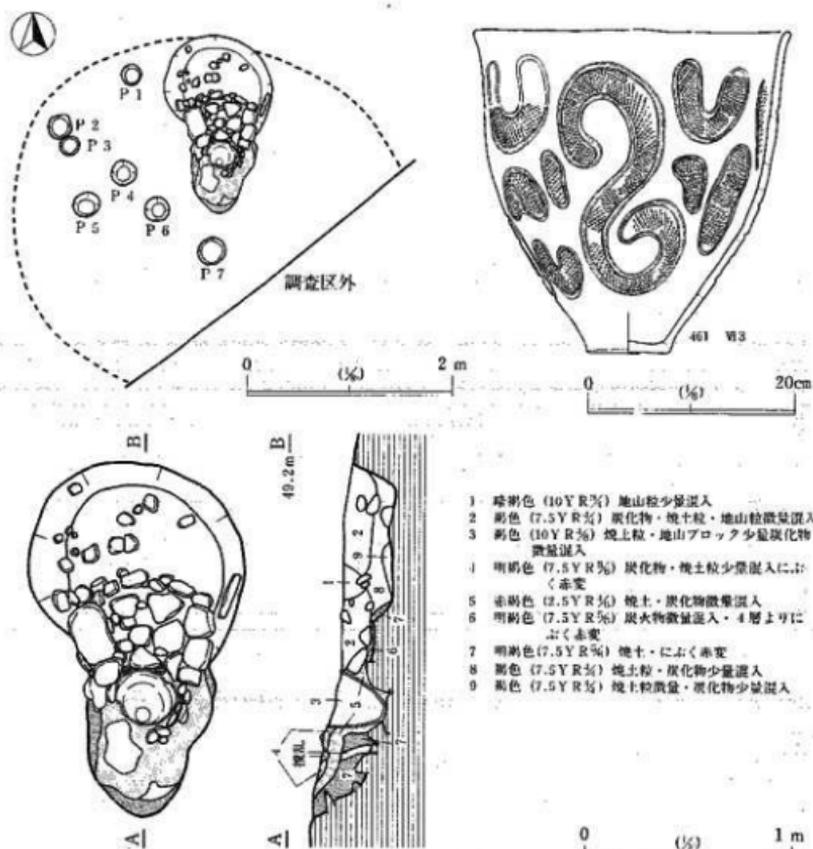
部下の粘土紐に沿って伸びている。縄文はL R単節縄文が縦位回転に施文され、口径19.7cmを測る。348は隆・沈線による文様が施され、隆線には部分的に刺突を施している。縄文はR L単節縄文の縦位回転である。349はL撚・R撚異種原体を用いた網目状燃糸文が施されている。350は円筒状を呈する深鉢形土器で口径21.2cm、底径13.4cm、器高38.8cmを測る。歯状工具による器面調整を施した後、0段多条のL R縄文を縦位回転に施文している。底面には網状状圧痕が見られる。351は口縁部が緩く内弯し、波状口縁を呈する。波底部には胴部まで垂下する粘土紐が貼付され、その上端両側面から横位に伸びる粘土紐は波頂部下で入組む形に貼付されている。入組状粘土紐の内側面には沈線による鈎手状区画文が配置され、区画文内及び粘土紐下端に1段から2段の刺突文が施されている。縄文はL R単節縄文が縦位回転に施文され、波底部から垂下する粘土紐にも施している。359・360はIV群に比定され、359は細い粘土紐を貼付した後、押し引き文を施している。360は厚味のある粘土帯を貼付した口縁部破片である。2本1単位の細い粘土紐で方形区画文を配置し、区画文内には縦位の細い粘土紐が貼り付けられている。361~386はVI群に比定され、やや太めの沈線により、楕円文・懸垂文・アルファベット状文が施されている。各単位文内には縄文や刺突文が充填されている。387~409・417は隆沈線による区画文が施され、VII群に比定される。410~416・418~422・452~455はVIII・X・XI群に比定され、曲線的な沈線文や変形工字文が施されている。石器の出土は少なく、石錐、播器、不定形石器等が出土している(第38図S34~38)。S35は柱穴P7埋土中から出土した石錐で、S38は炉の前庭部側壁に立て付けられた石皿である。S37は円盤状石製品で埋土4層から出土している。

#### S115 (第39図、図版9・32)

調査区西側に形成された南西から北東に伸びる埋没谷の東側縁辺部にあたるNB48・49グリッドに位置する。地山上面で検出したが、南東側は調査区外にかかっているため、全容は不明である。開田による擾乱が地山面まで及んでいたため、検出面は床面に相当する。柱穴配列からプランを推定しようとしたが、明確には把握できなかった。本遺構が構築されている面は地形的に狭少な平場を呈し、南東側には丘陵に連なる斜面が控えているため、規模等の推定値に近いものと思われる。平面形は径3.6mの略円形を呈すると考えられる。壁は現存せず、床面はほぼ平坦であるが、北側に向かって緩く傾斜している。

柱穴は北西半部から7本検出した。床面からの深さはP1~3が12cm、P4から順に35cm、18cm、10cm、5cmを測る。柱穴配列は不明であるが、P4・5のどちらかが主柱穴に相当すると思われる。

炉は北半部中央で検出したが、炉の断ち割りから新旧二時期の炉が認められた。新炉は長軸方向が南北を向き、全長1.74m、幅1.06mを測る。石組部・前庭部の東側が若干擾乱されてい



第39図 S115竪穴住居跡・炉跡

る他、前庭部は北壁に接していたものと考えられる。土器埋設部は長軸線上北側に深鉢形土器を北方向から斜めに据えている。傾斜角は12°を測る。埋設土器の東側外周には4cm～10cm大の亜角礫を立て据え、西側北寄りには10cm～15cm大の亜角礫を敷き詰めている。南西側では検出しなかったが、部分的に攪乱を受けていることから本来は「U」字状に配置されていた可能性がある。加熱の痕跡は土器及び礫に認められ、また、焼土化の範囲は掘り方平面形に一致し、埋設土器の両側が若干膨らむ「U」字状を呈する。北東端・西端・南端の焼土はその内側部分より若干にふい色調である。石組部は末広りに組まれ、末端は弧状を呈する。奥壁には15cm大の亜角礫と8cm大の円礫を緩い傾斜に据え付け、埋設土器の北側上端と奥壁の上面がほぼ一致するように組まれている。両側壁は10cm～30cm大の板状礫を緩い傾斜に立て据え、末端には

4 cm～15 cm大の亜角礫・円礫を弧状に積み重ねている。底面は15 cm大の板状礫2枚を東側に敷き、他は5 cm～10 cm大の亜角礫を敷き詰めているが、全体的には粗雑である。石組部では加熱の痕跡は認められない。前庭部は半円状を呈し、床面からの深さは12 cm～14 cmを測り、石組部の深さとほぼ一致する。東側壁には22 cm大の板状礫1枚が立て据えられ、石組部の東側壁の延長線上から東へ若干ズレている。旧炉は新炉とはほぼ同じ長軸方向を向き、規模も同様と考えられる。土器埋設部は新炉のその南端側に位置し、石組部はその分南側へ広がる。前庭部の末端は変わらないが、掘り込みは5 cm～10 cm程深くなる。構造的にはS I 14・18に近似し、石組部にも土器が埋設されていたと想定できる。その場合、埋設土器の位置は新炉の埋設土器に一致する。また、土器埋設部だけではなく石組部でも火を使用した痕跡が窺える。埋土から言えば1～5層が新炉に相当し、6～9層が旧炉に相当する。4・5層は新炉の焼土化範囲で、6・7層が旧炉の土器埋設部及び石組部での焼土化範囲である。

遺物は新炉の埋設土器1点だけである。第39図461がその資料で、口縁部をわずかに欠くものの、ほぼ完形に近く復元できた。口縁部が若干外反する深鉢形土器で口径30.8 cm、底径8.0 cm、器高31.6 cmを測る。縦位の「S」字状区画文が4単位施され、その間には「C」字状文、変形楕円文が配置されている。各単位文様内にはRLR複飾縄文が区画線に沿って回転方向を変えながら充填され、その後、沈線は再描画されている。

#### S I 18 (第40～45図、図版9・10・18・31)

台地の東側緩斜面にあたるN J・OA 45・46グリッドに位置し、検出面は地山上面である。南西側でS I 03と重複するが、S I 03が新しい住居である。本遺構は46ラインに設定した土層観察用ベルトにより、その存在が予想されていた。地山上面での検出時にプラン縁辺部が焼土化していたことから焼失家屋を想定したが精査の結果、埋土中には多量の焼土ブロック・炭化物が混入し、床面は赤変・硬化が著しく、一部炭化材を検出したことから焼失家屋と判断し、また、二重に巡る壁溝と柱穴配列から拡張に伴う建て替えが行われた住居であることが認められた。以下、新旧の順に述べていく。新住居は最終的に焼失したもので、旧住居の北東隅部から東壁側を除く部分を拡張することによって建て替えられている。

平面形は4.18 m～4.35 mの隅丸方形を呈する。現存する壁高は5 cm～20 cmを測り、緩く外傾している。緩斜面に構築されているため西壁側が最も高く、東へ移行するにつれ低くなる。東壁は開田による攪乱を受け残存していない。埋土は炉・柱穴P 1・4を除いて25層に細別できる。焼土ブロック・炭化物・地山粒を多量に混入する褐色土が主体で、焼失直後一気に埋め戻された状況が窺える。その時点で東壁側には浅い窪みが残り、その部分に7・10～13層の黒褐色土・褐色土が自然堆積したものと考えられる。出土遺物の大部分は7・10～13層に含まれていたが、VI群に比定される4個体の土器がまとめて出土していることから、この土器は投棄さ

れた可能性がある。壁溝は南壁西半部から西・北壁を經由し、東壁の一部まで付設されている。東壁側の壁溝は北東隅部から約80cmに位置する柱穴P13までである。上面幅10cm～25cm、底面幅5cm～15cm、深さ6cm～17cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は起伏が著しい。底面に穿たれるピットは少なく、P13の他に北東隅部西寄りと南壁側の端部にあり、深さ8cm～10cmを測る。床面はほぼ平坦で、西側から東側へ緩く傾斜している。焼失の痕跡は著しく、赤変・硬化の範囲は床面全体に及んでいる。

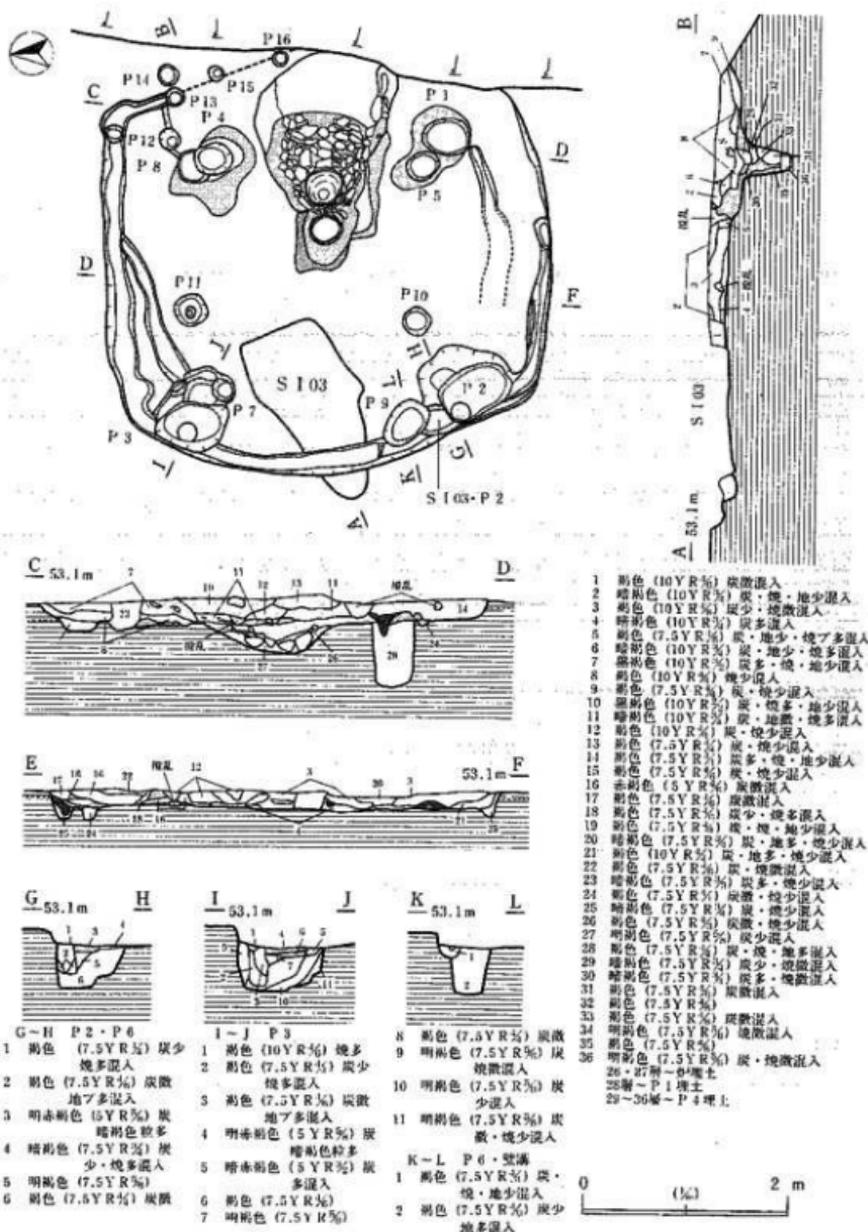
柱穴は旧住居も含めて15本検出した。P1～4が主柱穴で床面からの深さは順に66cm、45cm、43cm、53cmを測る。P2・3は埋土の観察から柱痕が認められ、径18cm、深さ20cm～30cmを測り、底面には達していない。P1・4間の中点とP2・3間の中点を結ぶ線が住居の中軸線でN-88°-Eを向く。これは炉の長軸線方向と一致し、P1・4間を結ぶ線は炉の石組部中央末端寄りを通過する。P4の東壁側で深さ8cm～23cmを測るP12・14～16を検出したが、これらの柱穴とP4・炉に囲まれた床面は比高差5cmをもって一段低くなっている。焼失による硬化を差し引いても他の床面よりかなり堅緻である点と、壁溝がP13で途切れ、東西方向に並ぶP12～14のうち、P14が東壁側プラン外に位置する点からこの部分が入り口であることが想定される。P14・16間距離は96cmを測り、P15は出入口施設の下部構造に関わるピットと思われる。

炉は東半部中央で検出した。長軸方向はN-88°-Eを向き、全長2.14m、幅1.33mを測る。石組部の北東側と前庭部末端東側は攪乱を受けている他は、前庭部末端は東壁に接していたと考えられる。土器埋設部は長軸線上石組部寄りに底部を欠く深鉢形土器を据えている。埋設土器は胴部下半の輪積の部分で二分割した後、上半分は逆位に据え、外側には下半分を正位に据えている。外側の土器は石組部側には据えられず開口している。燃焼の痕跡は著しいものと考えられるが、焼失による焼土化との識別は困難であった。石組部の平面形は前庭部側に大きく開く「U」字状を呈し、断面形は逆アーチ状を呈する。床面からの最大深部は30cmを測り、石組部末端にある。SI14の炉と同様、底面は土器埋設部側から直線的に傾斜している。壁面には7cm～12cm大の亜角礫・板状礫を積み上げ、底面には5cm～20cm大の亜角礫を敷き詰めている。末端は前庭部側に張り出す緩い弧状を呈し、15cm大の板状礫を二重に立て付けているが、やや内傾する立ち上がりを呈する。上端と床面との比高差は10cmを測り、前庭部底面より若干下位にある。底面の土器埋設部寄りには口縁部を欠く深鉢形土器を据えている。長軸線上の前庭部側から斜めに据えられ、傾斜角は13°を測る。土器の上端は底面より1cm～5cm程下位にある。前庭部は木広がりになり、東壁に接していたと考えられるが、北側壁東端は直線的に内側へ入り込んでいる。これは出入口部の柱穴と考えられるP16を配置したことに起因する。床面からの深さは15cmを測り、底面は緩い起伏をもちながら東壁側から石組部側へ傾斜している。

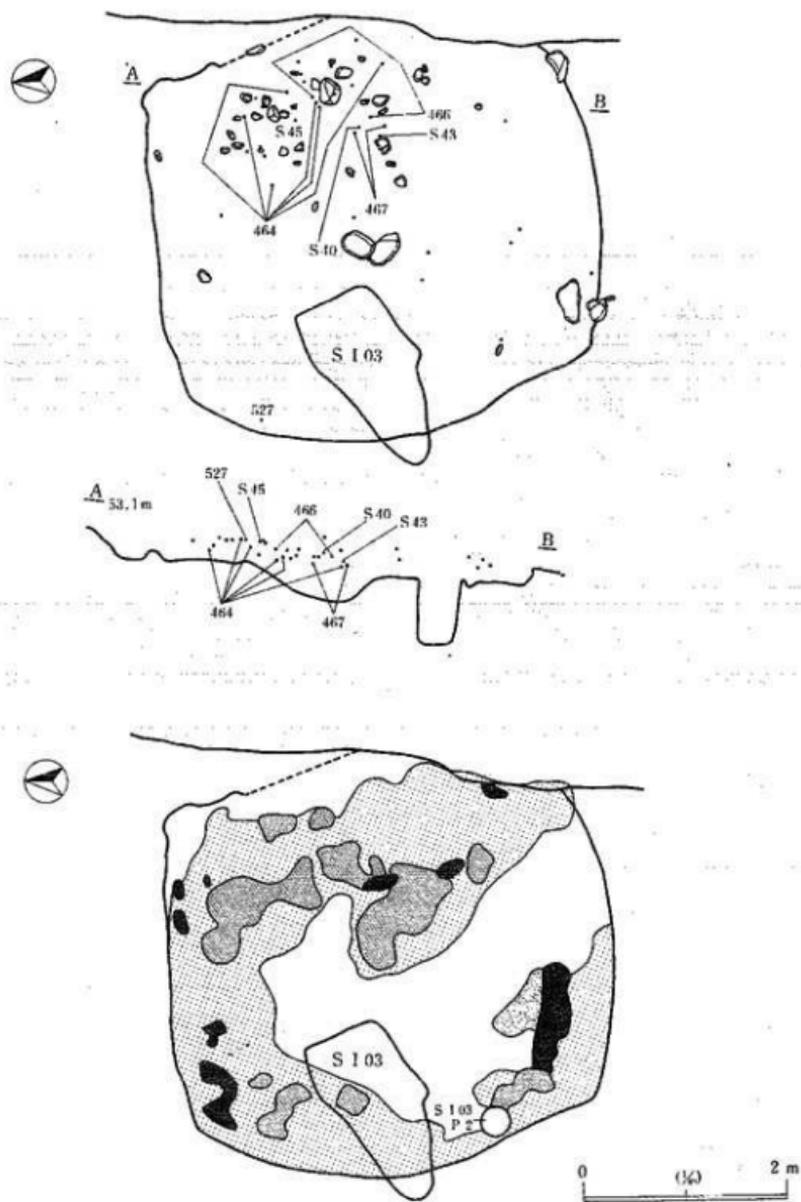
南側壁には25cm大の亜角礫を立て付けているが、その東側で抜き取り痕と看取できる落ち込みを検出したことから、本来は東壁際まで礫が配されていたと考えられる。北側壁では礫及び抜き取りの痕跡は認められない。炉の断ち割りから埋土は17層に細別できる。14～17層以外は焼失後の埋土で焼土ブロック・炭化物を多量に混入している。14～17層は焼失による焼土化であるが、石組部下の14・15層は焼失時の可能性も考えられ、石組部で火を使用したか否かは識別できなかった。旧住居のプランは新住居の床面から断続的に検出した。北壁中央部から南東隅寄りに巡る内側の壁溝で、柱穴P6・8を経由する隅丸方形と考えられる。北壁側の壁溝は新住居の北東隅部を共有しながら東壁へ移行すると想定され、西壁には壁溝が付設されなかったと考えられる。現存する壁溝は上面幅12cm～24cm、底面幅5cm～16cm、深さ10cm～18cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は緩い起伏がある。

柱穴はP5～8の4本を検出した。埋土は埋め戻された状況を示し、P6・8はP2・4にそれぞれ切られている。底面からの深さは順に37cm、34cm、46cm、33cmを測る。P5・8間の中点とP6・7間の中点を結ぶ線が中軸線と考えられ、N-83°-Eを向く。これは新住居の中軸線より5°北に振れ、住居のプランに符合することが窺える。炉は検出されなかったが、中軸線との関連から想定すれば、新住居の炉の位置にあたる。しかし、炉の断ち割りからはその痕跡を看取できなかったため、炉の作り替えは行われなかった可能性がある。

遺物は縄文土器片・石器が比較的多く出土したが、大部分は埋土7・10～13層中に含まれていた。土器はⅢ・Ⅵ～Ⅷ群に比定されるが、主体となるのはⅥ群土器である(第43～45図464～526)。石器は石鏃・石錐・石篋・磨石・凹石等(第45図S39～46)が12点出土している。第42図462は石組部に埋設されていた深鉢形土器である。口縁部は欠いているが、やや内湾しながら立ち上がる器形と考えられる。地文にRLR複節縄文が縦位回転に施文されている。現存器高35.6cm、底径11.6cmを測る。463は土器埋設部に上下に分断されて掘えられた深鉢形土器である。胴部上半に強い張り出しをもち口縁部にかけて強く外反する器形を呈する。文様は楕円文と縦列溝文を縦位に組み合わせ配置している。さらに「M」字状区画文や隅丸「凹」状区画文により5単位にくっっているが、隅丸「凹」状区画文・くりのいない部分が各1箇所ある。各単位区画文及び胴部下端にはRLR複節縄文が縦位回転により充填され、部分的に磨り消しを施している。「M」字状区画文の端部下方には、先に描画されたと考えられる沈線が看取でき、胴部下端に施された縄文よりも先行している部分がある。この沈線は器面に文様を削り付ける際の下書き描線と考えられ、本来はナデ調整や磨り消しにより痕跡を留めないものであるが、この土器の場合、文様施文工程の中で不手際があったものと思われる。口縁・張り出し部径32.0cm、現存器高31.0cmを測る。464～467は埋土10～13層中からまとまって出土したⅥ群に比定される土器である。464は粘土紐を貼付し、削り込みによって文様を描き、楕円文・縦列



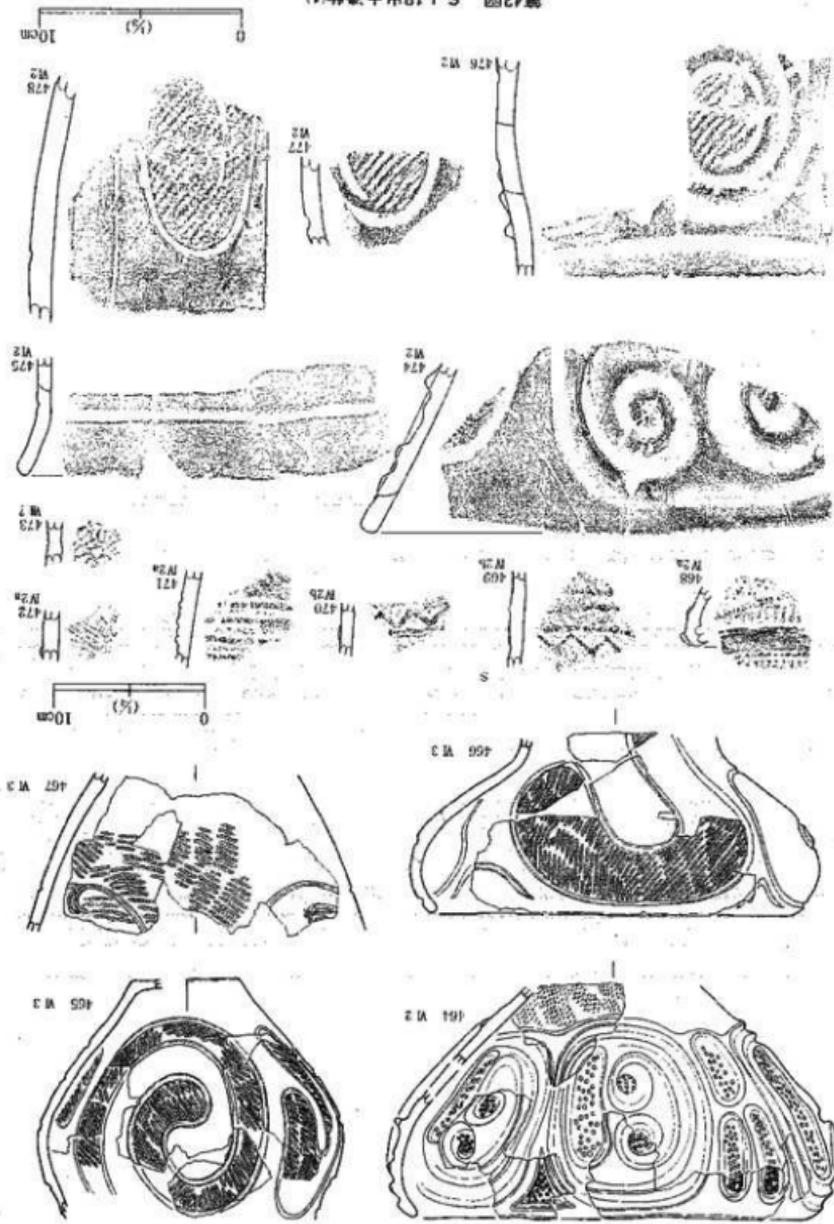
第40図 S I 18 竪穴住居跡



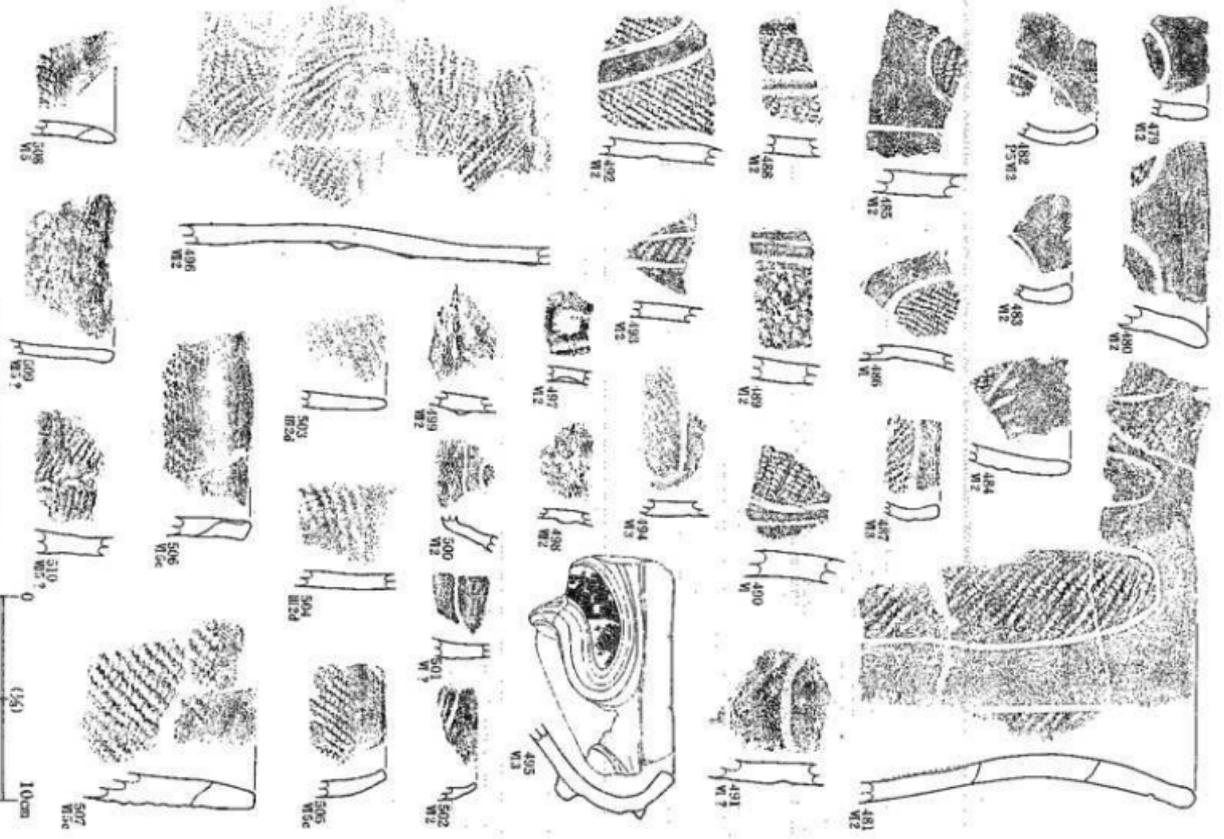
第41図 S118遺物出土状況・焼土及び炭化材検出状況



第43圖 S118出土遺物(1)



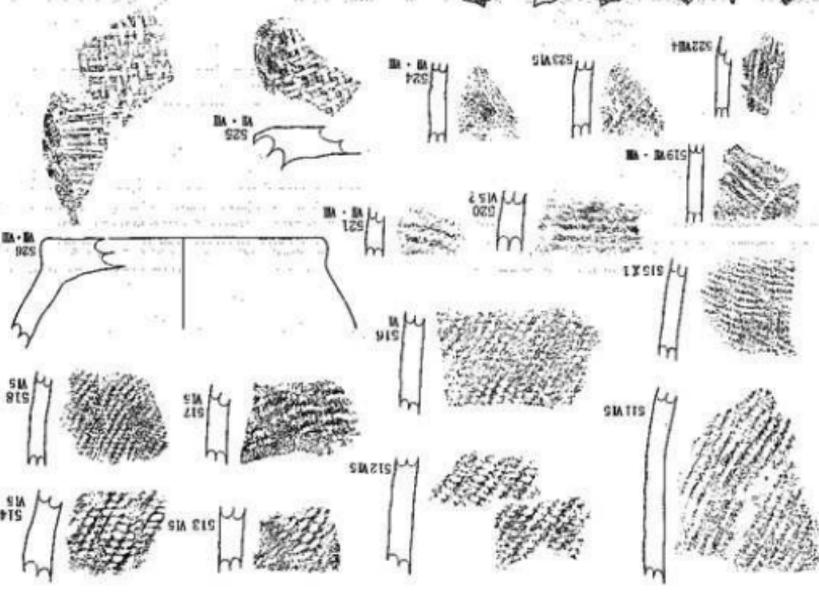
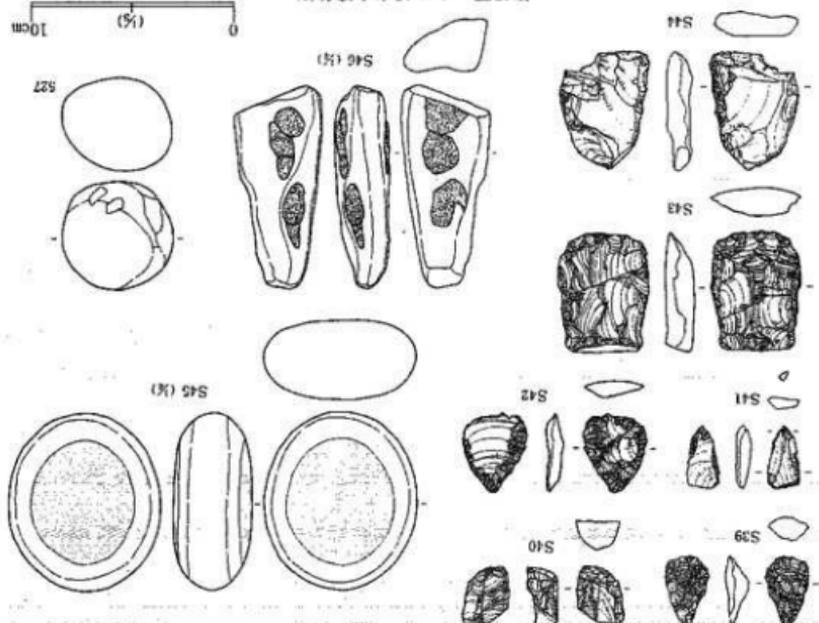
第1圖 出土遺物之放大圖



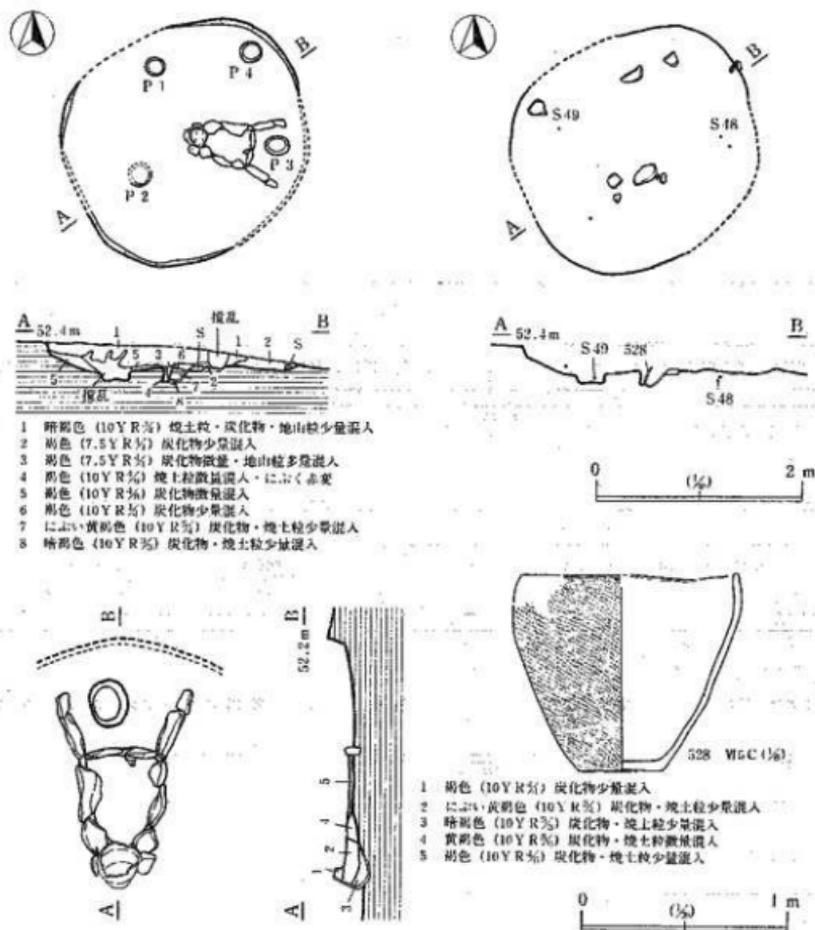
第44図 S118出土遺物(2)

第45圖 S18出土遺物(3)

10cm (1/2)



第1節 検出遺物之出土遺物



第46図 S I 21 竪穴住居跡・炉跡

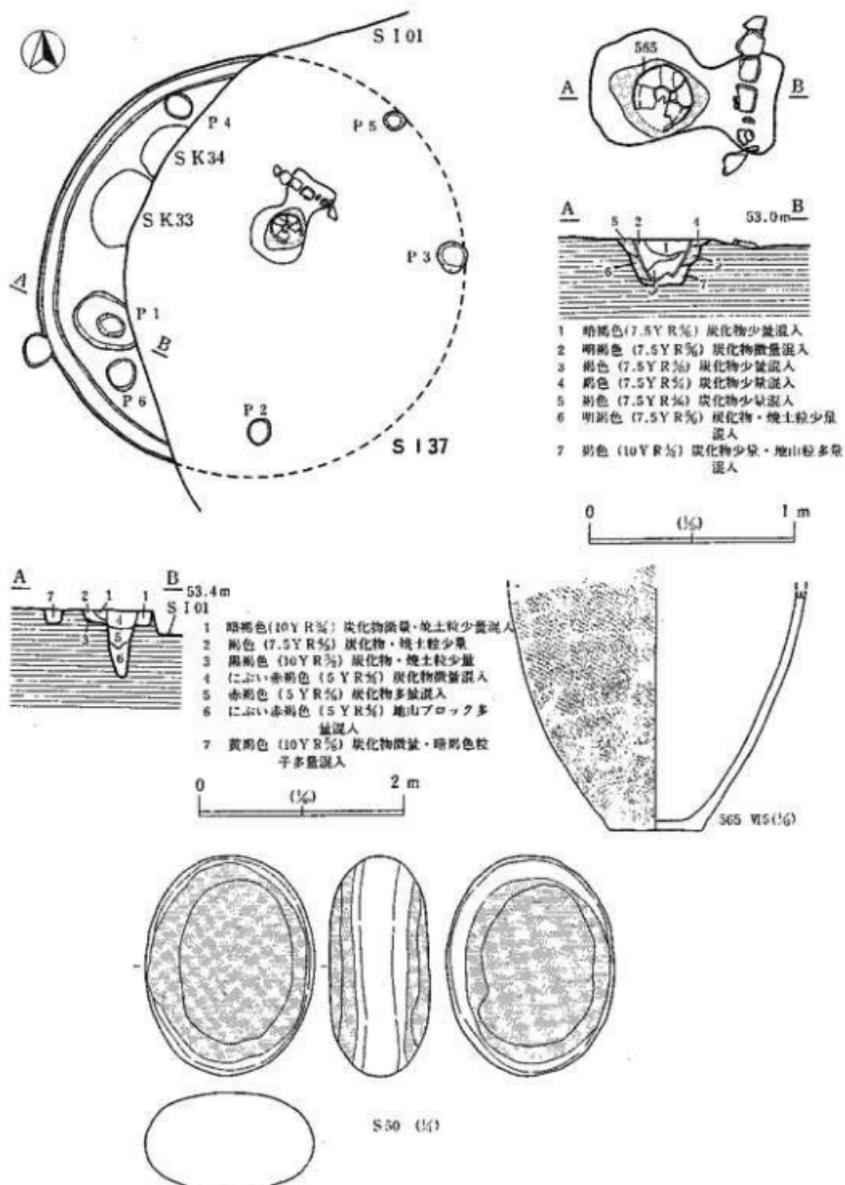
溝文・三角文が配置されている。各単位文には列点文が充填されている。465~467にはアルファベット状のモチーフが描かれ、465・466にはRL単節縄文が、467にはLR単節縄文が区画文及び胴部下半に充填される。527は北西隅部の埋土上位から出土した粘土塊で4.6cm~5.5cmの球形を呈している。

S I 21 (第46・47図、図版11)

台地の東側傾斜面北寄りにあたるN I 46・47グリッドに位置し、地山上面で検出した。平面形は径2.5mの略円形を呈し、現存する壁高は7cm~12cmを測る。南東・北西壁の一部は攪乱を



第47図 S I 21出土遺物



第48図 S137竪穴住居跡・炉跡・出土遺物

を受けているが、他はほぼ垂直に立ち上がる。床面は平坦であるが、南側から北側へ緩く傾斜している。また、南西側の壁際から柱穴P2にかけては約20°～25°の傾斜をもって移行する。埋土は炉の土器埋設部の一部を含めて8層に細別できる。1～5層が住居の埋土に相当し、自然的堆積を呈する。

柱穴はP1～4の4本を検出した。柱穴配列は台形状を呈し、北東側に片寄っている。床面からの深さは順に10cm、11cm、17cm、16cmを測る。P1・4間の中点とP2・3間の中点を結ぶ線が中軸線と考えられ、N-3°-Wを向く。これは長軸方向と大きく異なり、両者に関連性を見い出せない。しかし、P1・2間の中点とP3を結ぶ線を中軸線と想定した場合、N-79°-Wを向き、炉の長軸方向と一致することから、住居構築時の設計上の問題、あるいは、柱穴配列の片寄りから住居の拡張（南西側）が行われた可能性を含むものと考えられる。

炉は南東半部中央で検出した。長軸方向はN-79°-Wを向き、全長1.18m、幅0.67mを測る。土器埋設部は口縁部を部分的に欠く深鉢形土器を長軸線上の石組部側から斜めに据えている。傾斜角は46°を測り、先端側の土器上端は床面から5cm程度上位にある。埋設土器の両側には10cm大の亜角礫を1個毎立て据えている。燃焼による痕跡は認められるが、著しいものではない。石組部は「U」字状に組まれ、深さ5cmを測る。側壁には12cm～30cm大の亜角礫を立て付けているが、土器埋設部側では置き据えている。末端には20cm大の板状礫2枚を垂直に立て据え、部分的に5cm大の円礫を充填している。底面には全く礫が配されず、末端側から土器埋設部にかけて緩く傾斜している。前庭部は末広がりに開き、南東壁に接するが、末端では床面と同じ高さになっている。床面からの掘り込みは6cmを測り、末端から石組部へ緩く傾斜している。両側壁には10cm大と25cm大の亜角礫を1個毎、対向する形で立て付けている。炉の断ち割りから埋土は5層に細別でき、自然的堆積を呈する。燃焼による焼土化は土器埋設部で若干認められる他は、全く看取できない。

遺物は埋土1層から多量の縄文土器片が出土した（第47図529～564）。I群・IV群～VII群・X群土器に比定され、なかでも群に比定される土器片が主体を占める。石器は3点出土しており、埋土1層中から石匙（第47図S47）、北西側床面から不定形石器（同図S48）、炉の前庭部底面から磨石（同図S49）が出土した。第46図528は炉の埋設土器で、口縁部が部分的に欠けている。口縁部が緩く内湾する鉢形土器で、口縁は楕円形に歪んでいる。地文にLR単節縄文を縦位回転に施文しているが、口縁下1cm～0.5cmの部分は磨り消されて無文になっている。口径19.6cm～22.0cm、底径8.1cm、器高19.8cmを測る。胎土は1mm大の砂粒を若干含み、焼成は良好である。

#### S187（第48図、図版12）

台地の南東側縁辺部にあたるNJ・OA43・44グリッドに位置し、地山上面で検出した。開

田による攪乱が地山上面まで及んでいたため、検出面は床面に相当するが、壁溝と認められる褐色土の落ち込みを検出したことから、おおよそそのプランを推定できた。また、南東側の大部分はS I 01により破壊されているが、S I 01の床面で柱穴3本と炉の一部を検出したため、壁溝と合わせて住居跡と判断した。なお、S I 01の床面との比高差は28cmを測り、S I 01が低くなっている。

平面形は径4.1m前後の略円形を呈すると考えられ、壁溝は上面幅15cm、底面幅10cm、深さ13cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は緩い起伏がある。現存する床面はほぼ平坦であるが、西側から東側へ緩く傾斜している。北西側壁溝寄りでSK33・34を検出したが、本遺構より新しい土坑と考えられる。

柱穴はP1～6の6本を検出した。P2・3・5はS I 01の床面で検出したものである。検出面からの深さは順に66cm、27cm、18cm、45cm、16cm、52cmを測るが、S I 01との比高差を換算すると本遺構の床面から深さは44cm～66cm内におさまる。P1～4が主柱穴と考えられ、P1・2間の中点とP3・4間の中点を結ぶ線が中軸線で、N-33°-Eを向く。これはS I 01の床面で検出した炉の長軸方向とほぼ一致し、炉は中軸線上に位置する。また、P3・4を結ぶ線は炉の石組部と想定される部分を通過する。

炉は北東半部北東寄りのS I 01床面で検出した。土器埋設部の下部と石組部の底面に想定される一部が現存していただけで全容は不明である。長軸方向はN-32°-Eを向き、現存長93cm、幅78cmを測る。土器埋設部はほぼ中央に深鉢形土器を拵えている。埋設土器の遺存状況は劣悪で、底部から南東側胴部にかけて攪乱を受けていた。石組部は底部に敷き詰められていたと想定される10cm大の板状礫5枚を検出した。長軸方向に直交する直線状を呈し、S I 01の床面になかばくい込んでいる。前庭部はその痕跡が全く認められず不明である。炉の断ち割りから埋土は7層に細別できる。4～6層が燃焼による焼土化であるが、最下層の7層までは達していない。また、焼土化は土器埋設部のみに看取でき、石組部では認められない。炉の上部構造は全く不明であるが、S I 01床面との比高差が28cmあることを考慮すれば、少なくとも石組部は深さ30cm前後の深い掘り込みをもち、埋設土器の器高は約50cmを測ることが推測される。遺物は埋設土器(第48図565)以外に、柱穴P1の埋土中から磨石(第48図S50)が出土した。565は底径9.0cm測る深鉢形土器で、LR単節縄文が縦位回転に施文される。底部付近は加熱による剝離痕が著しく脆弱である。

## 2 竪穴状遺構

SK107(第49・50図、図版13・18)

調査区西端台地上、川袋川崖際のOE・OF46グリッドに位置し、地山上面で検出した。西側は崩落が著しく、北側は調査区外にかかっているため全容は不明である。現存する規模は南

北2.5m、東西2.2m、深さ40cmを測り、平面形は楕円形を呈すると考えられる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁際から緩傾斜しながら床面へ移行する。床面は緩い起伏があり、西側へ若干傾斜している。埋土は3層に細別で、自然的堆積状況を呈するが、遺物を多く含む2・3層は人為的に埋め戻された可能性がある。また、調査区外との境界で観察した土層堆積から、本遺構は少なくとも漸移層上面から掘り込まれていることが窺える。

遺物は2・3層から比較的多くの縄文土器片、石器(石匙・石皿・磨石等-第50図S51-55)が出土したが、ある程度図上復元できた縄文土器は第49図566・567である。胴部下半に膨らみをもつ深鉢形土器で、胴部上半にはアルファベット状文が配置され、胴部下半の波状沈線により文様帯が区画される。各単位文内と胴部下半には縄文が施され、566はR L R複節縄文、567はR L単節縄文である。566の無文部の器厚は全体的に厚みがある。その他、II群・IV-Ⅶ群・XI群に比定される土器片が出土している(第49・50図568-610)。

### 3 炉跡

#### SN05 (第51図、図版13)

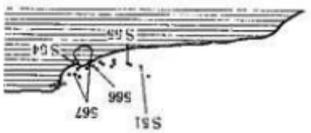
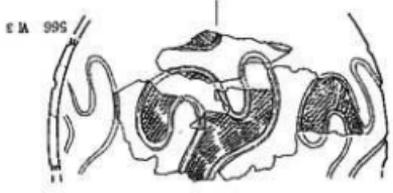
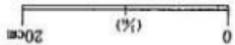
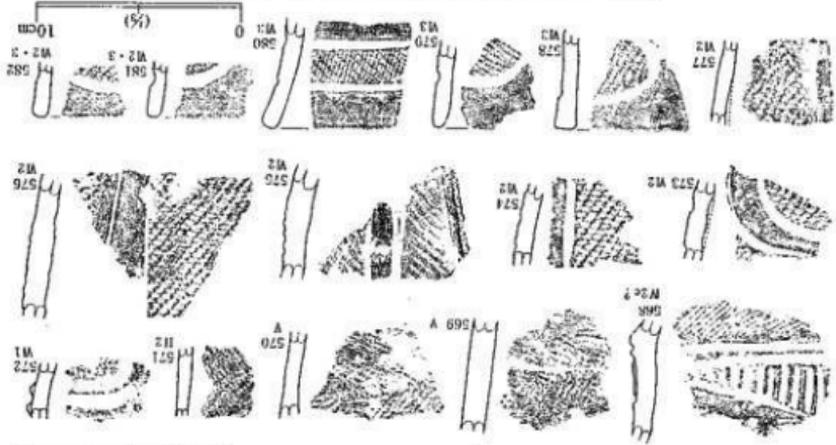
OC42・43グリッドに位置し、SK47の南東側に隣接する土器埋設炉である。地山上面で検出した。掘り方平面形は長軸44cm、短軸38cmの楕円形を呈し、深さ15cmを測る。壁は外傾し、底面は緩い起伏がある。本遺構は地山下の礫層を掘り込んで構築されているため、壁・底面の一部は礫面になっている。埋設土器は中央やや北西寄りに設けられている。第51図611の底部を中心に据え、外周縁辺部に611の口縁部破片と同図612・615-618の5個体の土器片を3重に巡らしている。土器内の埋土は炭化物・焼土を少量混入する暗褐色土で、掘り方埋土は地山粒を多く混入する褐色土である。埋設土器の周辺は鈍く赤変し、土器片自体も二次焼成を著しくうけている。

遺物は埋設土器以外には出土していない。611は口縁部に横位の渦文、胴部に逆「U」字状懸垂文が施文される。縄文はL R単節縄文が縦位回転施文され、各単位文様間にはナデ調整が施されている。612・615・616は同一個体でL R・R Lの二種類の単節縄文が用いられている。617は口縁部破片で隆線・沈線による渦文が施文され、丁寧にナデ調整されている。618は底部破片でR L単節縄文の縦位回転施文である。底面には網代状の圧痕がある。

#### SN20 (第51図、図版13)

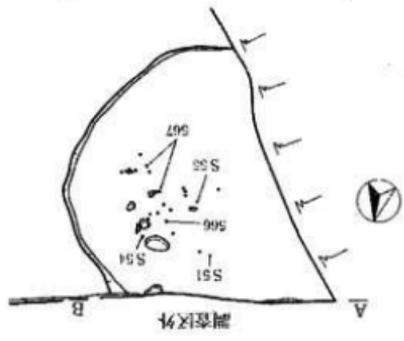
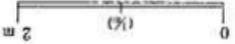
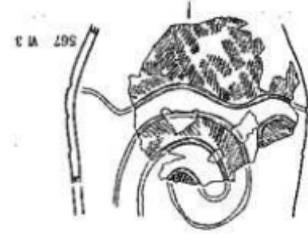
OD43グリッドに位置し、地山上面で検出した前庭部をもたない複式炉である。土器埋設部と石組部から構成され、長軸方向はほぼ東西を向く。全長65cm、最大幅40cmを測り、土器埋設部から石組部への順に構築されている。土器埋設部の構造は、地山を径30cmの円形に掘り込み、ほぼ中央部に底部と胴部上半を欠いた深鉢形土器を正位に据え置いて地山土を充填している。

第49図 SKI07型穴状遺構・遺物出状況・出土遺物(1)

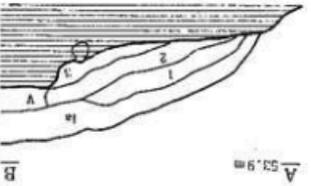


△ 53.9m

B

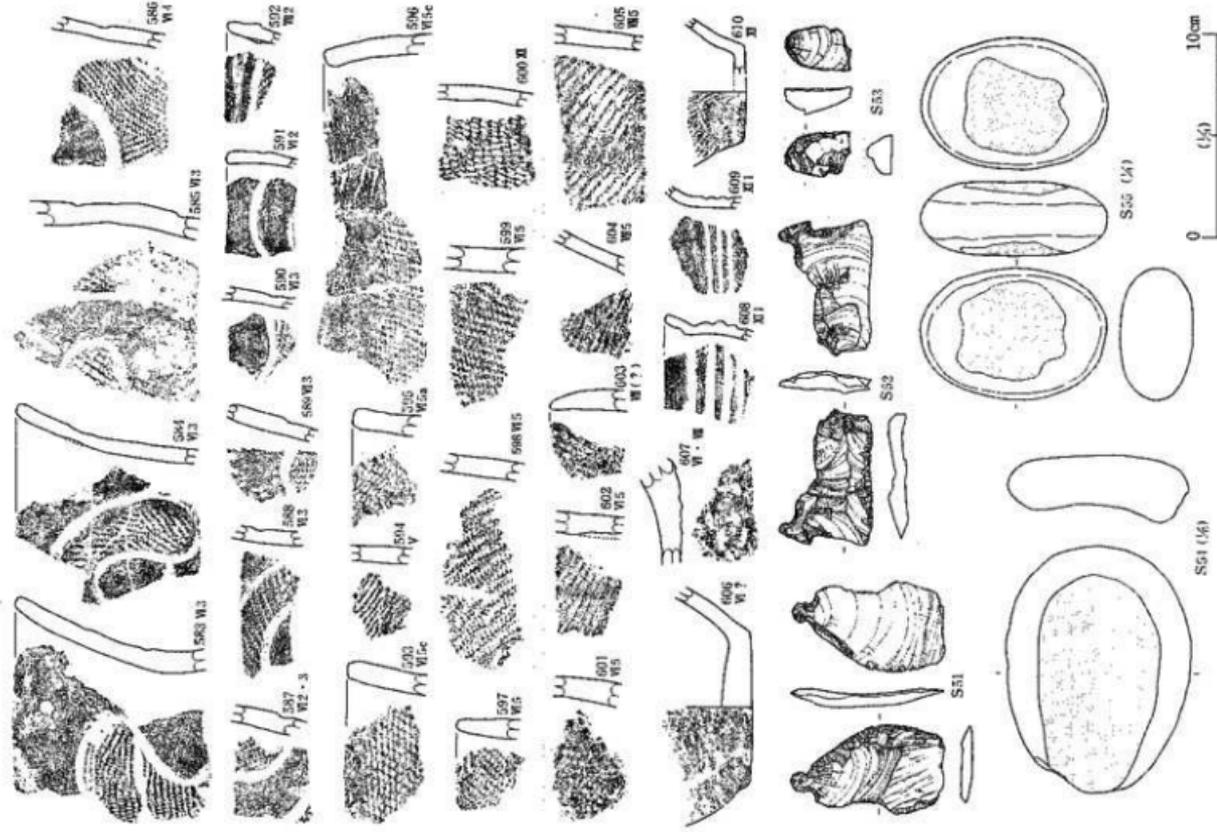


- 1 暗褐色 (7.5YR 3/2)
- 2 褐色 (7.5YR 4/2) 炭化物・地1粒微量混入
- 3 褐色 (7.5YR 5/2) 炭化物微量混入

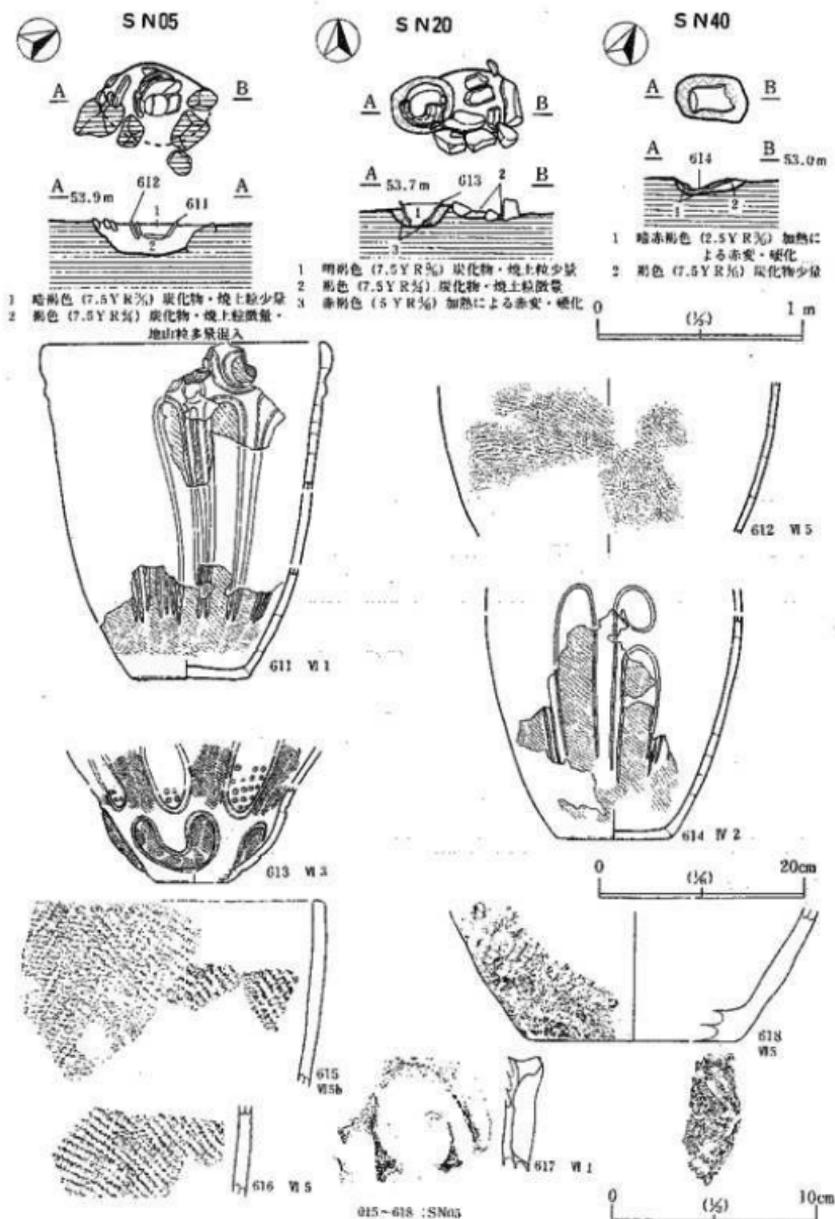


B

第48図 調査の記録



第50圖 S K I 07出土遺物(2)



第51図 SN05・20・40炉跡・出土遺物

埋設土器の遺存状況は悪く、北側半分はすでに崩壊している。石組部も同様であるため全容は不明であるが、径40cm程の方形状に石組されていたと考えられる。掘り込みは5cmと非常に浅く、両側壁には15cm大の板状亜角礫をやや斜めに立て据え、底面には8cm～18cm大の亜角礫が配されている。石組部末端には長さ25cmの棒状亜角礫を据え置いている。埋土は3層に細別でき、2層は石組部底面の隙間を埋めた充填土である。埋設土器の周辺は加熱による赤変・硬化が著しいものの、石組部は熱を受けた痕跡があまり残らない。

出土遺物は第51図613の埋設土器のみである。613は胴部下半に緩い括れをもち、胴部上半から口縁部にかけて膨らむ深鉢形土器と考えられる。胴部上半には刺突を充填した楕円文が8単位、同下半にはLR単節縄文を充填した「C」字状文が4単位施文されている。楕円文は「C」字状文の解放部と「C」字状文間に配置される。また、楕円文間にはLR単節縄文が縦位回転施文され、器面は丁寧にナデ調整されている。

#### SN40 (第51図、図版13)

OA46グリッドに位置し、SI03の床面南側で検出した。平面形は長軸34cm、短軸22cmの楕円形で、深さ7cmを測る掘り込みをもつ。埋土は2層に細別できるが、焼土の堆積は最厚部で5cmを測り、掘り込み底面には達していない。SN05に類似する埋土の堆積状況と思われる。埋土上面では、胴部上半から底部にかけて遺存する縄文土器が横倒した状況で出土している。本遺構は検出時にSI03に伴う焼土遺構と想定したが、埋土と土器の遺存・出土状況からSI03の構築時に本遺構の上部が破壊されたと考えられる。SN05の埋土状況に類似することを考慮すれば、本遺構の構造は土器埋設炉の可能性がある。

出土遺物は第51図614のみである。614は逆「U」字状懸垂文、蕨手状懸垂文が施文されると思われる。縄文はLR単節斜縄文が縦位回転施文され、各単位文様間は部分的に磨り消されている。

## 4 土坑

#### SN08 (第52・55図、図版14・18)

OB47グリッドに位置し、漸移層上面で検出した。平面形は径42cm～47cmの略円形で、深さ22cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は径42cmの円形で平坦である。埋土は3層に細別でき、東側で若干擾乱をうけているが、堆積状況から人為的堆積と考えられる。遺物は3層から縄文土器片が4点出土した。第55図619は深鉢形土器の大形破片で、口縁部から胴上部にかけて燃糸文(L撻)が施されている。

#### SK13 (第52・55図、図版14・18)

OB44グリッドに位置し、地山上面で検出した。平面形は長軸122cm、短軸70cmの隅丸方形で、

深さ13cm～16cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。本遺構は地山下の礫層を掘り込んで構築されているため、南東側底面・壁は礫面になっている。埋土は褐色土の単一層で、焼土・炭化物を少量混入している。遺物は埋土中から縄文土器片が6点出土した。第55図620は検出面から埋土中位にかけて押し潰された状態で出土した無文の深鉢形土器である。

**SK23 (第52図)**

OC44グリッドに位置し、地山上面で検出した。平面形は径50cm～60cmの略円形で、深さ18cm～26cmを測る。壁は緩く外傾し、底面は平坦である。SK13と同様に礫層に掘り込んでいるため、北東側底面・壁は礫面になっている。埋土は2層に細別できるが、堆積状況から人為的に埋められたと考えられる。遺物は出土しなかった。

**SK26 (第52・55図)**

調査区西端の川袋川崖際、OE44グリッドに位置し、地山上面で検出した。平面形は径64cm～72cmの不整形円で、深さ20cm～24cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦であるが、南東側で一段高くなっている。南西壁部に径18cm、深さ15cmの落ち込みがあるが、本遺構より新しいピットである。埋土は褐色土の単一層で、3cm～18cm大の歪角礫・円礫が多数混入していた。遺物は埋土から縄文土器片が7点出土した。第55図623は先端が鋭利な笥状工具による沈線文が施され、同図624は変形工字文が施されている鉢形土器の胴部破片である。

**SK27 (第52・55図)**

NI・NJ47グリッドに位置し、地山上面で検出した。本遺構はフラスコ状土坑で、平面形は径53cmの円形を呈し、括れ部は径43cmを測る。底面は径77cm～84cmの略円形で、ほぼ平坦である。深さは52cmで、壁面は緩い起伏をもつ。埋土は6層に細別でき、自然堆積と考えられる。遺物は3層から4点の縄文土器片が出土した(第55図627・628)。

**SK28 (第52・55図)**

OD44グリッドに位置し、地山上面で検出した。本遺構は地山下の礫層を掘り込んで構築された土坑である。平面形は長軸110cm、短軸88cmの楕円形で、深さ10cm～25cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面とも礫面になっている。埋土は検出時の状況から少なくとも2層に細別でき、焼土・炭化物を少量混入する自然的堆積と考えられる。遺物は埋土から縄文土器片4点が出土し、全て地文を縄文とする小破片である(第55図629・630)。

**SK29 (第52・55・57図、図版18・32)**

SK28の西側に近接するOD・OE44グリッドに位置し、地山上面で検出した。SK28と同様に礫層を掘り込んで構築された土坑である。平面形は長軸105cm、短軸72cmの楕円形で、深さ32cm～40cmを測る。壁は外傾し、底面は径50cmの円形で、壁面とも礫面になっている。埋土は褐色土に暗褐色土が混入する単一層で、自然的堆積と考えられる。遺物は埋土から磨石1点(第

57図S57)と縄文土器片が多数出土した(第55図631~643)。第55図621の文様は逆「U」字状懸垂区画文による8単位の縦位分割から構成され、各単位内には楕円文・二重楕円文・逆「U」字状懸垂文が配置されている。縄文は充填手法によるRLR複節斜縄文が縦位回転施文されている。

#### SK30 (第52・56・57図)

SI14の西壁際に位置し、SI14の精査中に検出したが、埋土の堆積状況から本遺構がSI14より新しいと判断した。北側半分が調査区外にかかっているため全容は不明であるが、フラスコ状を呈する土坑と考えられる。平面形は推定径58cmの円形で、括れ部は推定径43cmを測る。底面は推定径67cmの円形で平坦である。深さは65cmで、壁面は起伏に富んでいる。埋土は10層に細別でき、褐色土を主体とする人為的堆積と考えられる。また、埋土の観察から少なくとも基本層序のIII層中から本遺構が構築されたことが窺える。

遺物は埋土から石錐1点(第57図S56)と縄文土器片が多数出土した(第56図644~648)。644~646は同一個体で、逆「U」字状懸垂区画文により縦位分割された文様構成をとる深鉢形土器と考えられる。区画内には楕円文・逆「U」字状懸垂文が配置され、RL単節斜縄文が縦位回転により施文されている。

#### SK31 (第53図)

OA46グリッドに位置し、SI03の床面で検出した。本遺構の東側底面で、SI03の柱穴(P1)を検出したが、埋土の堆積状況から柱穴の掘り方とは考えられず、本遺構がSI03より新しい土坑と判断した。平面形は径83cm~105cmの不整形で、深さ8cm~13cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は緩い起伏がある。埋土は暗褐色土の単一層で、炭化物・焼土・地山粒を少量混入している。遺物は出土しなかった。

#### SK33 (第53・56図)

OA44グリッドに位置し、SI37の床面で検出した。東側がSI01に切られているため全容は不明であるが、長軸80cm、推定短軸40cmの楕円形を呈すると考えられる。深さ9cm~14cmを測り、壁は緩く外傾する。底面は平坦である。埋土は褐色土の単一層で良く締まっている。遺物は埋土から縄文土器片6点が出土した。第56図649は赤色塗彩の橋状把手で、丁寧に研磨されている。同図650はLR単節斜縄文を地文とし、隆線に縁取られた文様が施されると考えられる。出土土器の分類から本遺構はSI01より古く、SI37より新しいと判断した。

#### SK34 (第53図)

SK33の北東側に隣接し、SI37の床面で検出した。SK33と同様、SI01に切られているため全容は不明であるが、長軸61cm、推定短軸45cmの楕円形を呈すると考えられる。深さは11cm~14cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦であるが、中央部に向かって若干傾

斜している。埋土は3層に細別できるが、かなり攪乱を受けている。遺物は出土しなかったが、検出状況からSK33に近い時期に比定されよう。

**SK35 (第53・55～57図、図版18)**

OA44・45グリッドに位置し、地山上面で検出した。平面形は長軸59cm、短軸43cmの楕円形で、深さ10cm～15cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は緩い起伏をもちながら北側から南側へ若干傾斜している。埋土は2層に細別でき、2層上面から同一個体の縄文土器片が一括出土している。第55図622がその資料で、口縁部が内弯し、胴上部に緩い括れをもつ深鉢形土器である。口縁部に幅2cm程の無文帯が巡り、胴部にLR単節斜縄文が縦位回転施文されている。遺物は他に1層中から縄文土器の小破片が3点(第56図651～653)、磨石1点(第57図S59)が出土した。

**SK36 (第53・56図)**

NH45グリッドに位置し、地山上面で検出した。平面形は長軸60cm、短軸47cmの楕円形で、深さ8cm～16cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は緩い起伏をもちながら北西側から南東側へ若干傾斜している。埋土は褐色土の単一層であるが、検出面に炭化物ブロック、埋土中には亜角礫が混入している。遺物は埋土中から縄文土器片5点(第56図654・655)が出土した。

**SK38 (第53・56図)**

SI15の南西側、NC48グリッドに位置し、地山上面で検出した。平面形は長軸100cm、短軸81cmの楕円形で、深さ17cm～20cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は緩い起伏がある。埋土は2層に細別でき、亜角礫を少量混入する自然堆積と考えられる。遺物は1層から縄文土器片1点のみ出土した。第56図656がその土器片で、RL単節縄文が斜位・縦位回転施文された深鉢形土器の胴部破片と思われる。

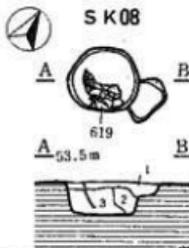
**SK39 (第53図)**

OB44グリッドに位置し、地山上面で検出した。東側が開田により壊されているため全容は不明であるが、径90cmの略円形を呈すると考えられる。深さは7cmと浅いが、底面南側に径44cm～57cm、深さ30cmを測る円形の落ち込みが穿たれている。壁は緩く外傾し、底面はほぼ平坦である。埋土は3層に細別でき、自然的堆積と考えられる。遺物は出土しなかった。

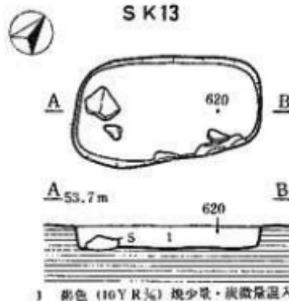
**SK41 (第53図)**

NI45グリッドに位置し、地山上面で検出した。平面形は径43cm～50cmの略円形で、深さ23cmを測る。壁は外傾し、底面は径24cmの円形で緩い起伏がある。埋土は褐色土の単一層で、炭化物を少量混入している。遺物は図示できなかったが、縄文土器小破片2点(第56図651・652)が出土しており、無文の胴部破片と0段多条RL縄文が施された胴部破片である。VI群土器に比定されよう。

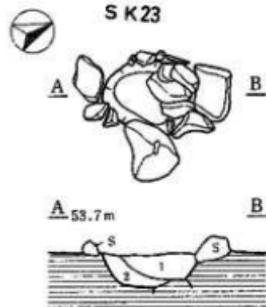
第1節 検出遺構と出土遺物



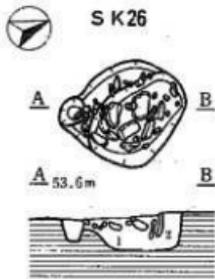
- 1 暗褐色 (10Y R%) 炭化物少量混入
- 2 褐色 (10Y R%) 炭化物少量混入
- 3 暗褐色 (10Y R%) 炭・地多量混入



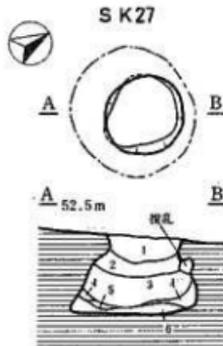
- 1 褐色 (10Y R%) 炭少量・炭微量混入



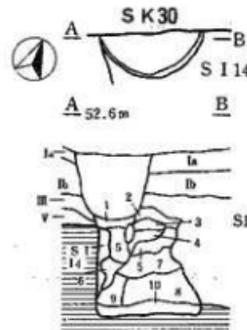
- 1 褐色 (10Y R%) 炭少量・黒色粒多量
- 2 黄褐色 (10Y R%) 炭化物微量混入



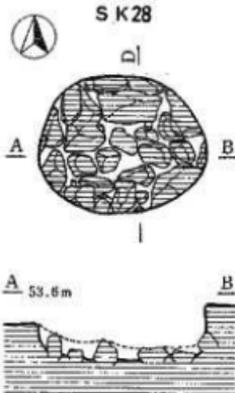
- 1 褐色 (10Y R%) 炭・地少量混入
- 2 暗褐色 (10Y R%) 炭・地少量混入



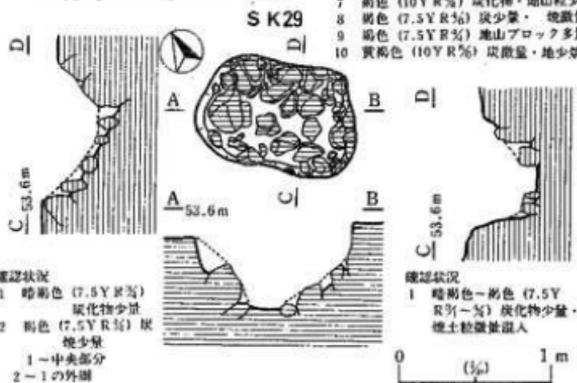
- 1 暗褐色 (10Y R%) 炭少量・地微量
- 2 褐色 (10Y R%) 炭・地少量混入
- 3 暗褐色 (10Y R%) 地山ブロック少量
- 4 黄褐色 (10Y R%) 炭化物微量混入
- 5 褐色 (10Y R%)
- 6 黄褐色 (10Y R%) 炭化物少量混入



- 1 褐色 (10Y R%) 炭化物微量
- 2 褐色 (10Y R%) 炭化物・地山粒微量
- 3 褐色 (10Y R%) 炭化物・小磁器量
- 4 褐色 (7.5Y R%) 炭化物少量
- 5 褐色 (10Y R%) 炭化物少量
- 6 褐色 (7.5Y R%) 炭化物・地山粒少量
- 7 褐色 (10Y R%) 炭化物・地山粒少量
- 8 褐色 (7.5Y R%) 炭少量・地微量
- 9 褐色 (7.5Y R%) 地山ブロック多量
- 10 黄褐色 (10Y R%) 炭微量・地少量



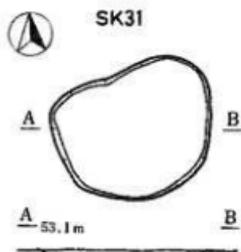
- 確認状況
- 1 暗褐色 (7.5Y R%) 炭化物少量
  - 2 褐色 (7.5Y R%) 炭 地少量
- 1 - 中央部分  
2 - 1の外側



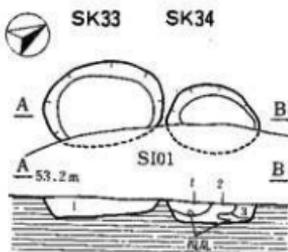
- 確認状況
- 1 暗褐色-褐色 (7.5Y R%) 炭化物少量・地山粒微量混入
- 0 (1/2) 1 m

第52図 S K08・13・23・26~30土坑

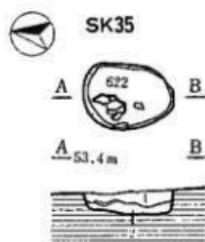
第4章 調査の記録



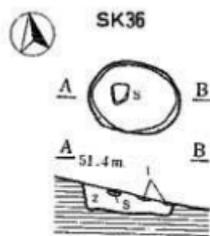
- 1 暗褐色 (10Y R 5) 炭化物・地山較少量・硬土粒微量混入



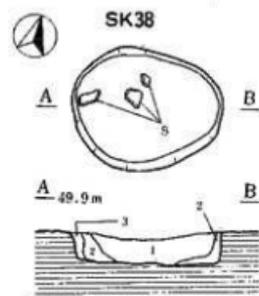
- S K 33  
1 褐色 (7.5Y R 5) 炭化物少量混入  
S K 34  
1 褐色 (7.5Y R 5)  
2 黄褐色 (10Y R 5) 炭化物微量混入  
3 褐色 (10Y R 5) 炭・殻少量混入



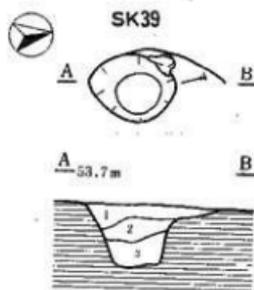
- 1 褐色 (7.5Y R 5) 炭化物少量混入  
2 褐色 (10Y R 5) 炭微量・地少量



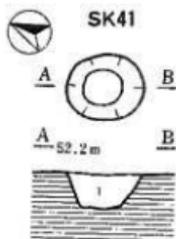
- 1 褐色 (10Y R 5) 炭化物多量混入  
2 褐色 (7.5Y R 5) 炭化物微量混入



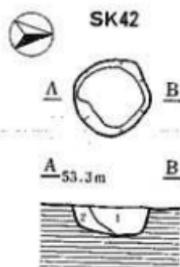
- 1 暗褐色 (10Y R 5) 炭・地微量混入  
2 褐色 (10Y R 5) 暗褐色粒少量混入  
3 暗褐色 (10Y R 5) 地山較少量混入



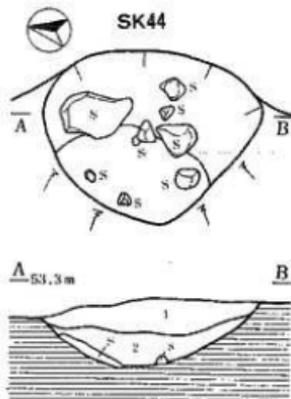
- 1 暗褐色 (7.5Y R 5) 炭化物微量混入  
2 褐色 (7.5Y R 5) 炭化物少量混入  
3 褐色 (7.5Y R 5) 炭化物少量混入



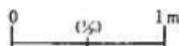
- S K 41  
1 褐色 (7.5Y R 5) 炭化物少量混入



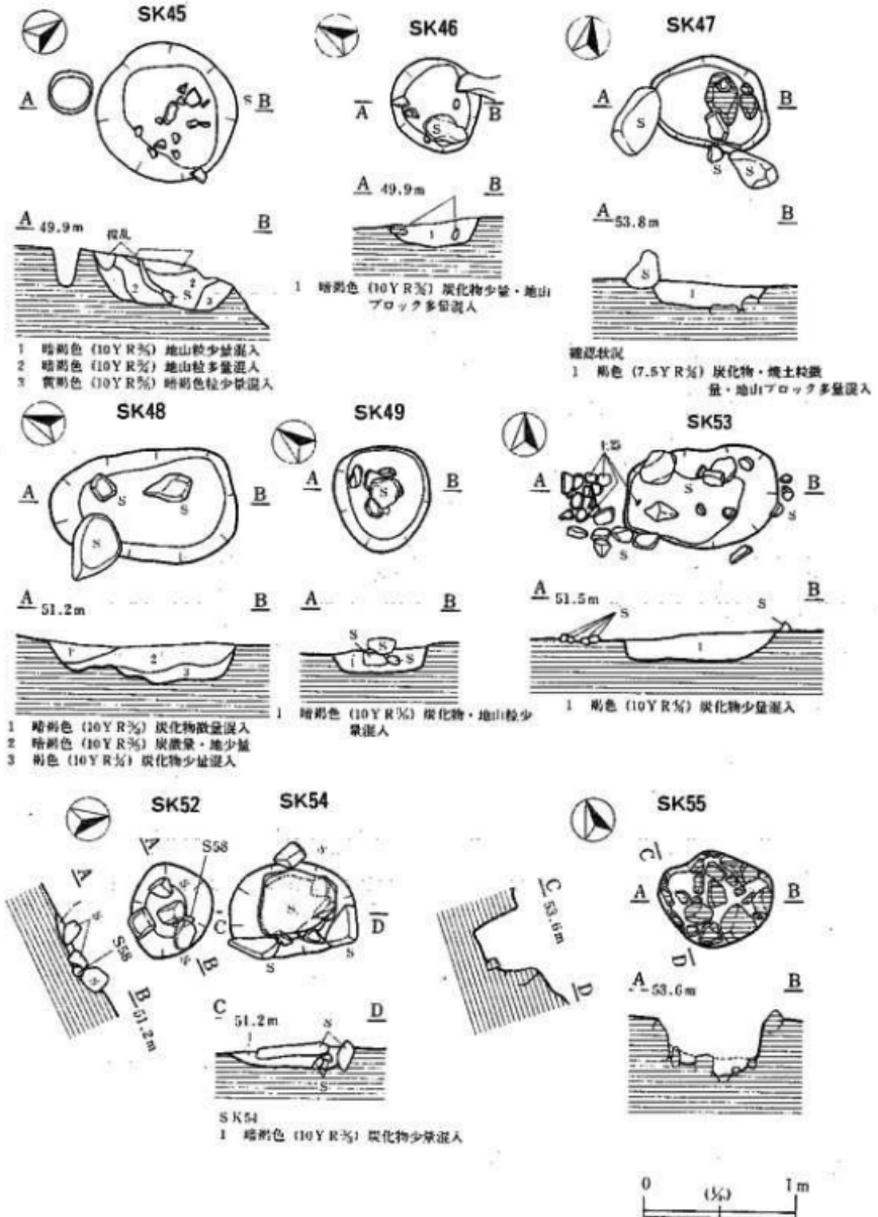
- S K 42  
1 褐色 (7.5Y R 5) 炭化物微量混入  
2 褐色 (10Y R 5) 地山ブロック多量混入



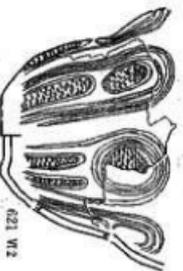
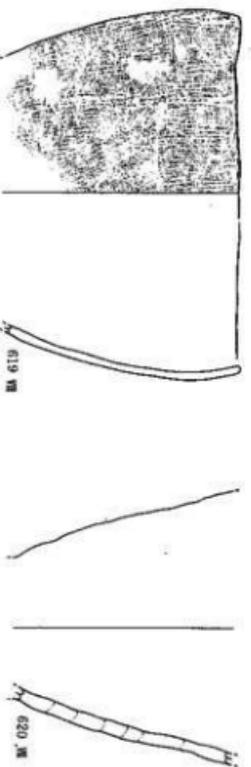
- S K 44  
1 褐色 (7.5Y R 5) 炭化物微量混入  
2 褐色 (7.5Y R 5) 地山ブロック多量混入



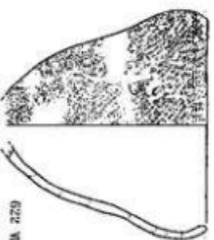
第53図 SK31・33~36・38・39・41・42・44土坑



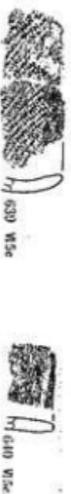
第54図 SK45~49・52~55土坑



619: SK26  
620: SK15  
621: SK25  
622: SK25



0  
1/50  
10cm

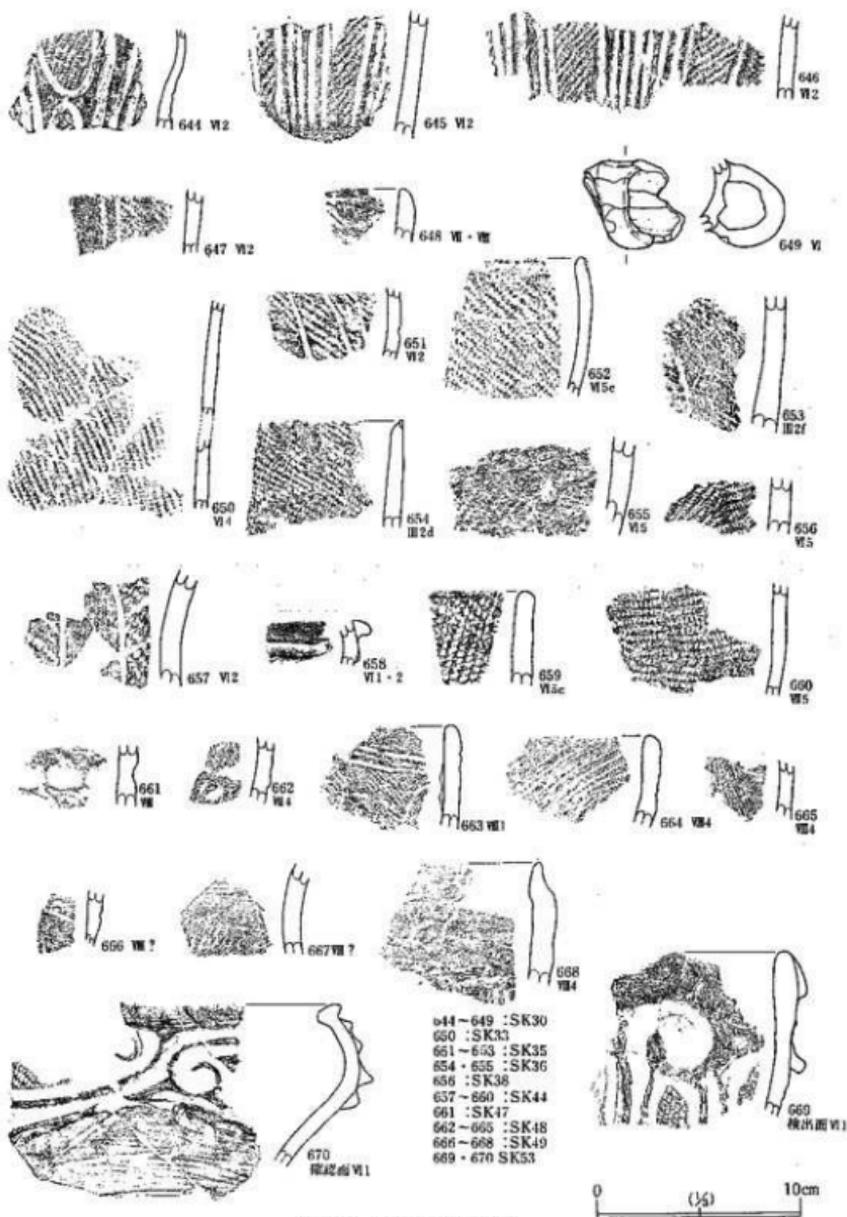


623-626: SK26  
627-628: SK27  
629-630: SK28  
631-643: SK29



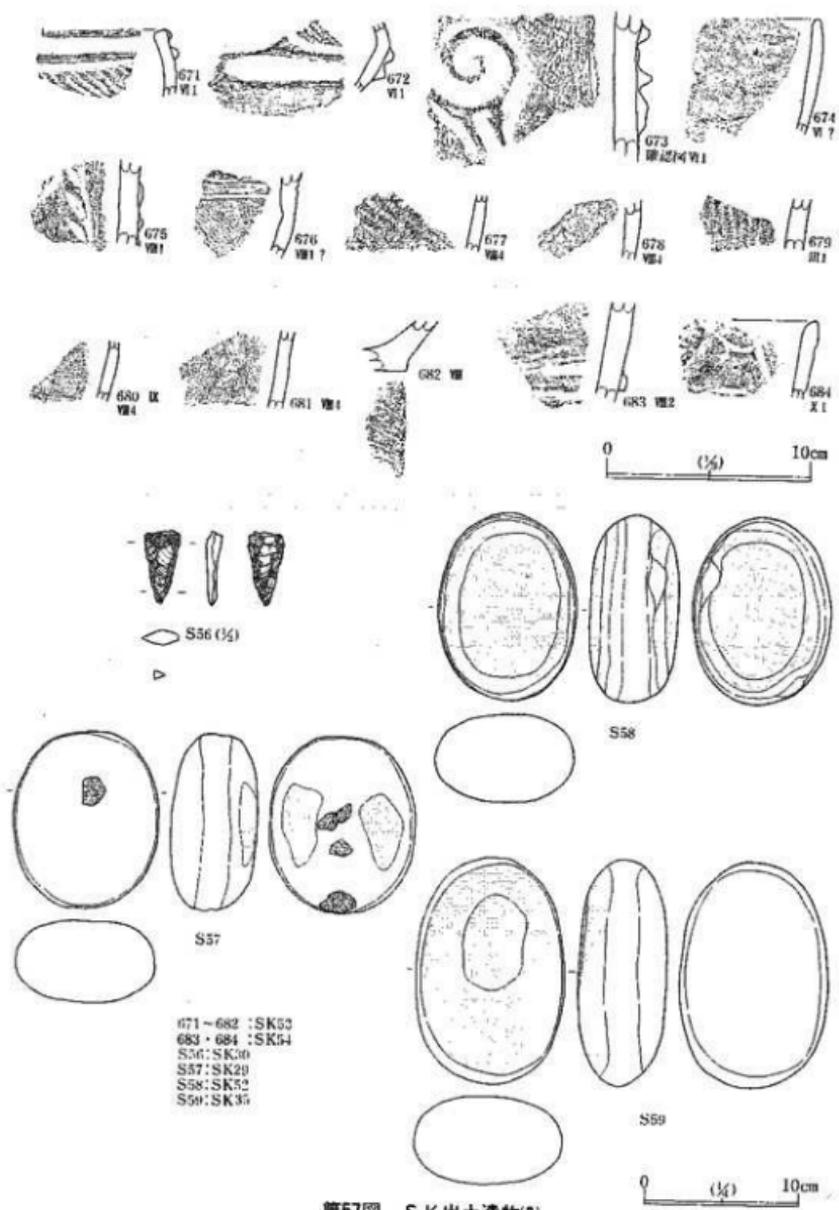
0  
1/50  
10cm

第55図 SK出土遺物(1)



第56図 SK出土遺物(2)

第4章 調査の記録



第57図 SK出土遺物(3)

## SK42 (第53図)

OA44グリッドに位置し、地山上面で検出した。平面形は径50cmの円形で、深さ12cm～18cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は緩い起伏をもちながら南側から北側へ傾斜している。埋土は2層に細別でき、自然的堆積と考えられる。遺物は出土しなかった。

## SK44 (第53・56図)

調査区西端の川袋川崖際、OE45グリッドに位置し、SI19の床面で検出した。西側は崩落が著しく、壁・底面の一部は遺存していない。全容は不明であるが、平面形は推定径1.4mの不整形円形を呈すると考えられ、深さ60cmを測る。壁はかなり外傾し、底面は推定径1mの略円形を呈し、緩い起伏がある。埋土は2層に細分でき、2層中には円礫・大形の亜角礫が多数混入している。遺物は2層中から縄文土器片13点が出土した(第56図657～660)。660以外はVI群土器に比定される。659は深鉢形土器の口縁部破片で、原体RLRを異方向に回転施文することにより羽状縄文を構成している。遺物の分類から本遺構はSI19より古い土坑と考えられる。

## SK45 (第54図)

OB・OC48グリッドに位置し、SK38の北東側に近接する。検出面は地山上面である。平面形は径93cmの円形で、深さ30cmを測る。壁は緩く外傾し、底面は径56cm～75cmの不整形円形で緩い起伏がある。埋土は3層に細別でき、攪乱を受けているものの自然的堆積と考えられる。遺物は出土しなかったが、2層中には5cm～15cm大の亜角礫が多数混入していた。

## SK46 (第54図)

OC48グリッドに位置し、SK38の南西側に近接する。検出面は地山上面である。平面形は径59cm～62cmの略円形で、深さ11cm～16cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は起伏をもちながら北西側から南東側へ傾斜している。埋土は暗褐色土の単一層で、5cm～30cm大の亜角礫を少量混入している。遺物は出土しなかった。

## SK47 (54・56図)

OC・OD42・43グリッドに位置し、SN05の北西側に隣接する。検出面は地山上面である。平面形は長軸75cm、短軸60cmの楕円形で、深さ12cm～16cmを測る。壁は緩く外傾し、底面は地山下の礫層に達している。埋土は褐色土の単一層で、焼土・炭化物・地山ブロックを混入している。遺物は埋土中から第56図661の1点のみ出土した。深鉢形土器の胴上部破片で、指頭状圧痕が横位に巡り、LR単節縄文が斜方向に回転施文されている。

## SK48 (第54・56図)

MG・MH69グリッドに位置し、地山上面で検出した。平面形は長軸123cm、短軸74cmの楕円形で、深さ17cm～25cmを測る。壁は南東側でほぼ垂直に、北西側で緩く立ち上がる。底面は緩い起伏をもちながら中央部へ傾斜している。埋土は3層に細別でき、13cm～40cm大の亜角礫を

混入する人為的堆積と考えられる。遺物は1・2層中から縄文土器片9点が出土し、VI群～VIII群土器が混在している(第56図662～665)。

**SK49** (第54・56図、図版14)

MF67グリッドに位置し、地山上面で検出した。平面形は62cm×70cmの略円形で、深さ12cm～15cmを測る。壁は緩く外傾し、底面は平坦である。埋土は暗褐色土の単一層で、炭化物・地山粒を少量混入している。底面から5cm程浮いた中央部には10cm大の亜角礫5点と縄文土器片3点を据え置き、その上面に20cm大の偏平亜角礫を積み重ねた集石が配されている。遺物は集石に使用された縄文土器片3点のみである(第56図666～668)。667は胴上部に緩い括れをもつ器形と思われる。口縁部から胴上部まで丁寧にナデ調整され、胴下部には捺糸文(L捺)が施文されている。668は口縁部破片である。口縁部は無文で、やや粗い横位のナデ調整が施され、口唇直下には指頭圧痕が巡ると思われる。胴部には捺糸文(R捺)が施されている。

**SK52** (第54・57図、図版14)

MH70グリッドに位置し、SK54の南側に隣接する地山上面で検出した。平面形は径51cm～61cmの略円形で、深さ6cm～10cmを測る。壁はかなり緩く立ち上がり、底面はほぼ平坦である。埋土は暗褐色の単一層で、磨石1点(第57図S58)と12cm×20cm大の亜角礫4点が底面から出土したが、散在的狀況が窺われるため底面に配置されたものかは判断できない。遺物は磨石1点だけである。

**SK53** (第54・56・57図、図版14)

MG70グリッドに位置し、地山上面で検出した。平面形は長軸1m、短軸65cmの楕円形で、深さ13cm～18cmを測る。壁は南東側で垂直に立ち上がり、他は緩く外傾する。底面はほぼ平坦で、西側から東側へ若干傾斜している。埋土は褐色土の単一層で、8cm～25cm大の亜角礫や縄文土器片が含まれている。本遺構の西側および東側縁辺部の地山上面で集石を検出した。6cm～18cm大の亜角礫・円礫が敷き並べられた狀況を呈している。西側の集石では、VI群に比定される縄文土器片5点も同様の狀況で出土している。土坑内出土の縄文土器は、VI群に比定されるものを主体とするため、集石は土坑より古い可能性が考えられる。第56・57図669～673が集石に伴う3個体の縄文土器片で、第57図674～682が土坑内出土の縄文土器片である。

**SK54** (第54・57図、図版14)

MH70グリッドに位置し、SK52の北側に隣接する地山上面で検出した。平面形は長軸83cm、短軸61cmの楕円形で、深さ12cm～20cmを測る。壁は南側でかなり緩く、北側で若干外傾しながら立ち上がり、底面は起伏をもちながら南側から北側へ緩く傾斜している。埋土は暗褐色土の単一層で、炭化物を少量混入している。北東部から南東部の壁際には、30cm大の角礫2点が立て据えられ、底面にはそれを支える狀況で10cm～15cm大の亜角礫6点が配されている。また、

底面から8cm程浮いた位置には、40cm～50cm大・幅7cmの角礫が蓄石状に置かれ、一部は底面に配された礫群に接している。遺物は埋土中から縄文土器片2点が出土した。第57図683は隆線による区画文様が描かれる胴部破片で、684は口縁に小突起が付され、沈線文が施される口縁部破片である。

#### SK55 (第54図)

OD44グリッドのSK28・SK29のほぼ中間南寄りに位置し、検出面は地山上面である。平面形は径62cm～74cmの略円形で、深さ30cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、礫層を掘り込んで構築されているため、壁・溝とも礫面になっている。埋土は褐色土の単一層で、炭化物を多量に混入している。遺物は出土しなかった。

### 5 土器埋設遺構

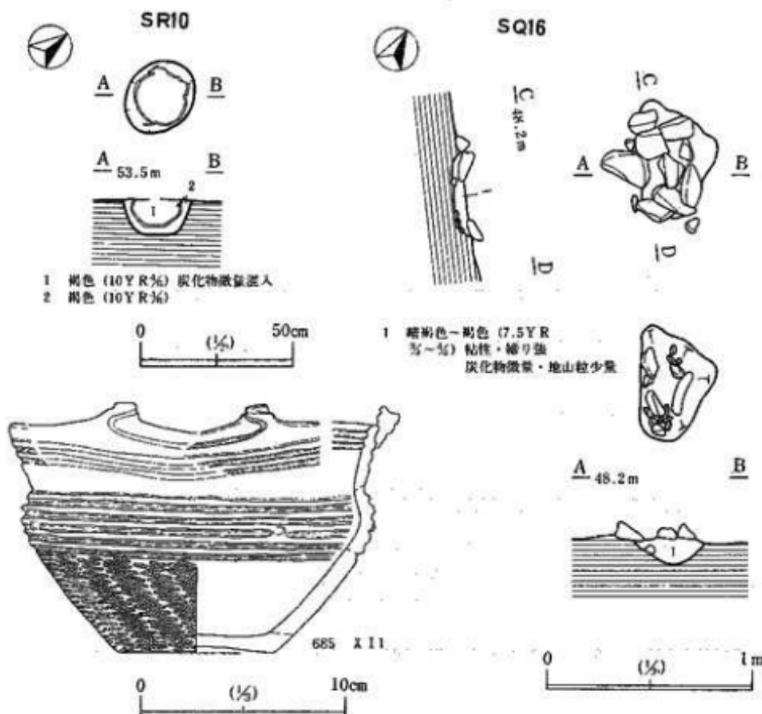
#### SR10 (第58図、図版14)

OE46グリッドに位置し、地山上面で検出した。平面形は径23cm～25cmの略円形で、深さ12cmを測る。埋設土器は底面から1cm～2cm程上面に正位に埋設されている。埋土は掘り方・土器内とも褐色土であるが、後者には炭化物が混入している。第58図685が埋設土器で、口径18.2cm、底径7.6cm、器高11.3cmの鉢形土器である。体部上半が内湾し、口縁部が直線的に外傾する器形を呈し、口縁には対向する二頂一対の突起が一つ設けられる。体部上半には5条の平行沈線が施され、粘土粒を貼付することにより4単位の工字文を作出している。口縁部には3条、内面には2条の平行沈線が巡り、さらに、内外面を巡る1条の沈線は突起の内側面を經由している。体部下半にはLR単節縄文が斜位回転施文される。内外面とも横位のナデ調整が施されている。

### 6 集石

#### SQ16 (第58図)

調査区西側にあたる南西から北東に伸びる埋設谷の東端、MJ50グリッドに位置し、検出された全ての遺構のなかで、最も標高が低い。検出面は地山上面で、集石下には不整形の落ち込みがある。集石の形態は径45cm～55cmの略円形を呈し、5cm～25cm大の歪角礫が用いられているが、積み重ねた状況は窺えない。集石下の落ち込みは、径40cm～50cmの不整形で、深さ5cm～22cmを測る。壁は緩く立ち上がり、底面は起伏が著しい。壁・底面の一部は地山下の礫層が露出している。埋土は褐色土に暗褐色土粒が混入する単一層で、遺物の出土はなかった。



第58図 SR10土器埋設遺構・SQ16集石

## 第2節 遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物には、縄文時代及び弥生時代の土器・石器・土製品・石製品と須恵器・古銭などがあり、コンテナにして78箱程である。縄文時代および弥生時代の遺物が圧倒的に多く、それ以降の遺物は少量である。

### 1 縄文時代および弥生時代の土器

出土した遺物の中で最も量が多く、コンテナで43箱程ある。施された文様・胎土・焼成などの特徴により、時期を考慮してI～XI群に群別した。各群の土器の出土層位は一様ではないが、大略X・XI群がII・III層中、VI～X群がII～IV層中、I～V群がIV・V層中から出土している。以下では分類基準と若干の特徴について略述する。また、第1節の遺構内出土土器についても以下の分類によっている。なお、底部に残る網代痕・木葉痕については第84図に示した。

## 第I群土器 (第59図686~695)

縄文時代早期中葉に位置付けられる土器を本群とした。貝殻沈線文を特徴とする土器群であり、器面には貝殻条痕も観察される。胎土は緻密で焼成良好な破片が多い。施される文様により1~3類に細分した。

1類 (686~690・698・670~672) 条痕の上に、貝殻文の施される類である。口縁部に矢羽根状に施文されるものと、曲線的な文様を描くもの(698・670~672)がある。

2類 (694~696・673~685) 条痕の上に、沈線の施される類である。682・683・685の器面には条痕は認められないが、沈線の状態からここに含めた。

3類 (691~693・697・686~695) 条痕だけの土器である。

## 第II群土器 (第60図696~723)

早期後葉に位置付けられる土器を本群とした。器の内外両面に縄文が施される、いわゆる表裏縄文の土器である。胎土中には少量の細砂粒を含むが、焼成は良好であり、器厚も薄い。文様の有無により2類に分けられる。

1類 (696~717) 数本の細隆線で直線的な文様を描くものである。なお、696~698は702~717と同一個体である。

2類 (718~723) 器面の表裏に縄文を施すが、他に文様は認められないものである。

## 第III群土器 (第61図724~第63図827)

前期中葉に位置付けられる土器群である。胎土に繊維を含む土器で、焼成は良好である。胎土中の繊維の量によって2類に分けたが、さらに文様などの特徴によって細分される。

1類 胎土中に多量の繊維を含み、器面でもその混入が明瞭に分かる土器である。文様の有無、施される縄文、器厚から2類に分かれる。

a (724~754・758・759) 器厚は厚く、内面に粗い調整痕を明瞭に止め、施される縄文も節の大きいものが多い。斜行縄文が多いが、羽状縄文のものもある。

b (755~757) 器厚は薄く、沈線による文様の施されるもので、755の口縁部は2類にもみられる内そぎ状を呈する。

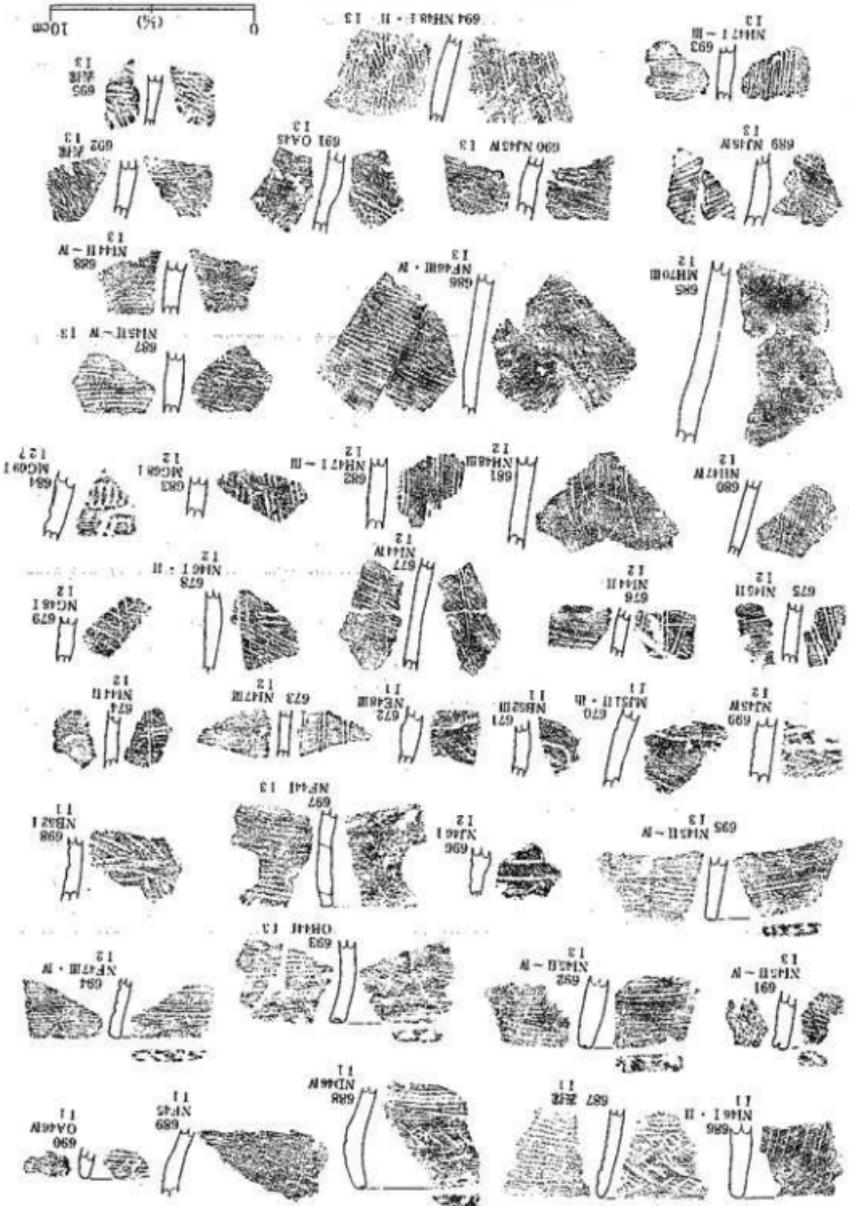
2類 胎土中に少量の繊維と砂粒を含み、軽い土器であるが、器面観察では繊維は明瞭でない。また口縁部が内そぎ状を呈するものが多く、口唇部を刻み込むものもある。施される縄文にはア~カの6種類のものがある。

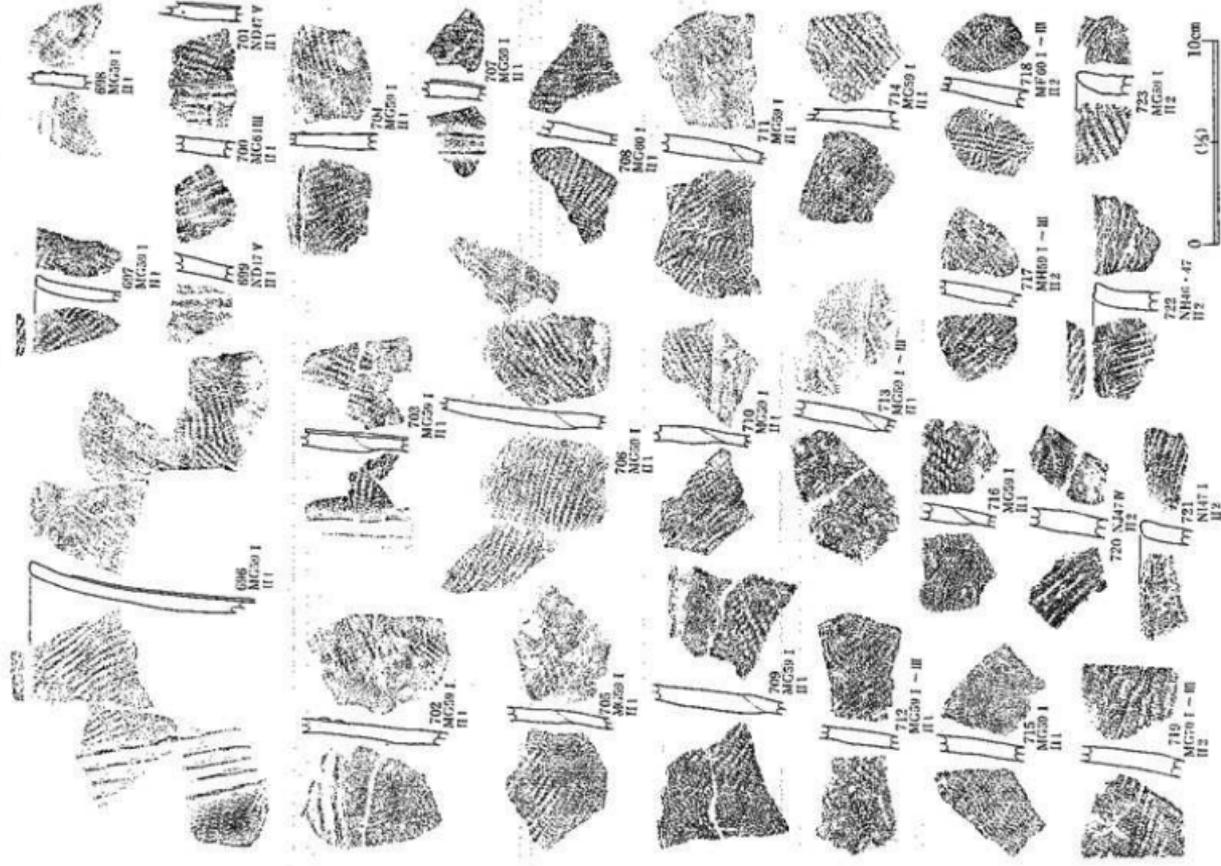
ア (760~765・779~788) 結束第1種羽状縄文の施される土器である。原体が短く結束部が強調されたものもある。760・761は同一個体で、口縁部に爪形文が施されている。

イ (767・789~794) ループ文の施された土器である。

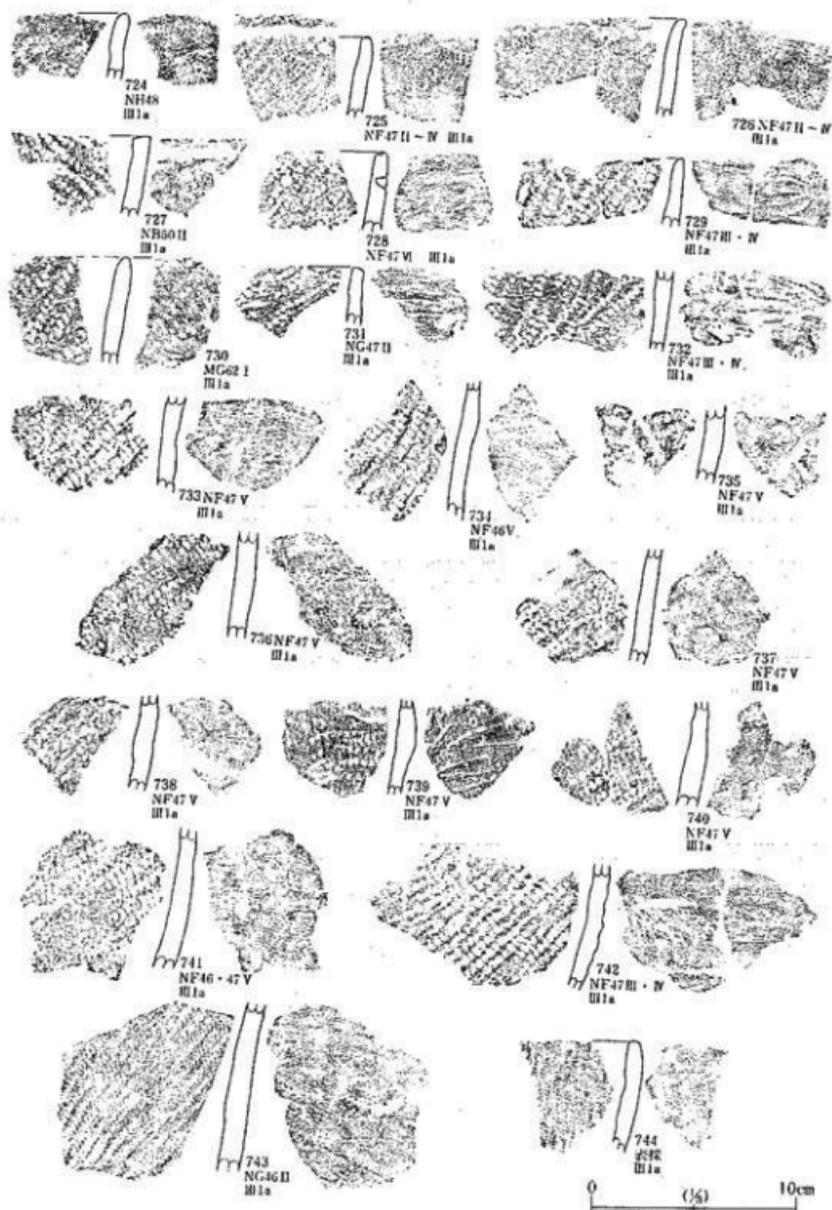
ウ (795~799) 施された縄文が付加条であるもの。795・796の原体は2段の縄(LR)に1段

第59圖 蓮瓣外出土器(1)I群



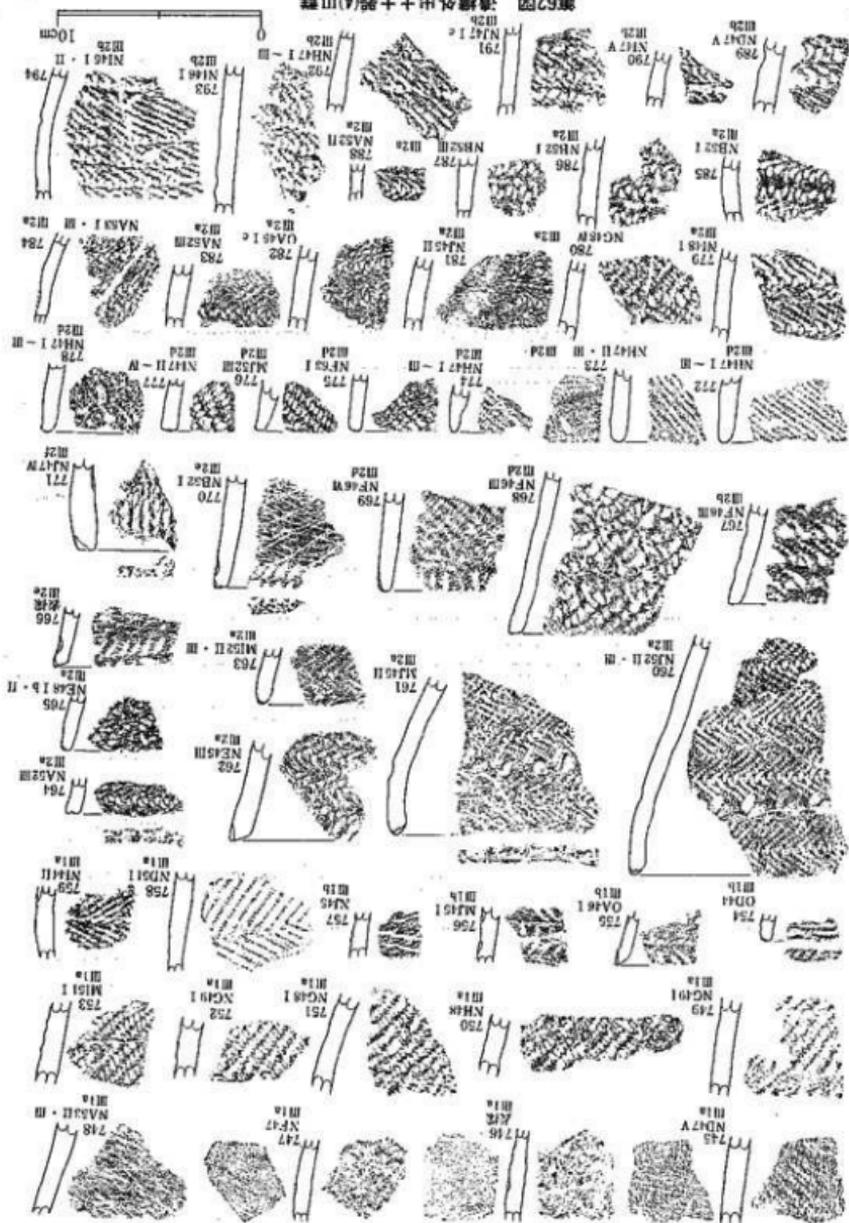


第60圖 遺構外出土土器(2)II群



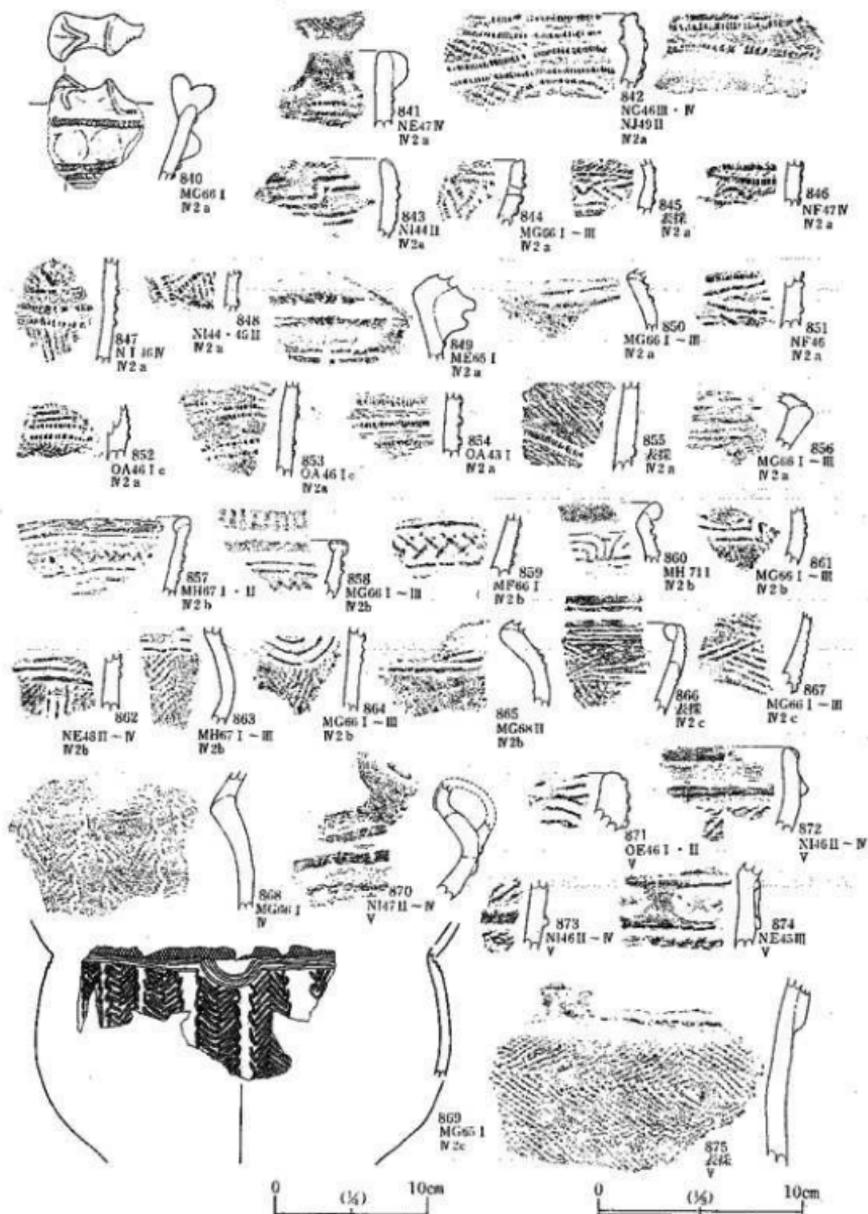
第61圖 遺構外出土土器(3)Ⅲ群

第2節 臺灣外出土遺物



第2節 臺灣外出土遺物





第64圖 遺構外出土土器(6)IV・V群

の縄(L)を巻き付けたものである。798は2段の縄(LR)に2段の縄を巻き付けたものと考えられるが、2種類の原体による可能性もある。

エ(768・769・772~778・800~818) 施された縄文が単節斜行縄文のもの。

オ(766・770・819~822) 網目状摺糸文の施されたもの。

カ(771・823~827) 摺糸文の施されたもの。

#### 第IV群土器(第63図828~第64図869)

前期後葉から中期初頭にかけての土器である。文様・胎土・器厚から2類に分けられる。

1類(828~839) 胎土に繊維を含み、器厚は厚く、全体の形が円筒形を呈する土器の破片である。830~832の隆帯は口縁部に巡るもので、830では刻みが施される。胴部の縄文は結束第2種羽状縄文や木目状摺糸文などがある。

2類 胎土には繊維を含まない。砂粒をやや多く含むが、焼成は良好で硬質である。器厚はやや薄目である。これらの土器は、胴上半が球形の金魚鉢形で、胴下半から底部が円筒形を呈するものが特徴的である。文様表現の手法により3細分した。

a(840~856) 半載竹管の押しきにより加飾した細い隆線により文様を描くものである。

b(857~865) a同様に細い隆線で文様を描くものであるが、隆線への装飾は施されていない。

c(866・867・869) a・bでの細隆線が、半載竹管による沈線に置き換えられた土器である。なお868・869に見られる縄文はRL・LRの異種原体を結束第1種によってつなぎ、それぞれの開端を縛ったものを原体とし縦位に回転施文したものである。

#### 第V群土器(第64図870~875)

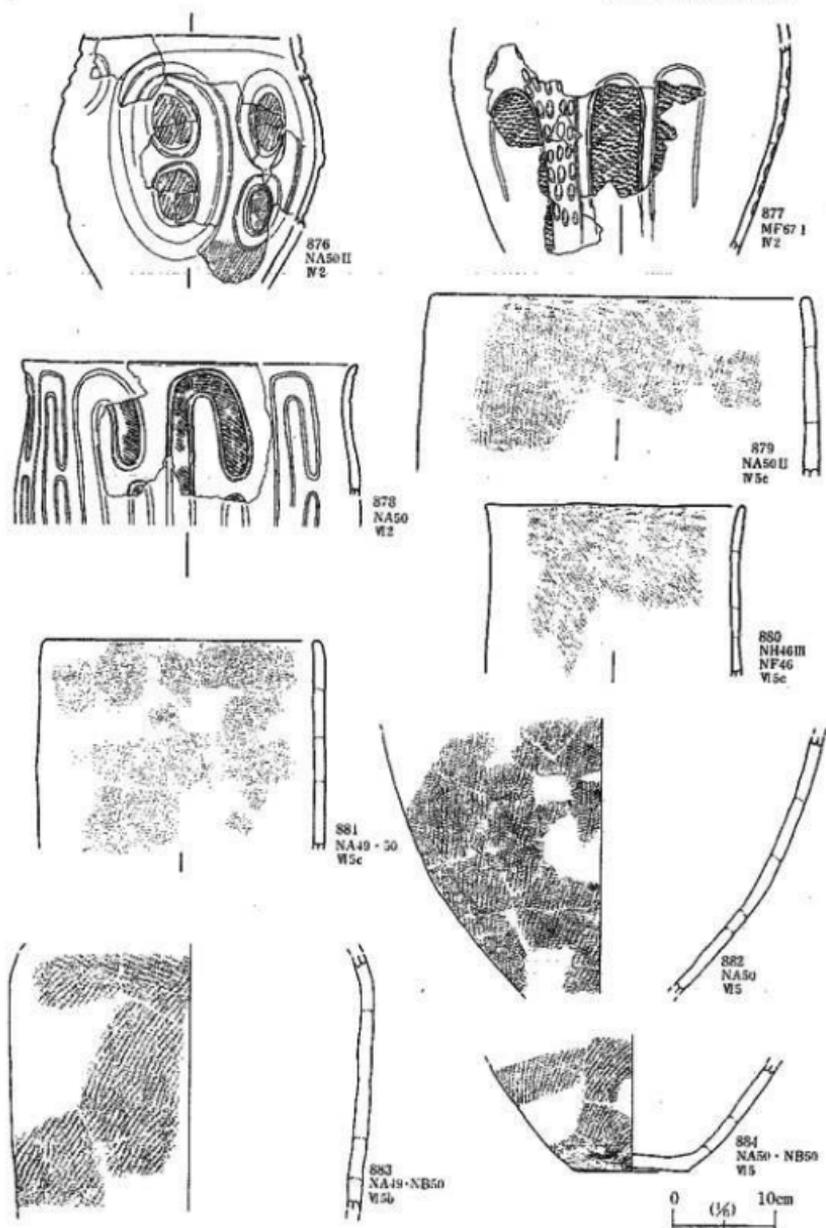
中期前葉に位置付けられる土器である。幅広く、断面が三角形または台形となる隆線によって文様を施す土器である。875は口縁部文様帯の下端にあたり、上方から垂下する隆帯の形状と、胴部に施される縄文が他とは若干違っている。

#### 第VI群土器(第65図876~第70図984)

中期後葉に位置付けられる土器である。出土土器の中では最も多い。また竪穴住居跡の複式炉に埋設されていた土器は本群に含まれる。胎土に少量の砂粒を含むが、焼成は良好である。器面は内外ともに丁寧に調整されている。深鉢形土器以外に鉢形土器・台付の土器がある。文様を描く手法の違い、および描かれる文様の違いから4類に細分されるが、これらの細分類は、概ね時間的な推移に対応するものと考えられる。なお胎土、焼成、施される縄文から本群に伴うと考えられる縄文だけの土器を5類とした。

1類(905~919) 明瞭な隆線あるいは隆沈線によって、渦巻き文を基調とした文様を施すものである。

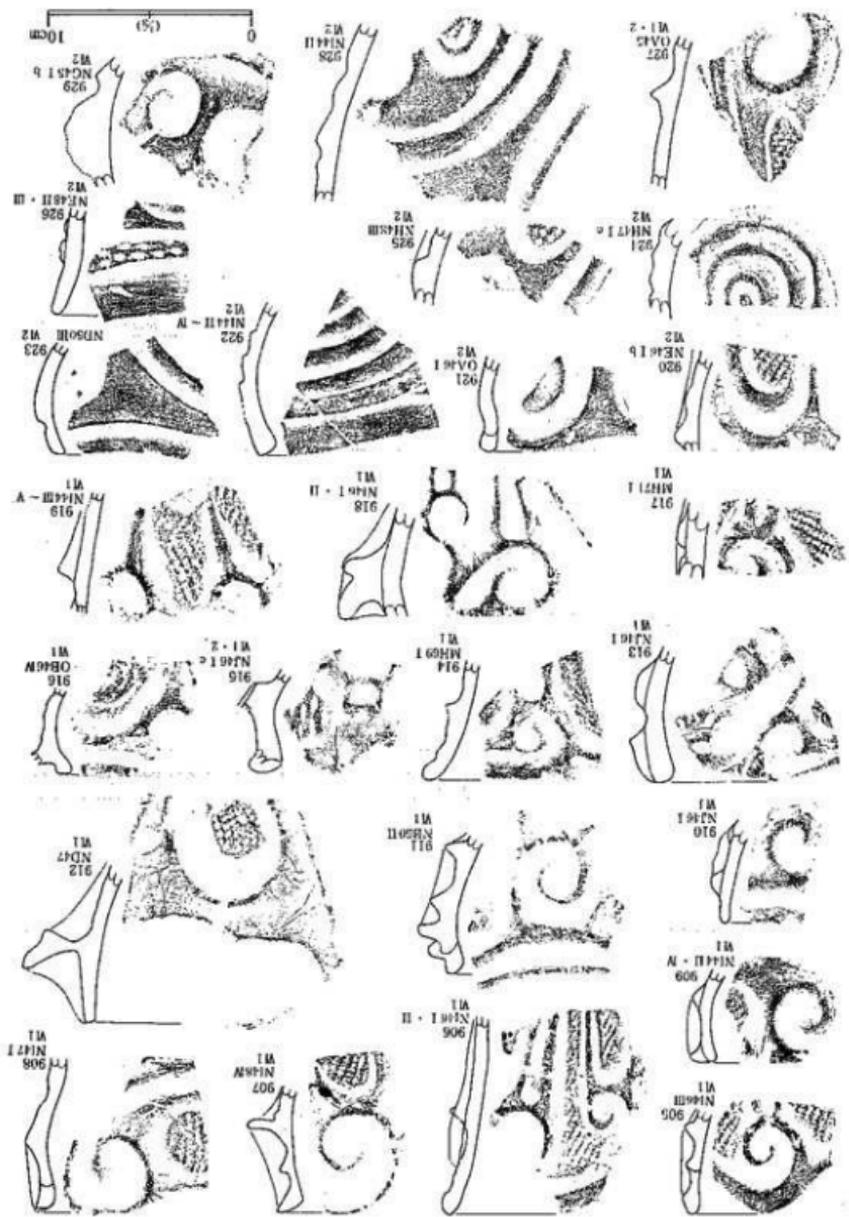
2類(876~878・920~968) 幅広で緩い稜線あるいは沈線によって、縦位の楕円形区画を基調



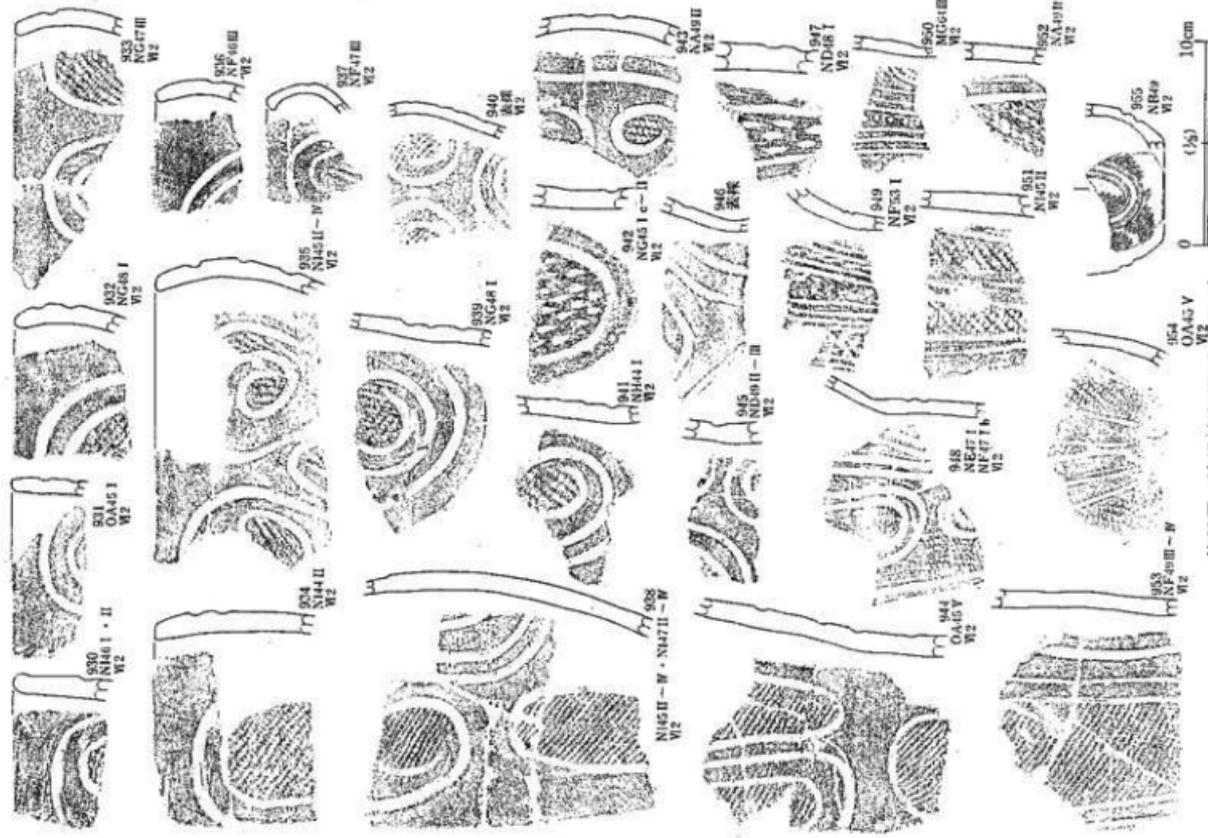
第65圖 遺構外出土土器(7)IV群



第67圖 蓮瓣外出土器(9)VI群

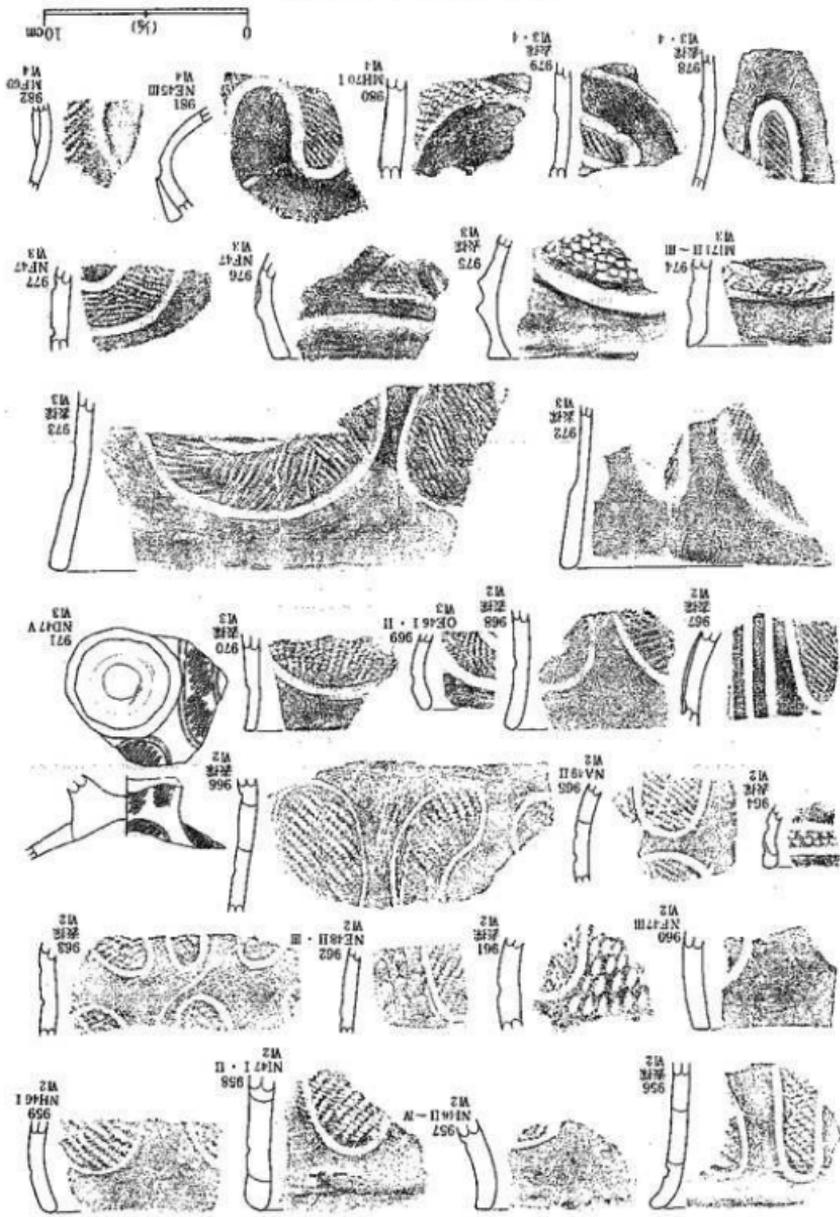


第2群 蓮瓣外出土器物



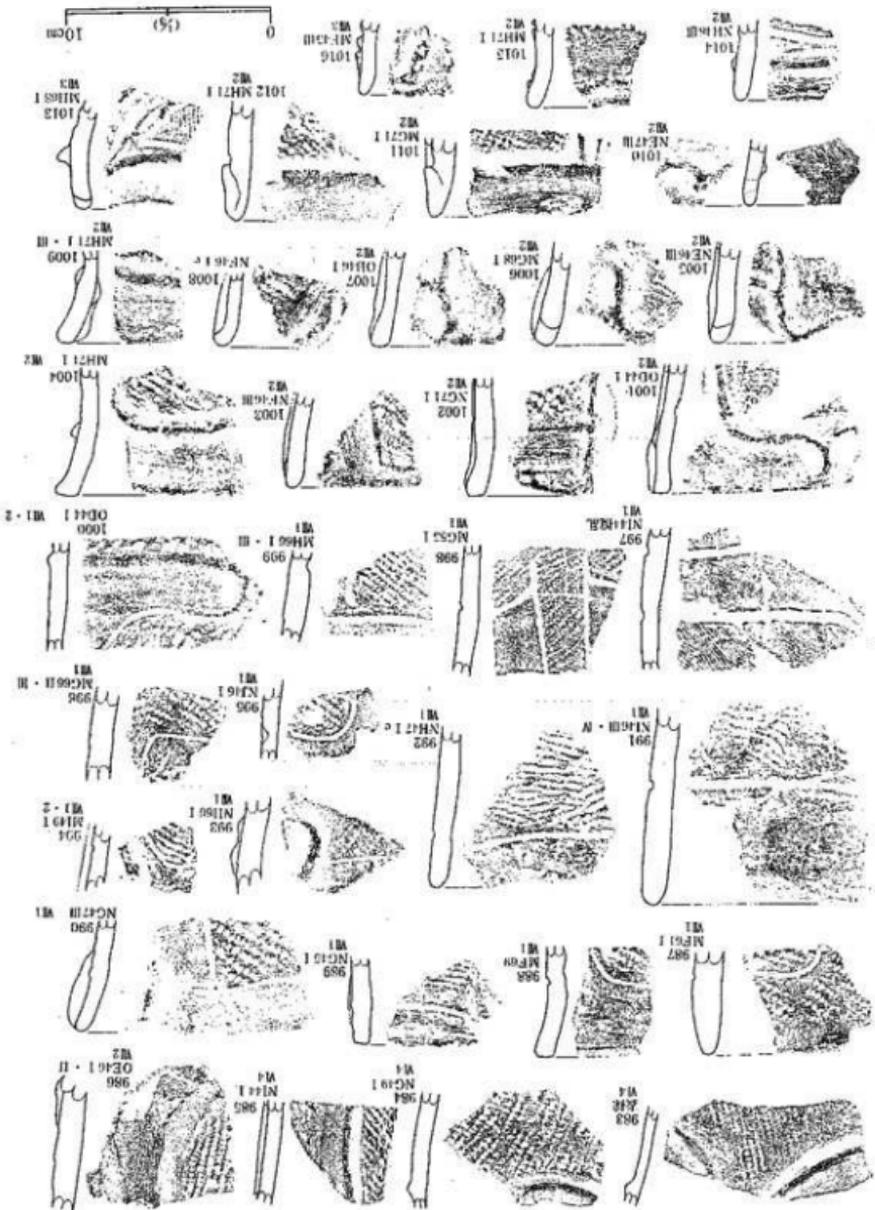
第68図 遺跡外出土器Ⅵ群

第69圖 外田干子器IV種



第2部 外田干子器

第70圖 遠東外出土石器(VI・IV群)



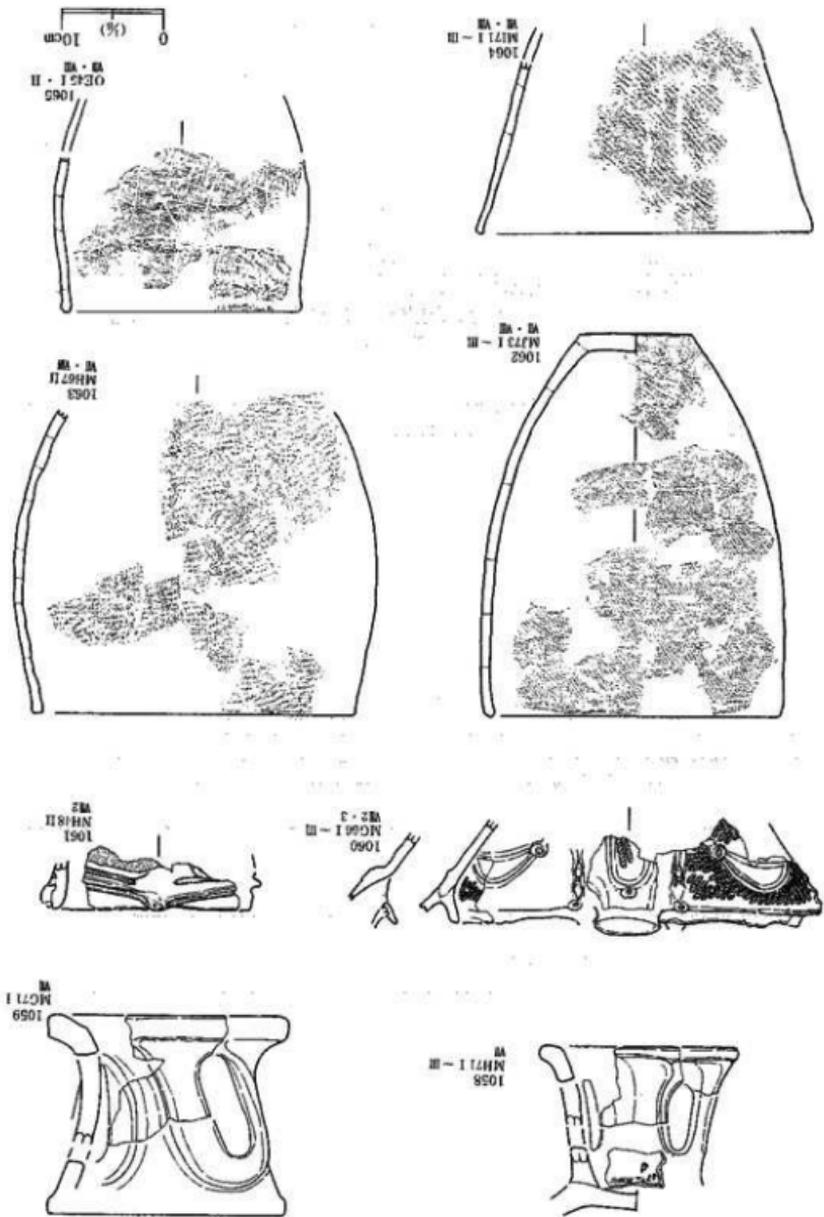
第4次 調査の記録

第71圖 遺精外出土器の腹面



第2圖 遺精外出土器の腹面

第72圖 遠藤外出土器04Ⅷ・Ⅷ群



とした文様を施すものであり、量的には本群でも最も多い。胴上部に器の最大幅をもち口縁部が内湾する器形のもと、胴中央付近に器の最大幅を持ち緩くくびれて外傾する口縁部に続く器形を呈するものがある。文様の端部には1類の渦文が痕跡的に残るものもある。稜線によって文様を描く土器では、2～3重の楕円区画を取るものが多く、沈線によって縦位の楕円形懸垂区画文を取る場合には1本の沈線によって区画するものが多い。また幾つかの区画文をくくり込む沈線や、区画文間を縫う様に巡る沈線のあるものがあり、文様の点ではさらに細分される可能性がある。

3類 (969～977・877・878) 削り付け、沈線描画、縄文充填(沈線再描画)、磨消しの施文手順により、沈線に区画された縄文部でアルファベット状の区画文が施される土器であり、縦位の楕円形区画文と区別されるものを本類とした。

4類 (978～985) 3類において縄文部で描かれていた文様が、やや肥厚した無文部で描かれる土器である。

5類 (879～904) いわゆる粗製の深鉢形土器である。小さめの底部から緩やかに立ち上がり、丸みを帯びた胴部を経て直線的に口縁部に続く器形を呈するものが多く、口縁部が外傾するものと、内湾するものがある。ただし、894は胴上部から内湾した後直線的に立ち上がる器形を呈し、他と異なっている。口縁部に施される縄文には、口縁部最上位から縄文を施すもの(885～891)、口縁部最上位だけは原体の施文方向を変えることによって羽状とするもの(883・892～897)、口縁部最上位に無文部をもって縄文を施すもの(879～881・898～903)、口縁部最上位に沈線で区画された無文部を持って縄文の施されるもの(904)がある。

#### 第Ⅶ群土器 (第70図987～72図1061)

中期末葉から後期初頭に位置付けられる土器である。本遺跡S I 14、S I 19の埋土出土土器がまとまった資料である。胎土中にやや大粒の砂粒を含み、器面調整が粗雑である点で第Ⅵ群土器と明瞭に違っている。文様を描く手法の違いにより4細分される。また、この土器に伴うと考えられる粗製土器を5類とした。

1類 (987～1000) 沈線により区画し磨消し縄文によって文様を描くもので、文様の無文部は横方向に切り合うものがある。なお1058は台付き土器の台部、及び1059は器台で、稜線により文様区画し、透かしを作り出している。胎土・文様から一応本群に分類した。

2類 (1001～1012・1060・1061) 隆帯で器面を区画する土器で、区画内には沈線と磨消し縄文による文様が描かれる。また隆帯上に刺突を施すものや沈線を施すもの、さらに隆帯の側面に刺突を施すものがある。1060は注口土器であり、口縁部下に疑似口縁状の隆帯が著しい。

3類 (1013・1039・1040・1041) いわゆる鎖状隆線と磨消し縄文によって曲線的な文様を描く土器である。

4類(1052~1057・1066~1071) 胴部に指でつまんだ状態の円形の刺突が施される土器である。1066~1069は壺形を呈するものと思われるが、刺突が小さく他とは若干異なっている。

#### 第VII群土器(第73図~75図)

後期前葉に位置付けられる土器である。調査区北半からまとまって出土した。胎土・焼成・器厚は第VII群土器と類似する。復原された個体がなく器形・文様共に全体については不明である。このため施される文様により3細分したが、明確な分類とはなっていない。また、施される縄文によって、本群に伴うと考えられる粗製深鉢形土器の破片を4類とした。

1類(1072~1079・1097~1101) 比較的大柄なモチーフと連鎖状S字沈線文に特徴づけられる類である。

2類(1102~1108) 沈線によって蕨手状の文様が施された土器を本類とした。

3類(1081~1091・1109~1131・1137~1144) 一組3~4本の沈線によって弧状のモチーフを描く土器を本類とした。

4類(1062~1065・1085・1147~1151) 地文は摺糸文のものが多く、ほかに条線が曲線的に施されるものもある。

#### 第IX群土器(第75図1152~1162)

後期中葉に位置付けられる土器である。磨り消し縄文によって文様を構成する土器であるが、半葎竹管により綾杉状のモチーフを描くものも本群に含めた。

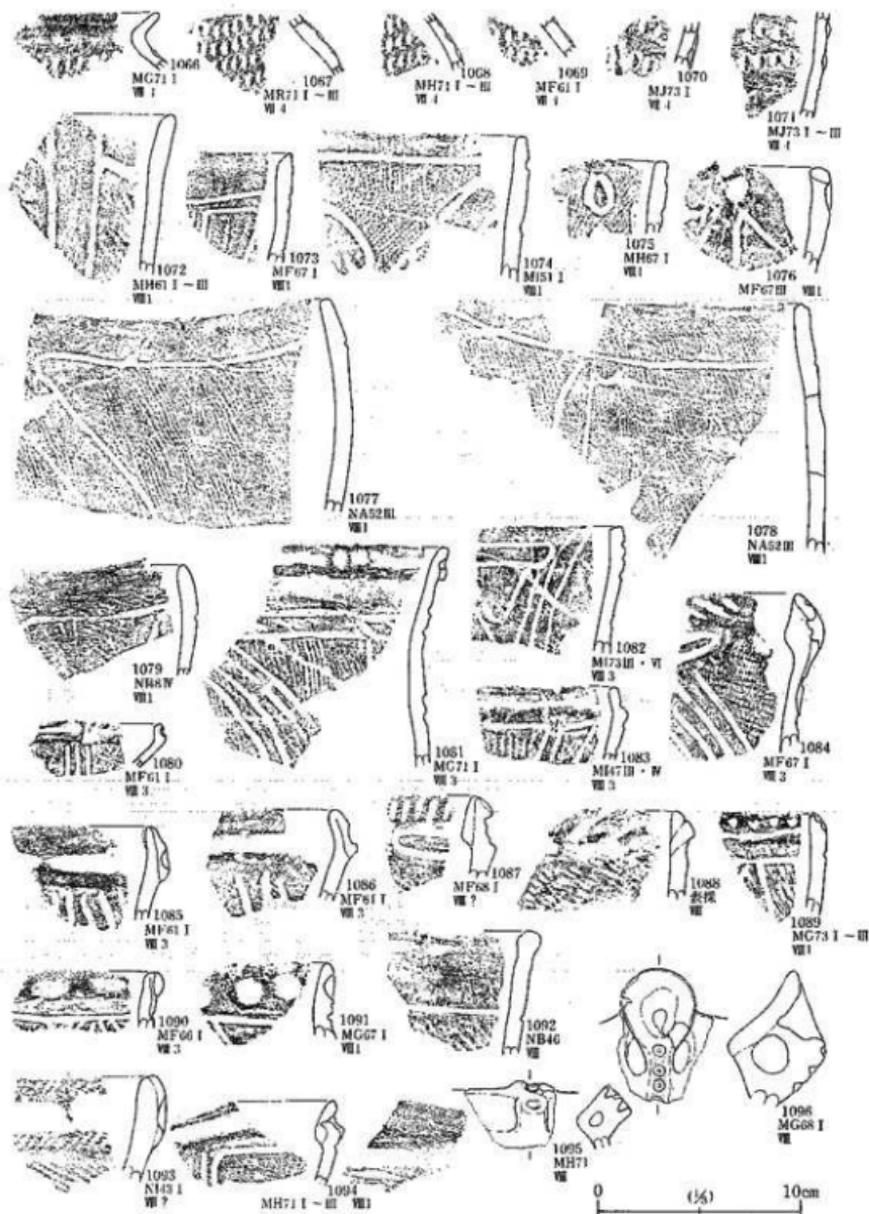
#### 第X群土器(第76図)

後期後葉から晩期初頭に位置付けられる土器である。深鉢形土器と鉢形土器がある。前者は胎土にやや大粒の砂粒を含み、器厚はやや厚いが焼成は良好で、器面の調整も丹念に行われており、全体の色調が白色を呈するものが多い。口縁部形状は平縁のものと、突起の付されるものがある。鉢形土器の胎土は緻密で、器厚は薄い。焼成は良好であるが、全体の色調が黒色を呈する。共に入り組み帯縄文が施されるが、三叉文の見られるものもある。

#### 第XI群土器(第77~83図)

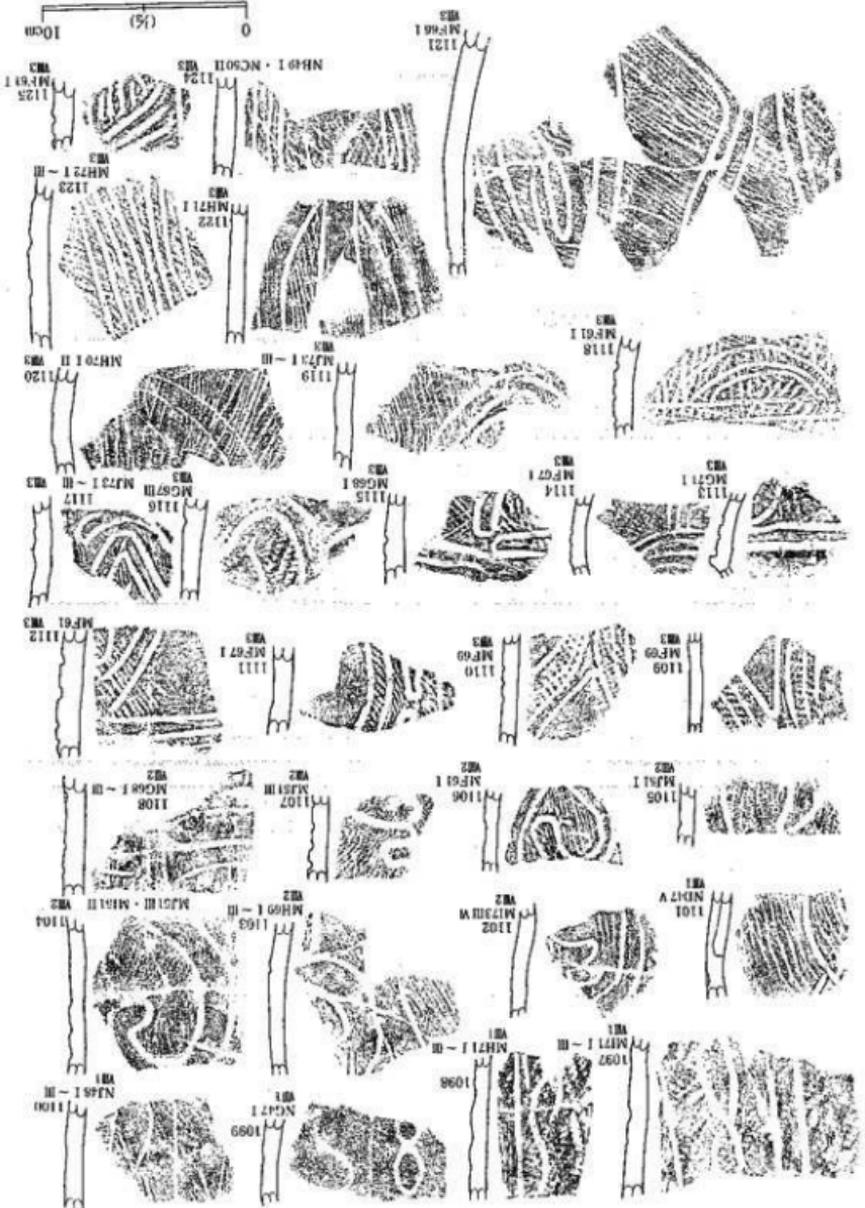
調査区南部台地上のS I 01の床面及び埋土中、NF46グリッド付近に堆積する4層中からややまとまって出土したほか、調査区全体から出土している。施される文様と器形により2類に細分し、本群に伴うと考えられる縄文だけの土器および無文土器を3類とした。

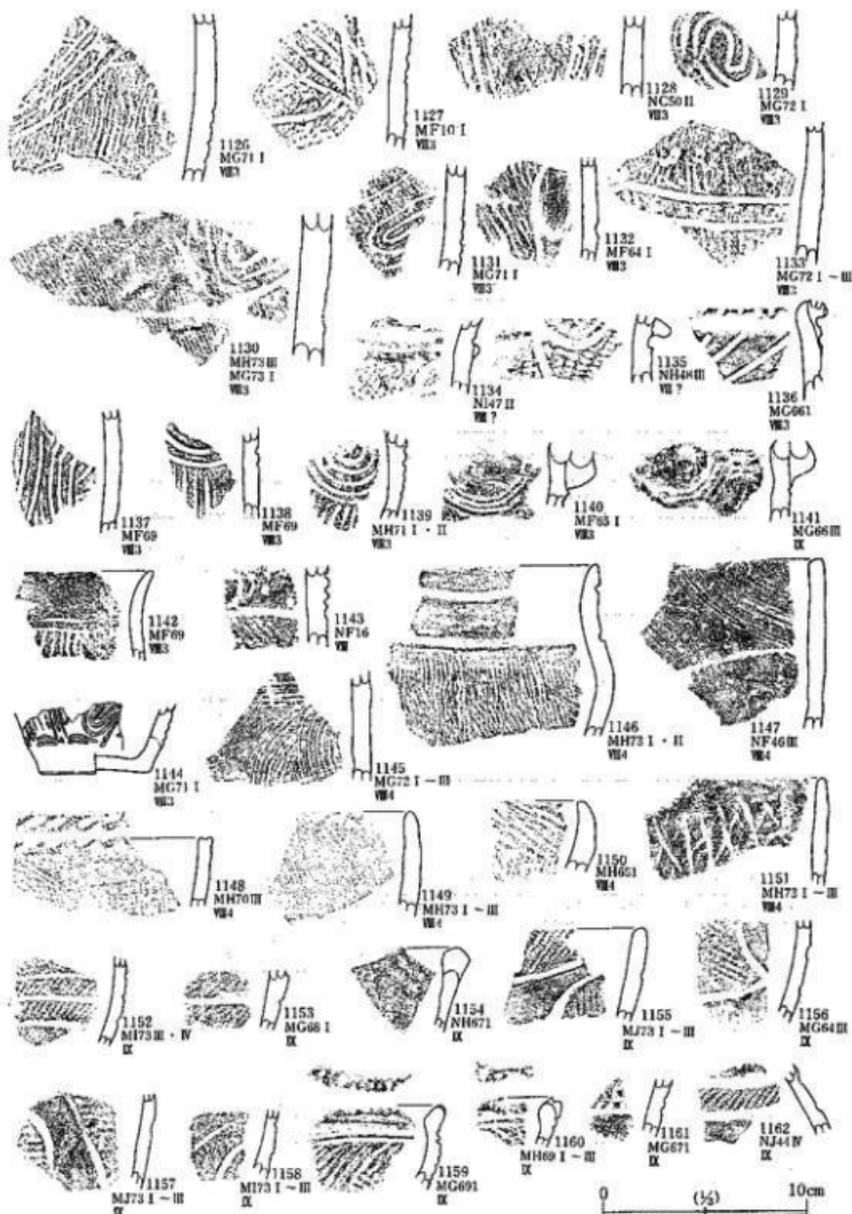
1類(1187~1189・1192~1197・1199・1207~1310・1313・1314・1320~1324) 基本的に工字文・変形工字文の施される土器を本類としたが、1~3条の平行沈線の施される土器も一括した。深鉢(甕)形土器、鉢形土器、壺形土器、台付き土器がある。このうち鉢形土器には底部から直線的な胴部を経て口縁部が内弯した後に直立するものと、底部から口縁部まで直線的に開くもの、また胴部中央で外傾し直線的に口縁部に続くものなど少なくとも3種類が存在する。



第73圖 遺構外出土土器15Ⅷ群

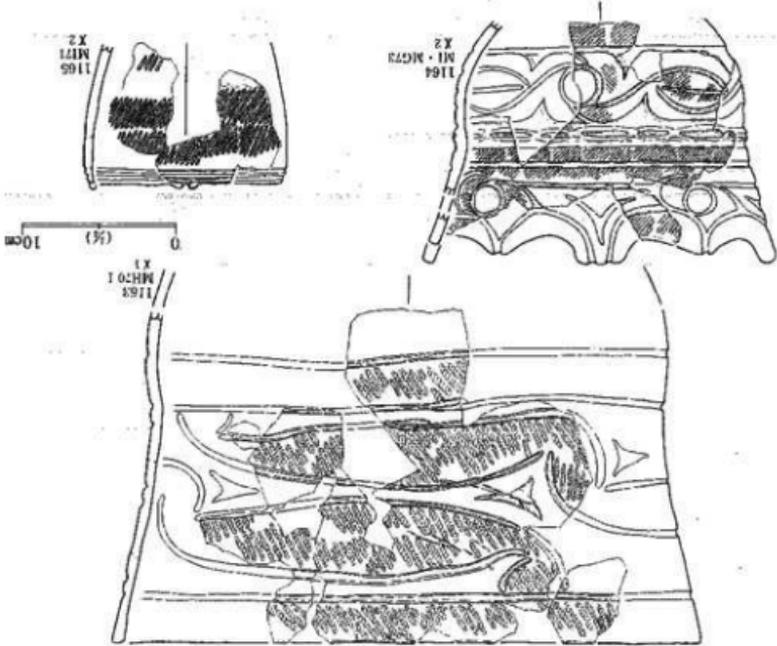
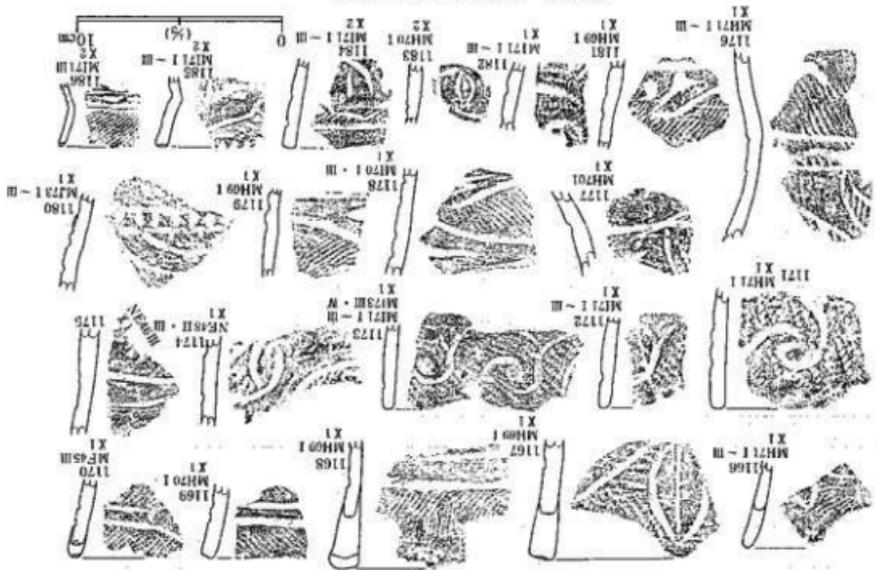
第74圖 遠東外出土器の圖解

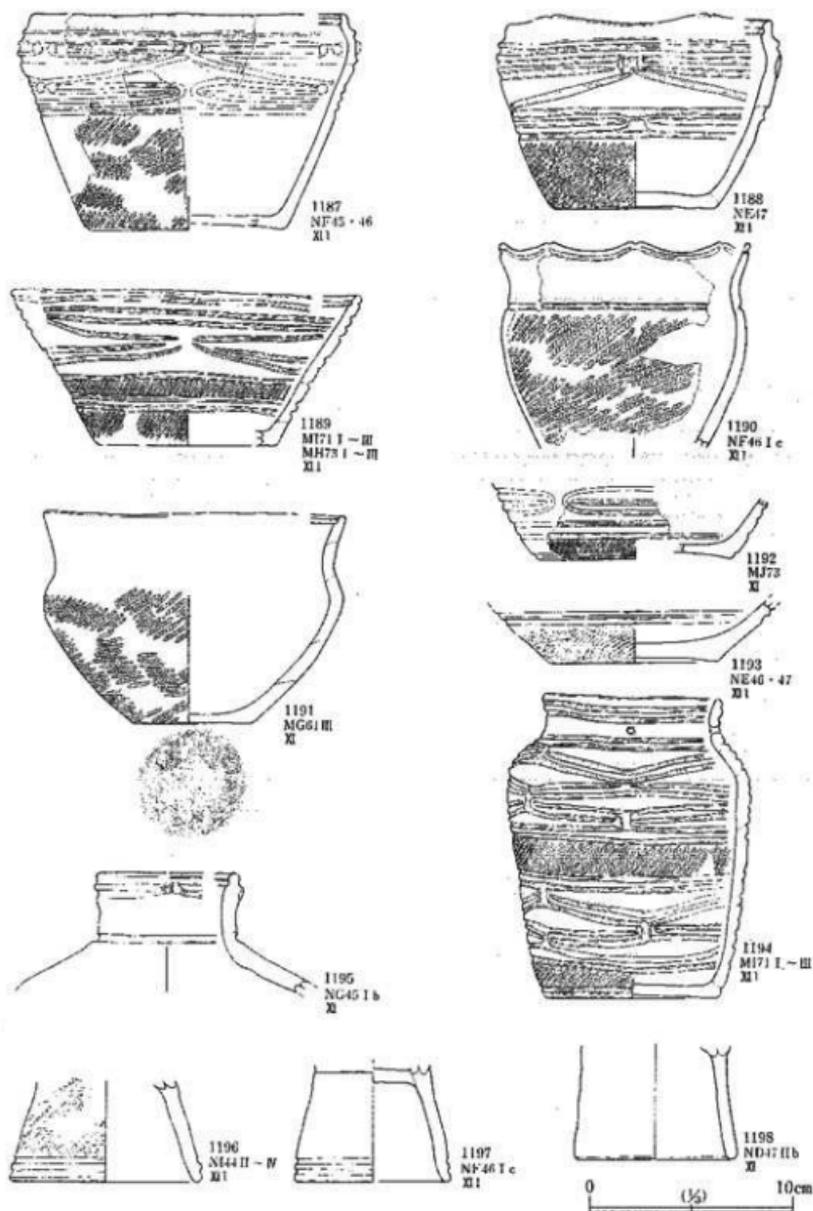




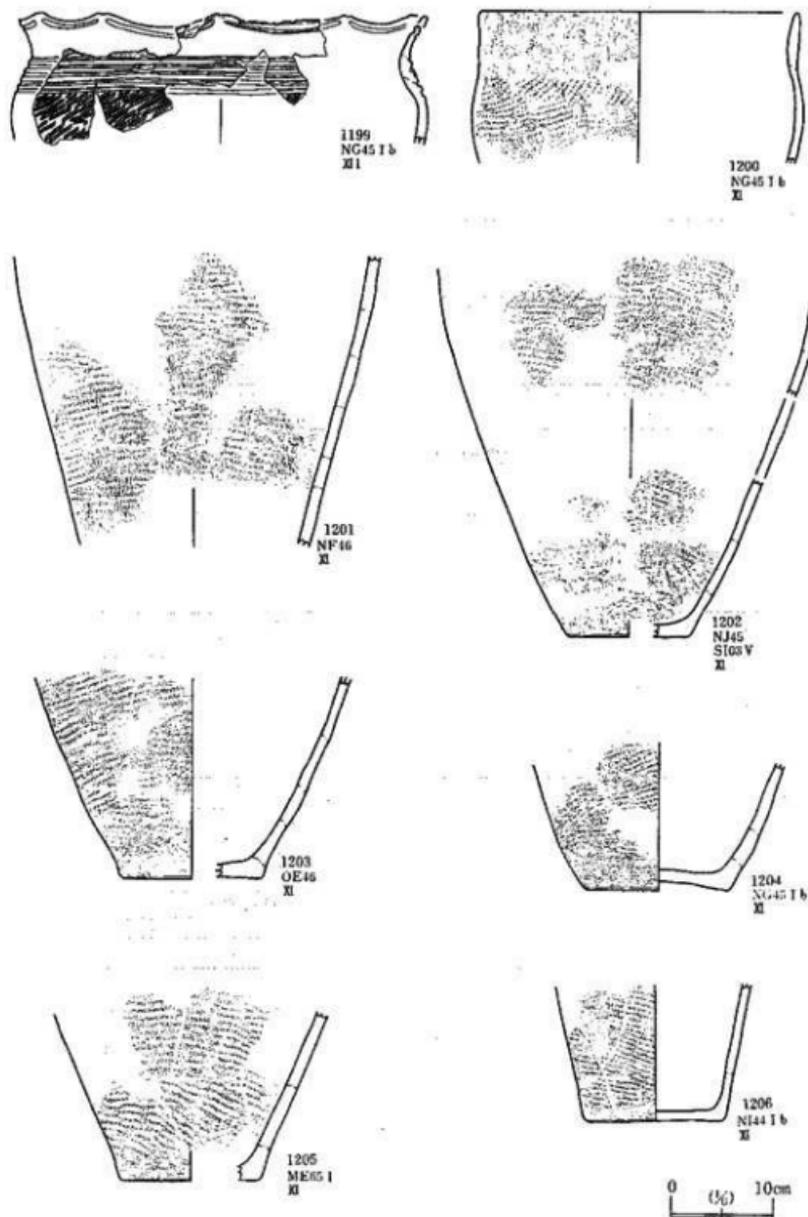
第75圖 遺構外出土土器(Ⅶ)・Ⅸ群

第76図 通橋外出土器のX線

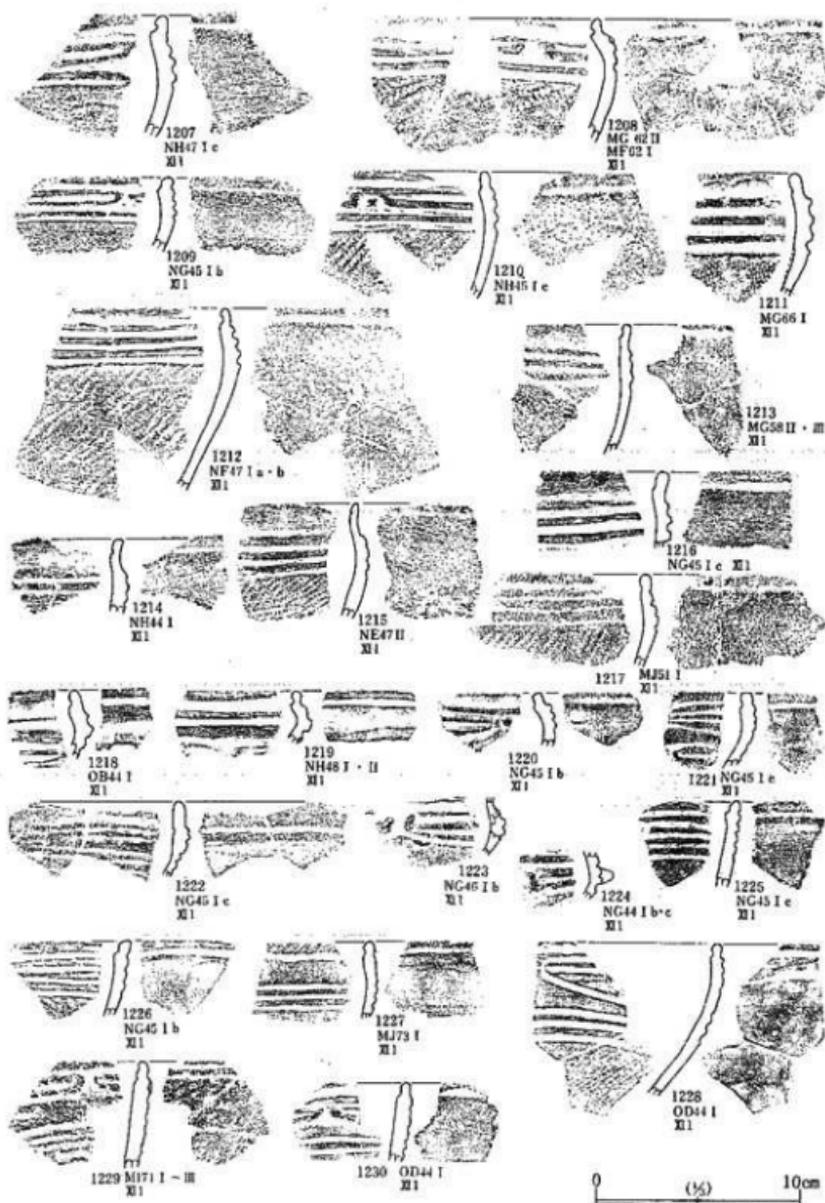




第77圖 遺構外出土土器(IX-XI群)

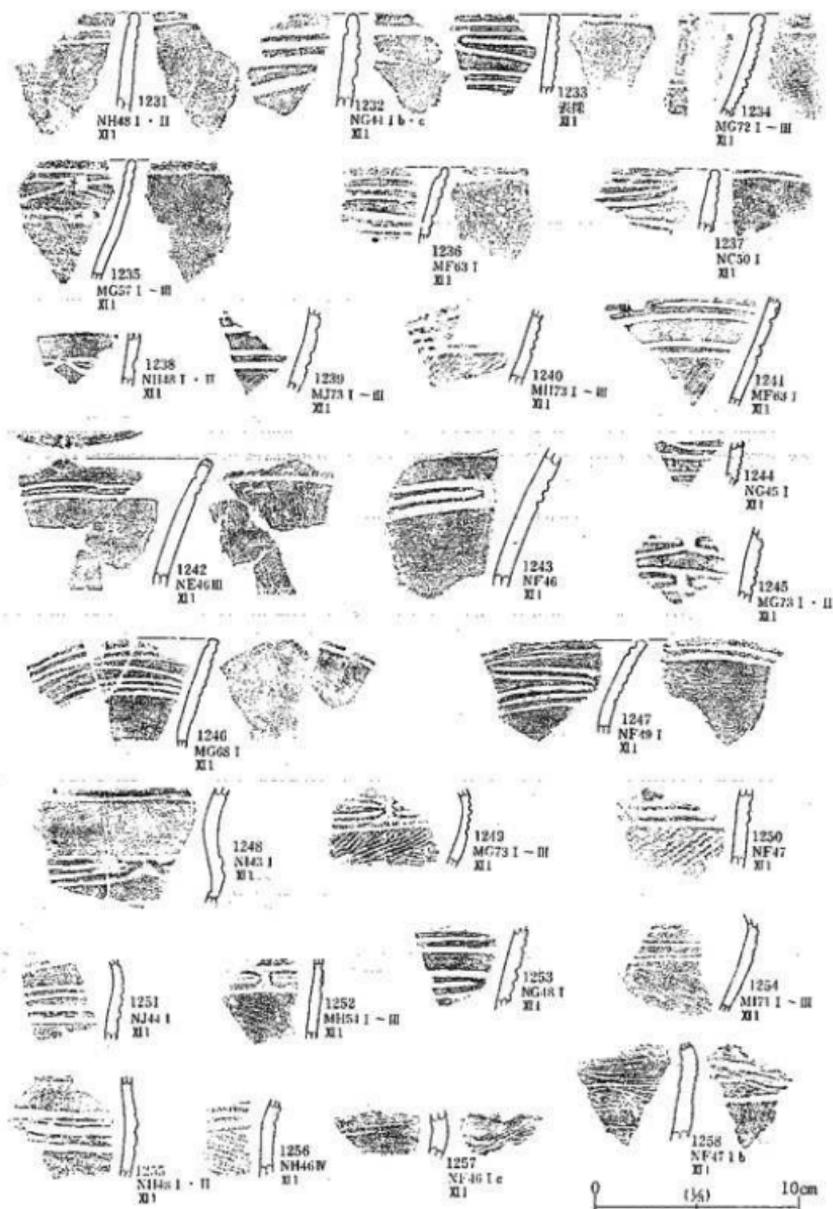


第78図 遺構外出土土器20区群

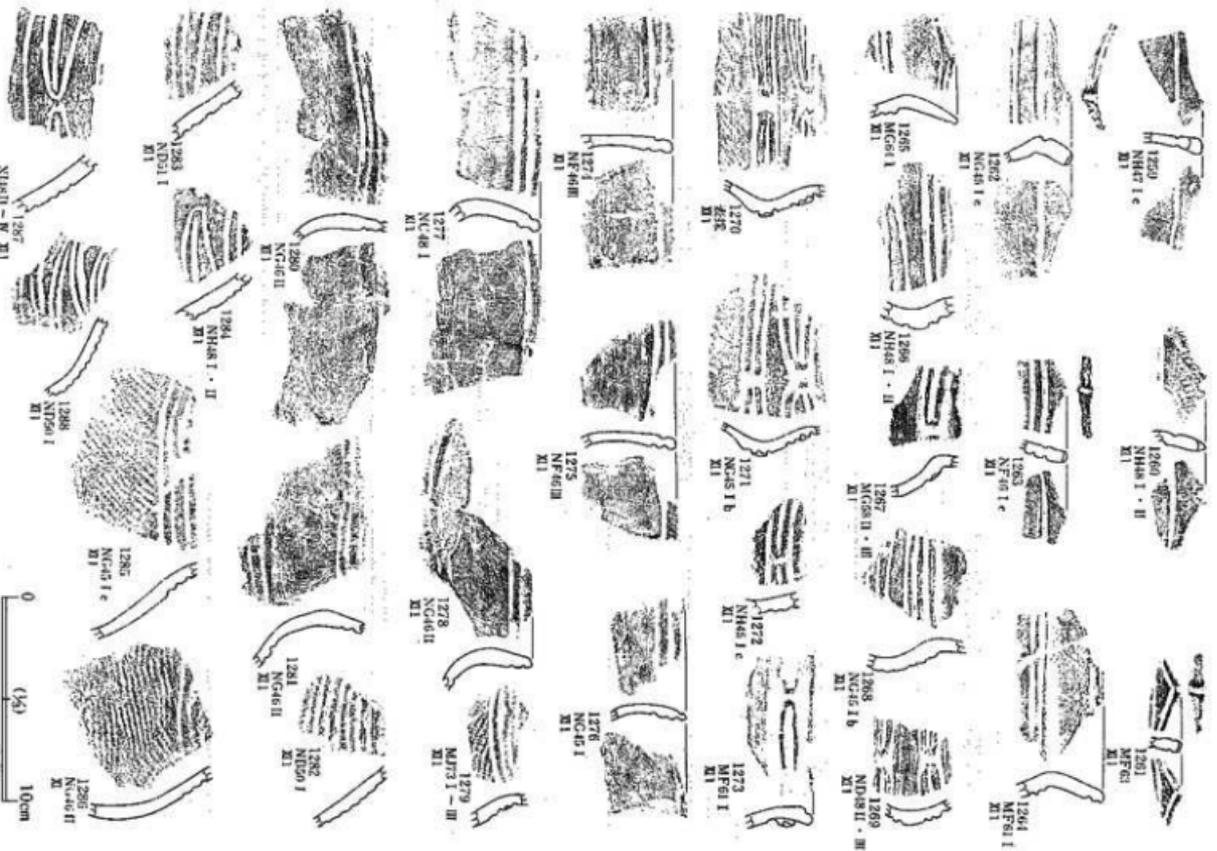


第79圖 遺構外出土土器(XI)群

第4章 調査の記録

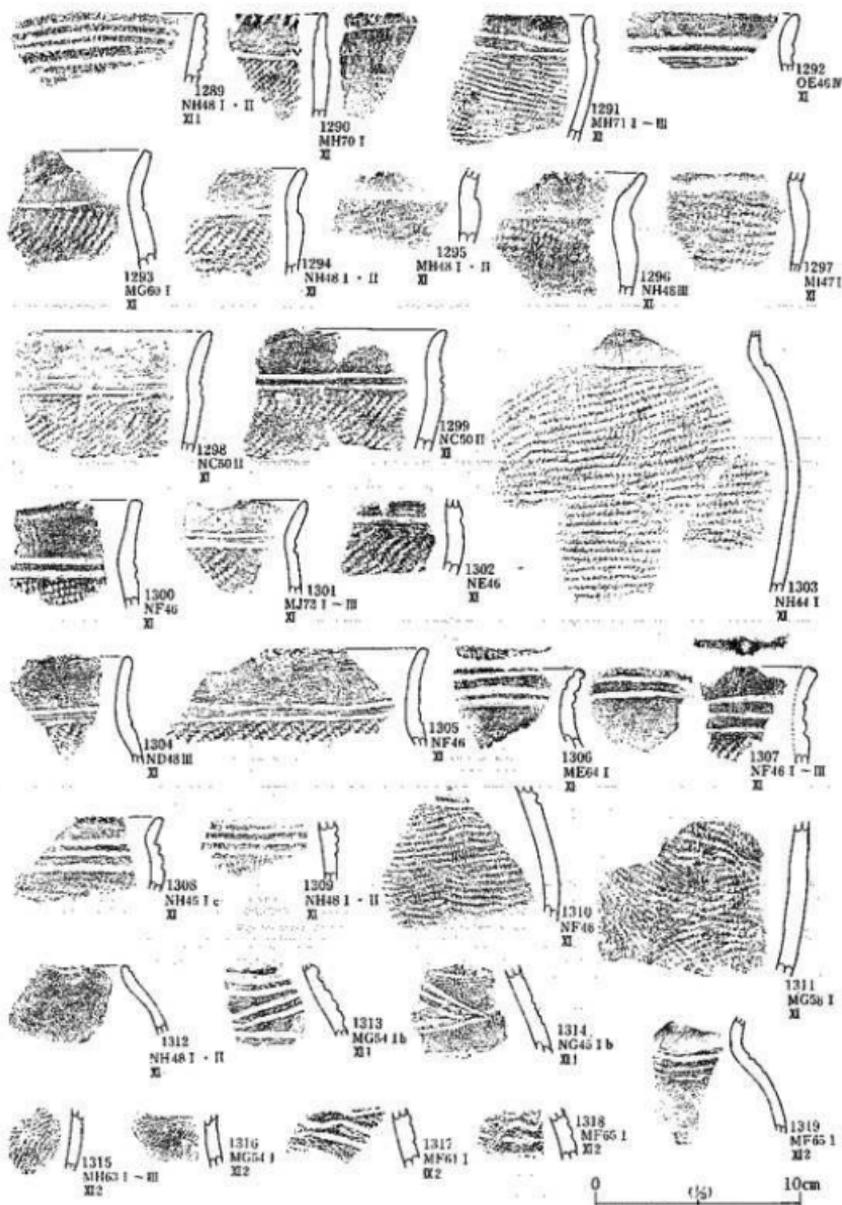


第80図 遺構外出土土器(2)XI群

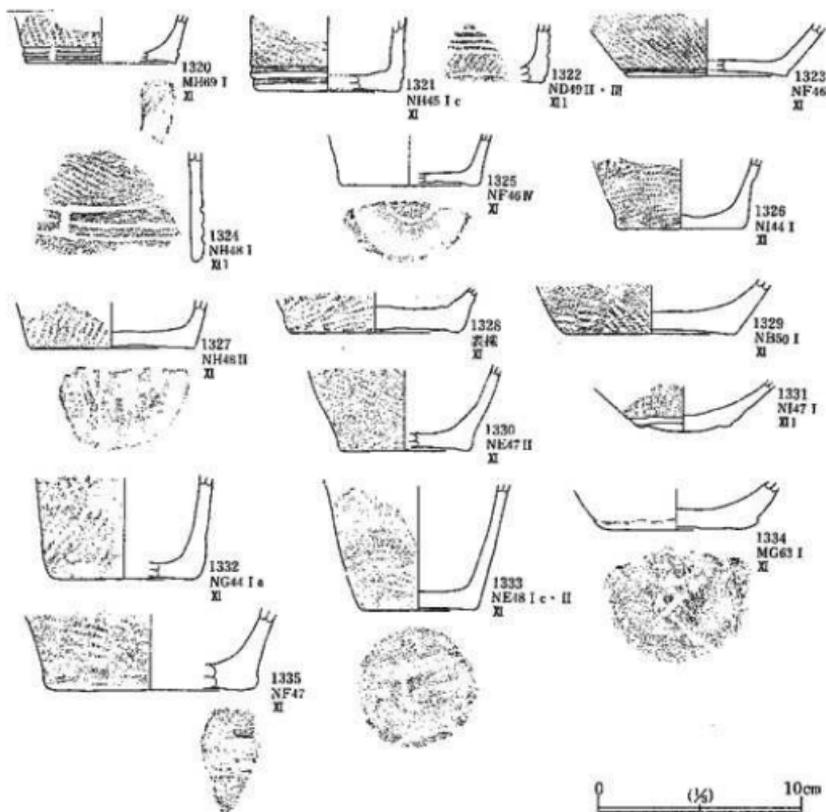


第81圖 遺構外出土土器(2)Ⅺ群

第4章 調査の記録



第82図 遺構外出土土器04XI群



第83図 遺構外出土器09XI群

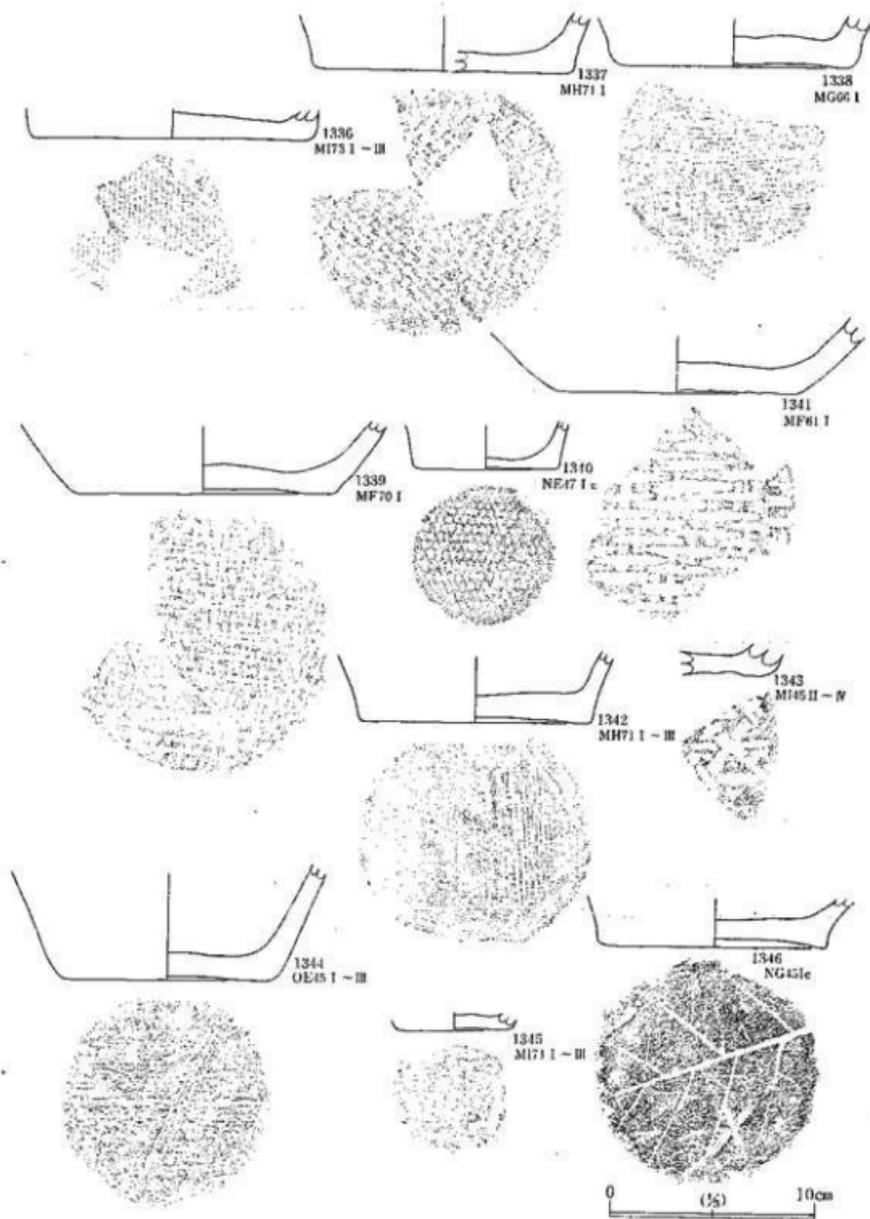
また、小型の深鉢（甕）形土器で、頸部に彫らみを持つものも本群土器を特徴付けている。

2類（1315～1319）緩い鋸歯状文が施される土器であり、壺形土器の破片が多い。

3類（1191・1194・1200～1206・1311・1312・1325～1335）縄文だけの土器には深鉢（甕）形土器・鉢形土器が多く、無文の1312は壺形土器である。縄文はLRが多く、条の横走するものが多い点が特徴的である。

## 2 石器

出土した石器には石鏃・石錐・石匙・石筥・不定形石器・磨製石斧・環状石斧・凹石・磨石・石皿があり、剥片を含めてコンテナで23箱ある。剥片石器の石質は頁岩のものが多く、ほかにメノウ・黒曜石を用いたものも比較的多く、特に後者では転石の状態出土したものもある。



第84図 遺構外出土土器の底部網状痕

また、メノウ剥片は1カ所からまとまって出土したものがあり、剥片貯蔵の跡である可能性もある。以下では上記の各器種について略述するが、実測図は各器種から数点を代表させている。図示しなかったものの一部は図版のみ掲載したのものもある。

#### 石錘 (第85図 S60～S79)

弓矢の先端に着けたと考えられる石器で、基本的に両面加工であり、原則として中軸線で左右対称形となる。遺構外から62点出土した。基部の形状には基部がくぼむ、いわゆる凹基式のもの24点、基部が平らなもの9点、基部が丸いもの1点、基部の作られたいわゆる凸基式のもの24点があるほか、基部の形状が特異なアメリカ式石錘も2点出土している (S78・S79)。

#### 石錘 (第85図 S80～S85)

穿孔するための石器で、17点出土している。支持するためのつまみ部を有するものと明確なつまみ部を有しない棒状のものがある。

#### 石匙 (第86図 S86～S96)

比較的薄手の剥片の一端につまみを、他辺のいずれかに刃部を作出した石器である。つまみの作り出しに際しては両面からノッチを入れるようにしているのに対し、原則として刃部は片面からの加工である。縦型のもの30点、横型のもの6点のほか、S93のように寸詰まりで分銅形を呈するもの4点の計40点出土している。

#### 石鏟 (第87図 S96～S103)

やや厚手の剥片に粗い二次加工を施して、全体の形状がいわゆるヘラ形を呈するように作られた石器である。34点出土した。二次加工は両面・半両面・片面のものがある。側面から見た刃部は片刃のものが多い。

#### 不定形石器 (第88図 S104～第90図 S130)

剥片の全周あるいは側面に2次加工を施した石器であり、総数143点出土した。二次加工によって刃部を作り出すものと、刃潰し状に二次加工を施すものがある。前者には、刃部が直線になるものと弧状になるものがある。また本遺跡では第88図にある小型のものが比較的多く出土 (43点)したが、S114は小型の剥片を得るための石核であり、石質は黒曜石である。

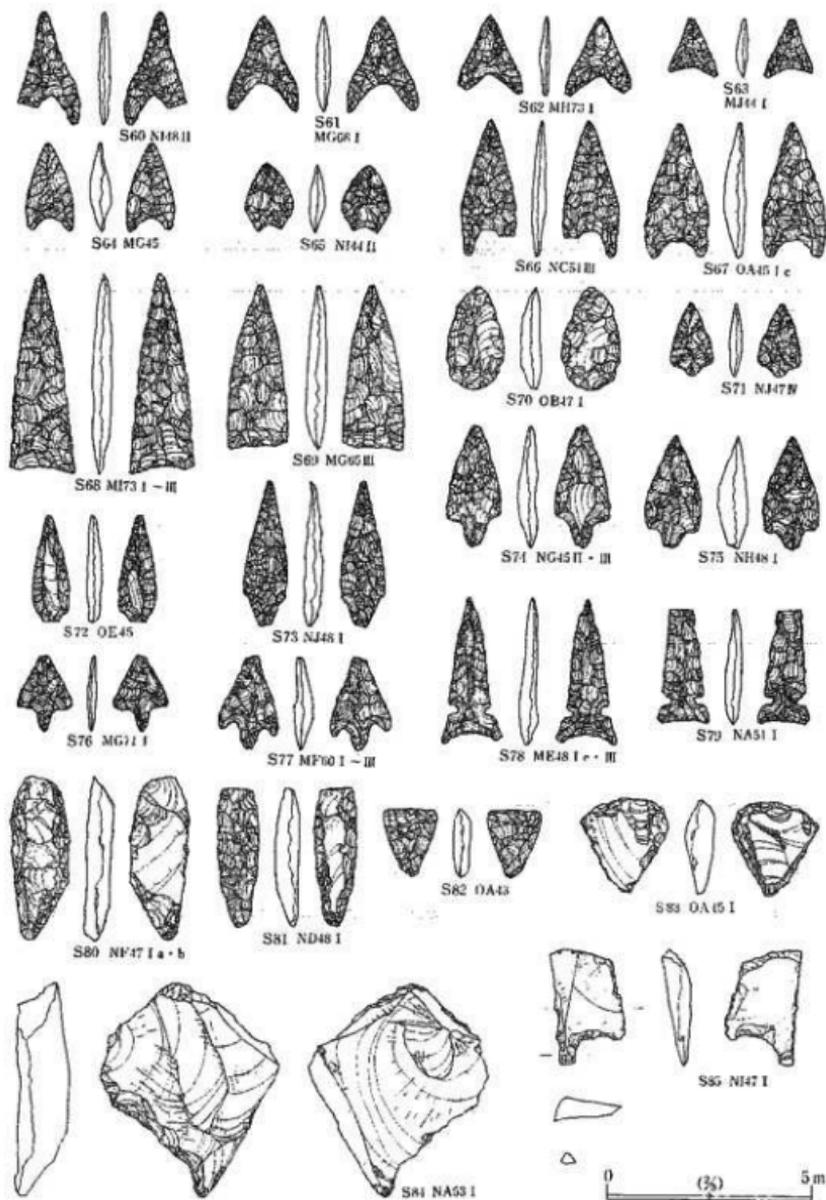
#### 石錘 (第88図 S130～S134)

扁平な楕円盤の長軸両端に打ち欠きによる袂りを作り出した石器である。4点出土した。

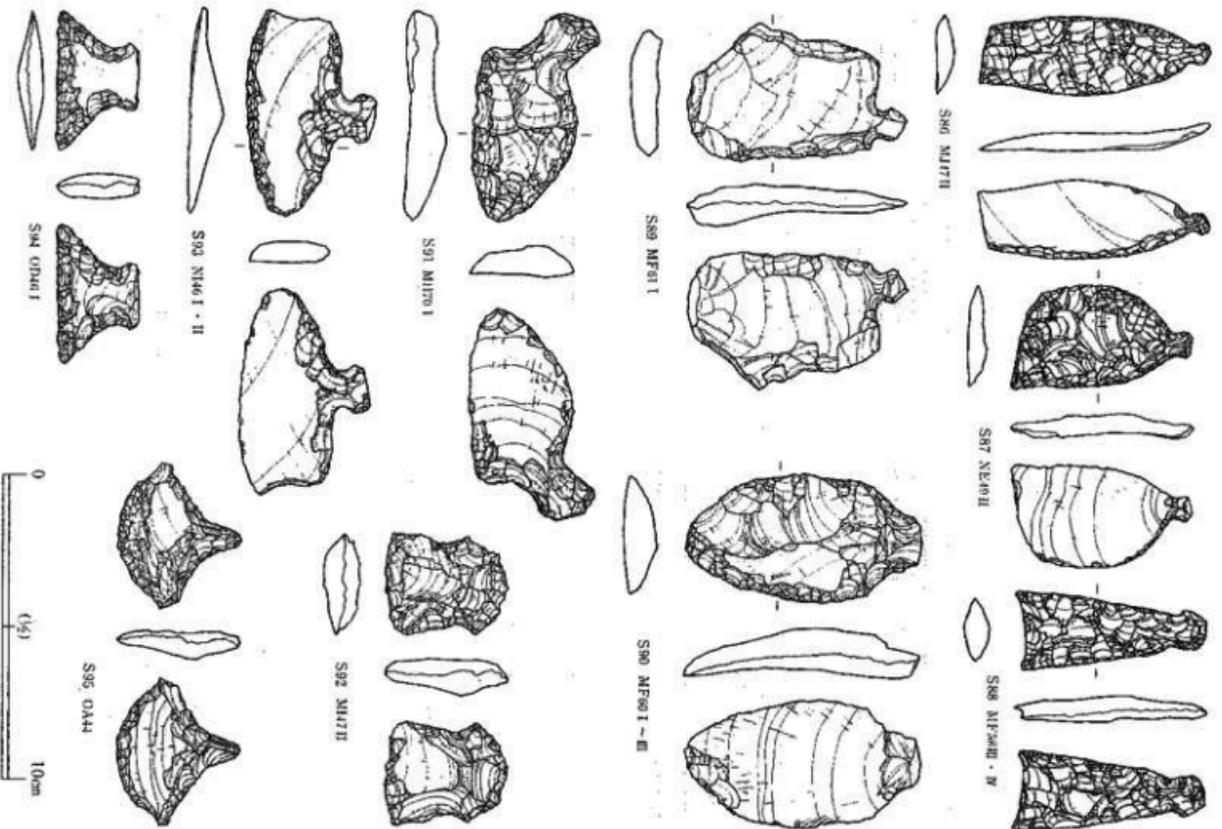
#### 磨製石斧 (第91図 S135～S145)

全面が研磨された石斧である。25点出土したが、基部を欠損するもの8点、刃部を欠損するもの8点を含み、小型のものも2点ある。

環状石斧 (第91図 S146) 全体の形状が環状を呈する石斧である。推定径12.5cmほどである。貫通孔が両面から穿たれており、内面には着柄時のアスファルトが多量に付着している。また刃

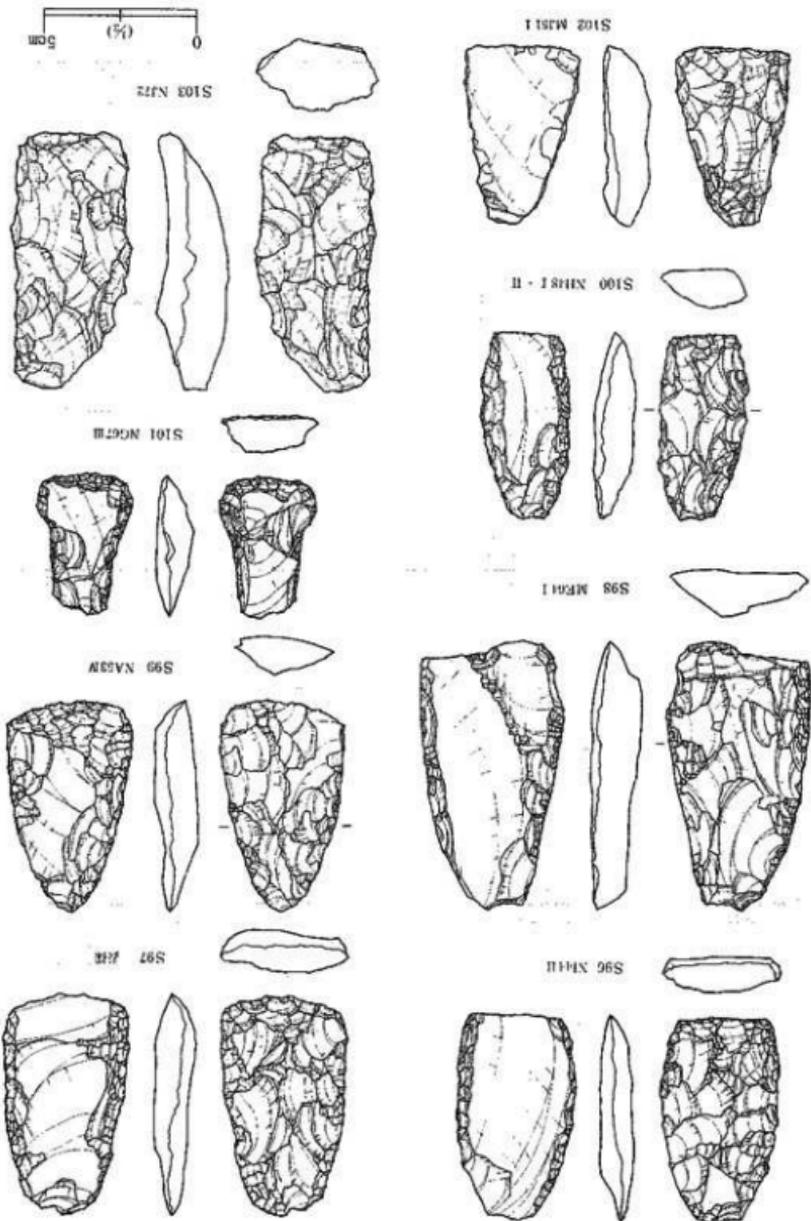


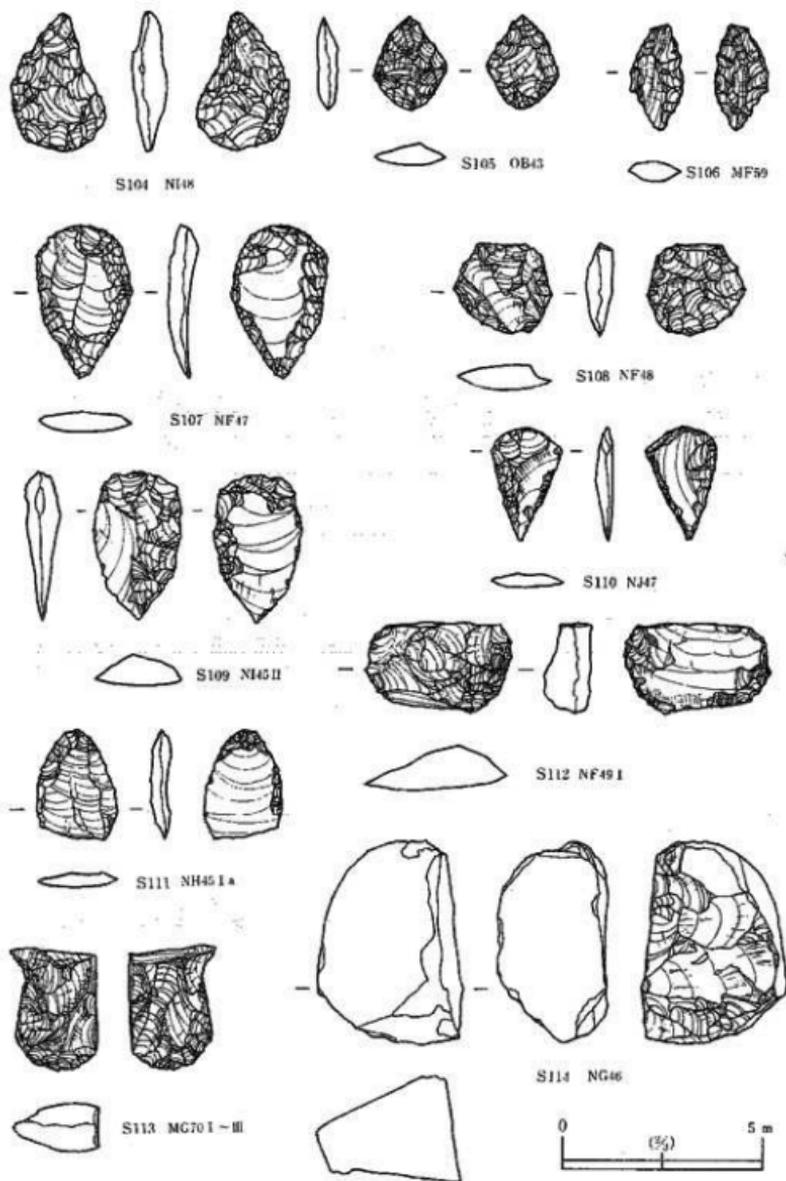
第85図 遺構外出土石器(1)石鏃・石錐



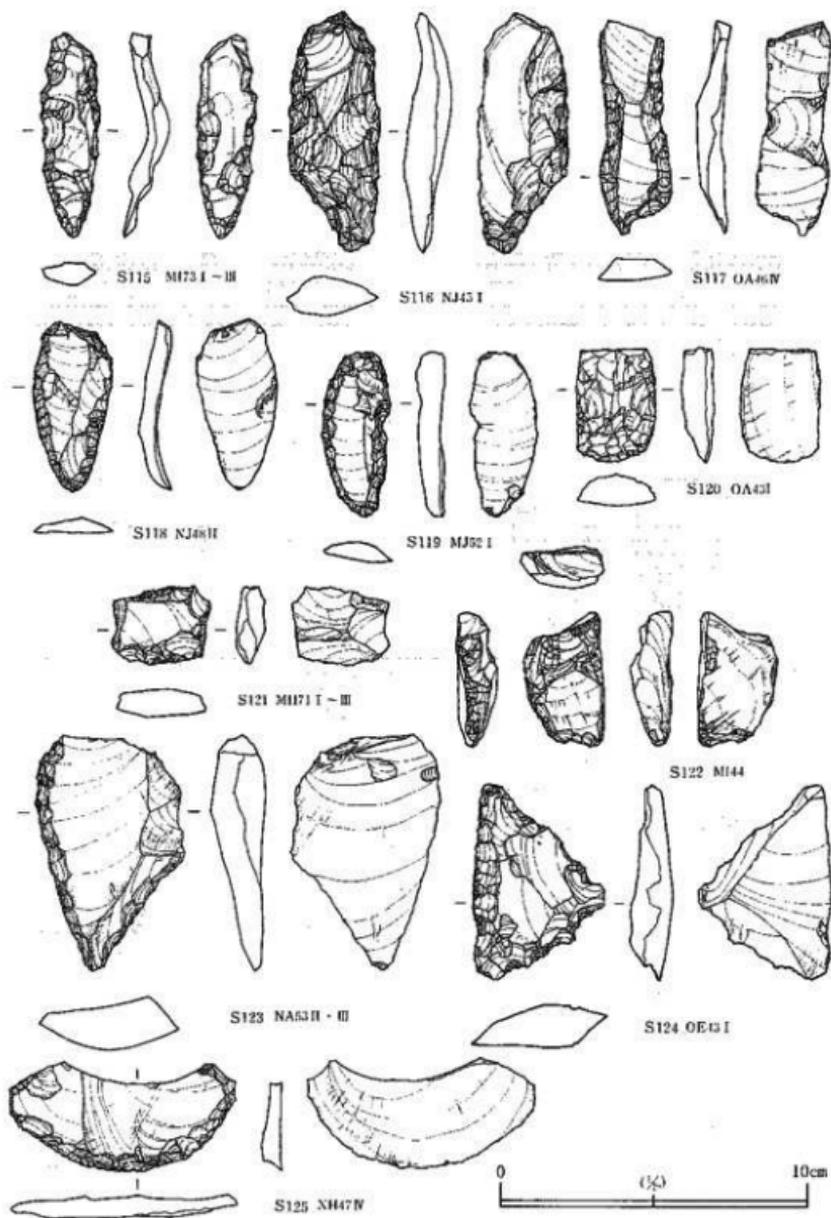
第86圖 遺構外出土石器(2)石匙

第87図 通橋外出土石器(3)石類

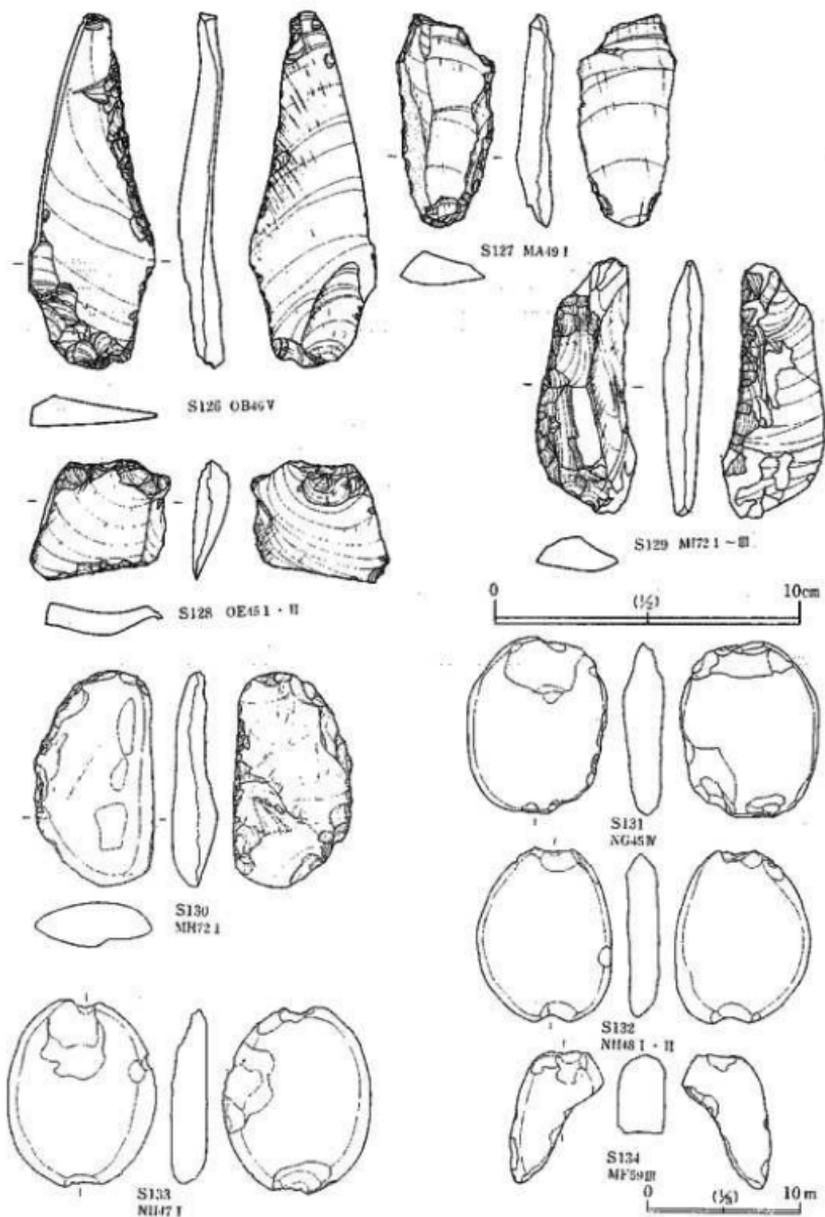




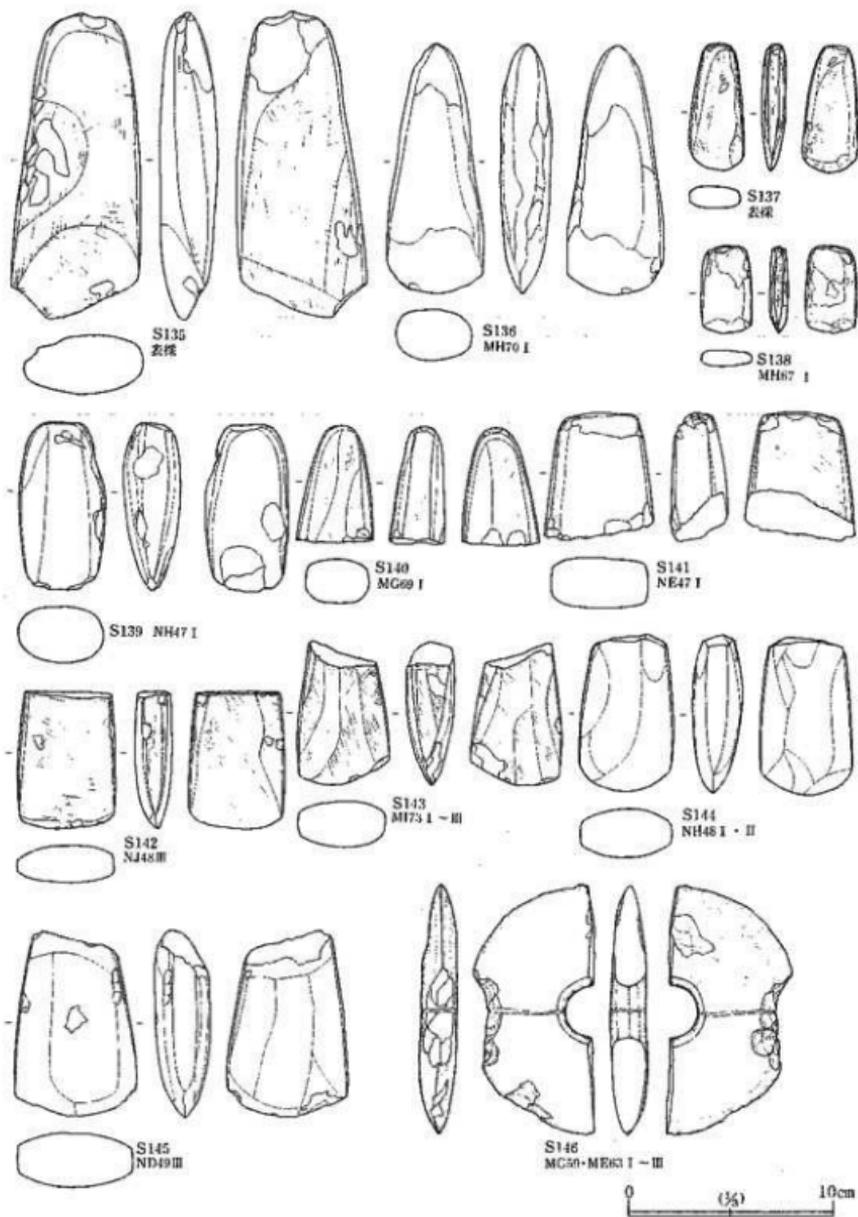
第88圖 遺構外出土石器(4)不定形石器



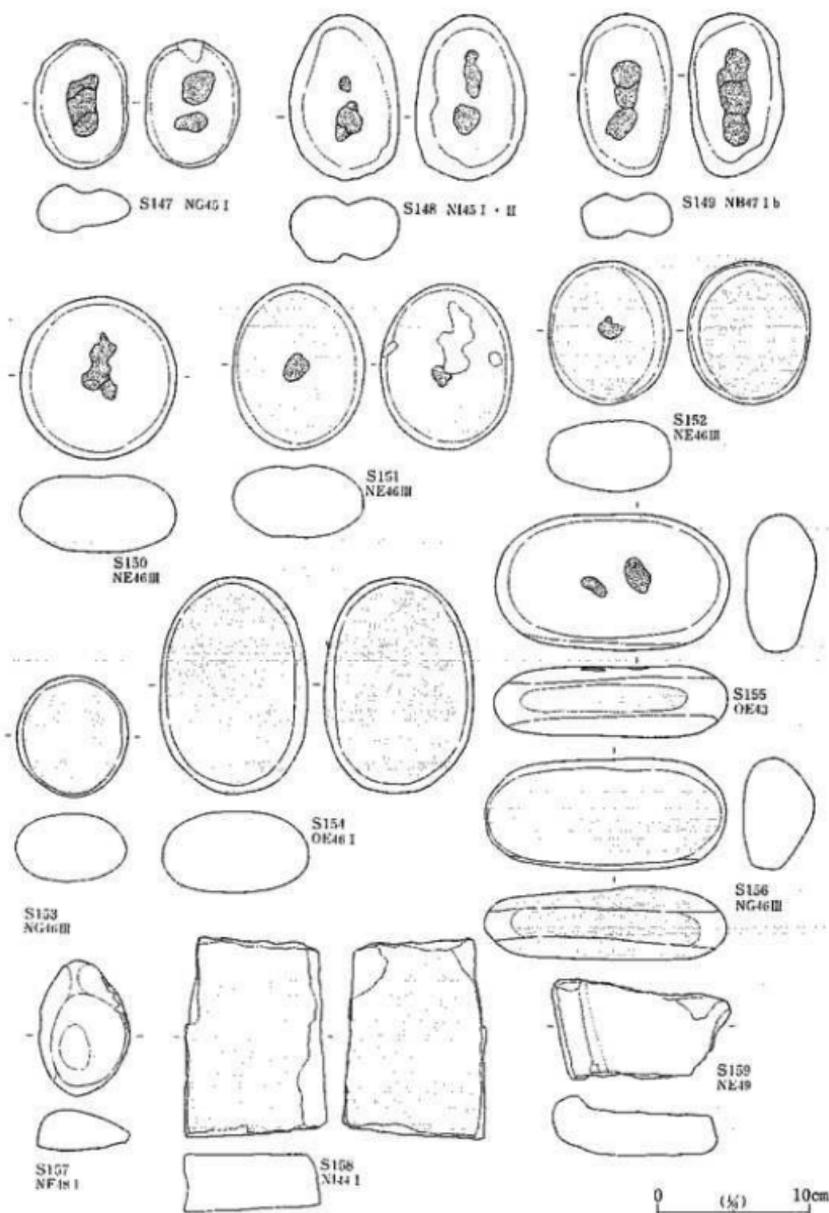
第89図 遺構外出土石器(5)不定形石器



第90圖 遺構外出土石器(6)不定形石器・石鏢



第91図 遺構外出土石器(7)磨製石斧



第92圖 遺構外出土石器(8)凹石・磨石・石皿

部には、潰れた部分が認められ、使用によるものと考えられる。

**凹石** (第92図S147～S152・S155)

拳大～1/3頭大くらいの自然礫の表面に、小さなくぼみを1～2個有する石器である。これらの中には、表裏面あるいは側面が磨られたものもある。

**磨石** (第92図S153・S154・S156・S157)

凹石と同規模の自然礫で、一部の面あるいは全面が磨られた石器である。

**石皿** (第92図S158・S159)

S158は板状の礫の2面を使用しており、S159では周境が作られている。

### 3 土製品

**土偶** (第84図1347～1349)

3点出土した。1347は脚部である。接地面の形態は楕円形を呈する。正面の左側がやや弯曲しており、右足と考えられる。1348は右側頭部と眉部の破片である。側頭部は球形を呈し表面側には耳を表す沈線が見られる。またこの部分の裏側には刺突が施されるが、頭髪を表現したものであろうか。眉部は隆帯となっており、細い刻みが施されている。1349は大型の中空土偶の背面左肩部～腕部及び腹部にかけての破片である。左腕先端にはきわめて簡略化された手指の表現が、4つの刺突によってなされている。背面全面には横位平行沈線と刺突列による文様が描かれるが、腕部の沈線は幾分斜位に施文される。

**円盤状土製品** (第93図1350～1371)

土器片を利用し、打ち欠きにより円形に整形したもので、45点ある。1350・1351には文様が残り、1350は縄文時代中期後葉、1351は同後期末葉のものである。

### 4 石製品

**円盤状石製品** (第93図S160～S162)

板状の礫の縁辺を打ち欠いて、円形に整形したものである。5点出土している。

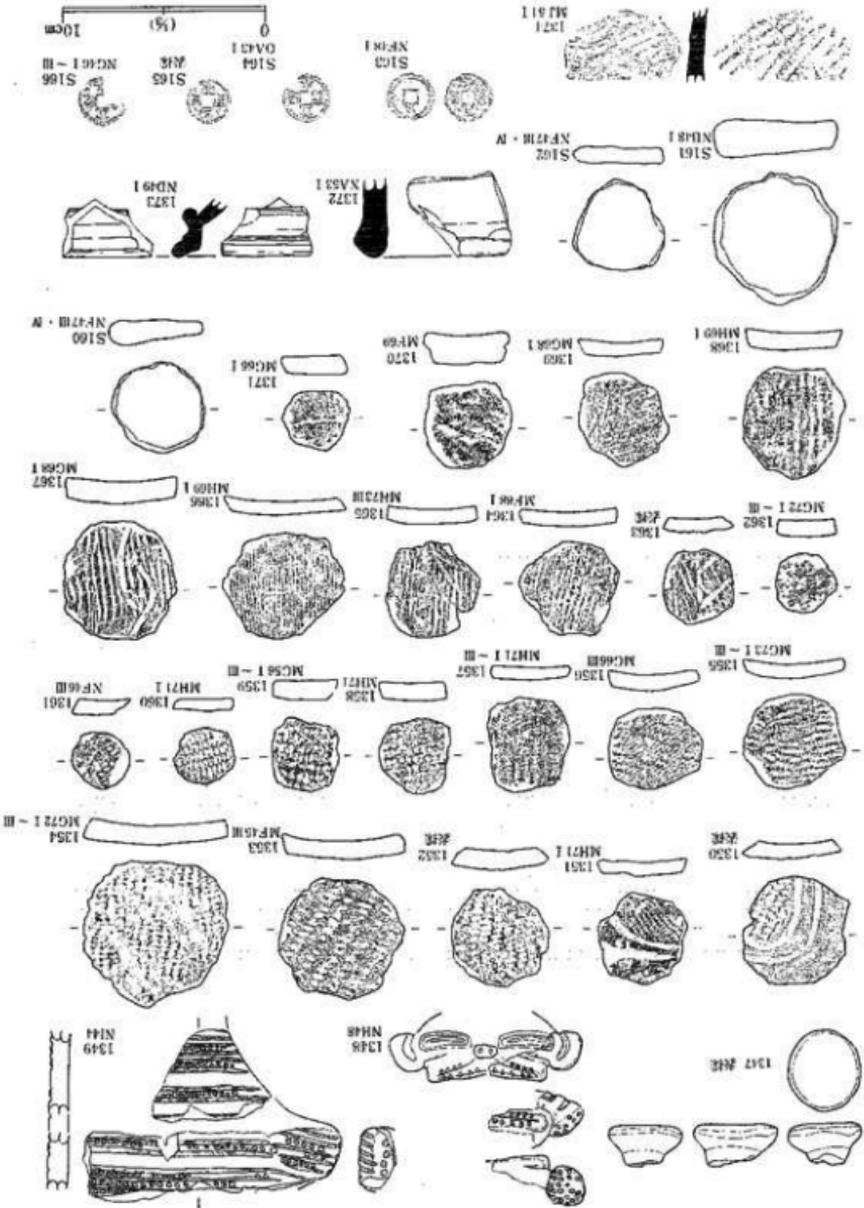
**5 須臾器** (第93図1372～1374)

3点出土した。1373は口縁部の破片で、胴部から一度屈曲して肥厚する口縁部に続いている。また屈曲部分の表面には鐮状の隆帯が付き、その上には一条の沈線が巡る。

**6 錢貨** (第93図S163～S166)

寛永通宝が7点出土したが、形状の分かる4点を図示した。

第93圖 邊構外出土製品・石製品・須惠品・古銭



第2部 邊構外出土遺物

## 第5章 自然科学的分析

## 第1節 放射性炭素年代測定

## 学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書

1989年11月9日受領致しました試料について年代測定の結果を下記のとおりご報告致します。なお年代値の算出には $^{14}\text{C}$ の半減期としてLIBBYの半減期5570年を使用しています。また付記した誤差はX線の計数値の標準偏差Xにもとずいて算出した年数で、標準偏差(ONESIGMA)に相当する年代です。また試料のX線計数率と自然計数率の差が2X以下のときは、3Xに相当する年代を下限の年代値(B. P.)として表示してあります。また試料のX線計数率と現在の標準炭素(MODEARN STANDARD CARBON)についての計数率との差が2X以下のときには、Modernと表示し、 $\times^{14}\text{C}\%$ を付記してあります。

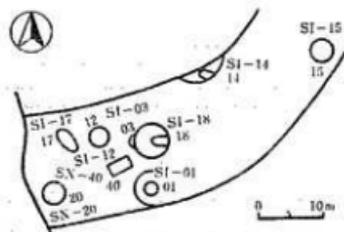
## 記

Code	No.	試料	年代 (1950年よりの年数)
G a k-14	607	Soil from 上熊沢 象潟町	3700± 80
		No. 1 6 KKNZ-S I 0 1 Pit 3	1750 B. C.
G a k-14	608	Soil from 上熊沢 象潟町	4130± 100
		No. 2 6 KKNZ-S I 0 2 第2土器埋設炉	2180 B. C.
G a k-14	186	Soil from 上熊沢 象潟町	4200± 90
		No. 3 6 KKNZ-S I 0 4 複式炉	2250 B. C.
G a k-14	186	Soil from 上熊沢 象潟町	4270± 90
		No. 4 6 KKNZ-S I 1 2 複式炉	2320 B. C.

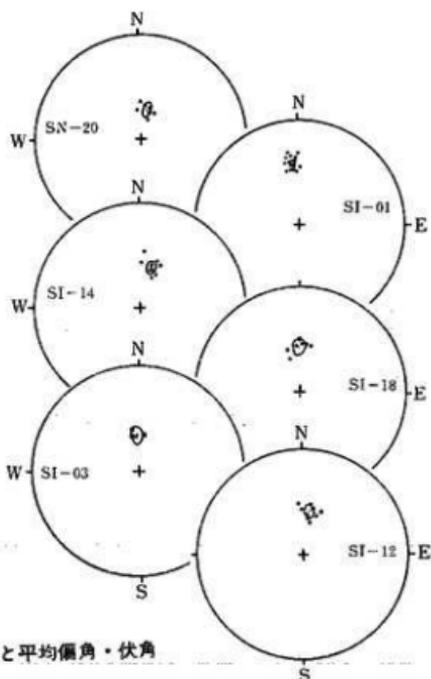
## 第2節 残留磁気測定

## 1 はじめに

土の中には磁石になることのできる磁性鉱物が数パーセント含まれている。これらの磁性鉱物のもっている磁石としての性質(磁化)は高温になると弱くなり、ある温度を超えるとなくなってしまふ。この温度はキュウリー点と呼ばれている。キュウリー点は磁鉄鉱で578℃、赤鉄鉱で670℃である。キュウリー点より高い温度まで熱せられ、冷えてキュウリー点以下の温

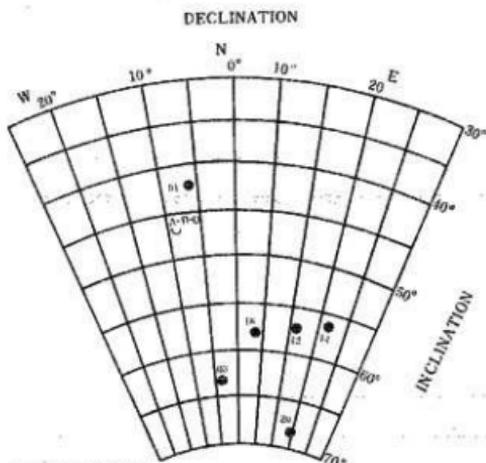


第94図 上熊ノ沢遺跡住居跡配置略図  
図に示してある所から試料を採集した。



第95図 各炉跡の測定結果と平均偏角・伏角

格内は $100^\circ$ 傾斜区間である。



第96図 上熊ノ沢遺跡測定結果

●が得られた平均偏角、伏角である。○は広岡(1977)によるA, D, 0年の偏角と伏角位置を示す。

度になると再び磁石としての性質をもつことになる。この時獲得される磁化は残留磁化と呼ばれ、地球磁場と同じ方向をもつ。つまり、地球磁場方向は磁性鉱物に保存されるわけである。再度加熱されてキュウリー一点以上に熱せられると保存された磁化方向は消えてしまい、その後冷却されたときの地球磁場方向を保存する。何回も使われた炉の床には、最後に使われて冷えたときの地球磁場方向が記憶されていることになる。従って、残留磁化方向を知ることは、過去の地球磁場方向を知ることになり、残留磁化方向から年代を推定することが可能となるのである。

## 2 目的

日本では西南日本の考古地磁気研究によって、A, D, 0年～現在までの地球磁場方向の変化が得られている(Hirooka1971, 広岡1977・1988)。残念ながら東北日本における地球磁場方向の変化はあまり報告されていない。また、縄文時代の磁化方向の変化はほとんど得られていないのが現状である。この調査の目的は、縄文時代から弥生時代にかけての地球磁場方向の変化を把握し、将来の東北日本の時間スケール決定のための基礎資料を得ることにある。

## 3 試料採集位置

上熊ノ沢遺跡は(所在地:秋田県由利郡象潟町大須郷字上熊沢3他)は鳥海山の西麓にあり、海岸から1kmほど入った、北緯39° 8'6", 東経139° 54'4"付近にあたる。遺跡は標高40m～50mの段丘の上にあつて、南及び西側には川袋川が流れている。遺跡は現在杉林と畑地になっている。

試料の採集は一辺24mmの立方体のポリカーボネイト製の容器を炉跡に挿入することにより行った。採集試料の方向と傾き(走向と傾斜)はオリエンテーターを用い、クリノメーター、プロトコンパスによって測定した。試料はSN-20から10個、SI-01から20個、SI-15から10個、SI12から10個、SI18から10個、SI03から5個、SN-40から3個、SI-12から10個の合計78個採集した。位置の概略は第94図に示してある。試料の状態としては、SI-01の実際の熱を受けた焼土から採集したものであるが、他の試料は焼土を取り除いた後の状態で採集したものである。

## 4 自然残留磁化(NRM)の測定

自然残留磁化は試料が保持している残留磁化のことで、今の場合、キュウリー一点以上に熱せられて冷却したときに獲得した熱残留磁化が主成分であると考えてもよいであろう。磁化測定はスピナー磁力計(PRINCETON APPLIED RESEARCH社製 MODE

L SM-2) により行った。測定によって得られた磁化方向が過去の地球磁場そのものであると考えるのは誤りである。なぜなら残留磁化を獲得してから長時間経過しているため保存している磁化方向とは異なった方向の成分が二次的に加わっている可能性があるためである。二次的な磁化成分を消去してはじめて当時の地球磁場方向が再現できる。この方法として交流磁場がよく用いられる。交流磁場は、静磁場がほとんど無い場所で十分強い交流磁場を作用させ、その振幅を0に漸減する手法である。上熊ノ沢遺跡の試料についてもこの交流磁場を適用した。

## 5 結果

求めた残留磁化方向は偏角、伏角を用いて表現することが多い。偏角 (Declination) は磁北からのずれの角度で、時計回りの方向を正とする。伏角 (Inclination) は水平面と磁化方向とのなす角である。水平面から下方向が正 (ノーマル) である。データ処理には Fisher (1953) の方法を用いて、精密度パラメーター (K)、95%信頼区画 ( $\alpha_{95}$ ) を求めた。第2表にその結果を示す。得られた測定値のうち試料の状態などで統計処理に不適当なデータは省略してある。

上熊ノ沢遺跡は考古学的見地からの年代は縄文時代であるとされている。いずれにしても、縄文時代の磁化方向はほとんど報告されていないのでこれらのデータは基礎データとして価値のあるものである。

第2表 上熊ノ沢遺跡炉跡残留磁気調査

Sample	N	ODF (Oe)	Dec ( $^{\circ}$ )	Inc ( $^{\circ}$ )	K	$\alpha_{95}$ ( $^{\circ}$ )	炉の形態	時代
SN-20	7	80	14.58	67.77	188.27	4.41	複式炉	縄文中期後葉
SI-01	15	70	-6.46	42.44	191.69	2.77	石囲炉	縄文最終末-弥生
SN-15	10	60	-	-	-	-	複式炉	縄文中期後葉
SI-14	10	60	17.22	56.88	116.34	4.50	複式炉	縄文中期後葉
SI-18	7	60	0.53	55.47	104.89	5.92	複式炉	縄文中期後葉
SI-03	4	60	-3.77	62.45	270.06	5.60	複式炉	縄文中期後葉
SN-40	3	60	-	-	-	-	土器埋設炉	縄文中期後葉
SI-12	9	50	10.89	56.68	128.34	4.56	複式炉	縄文中期後葉

Note: N: 統計処理に用いた試料数、ODF:磁化のまとまる交流磁場、Dec:偏角、Inc:伏角、K: 精密度パラメーター、 $\alpha_{95}$ : 95%信頼区画。

参考文献

- Fisher, R (1953) : Dispersion on a spherer, Proc. Roy. Soc. A., 217, 295-305
- Hirooka, K (1971) : Archaeomagnetic study for the past 2,000 years in southwest Japan, Mem. Fac. Sci., Kyoto Univ., Ser. Geol. Mineral., 38, 167-207.
- 広岡公夫 (1977) : 考古地磁気学および第四紀磁気研究の最近の動向, 第四紀研究, 15, 200-203
- 広岡公夫 (1988) : 古地磁気・考古地磁気編年による年代推定 地質学論叢, 第39号, 305-318

### 第3節 鉱物分析及び屈折率測定

#### 1 はじめに

本遺跡は、秋田県南部鳥海山火山の西麓に位置する遺跡である。発掘調査では縄文時代の住居跡と遺物が検出されている。本分析では、遺跡の標識的な土壌断面の鉱物分析および含まれる火山ガラスの屈折率測定を行い、すでに噴出年代が明かにされている示標テフラの層位を把握することにより、土層の堆積年代に関する資料を得る。

#### 2 鉱物分析

##### (1) 分析方法

東北地方一帯には、第四紀に噴出したテフラ（火山砕屑物）が多く分布している。この中には噴出年代が知られているテフラがあり、示標テフラと呼ばれ様々な編年学的研究に用いられている。ここでは、鉱物分析を行い、重鉱物組成および軽鉱物組成の層位ごとの変化から、鉱物分析に特徴のある示標テフラの検出を試みた。分析の対象とした土壌試料5点の層位を、第99図に示す。

分析は、次の手順で行われた。

- ① 資料50gを秤量。
- ② 超音波洗浄と分析篩により、泥分（1/16mm以下）を除去。
- ③ 80℃で恒温乾燥。
- ④ 分析篩により、1/4-1/8mmの粒子を篩別。
- ⑤ テトラブプロモエタン（比重2.96）により、重液分離。
- ⑥ 重鉱物、軽鉱物各々250粒を偏光顕微鏡下で同定し、重鉱物組成および軽鉱物組成を求める。

## (2) 重鉱物組成

重鉱物組成をダイアグラムにして第98図に、その内訳を第3表に示す。各試料の重鉱物組成は、次のように表される。

試料番号1：斜方輝石>不透明鉱物>単斜輝石>角閃石>カンラン石

試料番号2：斜方輝石≧不透明鉱物>単斜輝石>角閃石>カンラン石

試料番号3：不透明鉱物≧斜方輝石>角閃石>単斜輝石≧カンラン石

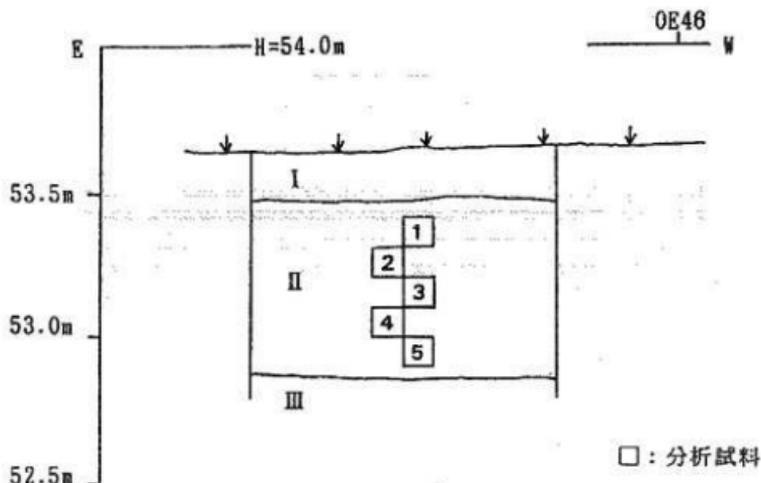
試料番号4：不透明鉱物>斜方輝石>単斜輝石>カンラン石

試料番号5：不透明鉱物>斜方輝石>単斜輝石≧角閃石>カンラン石

個別の鉱物の量比には変化が認められるものの、大きく組成が変化する層準は認めることができない。また、1 m堆積のテフラの可能性を示す指標となる、火山ガラスが付着した鉱物も認めることができない。

## (3) 軽鉱物組成

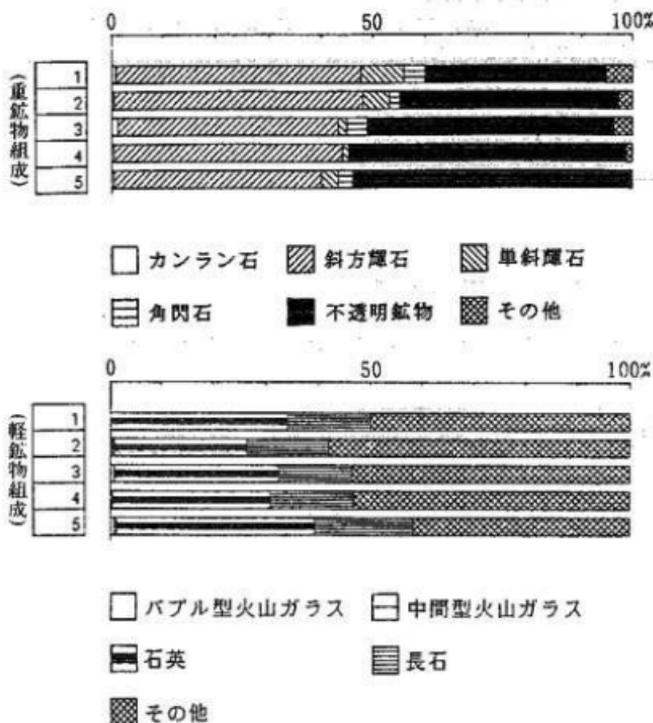
軽鉱物組成をダイアグラムにして第98図に、その内訳を第3表に示す。おそらく砂丘砂起源と考えられる石英の占める割合が大きい。一方、長石の割合はそれほど小さくなく、また風化しているものが多い。石英および長石の割合は、層位によって大きく変化することはない。また、とくにテフラの指標とされることが多い火山ガラスは、試料番号2以下の試料でみとめられるものの、その量は非常に少ない。



第97図 上熊ノ沢遺跡 鉱物分析試料の層位

第3表 上熊ノ沢遺跡 鉱物組成

試料番号	重 鉱 物 組 成						同定鉱物粒数	軽 鉱 物 組 成					同定鉱物粒数
	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	不透明鉱物	その他		バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	石英	長石	その他	
1	2	117	21	10	87	13	250			85	40	125	250
2	1	119	13	5	105	7	250	1	1	64	39	145	250
3	3	105	4	10	119	9	250	2		79	35	134	250
4	1	109	3		134	3	250		1	76	40	130	250
5	1	99	8	7	134	1	250	2	1	95	48	104	250



第98図 上熊ノ沢遺跡 鉱物組成ダイアグラム

#### (4) 鉱物分析の結果

鉱物分析によって明らかにされた重鉱物組成および軽鉱物組成の層位ごとの変化からは、テフラの降下層準を求めることはできなかった。

#### 3 屈折率測定

野外観察や鉱物分析などによって検出されたテフラと、示標テフラとの同定には、とくに火山ガラスや鉱物の屈折率を測定することがとくに有効とされている(新井, 1972)。本分析でもテフラに含まれる火山ガラスや鉱物の屈折率測定2点を予定していたが、示標テフラを検出できないことから、測定不可能であった。

#### 参考文献

新井房夫(1972)「斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロロジーの基礎的研究—」『第四紀研究』11, P. 254-269.

### 第4節 樹種同定

#### 1 試料

試料は縄文時代のもとのされる住居跡S I 18の床面から検出されたもの1点で、同住居に使用された木材とされるが詳細は不明である。

#### 2 方法

試料を乾燥させたのち木口・柀目・板目の3断面を作成、走査型電子顕微鏡(無蒸着・反射電子検出型)で観察・同定した。同時に電子顕微鏡写真図版(図版33-2)も作成した。

#### 3 結果

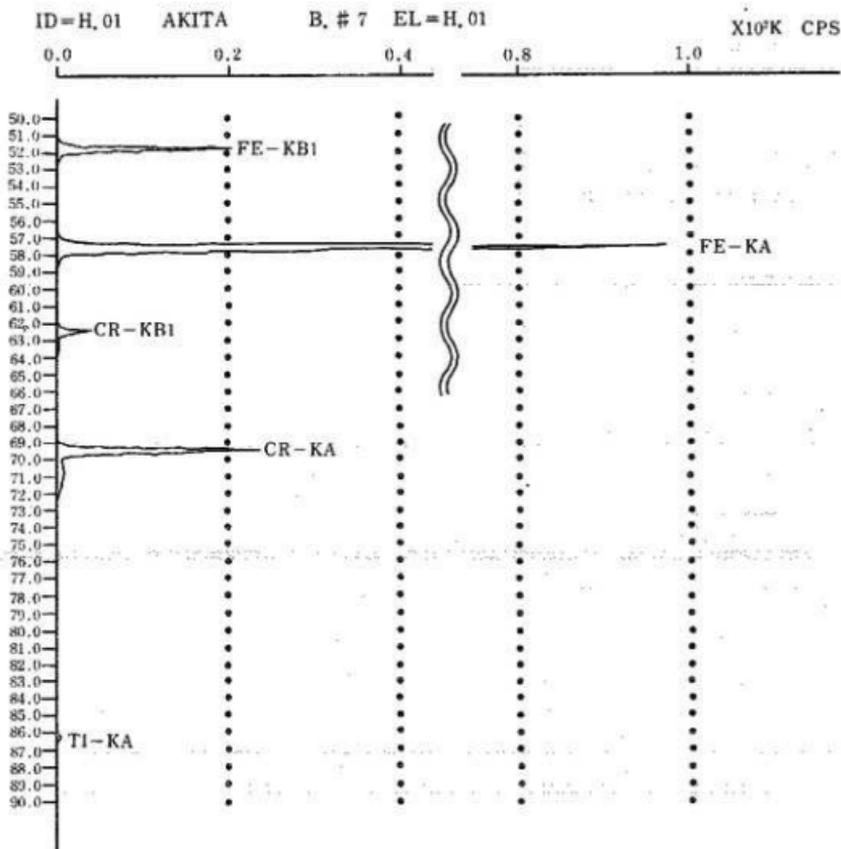
試料はクリ(*Castanea crenata*)に同定された。試料の主な解剖学的特徴や現生種の一般的な性質は次のようなものである。

環孔材で孔圍部は広く、孔圍外でやや急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大導管は単独、横断面では円形～楕円形、小導管は単独および2～3個が斜(放射)方向に複合、横断面では角張った楕円形～多角形、単穿孔をもち、嚢孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単(～2)列、1～20細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。クリは北海道西南部・本州・四国・九州の山野に自生し、また植栽されるブナ科の落葉高木である。材はやや重硬で、強度は大きく、加工はやや困難であるが耐久性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材、楡木や海苔粗朶などの用途が知られている。

### 第5節 蛍光X線分析

試料は、上熊ノ沢遺跡S I 01住居跡床面より出土した鉢形土器内に充填されていたものである。検出時点では銀色に発色する土器内部のものについて、全く不明な状態であったが、幸にも岩手県立博物館において分析して頂く機会を得た。蛍光X線分析は、試料を土器から取り出した後、努めて土を除き黒いものをかき集めて行われた。

蛍光X線分析装置による定性チャートを第99図に示す。検出元素はFe (鉄) とTi (チタン) であるが、量的にはFe (鉄) が圧倒的に多い。分析して頂いた木村克則からは不純物が非常に少ないことから砂鉄と考えられる旨のご教示を得た。



第99図 蛍光X線分析装置による安定チャート

## 第6章 まとめ

調査では16軒の竪穴住居跡を含む総数49遺構とコンテナ110箱に及ぶ遺物が出土した。出土土器には、縄文時代早期から弥生時代前期初頭までのものがあり、各時期の遺物が時期毎に比較的まとまっている。また縄文時代中期後葉の土器群と後期前葉の土器群は、分布の相違が明瞭であり、時期毎の土地利用の差を反映したものと考えられる。遺構では、南側の台地上に複式炉を持つ住居跡群が多く存在し、その重複関係などから集落の変遷を示している。以下では、住居跡群の変遷と出土土器の位置付けについて記述し、まとめとする。

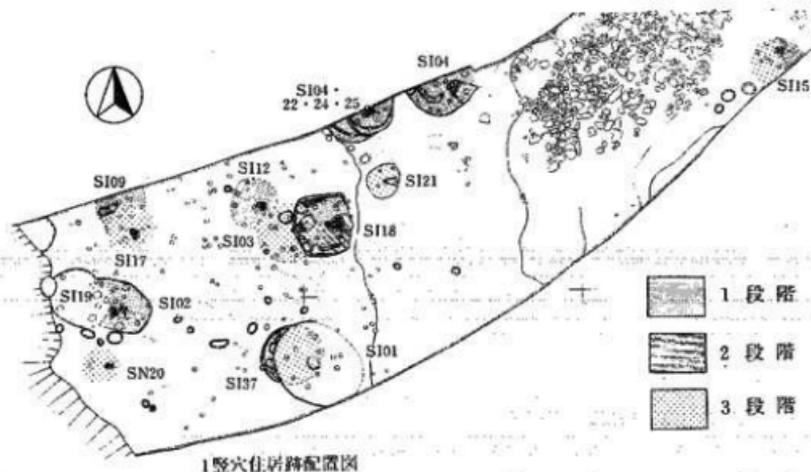
## 1 竪穴住居跡の変遷について

調査の結果、複式炉を有する竪穴住居跡を11軒検出した。これらの住居跡は、炉に使われた土器と炉の特徴から縄文時代中期後葉に位置付けられる。ここでは、炉跡として扱ったSN20を含めて住居跡群の変遷を考えてみる。

その際、視点としたのは第1に重複関係、第2に出土土器、第3に複式炉の形態である。第1についての詳細は第4章第1節で記述したが、その他に建て替え[S I 14・18]や、炉の作り替え[S I 02・09・15]を行った住居があることから、同一住居での新旧が認められる。第2については、炉の埋設土器以外に住居に直接かかわる出土土器がなかったため、埋設土器の分類に重点を置いた。第3については、前庭部の有無〈イ・ロ〉、石組部の形態〈方形・扇形〉、住居内での土器埋設部の位置〈A～C〉、埋設土器の据え方〈①～④〉から、炉形態の系列変化を考えた(第100図)。上の住居跡群は、土器分類から群2類と同3類の段階に大別でき、前者は重複関係等からさらに2段階の変遷が考えられる。以下、炉形態の系列変化を加えた各段階の様相を述べる。

1段階には、S I 02・09・14・18の旧期が相当する。炉形態は、前庭部を有し石組部に土器を斜位に埋設する(イ)①、石組部に土器をもたない(イ)③、前庭部がなく石組部にも土器を持たない(ロ)③の3系列がある。石組部は方形・扇形に組まれ、住居内での土器埋設部の位置はA～Cと様々である。2段階に相当するS I 04と重複するS I 22・24・25はこの段階に含まれるが、切り合いの推移から、この段階はさらに少なくとも3段階の細別が可能である。

2段階は、前段階の新期にあたる住居の他にS I 04・12・15(旧期)が相当する。炉の形態は(イ)①土器埋設石組部から派生したと考えられる(イ)②が出現し、(イ)③・(ロ)③は土器埋設部を主体とする形に変化するが、(ロ)③は新たに(ロ)④として継承されている。この段階の炉の特徴は、埋設土器の斜位傾向が強く、石組部は末端が弧状を呈する扇形に組まれ



1 竪穴住居跡配置図

上器分類	VI群2類		VI群3類	埋設土器の据え方	複式炉の構成	   3土器埋設位置模式図
段階	1段階	2段階	3段階			
変遷	① SI14 (旧) → SI14 (新) C SI18 (旧) → SI18 (新) B SI15 (旧) B (イ) ② SI12 A SI15 (新) C SI21 A			① 土器埋設部正位・斜位 ② 土器埋設石組部系斜位 ③ 土器埋設部正位・斜位 ④ 土器埋設部正位	(イ) 土器埋設部 石組部 前庭部 (ロ) 土器埋設部 石組部	(イ)① (イ)② (イ)③ (ロ)④
	③ SI02 (旧) → SI02 (新) C SI09 (旧) C → SI09 (新) C		SI03 C			
	(ロ)					
	SI22→24→25 → SI04 A		SI17 B SI37 C SN20			
石組部形態	方形・扇形	扇形	方形			
住居内土器埋設部位置	A・B・C	A・B・C	C主体			

2 竪穴住居跡変遷図

4 複式炉模式図

第100図 複式炉を有する竪穴住居変遷図

る点 5 ある。

3段階はS I 03・15 (新期)・21・37・S N20が相当する。炉形態は(イ)②・③・(ロ)④の3系列がある。(イ)①は(イ)②に吸収された形で消滅し、(イ)③は1段階に戻っている。石組部は方形に組まれ、住居内での土器埋設部の位置が壁寄りにあるCが主体となる。さらに、前庭部を有する複式炉の埋設土器は斜位に据えられ、前庭部のない複式炉の埋設土器は正位に据えられる特徴がある。

以上で各段階の様相を外観したが、各段階での住居軒数を見ると1段階が5軒程度、2段階が7軒、3段階が6軒となり、土器分類以外に炉形態からも2・3段階間に画期が窺える。

また、今回の調査では、上記の他にS I 01・19の2軒の竪穴住居跡を検出した。S I 19は上述の3段階以降に位置付けられるものの、縄文時代後期前葉までは下らない時期である。またS I 01は県内で調査例が増えつつある弥生時代前期初頭の住居跡で、蟹沢Ⅱ式期に比定される。

## 2 出土土器について

本調査で出土した土器は、胎土・焼成・文様構成・文様表出手法・縄文などの特徴に着目し、I～XI群に群別された。また、各群内が更に類別されたものもある。様々な時期の土器があり、分類は必ずしも明確でないものもあるが、以下では各群の編年上の位置について概観する。

I群は貝殻沈線文土器様式の中に位置付けられる土器群である。1類中には文様構成の点で2種類のものが存在する。また2類の一部は岩井堂洞穴遺跡第4洞穴第9層出土遺物に類例がある。II群は県内でも資料が増えつつある表裏縄文の土器である。ただし、1類を特徴づける細隆線は、条痕文土器様式に位置付けられる槻ノ木1式との関係も考えられる。県内では本荘市の神沢遺跡に類例がある。III群は前期初頭に位置付けられる土器である。1類aは胎土や器面の状態から長七谷地III群との関係が、また1類bは文様表出手法の点で花積下層式との関係が考えられる。2類は東北南半に分布する土器群であり、上川名Ⅱ式に關係する。IV群1類は円筒下層d式に比定され、同2類は前期末葉から中期初頭にかけて日本海側の庄内地方に分布する吹浦式に比定されるものを含んでいる。VI群は大木9式、大木9・10中間式に比定されるものである。1～4類は概ね時間的変遷に対応するものと考えられるが、特に2類としたものについては、文様構成と文様表出手法の点で細分されうるものである。VII群は大木10式の最終段階から門前式併行期に位置付けられる。S I 14・19の埋土中から出土した遺物がまとまった資料である。VIII群は門前3式ないしは宮戸I b式併行の土器で、県内では八木遺跡に類例がある。IX群は加曾利B式併行期に比定される。X群は後期終末の宮戸Ⅲ式から晩期の大洞B式期に比定できる。XI群は大洞A式から弥生時代前期の青木畑式併行期に比定される。特に頭部に膨らみをもつ小型の深鉢(甕)形土器は庄内地方との関係を示すものである。

## 主要参考文献

- 山下孫雄 「岩井洞窟 第4洞穴第8次発掘調査報告書」雄勝町教育委員会 1979 (昭和54年)
- 石川恵美子 「岩井洞窟における早期貝殻沈線土器の系統と変遷」『秋田県立博物館研究報告』第15号 秋田県立博物館 1990 (平成2年)
- 本荘市教育委員会 「神沢海岸遺跡」 1971 (昭和46年)
- 加藤 孝 「宮城県上川名貝塚の研究」『宮城学院研究論文集』I 1951 (昭和26年)
- 小高町教育委員会 「宮田貝塚」 1975 (昭和50年)
- 青森県教育委員会 「長七谷地貝塚」青森県埋蔵文化財調査報告書第57集 1980 (昭和55年)
- 相原淳一 「東北地方における縄文時代早期後葉から前期前葉にかけての土器編年—仙台周辺に分層発掘資料を中心に—」『考古学雑誌』第76巻第1号 1990 (平成2年)
- 山形県教育委員会 「吹浦遺跡 第3・4次緊急発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第120集 1988 (昭和63年)
- 福島県教育委員会 「真野ダム関連遺跡発掘調査報告XIV 上ノ台A遺跡(第2次)」福島県文化財調査報告書第230集 1990 (平成2年)
- 福島市教育委員会 「昭和63年度市道原宿愛宕原1号線建設工事関連遺跡調査報告 愛宕原遺跡」福島県埋蔵文化財報告書第31集 1989 (平成元年)
- 福島県教育委員会 「塩沢上原A遺跡」福島県立博物館調査報告第10集 1985 (昭和60年)
- 丹羽一茂 「大木式土器」『縄文文化の研究』4 雄山閣 1981 (昭和56年)
- 小林 克 「内村遺跡出土土器と住居群の変遷」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第3号 1988 (昭和63年)
- 柳沢清一 「大木9-10式土器論(上)」『先史考古学研究』第3号 1990 (平成2年)
- 柳沢清一 「大木10式土器論」続考」『北奥古代文化』第19号 1988 (昭和63年)
- 池谷信之 「東北地方における縄文時代中期末葉土器の変遷と後配土器の成立」『沼津市博物館紀要』12 1988 (昭和63年)
- 本間 宏 「東北地方南部における縄文後期前葉土器群の変遷過程」『縄文後期の諸問題』縄文セミナーの会 1990 (平成2年)
- 大迫町教育委員会 「岩手県稗貫郡大迫町観音堂遺跡—第1次～6次発掘調査報告書」大迫町埋蔵文化財報告第11集 1986 (昭和61年)
- 秋田県教育委員会 「八木遺跡発掘調査報告書」秋田県埋蔵文化財調査報告書第181集 1989 (平成元年)
- 山形県教育委員会 「生石2遺跡発掘調査報告書(3)」山形県埋蔵文化財調査報告書第117集 1987 (昭和62年)
- 秋田市教育委員会 「地蔵田B遺跡・台A遺跡」『秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書』 1986 (昭和61年)
- 東根市史編纂委員会 「東根市史」別巻上 考古・民俗篇 1989 (平成元年)
- 畑隆隆 「東日本における弥生文化の受容」『考古学雑誌』第73巻1号 1987 (昭和62年)



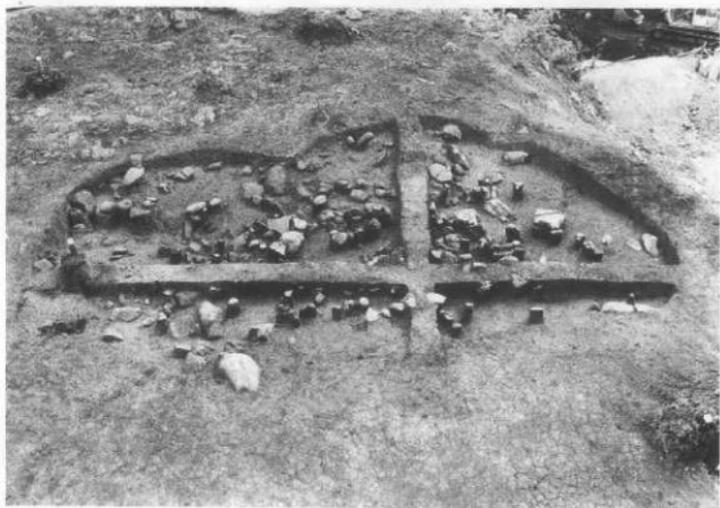
1 調査前近景 (北東▶)



2 航空写真



1 S101竖穴住居跡完掘状況(南西▶)



2 S102・19竖穴住居跡遺物出土状況(北▶)



砂井(南西▶)



81

砂1埋設土器



82

砂2埋設土器



83

砂3埋設土器



84

砂4埋設土器

S102竪穴住居跡



完軀狀況 (北東▶)



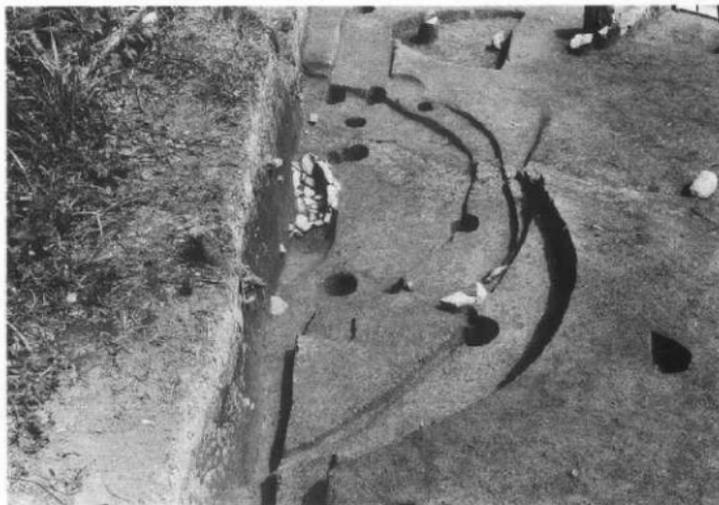
完軀 (南▶)



埋設土器

565

S I 03 竪穴住居跡



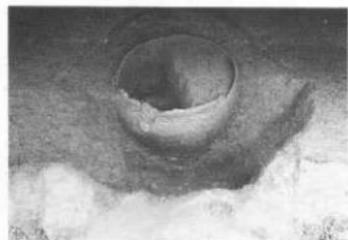
完掘状況 (西▶)



S 104石組部 (南東▶)



S 104石跡 (南東▶)



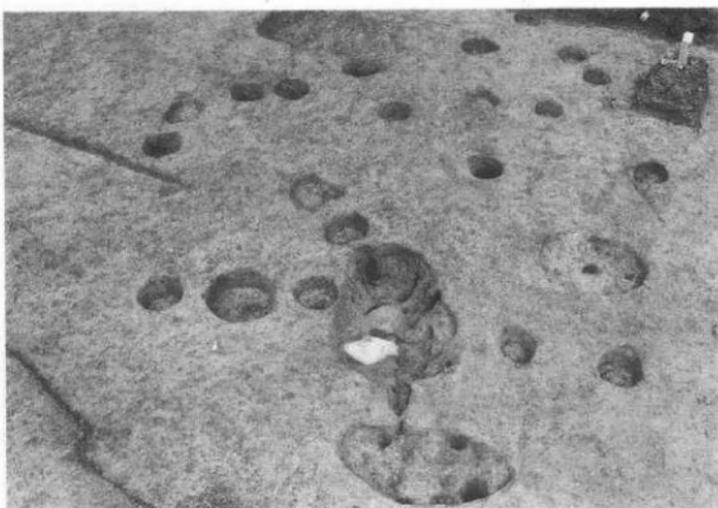
S 104土器埋設部 (南東▶)



S 104埋設土器

230

S 104・22・24・25竪穴住居跡



完掘状況 (南東▶)



S I 09貯跡 (南東▶)



S I 17貯跡 (南東▶)



305

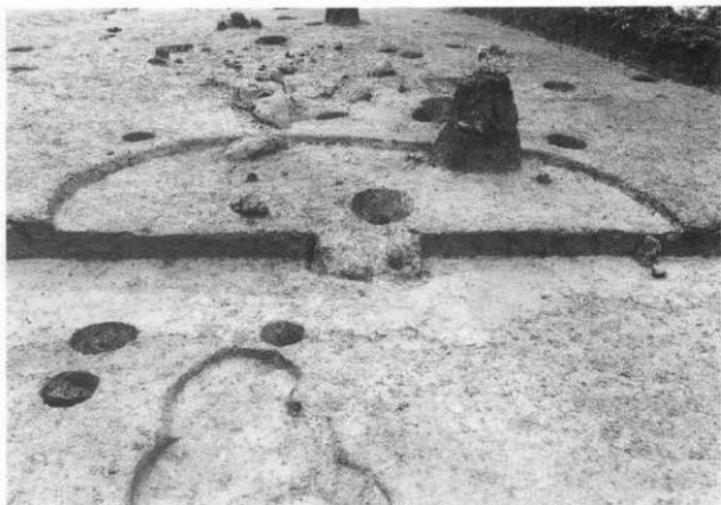
S I 09埋設土器



306

S I 17埋設土器

S I 09・17竪穴住居跡



完掘状況(東▶)



炉跡(北▶)



土器埋設部



埋設土器

331



埋設土器

332

S112竪穴住居跡



完掘状況 (南▶)



炉跡 (北西▶)



土器埋設部 (南東▶)



埋設土器

342



石組部埋設土器

343

S 114 竪穴住居跡



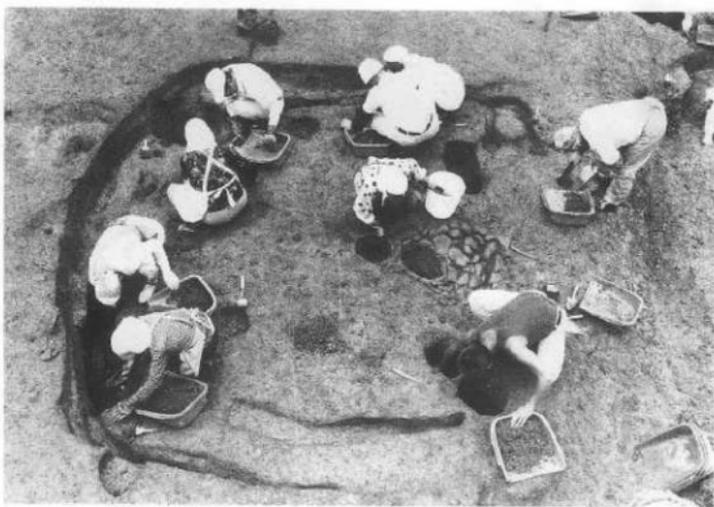
炉跡（北東▶）



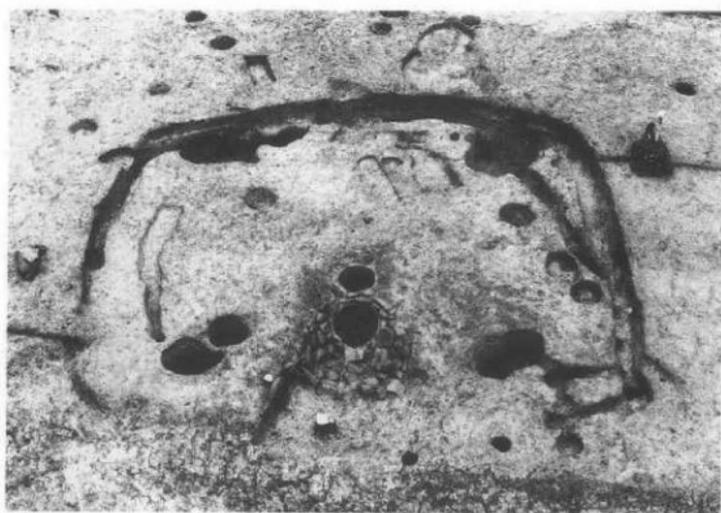
埋設土器

461

1 S I 15 竪穴住居跡



2 S I 18 竪穴住居跡精査状況（南▶）



発掘状況 (東▶)



炉跡 (東▶)



炉断ち割り (北▶)



463

埋設土器



462

石組部埋設土器

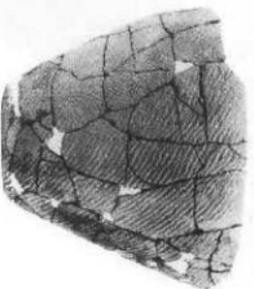
S 118 竪穴住居跡



完備状況(東▶)



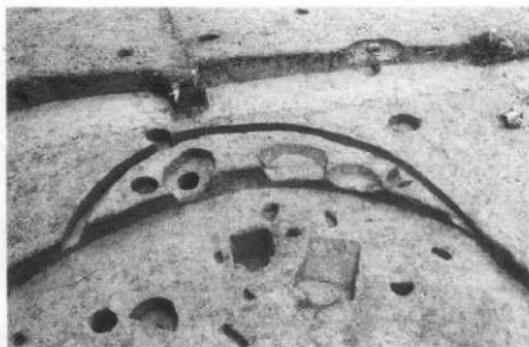
右側(東▶)



厚邊土器

526

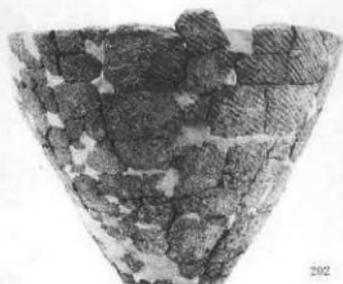
S121壘穴住居跡



完備状況 (東▶)



炉跡 (北西▶)



202

埋設土器

S 137 竪穴住居跡



SK I 07 竪穴状遺構完掘状況 (東▶)



SN 05 炉跡断面 (南東▶)



611

SN 05 埋設土器



612

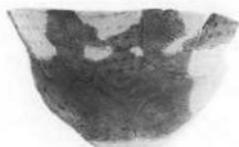
SN 05 埋設土器



SN 20 炉跡完掘状況 (東▶)



SN 40 炉跡断面 (南▶)



613

SN 20 埋設土器



614

SN 40 埋設土器

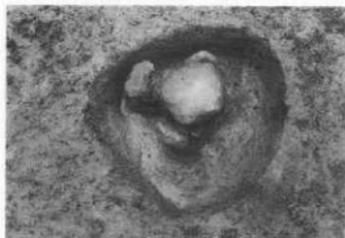
SK I 07 竪穴状遺構 SN 05・20・40 炉跡



S K08土坑遺物出土状況(北▶)



S K13土坑遺物出土状況(西▶)



S K49土坑精査状況(南▶)



S K52土坑断面(北▶)



S K53土坑検出状況(北▶)



S K54土坑検出状況(西▶)



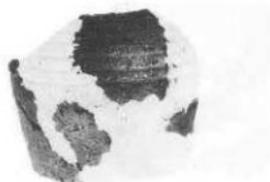
S R10土器埋設意構断ち割り(南東▶)



685

S R10埋設土器

S K08・13・49・52・53・54土坑 S R10土器埋設遺構



1 S 101



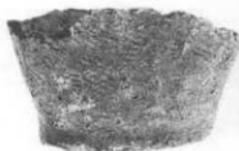
2 S 101



3 S 101



4 S 101



5 S 101



6 S 102



7 S 119



8 S 119

遺構内出土土器 (1)



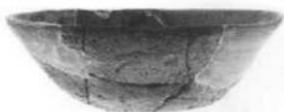
1 S 119



2 S 119



3 S 119



4 S 119



5 S 103



6 S 103



7 S 104



8 S 112

遺構内出土土器 (2)



344

1 S114



345

2 S114



346

3 S114



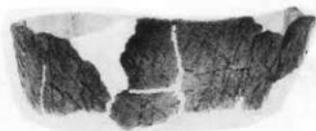
347

4 S114



348

5 S114



349

6 S114



350

7 S114



351

8 T114

遺構内出土土器 (3)



465

1 S I 18



466

2 S I 18



566

3 S K I 07



567

4 S K I 07



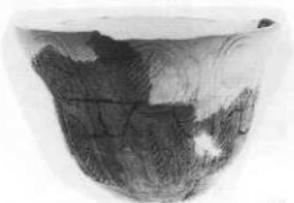
619

5 S K 08



620

6 S K 13



621

7 S K 29



622

8 S K 35

遺構内出土土器 (4)



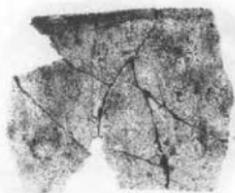
869



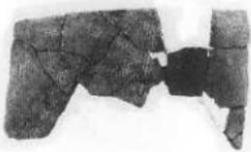
876



877



878



879



880



881



883

遺構外出土器(1)



882



881



1062



1062



1063



1063



1064

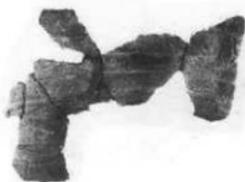


1141

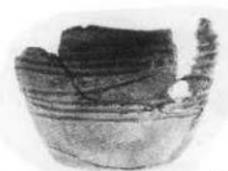
遺構外出土器(2)



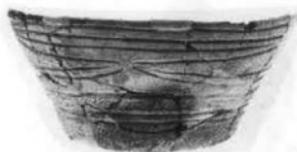
1103



1164



1187



1189



1191



1194

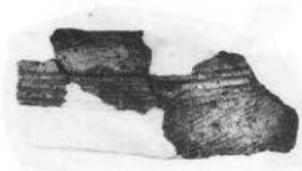


1195



1197

遼寧外出土土器 (3)



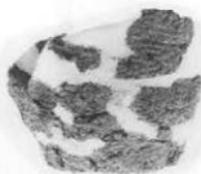
1199



1196



1201



1202



1203



1204

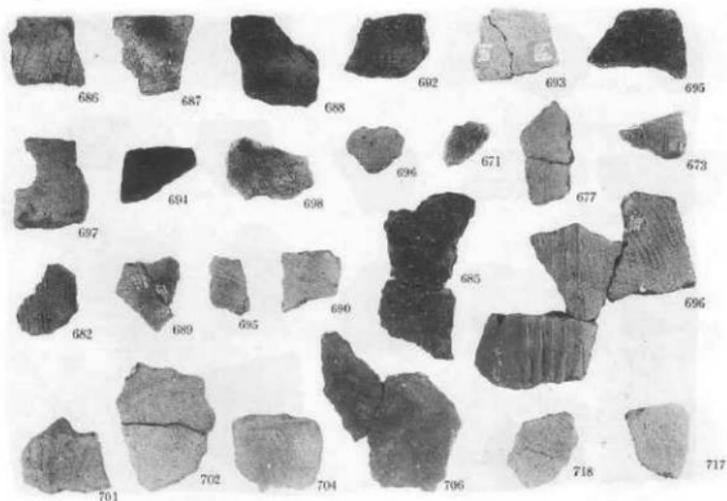


1205

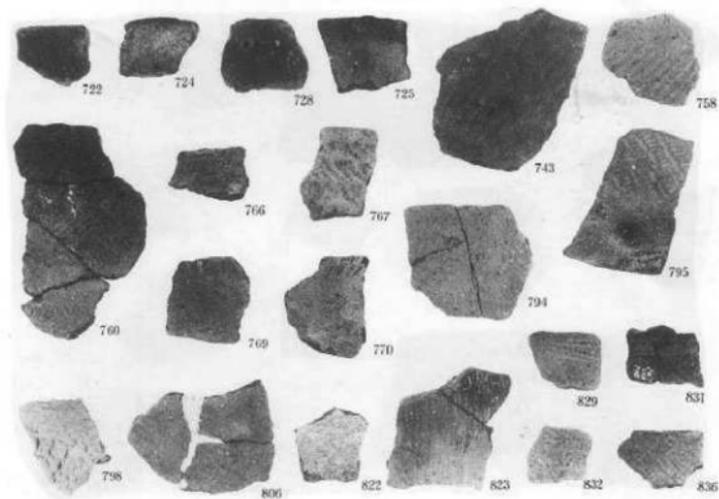


1206

遺構外出土土器 (4)

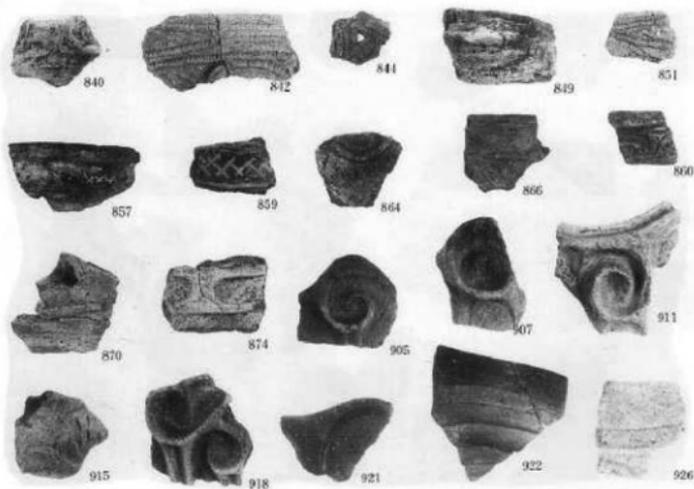


1 I・II群土器

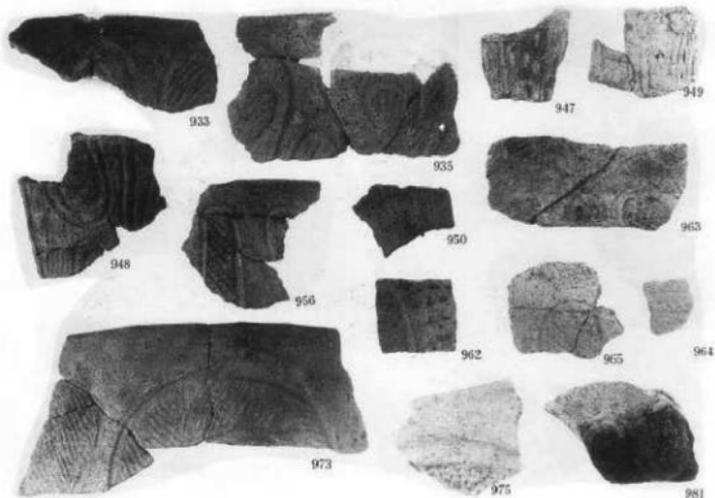


2 III群土器

遠橋外出土土器(5)

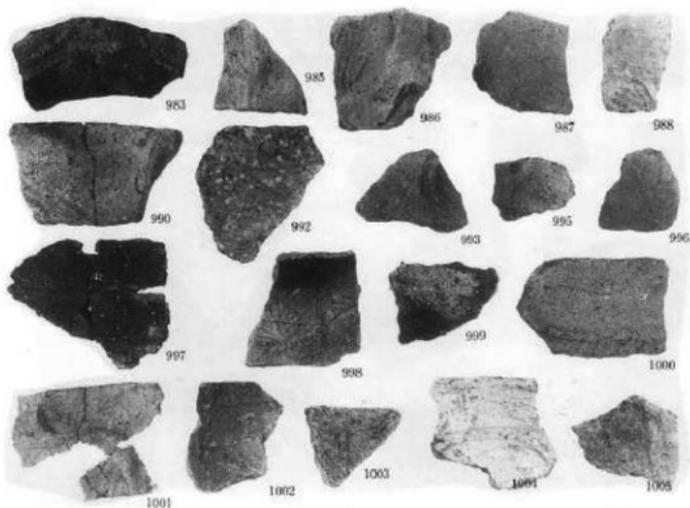


1 IV-VI群土器

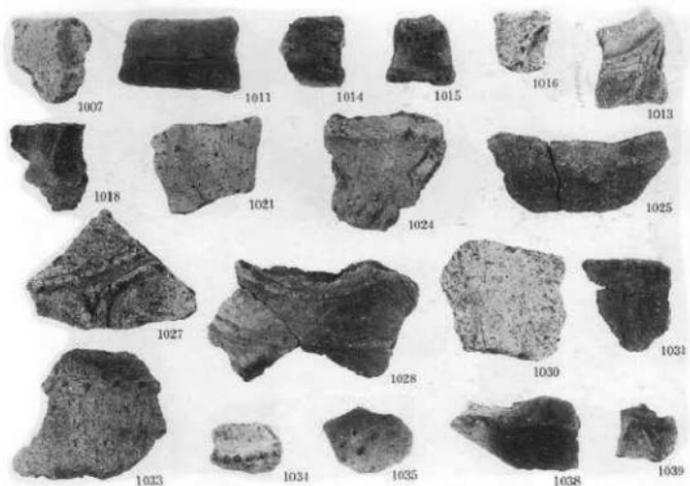


2 VI群土器

遺構外出土土器(6)

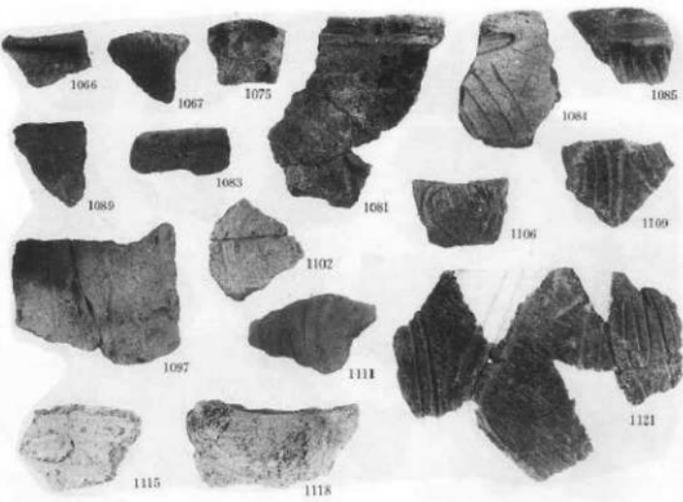


1 Ⅶ群土器

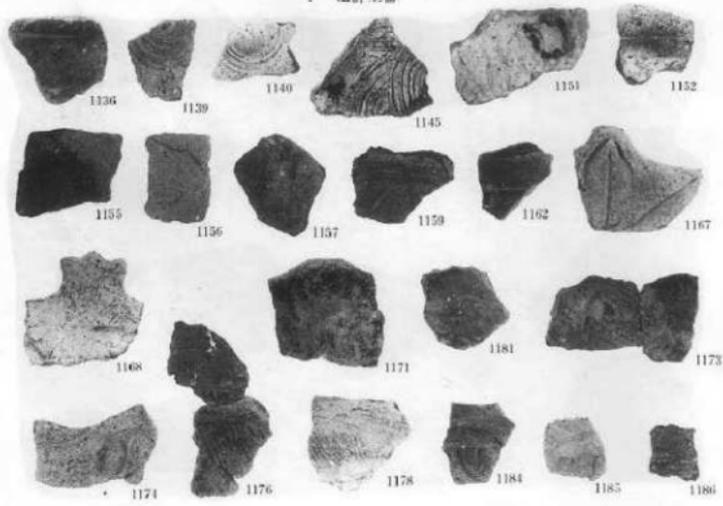


2 Ⅷ群土器

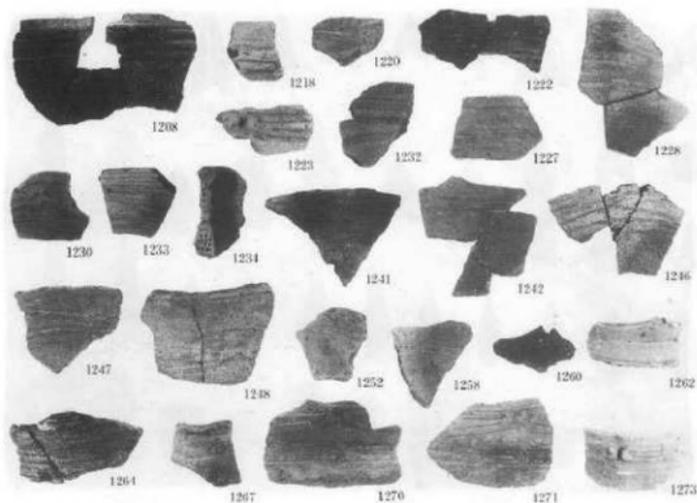
遠構外出土土器 (7)



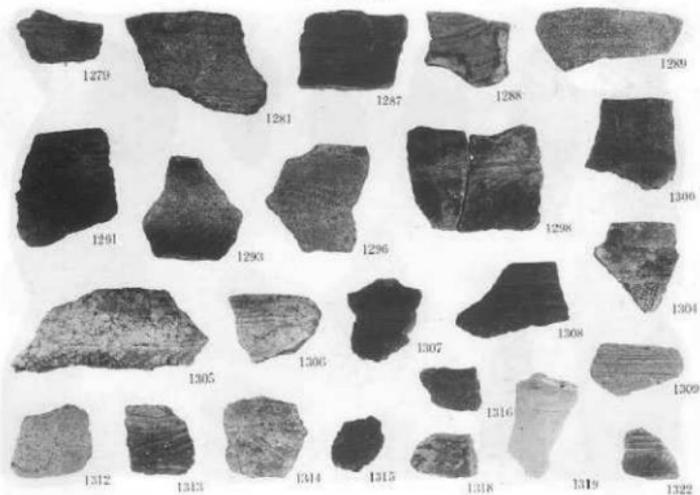
1 VII群土器



2 VII-X群土器  
遺構外出土土器 (8)

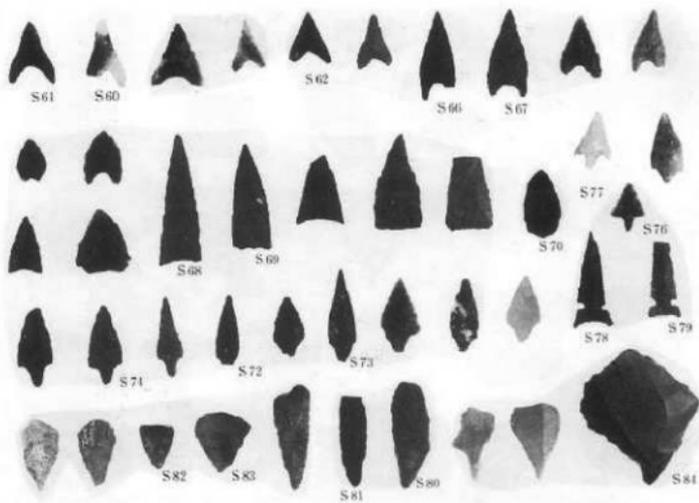


1 西群1器

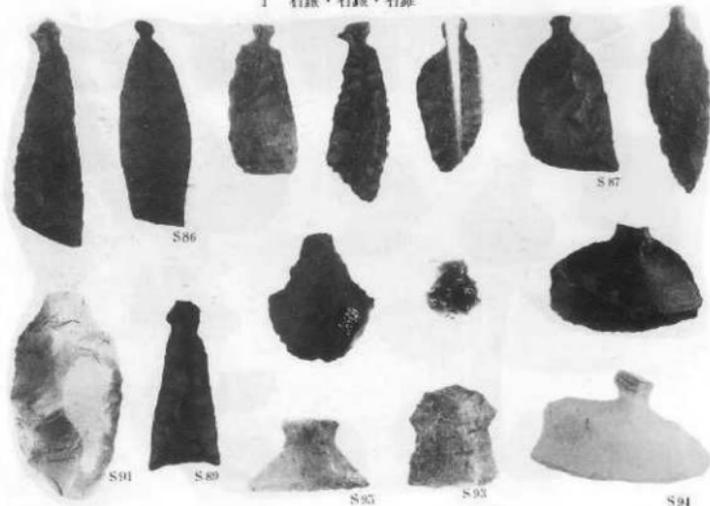


2 西群2器

遺構外出土土器(9)



1 石鏃・石鏃・石鏃

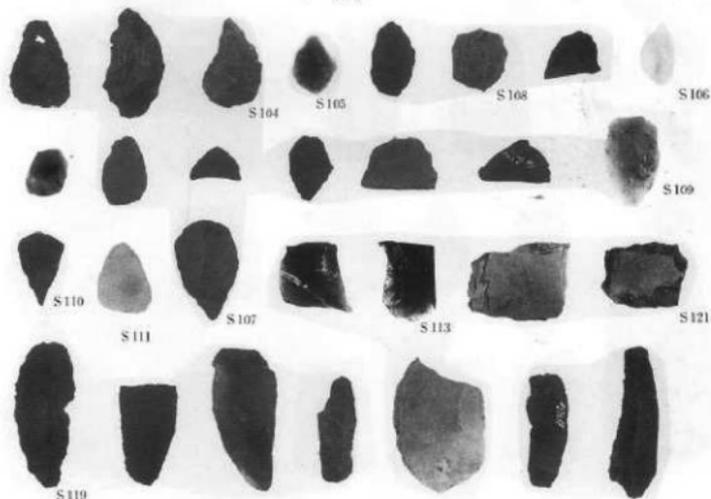


2 石鏃

道構外出土石器 (1)

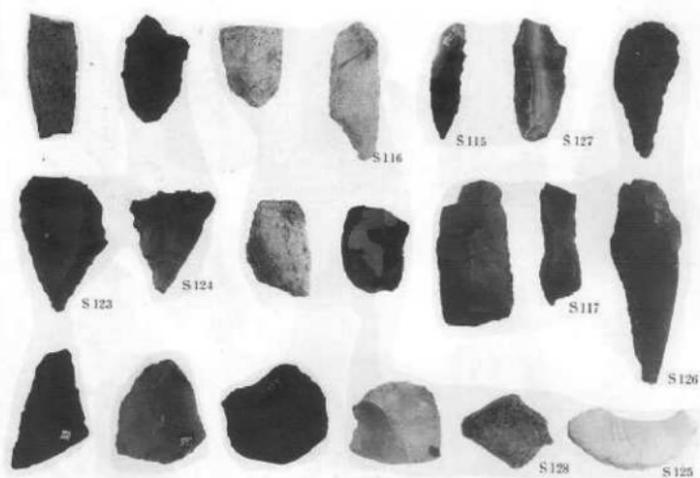


1 石鏡

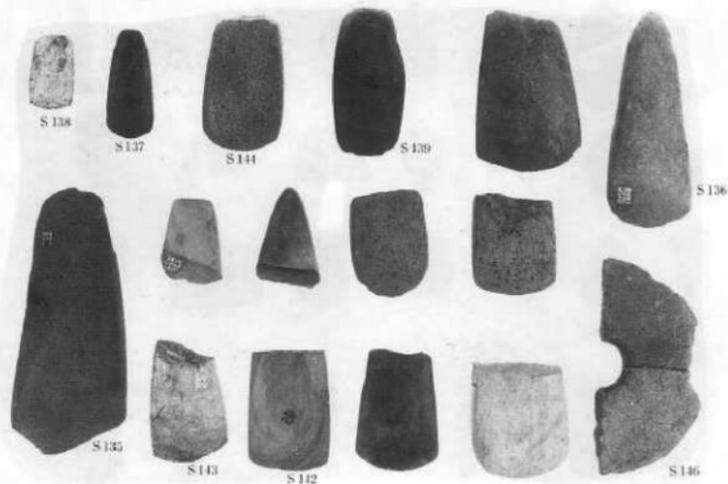


2 不定形石器

遺構外出土石器 (2)



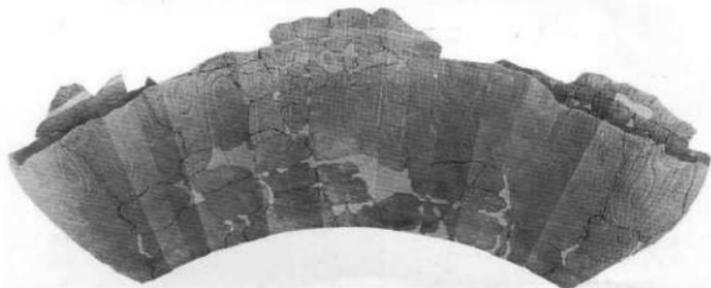
1 不定形石器



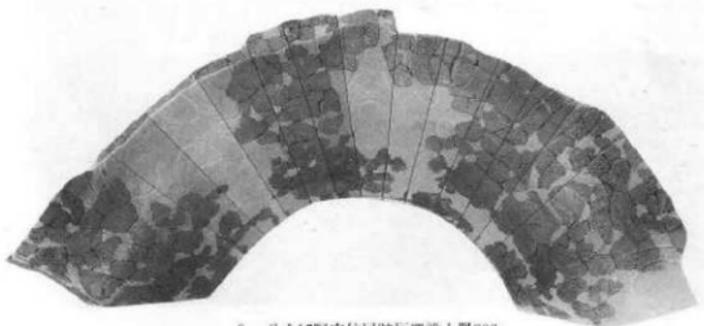
2 磨製石斧・圓狀石斧  
道橋外出土石器 (3)



2 S I 18 豎穴住居跡中埋設土器463



1 S I 04 豎穴住居跡中埋設土器230



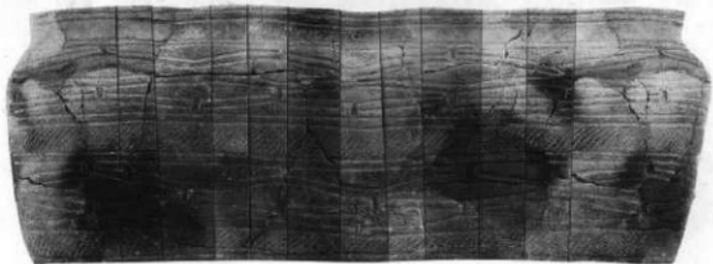
3 S I 17 豎穴住居跡中埋設土器306  
土器展開写真(1)



1 SK29土坑内出土土器621

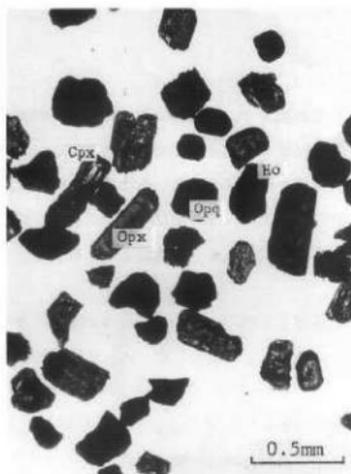


2 S・I 15竪穴住居跡の埋設土器461

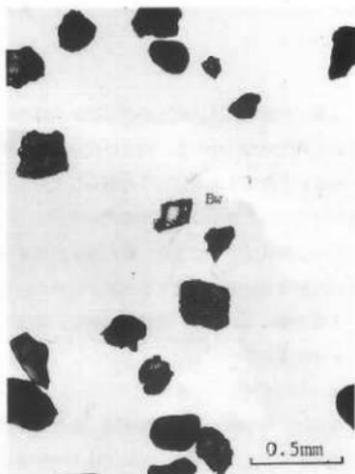


3 M171グリッド1～III層1194

土器展開写真(2)



試料番号5 重鉱物

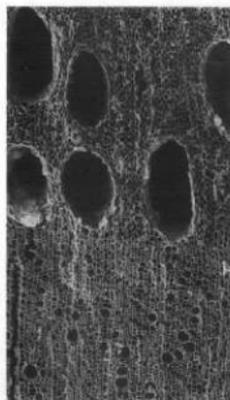


試料番号5 軽鉱物

Opx : 斜方輝石, Cpx : 単斜輝石, Ho : 角閃石, Opxq : 不透明鉱物

Bw : バブル型火山ガラス

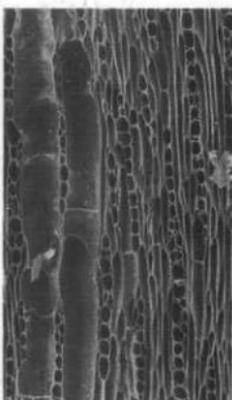
1 重鉱物・軽鉱物偏光顕微鏡写真



木口 x50



縦目 x150



板目 x150

2 炭化材電子顕微鏡写真

## あとがき

上熊ノ沢遺跡には、縄文時代早期から弥生時代前期初頭まで、断続的に人々の活動の痕跡が止められていた。中でも、縄文時代中期の後葉以降には幾度か集落が営まれた所である。

いまから数千年の昔の人々の暮らしについて、具体的な様子はなかなか明瞭ではないが、近年の考古学的な成果は、縄文時代が従来イメージされがちであった野蛮な時代ではなく、かなり豊かな時代であったという時代像を構築させている。本調査によって確認された事実も、そうした当時の社会を復元する良好な材料である。

本報告書においては、遺跡及び調査の全体を伝える事を意図したが、担当者の未熟さにより不十分な点が多い。そうした点についてはこれからの課題とし、機会を得て補っていかねばならないものと考えている。

最後に、発掘調査から遺物整理・報告書作成作業にかかわって下さった多くの方々に、心から感謝すると共に、作業員として種々の作業を支えてくれた方々の名簿を掲載する。

池田 昭三	池田農夫雄	伊東 俊直	奥山喜一郎	熊谷直五郎	熊谷 直義
斎藤 典芳	須藤 久二	須藤 武	須藤 文雄	森 勝也	池田 亨
加藤勇治郎	池田 春子	菅原トヨメ	須藤 玲子	高橋ツネ子	田中 久子
森 リエ子	今野 三男	須藤 留治	斎藤紀美子	菅原喜久子	菅原サカエ
土門トヨミ	土門 雪見	阿部慶一郎	熊谷 小末	山田 成	斎藤 巖
斎藤富美雄	斎藤クミ子	伊藤 昭彦	伊藤 美幸	大西 英子	奥山 文子
鎌田 栄子	佐々木 薫	佐々木美紀子	島津 竜子	杉山恵美子	鈴木 孝子
鈴木 智子	佐藤 郁子	佐藤 寿子	高橋早百合	高橋フサ子	高橋まき子
武田 明子	竹村 純子	高樫 厚子	新田 和子	斎藤 典芳	